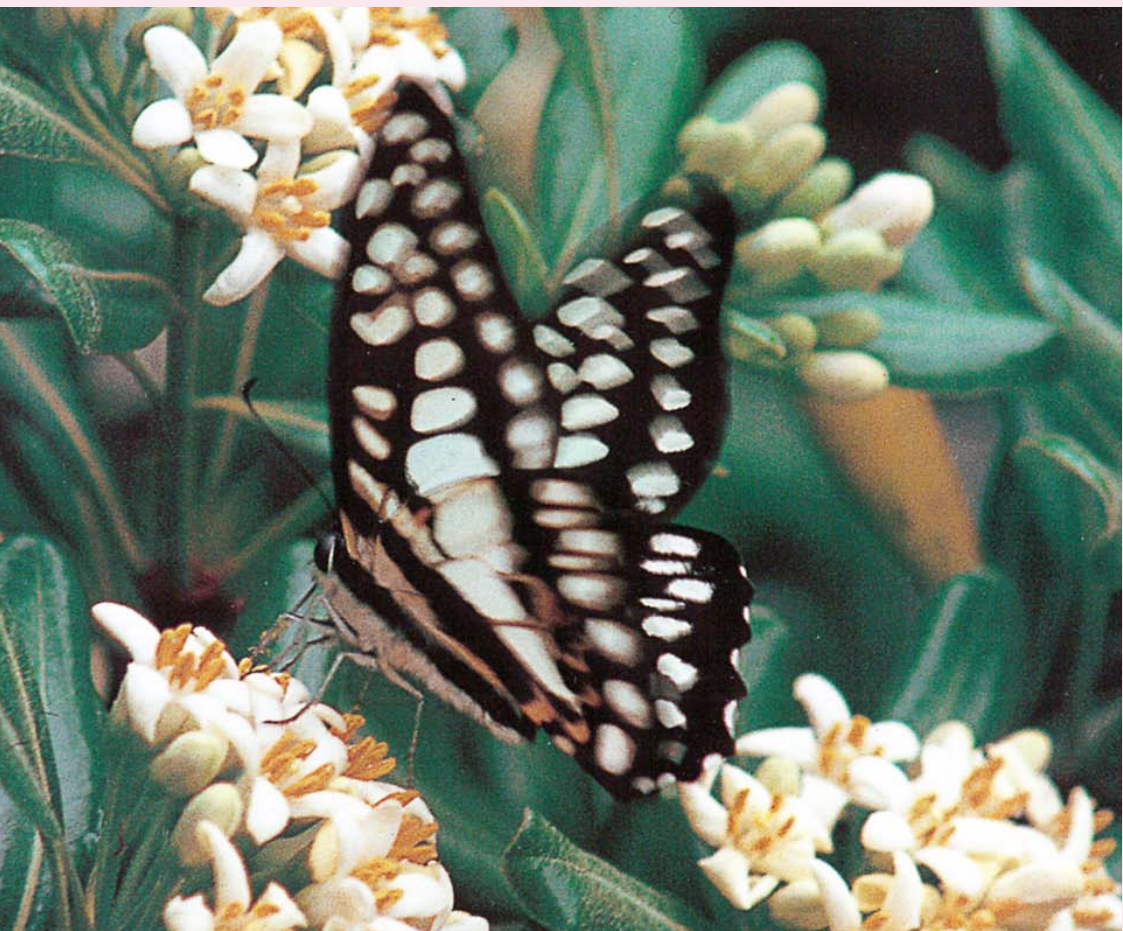


2014年度改訂版

自然カラーシリーズ

# 佐賀の蝶

西村謙一著



# 電子書籍化にあたって

[佐賀の蝶]が出版されたのが1993(平成5)年であるから、あれから、もう20年以上も過ぎた。佐賀県の蝶については、この20年の間に、種の絶滅、普通種の個体の減少、迷蝶の飛来など、かなり変化してきた。[佐賀の蝶]は改訂が必要だと思っていた時、佐賀県立図書館の企画で、「佐賀の自然デジタル大百科事典」の一環として本書を電子書籍化して頂くことになった。

今回、[佐賀の蝶]電子書籍化を機会に、未掲載の種の追加、現在の知見など一部加筆した。また、学名も命名者の発表年号まで記入した。蝶の配列順位および学名は、白水隆著「日本蝶類標準図鑑学習研究、2006」に従った。

初版の出版までは、蝶を積極的に撮影する人はプロを含めて、そんなに多くはなかった。また専用のレンズも広くは普及している状態ではなかった。

ところが現在は、操作が簡便な、性能のよい安価なデジタルカメラが普及したことに加え、携帯電話やiPadなどで、誰でも容易に花や蝶が撮影出来るようになった。さらに、従来のフィルムカメラでは、同じ対象を何回も撮影する事は、フィルムの値段から、経済的にも困難であった。今日のデジタルカメラは撮影したら自動的にSDカードに保存され、気に入らなければ消去して、何回でも使用出来るので、極端に言えばSDカード1枚あればよいので、シャッターを押す回数を気にしないでもよい。また、シャッター速度や絞り値は気にすることなく、フォーカス(ピント)もカメラが設定してくれるオート撮影機能が付いているので撮影が非常に簡単になった。

勿論、これらのカメラを用いての撮影でも、良い写真を撮るのは技術を要し、プロ級の撮影は困難であるが、カメラ任せで、それなりの写真が撮影出来るので、蝶撮影が普及したと思う。インターネットでホームページを見れば、多くの蝶の写真が見られ、中には見事なものやプロの撮影もある。

私は2000年頃までは、フィルムカメラの200mm.MicroNIKKORで蝶を撮影していた。その後は、デジタルカメラによる撮影に変わり現在は、Nikon D3100, レンズ AF-S DX Micro NIKKOR 85mm f/3.5G ED VRを主として使用している。また補助的に、Canon IXY 200, COOLPIX P520でも蝶撮影をしている。

このような時期に、本書の電子書籍化を行うのは、躊躇されるが、全く意味がない訳ではない。蝶を撮影するようになった動機は、初版に記したので、繰り返しては述べないが、次の和歌に要約される。

天津風 雲の通路 吹きとぢよ をとめの姿 しばし留めむ

僧正 遍照

蝶は、この大自然が与えてくれた、素晴らしい美しい贈り物である。このはかない美しい姿を写真として止めたい、の想いから撮影を続けてきた。

昆虫や蝶に魅力を感じるようになると、初めて見る種類や珍しい種類に遭遇した時の、昆虫少年の驚きと感激は絶大である。この興奮を残しておきたいとの思いで書いたのが本書である。また山野で出合う蝶の種類を列記し、自然への関心が高まるように配慮した。身の回りの蝶に興味を持ち始めると、他所にはどんな種類の蝶がいるかと関心を抱くようになる。そこで、著者が経験した範囲で他県の蝶も記した。

佐賀昆虫同好会員 溝上誠司氏によると、1924年から2014年までに、佐賀県からは迷蝶を含めて104種の蝶が記録されている。この中で、県内80種(県外20種)の蝶の写真に掲載した。また著者が撮影した英国、米国、タイ国、香港、マレーシア、グアテマラの蝶の写真も含めた。

本書は種名同定のための図鑑を第一の目的として執筆したものではないが、蝶に興味を覚え始めた少年少女にも、役立つようにとの要望に沿って種類を推定出来るように企画した。

蝶は、一部を除いて各種類の特徴がはっきりしており、本書が種名の推定に役立つと思う。しかし、確実な種名の同定は、図鑑を調べるなり、蝶に詳しい人に相談するなりされる事をお勧めする。

今回、私の、これまで書いた「虫に関する随筆」も挿入させて頂いた。これも合わせて読んで頂ければ幸せである。

今回の電子書籍化にあたり、佐賀県の蝶について、種々ご教示を頂いた、前佐賀昆虫同好会会長 市場 利哉氏、同会会員 溝上 誠司氏、古川 雅通氏、坂井 文雄氏、廣川 典範氏に厚く、お礼を申し上げます。また、今回新たに貴重な写真を提供頂いた、坂井 文雄氏 古川 雅通氏、同会会員 針貝 邦生博士に感謝する。

なお、以前、著者が「大塚薬報」に連載した、「無視できぬ虫のはなし」の転載許可を頂いた「大塚薬報」編集長 松山真理氏に、お礼を申し上げます。さらに、貴重な標本の写真の掲載を許可されたAustralian Butterfly Sanctuaryに感謝する。また、図の一部の転載を許可された小学館に感謝する。著者が「医界佐賀」に掲載した写真の転載を承認頂いた佐賀県医師会に感謝の意を表す。最後に、電子書籍の企画・制作に携わられた株式会社ドミッキアルファ並びに佐賀県立図書館の皆様にお礼申し上げます。

---

# P R E F A C E

---

If no butterfly were present at all in the earth, how monotonous nature would be. Indeed, butterflies are fairies or goddesses in the nature. I have been interested in the living creatures including insects since I was a boy. I have wandered in the fields or hills to seek butterflies. Great was my surprise and pleasure when I encountered rare or unexpected butterflies.

Early in my boyhood I used to catch butterflies by a net and extended their wings on the wooden plates for the purpose of making specimens. Growing from a boy, however, I gradually became interested in butterflies living in the field.

Later, when I was working as a neurosurgeon, on the other hand, I became interested in taking photographs of operative findings such as cerebral tumors or other pathological lesions of the central nervous system.

One day, by the same procedure, I tried to take photograph a common butterfly in my garden. Since then, I have continued to photograph butterflies living in their natural surroundings for about 50 years as my hobby.

In August of 1993, I wrote in Japanese a book on butterflies entitled *Butterflies of Saga Prefecture, Japan*, which was published by Saga Newspaper Company.

It has been 22 years since the publication. This time, fortunately, Saga Prefectural Library proposes to republish this publication in e-book. I am very glad to accept the proposal.

Up to the present, 104 species of butterflies including migrated individuals have been recorded from Saga Prefecture since 1924. Among them, 80 species are shown in this e-book with brief explanation on individual characteristics.

Besides butterflies found in Saga, I introduced butterflies, which encountered in other prefectures or foreign countries by showing photographs.

In addition to these pictures, I included my essays on invertebrates. Reading this e-book, if you experience how wonderful the world of butterflies is, I would be very happy.

Finally, I wish to express my sincere appreciation to several members of The Saga Insects Club for their giving me valuable information on the butterflies found in Saga Prefecture.

Permission to use photographs and essays from Australian Butterfly Sanctuary, the Saga Medical Faculty, and the Otsuka Pharmaceutical Journal are gratefully acknowledged.

January 1, 2015

Kenichi Nishimura, M.D., Ph. D.

---

# 推薦する参考書

---

現在、沢山の参考書が出版されているが、初版に列記した以外に、とりあえず、最近の次の参考書を推薦する。

また、インターネットでホームページを開けば、目的の蝶の写真や解説を見る事が出来る。

1

**白水 隆：『日本産蝶類標準図鑑』. 学習研究社 , 2006**

わが国の蝶学の第一人者が編集・執筆しており、わが国の蝶全種について、多数の標本の写真と、詳しい最新の知見の解説が掲載されている。

2

**溝上 誠司：『佐賀県産蝶類文献目録』. 佐賀昆虫同好会 , 1994**

佐賀昆虫同好会員の著者が、1924～1991年間までの佐賀県で報告された文献を纏めた書で、佐賀県の蝶を知る上に不可欠の書である。1992年以後の文献は、同好会発行の機関紙「佐賀の昆虫」に同著者が連載している。本書は、同好会の特別報告第1号として発行されたが、佐賀県立図書館で閲覧する事が出来る。

3

**日本チョウ類保全協会編：**

**『フィールドガイド日本のチョウ』. 3刷, 誠文堂新光社 , 2013**

日本チョウ類保全協会の会員を中心に、フィールドで撮影された、日本の蝶の生態写真を用いた図鑑である。野外で眼にする蝶の鑑別が出来るように工夫されている。野外に持ち歩いて、生きた蝶を観察するのに役立つ図鑑である。

4

**小野啓一、小野展嗣、町田龍一郎、田辺力 指導/執筆：**

**『小学館の図鑑 NEO 新版 昆虫』, 小学館 , 2014**

昆虫の生き生きとした色鮮やかな写真が多くある。

また、昆虫が住んでいる場所や育て方も詳しく書かれている。

自由研究に役立つ情報が多い。さらにDVDも付いている。

# 佐賀の蝶

## もくじ

電子書籍化にあたって	001
PREFACE	003
推薦する参考書	005
随筆集	
■ 蝶の名前	011
■ 蝶と蛾の違い	013
■ 蝶と人	015
■ 学名との出会い	019
佐賀の蝶	
■ アゲハチョウ科	
ジャコウアゲハ	023
アオスジアゲハ	025
ミカドアゲハ	027
アゲハ	031
キアゲハ	033
ナガサキアゲハ	035
モンキアゲハ	037
シロオビアゲハ	041
クロアゲハ	043
オナガアゲハ	045
カラスアゲハ	047
ミヤマカラスアゲハ	051
■ シロチョウ科	
ツマキチョウ	053
モンシロチョウ	055
スジグロシロチョウ	057
キタキチョウ	059
モンキチョウ	061
ウスキシロチョウ	063
■ シジミチョウ科	
ウラギンシジミ	065
ゴイシシジミ	067
ムラサキシジミ	069
ムラサキツバメ	071
ウラキンシジミ	073
クリシマミドリシジミ	075
コツバメ	077
トラフシジミ	079
ベニシジミ	081
クロシジミ	083
ヤマトシジミ	085
タイワンツバメシジミ	087
ツバメシジミ	089
ヤクシマルリシジミ	091
サツマシジミ	093
ルリシジミ	095
スギタニルリシジミ	097
ウラナミシジミ	099
クロマダラソテツシジミ	101

■ タテハチョウ科		
テングチョウ		103
サカハチチョウ		105
ヒメアカタテハ		107
アカタテハ		109
キタテハ		111
ヒオドシチョウ		113
ルリタテハ		115
タテハモドキ		117
アオタテハモドキ		119
メスアカムラサキ		121
イシガケチョウ		123
オオウラギンスジヒョウモン		125
クモガタヒョウモン		127
メスグロヒョウモン		129
ミドリヒョウモン		131
ウラギンヒョウモン		133
オオウラギンヒョウモン		135
ツマグロヒョウモン		137
スミナガシ		141
ホシミスジ		143
コムミスジ		145
イチモンジチョウ		147
ゴマダラチョウ		149
コムラサキ		151
ヒメウラナミジャノメ		155
ヒメジャノメ		157
ジャノメチョウ		159
クロコノマチョウ		161
クロヒカゲ		163
サトキマダラヒカゲ		165
アサギマダラ		167
カバマダラ		169
スジグロカバマダラ		171
■ セセリチョウ科		
アオバセセリ		173
ダイミョウセセリ		175
ミヤマセセリ		177
ホソバセセリ		179
コチャバネセセリ		181
キマダラセセリ		183
クロセセリ		185
オオチャバネセセリ		187
チャバネセセリ		189
イチモンジセセリ		191

## 県外・国外の蝶

ヒメギフチョウ	194
ウスバアゲハ	196
タイガー・スオローテール	198
ヒメシロチョウ	200
ツマベニチョウ	202
エゾシロチョウ	204
ヤマキチョウ	206
スジボソヤマキチョウ	208
ベニモンシロチョウ	210
ウラナミアカシジミ	212
オナガシジミ	214
エゾミドリシジミ	216
ジョウザンミドリシジミ	218
キベリタテハ	220
クジャクチョウ	222
ミスジチョウ	224
オオミスジ	226
オオムラサキ	228
キバネセセリ	232
ギンイチモンジセセリ	234

## 外国の蝶

英国ケンブリッジの蝶	237
フロリダに蝶を追う	241
タイ国北部蝶採集記	247
タイ国北部にキシタアゲハを追う	253
香港ビクトリア公園の蝶目撃・撮影記録	257
マレーシアの蝶	261
グアテマラの蝶採集記	265

## 採集記

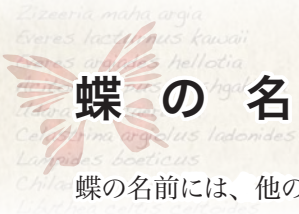
与那国島蝶採集記	268
佐賀県三瀬村の蝶補遺	272

## 随筆集

■ 佐賀むし通信	人魂	280
	胡蝶の夢	282
	昆虫博士	284
	ハワイの蝶	286
	感銘を受けた本	288
	昆虫採集道具	290
	日本産蝶の命名者のプロフィール	292
■ 無視できない虫の話	「虫と言うもの」	294
	人を食う「虫」	298
	人が食う「虫」	302
	日本はよいか、住みよいか	306
	恐怖の棲み家	310
	アンデスの彼方に	314
	川は流れる	318
	旅をする蝶	322
	南太平洋の彼方から	326
	土からの恐怖	330

松原に	334
-----	-----

故郷高知の幼友達に捧げる



# 蝶の名前

蝶の名前には、他の動植物と同じように、和名と学名が用いられる。

## 和名 (Japanese name)

地方によって、同じ蝶でも、いろいろの呼び名があるが、全国的に統一されたのが標準和名である。和名を命名するのに命名規約はないが、勝手に変更できない。標準和名は、殆どが納得出来る名前であるが、中には不適當な名前もある。例えば、タテハモドキ。モドキというのは、「似て異なるもの」の意味である。そこで、タテハモドキの意味は、「タテハに似ているが異なる」の意味になる。ところが、タテハチョウ科の名前は、あっても「タテハ」という和名の蝶はいない。また、矛盾する名前が近年変更されたものもある。ウスバシロチョウはシロチョウ科の蝶ではなく、アゲハチョウ科の蝶である。そこでウスバアゲハと変更された。

和名は、カタカナで記す事に決められている。平仮名や漢字で書く事は許されない。蝶では見られないが、学名を、そのまま、カタカナで書く場合もある。

例：パラメキウム・カウダツム (原生生物のゾウリムシの学名)

*Paramecium caudatum*

## 学名 (英語 : scientific name ラテン語 : binomen, binomina)

学名は「分類学の父」と云われるスウェーデンの博物学者カール・フォン・リンネ (Carl von Linné : 1707-1778) によって創設された。その表記はラテン語、またはギリシャ語の単語に由来する例が多い。ラテン語化した他国語も用いられる。

動物には、「国際動物命名規約」、植物には「国際植物命名規約」、細菌には、「国際細菌命名規約」がある。各々少しずつ異なる。ウイルスには学名はない。

その基本は、属名、種名からなる(二名法)。大切なことは、1種の生物には、世界的に共通する学名は1つしかないことである。動物の学名の完全な記述方法は、動物の種類を属、種小名 (亜種名)、命名者名、命名年号を表したものである。例えば、

ナガサキアゲハ *Papilio memnon* Linnaeus, 1758

*Papilio*は、アゲハチョウ科の中のパピリオ属、*memnon*は、種類、Linnaeus, 1758は、Linné をラテン語化したもので、Linnéが1758年、新種として発表した事を意味する。その他の命名者の名前は、そのまま用いている。

例：Butler, Matsumuraなど。

亜種という概念がある。別種とする程違っていないが、差が見られる場合に亜種とする。地理的に隔離されている場合に用いられる。日本のナガサキアゲハは亜種として認められており、次の学名が用いられる。

*Papilio memnon thunbergii* von Siebold, 1824

*Mimodesia* *White Grass Blue*  
(Matsumura, 1926) *Indian Cupid*  
*Mimodesia* *Short-tailed Blue*  
(Matsumura, 1929) *Common Hedge Blue*  
(Moore, 1879) *Albocruerulea*  
(de L'Orza, 1869) *Holly Blue*  
(Fabricius, 1798) *Long-tailed Blue*

*Junonia* *orthyx*  
*Hypolimnys* *miippus*  
*Gnethis* *thydamias* *abellia*  
*Argyropano* *rutilana*  
*Nephargynnis* *arsady* *omene*  
*Dumoria* *Sugana* *lianne*  
*Argyropano* *ruphia* *taushimiana*

(Linnaeus, 1758) *Blue*  
(Linnaeus, 1764) *Dansud*  
Fruhstorfer, 1878 *Common Map*  
(Matshulsky, 1866) *The Great Eastern Silverstripe*  
(C. & R. Felder, 1862) *Andajomene* *Fritillary*  
(Fruhstorfer, 1907) *Sugana* *Fritillary*  
Fruhstorfer, 1906 *Silver-washed* *Fritillary*

亜種が認められると、最初新種として命名されたものは、名義タイプ亜種となり、学名は変わらない。*Papilio memnon* Linnaeus, 1758 =名義タイプ亜種

命名者、年号に括弧 ( ) が付いている場合がある。例えば、モンキチョウ *Colias erate* (Esper, 1805) これは、Esperが1805年、最初に命名発表したが、後で誰かが再分類した事を示す。このような意味があるので、勝手に括弧をつけたり、外したりしては、出来ない事を知っておく必要がある。この事は、あまり守られていない。

*Papilio memnon thunbergii* , *Colias erate* (Esper)

または、*Colias erate*のように、命名者、年号は省略してよい事になっている。しかし括弧は省略出来ない。

ラテン語の意味はギリシャ神話等に由来するものなどが多く、日本人には分かりにくい。また、意味不明のものもある。しかし、*japonica*, *daimio* (大名)、*geisha* (芸者) など日本語由来のものもある。

属名は大文字で始る。種小名は人名であっても、必ず小文字で始る。

例：*Favonius yuasai yuasa*=Yuasa(湯浅)

属名、種小名は、斜体 (イタリック体) で記す。これは、欧文文章の中で、分かりやすくするためである。斜体で記す事は規定されてはいないが、殆どは斜体で書かれている。

学名の読み方にも規定はない。ラテン語であるから、ラテン語の発音でなければならないとの主張があるが、英語読み、或はドイツ語読み、フランス語読み等の母国語読みみされている場合が普通である。

## 新種の発表

規定通りに学名をつけて発表するには、公的出版物に発表する必要がある。記載の言語に規定はないが、英語が用いられるのが普通である。講演、ポスター、電子媒体などに発表しても認められない。新種として発表しても、その種に既に学名が付けられていたら、同物異名 (synonym) となり新種として認められない (有効名とはならない)。また、その学名が他の種類に用いられる場合は、異物同名 (homonym) として有効名とはならない。

新種発表には1個体の新種発表のもとになった模式標本、複数の副模式標本を保存しなければならない規定がある。亜種は新種として認められる。

## 先取権

新種発表は早い勝ちである。最初の発表だけが認められ、後の発表は同物異名 (synonym) になってしまう。1日でも早く発行された雑誌に先取権がある。同一雑誌に同時に新種発表論文が掲載された場合、前のページの発表に先取権がある。



# 蝶と蛾の違い

「蝶と蛾は、どこが違うのですか」これは、よく受ける質問である。結論から先に述べると、確かに、幾つかの点で、両者は異なるが、絶対的な違いはない。両者は分類学で、チョウ目(Lepidoptera)に入り、むしろ蝶は蛾の種類とも云える。

その主な特徴と例外を述べよう。

## ①“蝶は昼活動し、蛾は夜活動する”

確かに、蝶は昼活動し真夜中だけ活動する種類はいない。「夜の蝶」は自然界には存在しない。しかし、ジャノメチョウの仲間やセセリチョウの仲間も夜飛ぶ事はある。多くの蛾は夜活動するが、昼活動する蛾も少なくない。とくに、イカリモンガは昼活動し花などに止まる。

## ②“蛾は電灯に来るが、蝶は来ない”

蛾は、よく電灯にくる。しかし、蝶の仲間でも、電灯に来ることはある。著者は、外国でウスキシロチョウが電灯に来たのを見たし、サトキマダラヒカゲが、同じく電灯に来て長時間止まっているのに遭遇した。ただし、蝶は、めったに電灯には来ないのは確かである。

## ③“蝶は翅を閉じて止まるが、蛾は翅を開いて止まる”

タテハチョウの仲間の多くは翅を開いて止まる。とくに、イシガケチョウは、必ずと云っていい程、翅を開いて止まる(翅を閉じて止まるのは見た事がないが、翅を閉じることもあるらしい)。前記のイカリモンガは、翅を閉じて止まるので、よく蝶に間違われる。

## ④“蝶の触角は、こん棒状、蛾の触角は先が尖っている”

これが一番簡単な見分け方である。蝶の触角は、セセリチョウ類を除いて、こん棒状である。一方、蛾の触角は、先が尖っているか、櫛状である。日本の蝶には、この区別が全て当てはまる。だだ、南米に分布するカストニア*Castnia evalthe* Fabricus, 1775という蛾は、昼間、花から花へ飛び回り、こん棒状の触角を持っている。この種を蝶としている研究者もいると云う。

## ⑤“蛾には前翅と後翅つなぐ「翅棘」があるが、蝶にはない”

「翅棘」は、前翅と後翅を一緒に動かすために、両翅を繋ぐ、後翅の基部から突出している棘である。蛾はこの「翅棘」を持っている。蝶は、この棘の代わりに後翅の前縁が突出している。しかし、この「翅棘」を持たない蛾もいる。オーストラリア産の色彩が派手なラッフルズセセリ

*Euschemon rafflesia* (Macleay, 1827)の雄だけは、この「翅棘」を持つと云う。しかし、蛾や蝶を捕まえて観察しなければ分からない。英語では、日本語のように、蝶と蛾は区別して、蝶butterfly、蛾mothと呼ぶが、ドイツ語では、通常、両者を区別せずに、Schmetterling あるいはFalterと呼ぶ(これはチョウ目に相当する言葉)。しかし、区別するときには、蝶には、「昼Tag」を付けて、Tagschmetterling、あるいは、Tagfalter、蛾には「夜Nacht」を付けてNachtschmetterling、あるいはNachtfalterと呼ぶのが一般的だそうである。英国(多分、オーストラリアも)では、セセリチョウ科は、蝶に含めない。skipperとして別に扱われている。

## 蝶と蛾の触角の比較 (著者保存標本より)





# 蝶と人

## 1、蝶は人に危害を加えるか？

昆虫の中には、ハチのように人を攻撃して刺し、場合によっては被害者を死に至らしめる危険な虫もいる。実に、わが国で年間約40人がハチに刺されて死亡している。

カ類は、人を吸血するばかりでなく、感染症(伝染病)を媒介する。中には、黄熱を感染させるネッタシマカ、デング熱のヒトスジシマカ、日本脳炎を媒介するコガタアカイエカ、熱帯熱マラリアを伝搬するハマダラカなど危険な種類もいる。

チョウ目のドクガ、チャドクガ、モンシロドクガなどのドクガ類は幼虫時代からの毒針毛を持ち、人が接触すると、皮膚炎を起こす。毎年かなりの被害者が出る。

同じチョウ目の蝶は、どうか。ドクチョウと云われる蝶の仲間がいる。体内に植物由来の毒を持ち、鳥に食べられるのを避けていると云われている。このドクチョウに非常に似た、毒を持たない蝶がおり、ドクチョウに似せて鳥に食われないようにするためと解釈され、擬態として有名である。北米のオオカバマダラも、体内に毒を持っており、鳥に食べられるのを避けている。しかし、人は蝶を食べる事はないので、毒を持つ蝶は、人に害を与えることはない。

平安時代の人々は、蝶は「わらわ病」を伝搬すると信じていたらしい。「わらわ病」とは、マラリア(多分、三日熱マラリア)であると云う。それで、古の和歌には、蝶は殆ど登場しなかったとの説もある。しかし、人々は蝶の美しさは知っていたらしく、当時の美女の舞に蝶の姿で登場する。

蝶はマラリアや、その他の病気を一切伝搬しない。また、人を襲って危害を加えたりしない。

ただ、わが国の蝶で、ツマグロヒョウモン、ヤエヤマムラサキ、ルリタテハの幼虫(図1)は、棘針を持ち、手で触ると刺されることがある。しかし毒はない。以上述べたように、成虫の蝶は、全く人に危害を与えることはない。

図1 ルリタテハの幼虫



1993年10月10日撮影(佐賀市内1丁目)

## 2、蝶は人を恐れるか？

野外で、飛んだり、止まったりしている蝶に近づく、蝶は、さっと逃げる。原色の花など描いたシャツ等を着ていると、蝶は寄ってくるが、めったに止まったりはしない。通常、蝶は人には止まらない。

蝶は人を恐れているらしい。

しかし、人を恐れるのは、先天的とは考えられない事実がある。おそらく、野外で孵化した後に、学習によって、動物や人を警戒するようになったのではないだろうかと思われるが、どうであろう。

2004年11月15日、私はオーストラリアの北クイーンズランド、キュランダにあるオーストラリア蝶保護区(Australian Butterfly Sanctuary)を訪問して、同地に数日間滞在した。この施設は、3,666 m<sup>3</sup>の広大な庭園で、多くの蝶が乱舞する蝶の園である。二重の門を開いて、中に入ると、驚いた事に、後翅が緑黄金色に輝く、1頭のトリバネアゲハ(Australian Birdwing)が、すぐ近くに飛んで来た。写真や標本でしか見た事がない蝶が、今目の前に入る。しかも、逃げようとしな。この蝶に出会って、私は、もう我を忘れて、カメラのシャッターを切った(図2)。この感激と喜びは表現できない程大きかった。この時、私は南海万里の海を越え、はるばる、ここに来てよかったと、つくづく思ったものだった。

図2 Australian Birdwing



2004年11月15日撮影 (Australian Butterfly Sanctuary, Kuranda, AU)

*Parasara mahisargia*  
*Erebia lucina* *aus. kawaii*  
*Vanessa atalanta* *hellotia*  
*Udulia anthracina*  
*Colias erichsonii*  
*Chilastis agestis*

(Mitsunaga, 1926) Pale Grass Blue  
 (Matsumura, 1926) Indian Cupid  
 (Mitsunaga, 1929) Short-tailed Blue  
 (Matsumura, 1929) Common Hedge Blue  
 (Moore, 1879) Albocruerulea  
 (de l'Orza, 1869) Holly Blue  
 (Fabricius, 1793) Long-tailed Blue

*Junonia orithya*  
*Hypolimnas misippus*  
*Gynethis thydarnas mabella*  
*Argyropanome rustiana*  
*Nepheronia ardy emene*  
*Dumora sagana lianne*  
*Artemis puphis tsushimura*

(Linnaeus, 1758) Blue  
 (Linnaeus, 1764) Danaid Eggfly  
 Fruhstorfer, 1898 Common Map  
 (Matshulsky, 1866) w/The Great Eastern Silverstripe  
 (C. & R. Felder, 1862) Aradyomene Fritillary  
 (Fruhstorfer, 1907) Sagana Fritillary  
 Fruhstorfer, 1906 Silver-washed Fritillary  
 (Butler, 1873) High Brown Fritillary  
 (C. & R. Felder, 1862) Danaid Eggfly

小道を、まっすぐに進んでいると、沢山の熱帯蝶が飛んでいる。アゲハチョウ類、シロチョウ類、タテハチョウ類が多い。間もなく、シロチョウの1種が飛んで来て、私の腕に止まった。近くで見ると、何と可愛らしい蝶だろう。その中、2、3頭の蝶が来て胸や腕に止まる。周囲を見ると、私だけでなく、他の観光客にも来て止まっている。この蝶は人を恐れない。入園するとき、絶対に蝶に触ったり、追い払わないようにとの注意書きを渡されていたのを思い出した。

保護区内で卵から孵化された蝶は、ここでは、人や動物の外敵に襲われることはないのでは、人を避けないのだろう。一方、野生の蝶は、人や動物が危険だということを学習するのであろう。この考えが正しいかは、専門家に聞きたいところである。

さらに小道を進むと、小さな池があって、その周りに10頭位の美しい瑠璃色のアゲハチョウ乱舞している。Ulysses Butterfly (*Papilio ulysses* Linnaeus, 1758)である。時々こちらに来て草木に止まるが、絶対に翅を開いて美しい瑠璃色の表(図3)を見せない。

裏翅は褐色が目立たぬ地色で表と全く違う(図4)。

とうとう翅を開いた姿は撮影出来なかった。職員に聞いても、まず翅を開く事はないと云う。仕方がないので、標本を許可を得て撮影させてもらった。

2005年4月5日、多摩動物園の昆虫園を訪問した時のことである。ここには、日本本土の蝶は勿論、沖縄の蝶が広大な敷地に舞っている。園内で腰掛けて休んでいる時、1頭のオオゴマダラが、飛んで来て私の額に止まった(図5)。

間もなく飛び去るだろうと思って、立ち上がって歩いても逃げようとしな。また、私は腰掛けたが、それでも逃げようとしな。入園者が次々に通りかかり、興味深げに私の顔に止まった蝶を眺めて行く。中には、撮影する人もいた。近寄って、じっと見る人によると、蝶は口吻を伸ばして何か吸っていると云う。ヘヤトニックか、汗でも吸っているのかと考えたりした。30分経って帰る時間が来たが、蝶は未だ去ろうとしな。連れて帰るわけにはゆかないので、静かに蝶に触れて別れを惜しみつつ去ってもらった。蝶と充分楽しんだ一時だった。

(2014年9月25日)

図3 Ulysses Butterfly



2004年11月15日撮影  
 (Australian Butterfly Sanctuary, Kuranda, AU)

図4



2004年11月15日撮影  
 (Australian Butterfly Sanctuary, Kuranda, AU)

図5 額に止まったオオゴマダラ



2005年4月5日撮影  
 (東京都多摩動物園)

# 学名との出会い

国民学校(小学校)4年生頃だったと思う。蝶には沢山の種類があり、それらが図鑑に掲載してあることが分かりかけた頃、図鑑の各蝶の名前と共に、変な文字が並んでいるのを知った。父に尋ねると、これは外国の文字だと云う。

今でこそ、小学校の時にアルファベットを習うが、私の時代では、旧制中学に入って初めてアルファベットを学んだものだった。私は早速、父からアルファベットを教してもらい、さらに日本語のローマ字も学習した。勿論、教科書などはない。

ローマ字が読み書き出来るようになると、蝶の外国語の名前の、幾つかはローマ字風に読めるようになった。

しかし、読み進んでいると間もなく行き詰まってしまった。それは、c, ch, l, q, th, x, 等のローマ字にない文字やスペリングに出会ったからである。

図鑑の中には、学名を片仮名で併記してあるのもあった。

例えば、*Paramecium caudatum* (ゾウリムシ)を、パラメキウム・カウダツムのようである。

このような、片仮名併記から、私は、caはカ、ciはキ、laはラと読むのだと知った。しかし、ch, q, th, x, は読めなかった。

私が旧制中学に入学したのは、1945(昭和20年)4月、太平洋戦争の終戦の年である。もう、その頃は、東京の大空襲が行われており、わが国は敗戦の坂を転がり落ちていた。

英語の授業の最初に英語教師が、生徒に質問したのは、「なぜ、英語を勉強しなければならないか」であった。今日では考えられない質問である。当時は、英語は敵国語で、英語の授業を廃止する中学も少なくなかった。その主な答えは、「敵国の様子が分かる」であった。私は学名が読めるようになると答えたのを思い出す。

中学に入って、学名を英語読みに出来るようになったばかりでなく、学名についての基礎を学んだ。そして学名の提唱者Linnéは、Darwinともに、生涯忘れ得ぬ名前となった。

学名の知識を積むにつれ、誰でも自分も学名の命名者になりたいとの夢を抱く。

昆虫でも、人が未だ手を付けられない特殊なグループを研究すれば、新種発見の機会はあるが、蝶の新種発見命名は今日では、絶対と云ってよい程不可能である。

大学医学部に入学すると、すぐ寄生虫学教室に入りを許された。最初は顎口虫の研究を手伝って

たが、3年生の時、助教授からツツガムシの研究を誘われた。私に与えられたテーマは、太宰府のツツガムシの種類と季節的消長を探ることであった。同虫は野ネズミの耳殻に寄生する。私の仕事は、アカネズミを採集し、その耳殻からツツガムシを集めて標本を作り、その種類を同定することだった。この仕事を続けているうちに、とうとう私は、ツツガムシに、はまってしまった。

そうすると、新種を発見したい夢を抱くようになった。当時は、日本のツツガムシの種類は、出尽くして新種発見出来る状態ではなかった。同虫は、ネズミばかりでなく、他の哺乳動物にも寄生する。私は、これまで充分調べられていなかった哺乳動物として、コウモリを選んだ。コウモリからは、既に1種の同虫が発見されていた。私は、自ら洞穴に入ってコウモリを採集したり、他の研究者から材料を頂いたりした。

最初の間は、同虫を発見出来なかったが、ある日、初めて見るツツガムシを顕微鏡下に発見した。早速、指導の助教授、昆虫学の助手と詳細に検討して、新種であることを確認した。

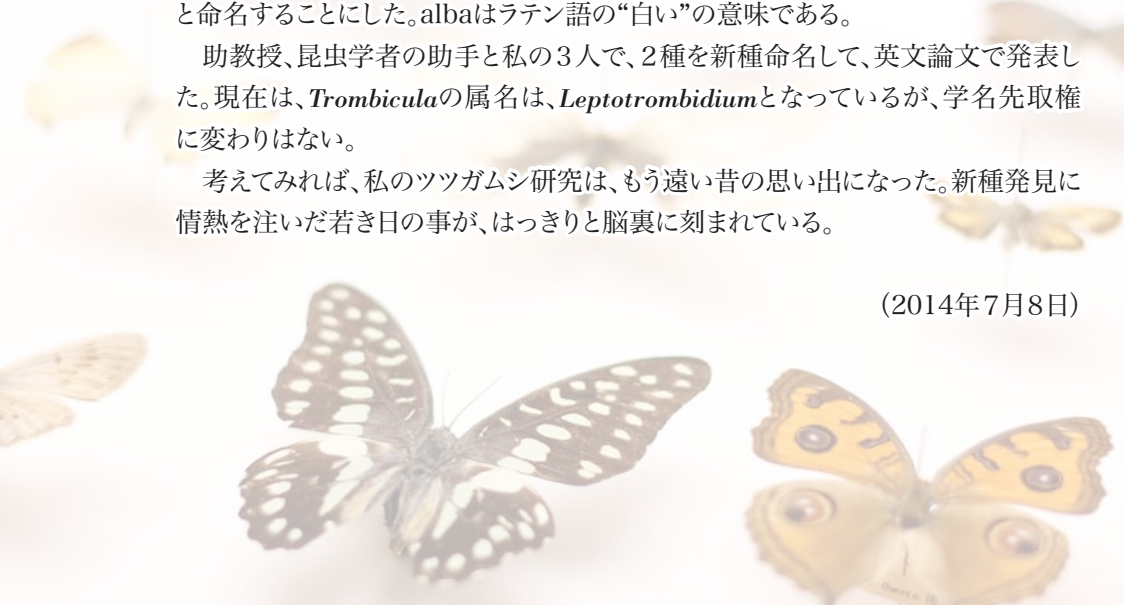
この新種は、材料提供者の農学部教授に捧げて、*Trombicula uchidai* (和名:ウチダツツガムシ)と命名することにした。

続いて、更に別の1種を発見した。古典的ツツガムシ病を媒介する種は、*Trombicula akamusi* (和名:アカツツガムシ)の名で有名であった。新種は、白い色をしていたので、アカツツガムシに因んで、*Trombicula alba* (和名:シロツツガムシ)と命名することにした。albaはラテン語の“白い”の意味である。

助教授、昆虫学者の助手と私の3人で、2種を新種命名して、英文論文で発表した。現在は、*Trombicula*の属名は、*Leptotrombidium*となっているが、学名先取権に変わりはない。

考えてみれば、私のツツガムシ研究は、もう遠い昔の思い出になった。新種発見に情熱を注いだ若き日の事が、はっきりと脳裏に刻まれている。

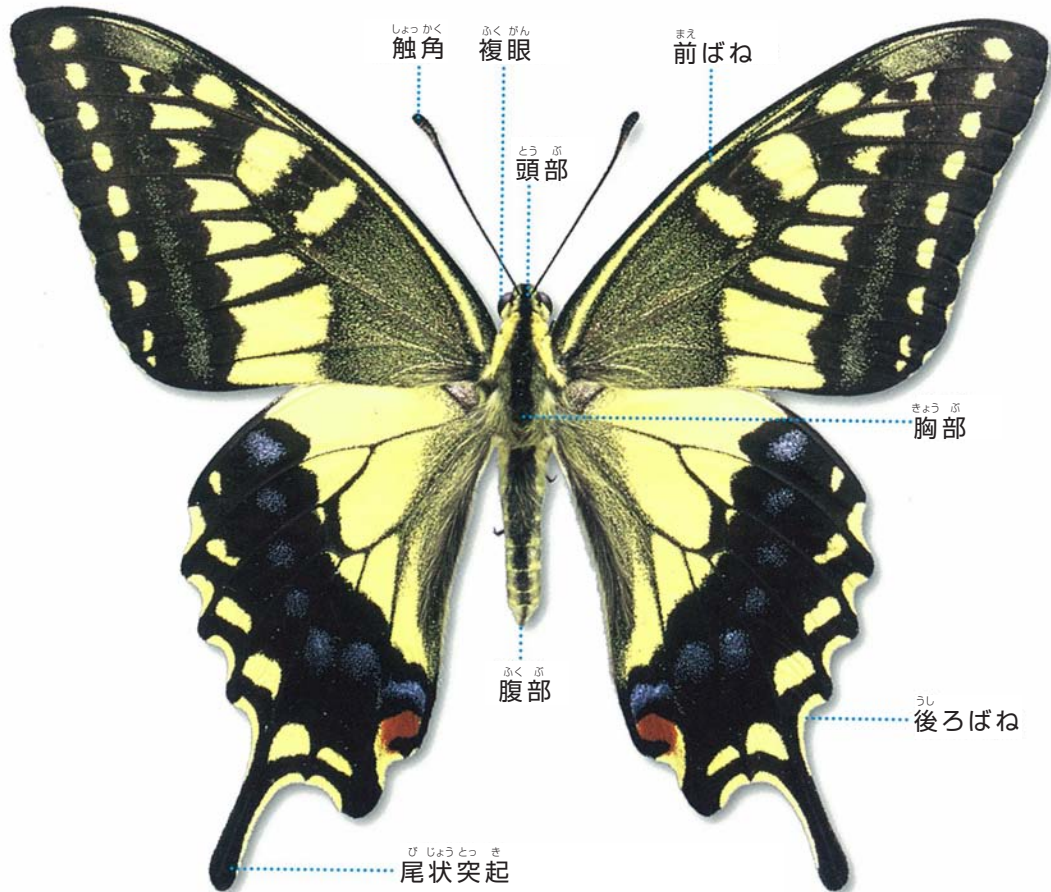
(2014年7月8日)



# 蝶の各部の名前

## キアゲハの体 からだ

からだ ほそ なが おお まい  
体は細長く、大きな4枚のはねがあります。



なつ がた  
夏型 ♂

びじょうとつ き  
尾状突起

アゲハチョウやシジミチョウのなかま  
などに見られる、つき出た部分です。

# 佐 賀 の 蝶



## ジャコウアゲハ

Chinese Windmill

*Byasa alcinous* (Krug, 1836)

前羽の長さ: 約50mm

1993年5月17日撮影(佐賀市三瀬村)

雄は黒色だが、雌は黄灰色というのも、普通の黒いアゲハとは違った感じがする。それに加えて体の両側面に、赤色から黄色の毛があるのも他の黒いアゲハとは違う。地域によって亜種がある。夏型は春型より大型であるが、斑紋に季節的な変異は見られない。とらえればジャコウの香りがする。わが国では本州北端の青森県より、九州南端の鹿児島県に至る全土に分布する。国外では朝鮮半島、中国大陸、台湾に分布する。西南日本では4月頃より出現し、年3回発生する。ゆっくりと飛び花を訪れる。

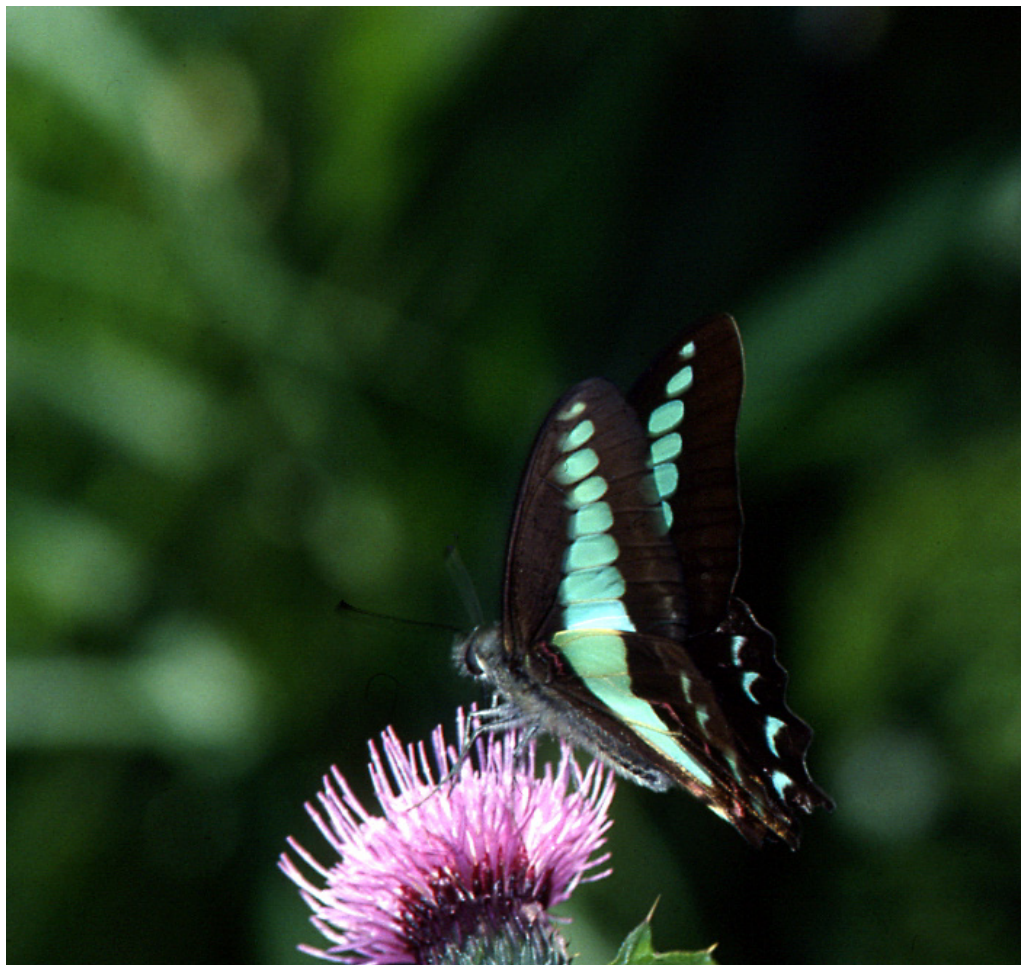
もう、何十年も前になるが、台南のガランビーで始めてベニモンアゲハを見たとき、飛び方がジャコウアゲハに似たものだった。ジャコウアゲハの食草は、ウマノスズクサ科の植物である。幼虫は暗紫色で白色帯があり、肉棘状突起をもち、他のアゲハ類の幼虫とは一見して区別できる。

1992年6月26日、佐賀県神埼郡三瀬村のキャンプ場にてかけたとき、道の横端を急いで這っている幼虫がいた。特徴的は色彩と形から、ジャコウアゲハの終齢幼虫と分かった。早速、捕まえて持ってかえり、プラスチックの箱の中に割りばしを1本入れて、その中に幼虫を放した。翌朝には茶褐色の綺麗な蛹となった。7月13日には雄のジャコウアゲハが羽化した。窓から放してやると、雨の中を元気に飛んで行った。

# アオスジアゲハ

Common Bluebottle

*Graphium sarpedon nipponum* (Fruhstorfer, 1903)



前羽の長さ: 約45mm

1992年5月26日撮影(佐賀市三瀬村)

佐賀平野に春がきて、もう、冬の寒さは戻ることはない4月中旬ごろになると、ブルーの色が目立つアオスジアゲハがさっそうと現れる。

佐賀県ではどこでも普通に見られる蝶である。夏には、この蝶が集団で水を飲みに来ているのに出会うこともある。

これらの水辺に集まるのはすべて雄である。幼虫はクスノキの葉を食べる。この蝶は南方系の蝶でインド、スリランカから、東南アジア、オーストラリア北東部まで広く分布する。

わが国では秋田県南部、岩手県南部が分布の北限。私はかつて盛岡市に住んだことがあったが、快適な東北の春に、なにか物足りないと感じていたが、それは長年見慣れてきたアオスジアゲハがいなかったためであった。

この蝶はあまり目立たないが、美しく気品のある蝶だと思う。とくに、あのブルーの色は、南国の春から夏にかけて空の色と完全にマッチしている。

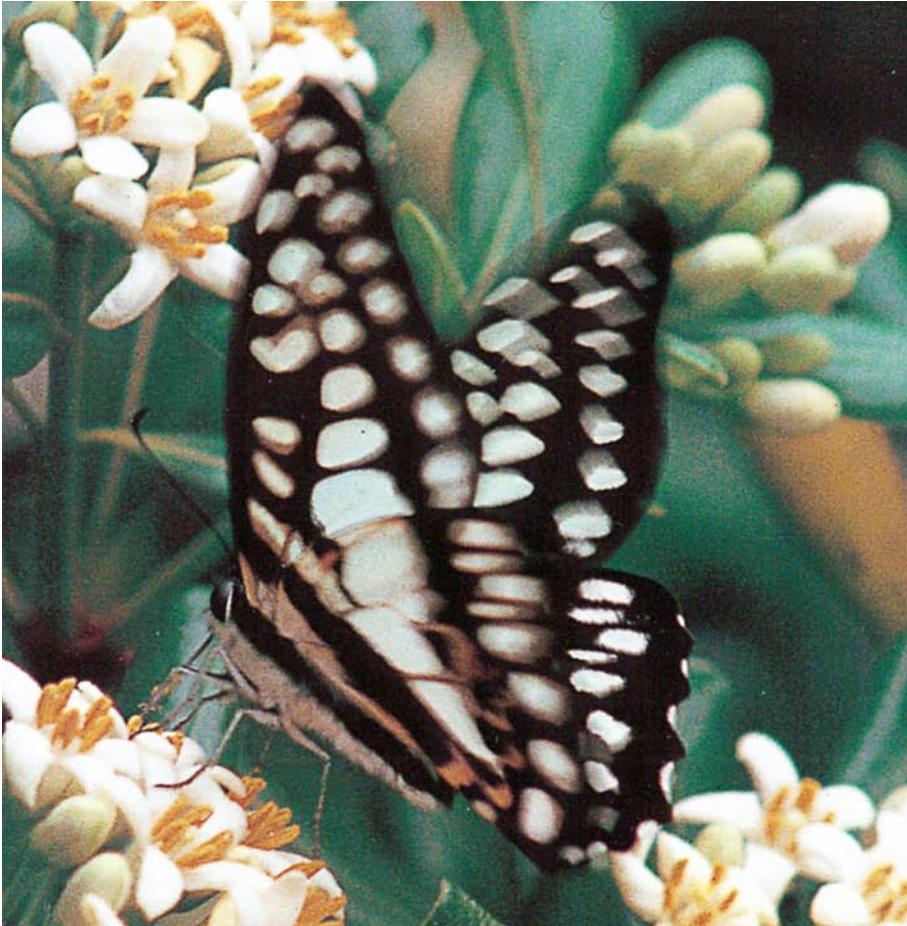
佐賀昆虫同好会会員の針貝邦生博士は佐賀新聞1992年4月2日付の"読者ろんだん"に、佐賀県の「県蝶」を選ぶことを提案され、その候補として、ツマグロヒョウモンとともに、このアオスジアゲハを挙げておられる。

私も針貝博士の提案に大賛成である。私は「県蝶」の候補として迷うことなく、アオスジアゲハに投票する。



## ミカドアゲハ

Common Jay

*Graphium doson albidum* (Wilman, 1903)

前羽の長さ:約45mm

1982年5月2日撮影(佐賀市鍋島町蛭久)

小学校5年生のころであったと思う。蝶の名前が分かりだした昆虫少年であった私は、夏の暑い盛りに、ネットをもって高知公園で蝶を追っていた。少し疲れかけて休もうとした時に、私の目の前に一頭の蝶がゆっくり飛んできた。

どこにでも見られるアゲハチョウのようでもあるし、アオスジアゲハにも似ている。とにかく初めてみる蝶である。私は図鑑の蝶の写真を頭に描いた。

「ミカドアゲハだ」。そう叫ぶと同時に、私の心臓は早鐘のように高鳴り始めた。私はミカドアゲハが高知県の天然記念物であることを知っていたが、標本さえもまだ見たことはなかった。

こんな珍しい蝶が私の目の前にいる。蝶はゆっくり飛び、私の目の前約3メートルの草に止まろうとしている。近付いて上からネットをかぶせればいいものを、私はネットを横にふった。

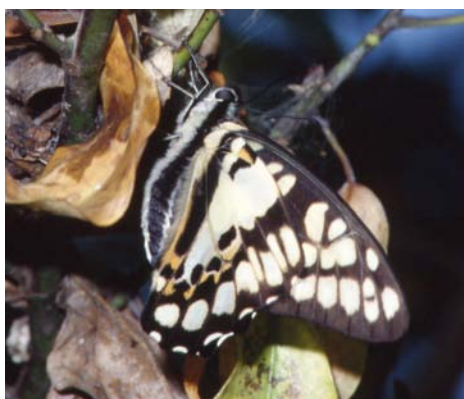
一瞬のことであった。蝶は舞い上がって逃げていった。私は我を忘れて蝶が逃げた方向に走り蝶の姿を求めた。何回も何回も同じ場所を行ったり来たりした。

しかし、蝶は二度とその姿を見せなかった。翌日も、その次の日も毎日公園に通った。ついに、私は少年の日に再びミカドアゲハに会うことはなかった。それ以来、私はミカドアゲハにあこがれ続けた。

その後、ミカドアゲハに再会したのは、10年以上も後のことで、福岡市の九大構内である。しかし、私にとってこの蝶が珍蝶であることには変わりなかった。1980年4月に佐賀市にきてから、佐賀市内にミカドアゲハがいることを聞いたのは、その発生期も過ぎたころであった。



2010年5月15日撮影(佐賀市鍋島町蛸久)



1996年4月7日撮影(佐賀市鍋島町蛸久)

幼虫



卵



蛹(さなぎ)



翌年の1981年5月7日、佐賀昆虫同好会会員の坂井文雄氏に教えて頂いた佐賀市城内に行くと、トベラの花にミカドアゲハが飛来していた。これが佐賀県での同蝶との最初の出会いであった。

ミカドアゲハの幼虫は、オガタマノキ、タイワンオガタマノキ、タイサンボクなどを食べる。佐賀市内では数カ所発生地がある。同地では蝶は4月下旬から5月上旬にかけての期間と、6月下旬から7月上旬にかけて見られる。

1982年、鍋島町の自宅の庭に、ミカドアゲハの食樹植物であるオガタマノキとタイアワンオガタマノキ、訪花植物であるトベラを植えた。夢に描いたミカドアゲハが舞う庭"を実現したいとの願いからである。毎年、発生時期になれば、ミカドアゲハの飛来を待ったが、1986年までは全く、その姿を見せなかった。1987年5月8日は、五月晴れの快適な日であった。12時31分、1頭のミカドアゲハが飛来した。羽の斑紋は青色調の個体であった。その日は、同蝶が次々に飛来した。その年の夏は、ここで羽化した個体も確認できた。1988年と1992年には、ミカドアゲハの出現を確認できなかったが、1989年、1990年、1991年には、発生時期に同蝶が飛来した。また、卵、幼虫、蛹も確認できた。長い間の夢であったミカドアゲハが舞う庭"が実現できたのである。

その後、2014年現在まで、毎年成虫を見る事が出来る。自宅の庭は、ミカドアゲハの発生地になった。

## アゲハ

Asian Swallowtail, Chinese Yellow Swallowtail

*Papilio xuthus* Linnaeus, 1767

前羽の長さ:約45mm

2014年5月10日撮影(佐賀市鍋島町蛸久)



2014年5月10日撮影(佐賀市鍋島町蛸久)

わが国で、もっとも普通のアゲハチョウである。北海道北部を除く日本全土に分布する。国外では朝鮮半島、アムール、中国本土、台湾、北ミャンマー、ルソン島、グアム島などに分布し、東アジアの特産種である。わが国では小型の春型が4月から5月にかけて出現し、大型の夏型は7月から10月にかけてみられる。平地から低山地域にみられる。キアゲハのように、標高の高い地域には棲息しない。

佐賀平野では、4月上旬に小型の白っぽい羽の個体が出現する。このアゲハをみると、もう、春の日が再び冬の日に戻ることがないと安心する。幼虫はキハダ、サンショウ、カラタチなどのミカン類の葉を食べる。成虫(蝶)は各種の花を訪れる。また、雄は高温期に湿地に下りて吸水する性質がある。サナギの状態越冬する。

わが国に古くからある蝶の文様の多くは、抽象化されており、種類の同定不能のものが多い。しかし、アゲハが原型となったものもある。わが国の昆虫学は、江戸時代に始まるとされている。その頃までに、蝶を正確に写実したものはほとんどない。江戸中期の画家であった丸山応挙は、実に正確にアゲハを写実している。この図は東京国立博物館に保存されている。その図は今日の図鑑の絵として立派に通用する。アゲハは古い時代から、もっとも日本人の眼にふれてきた蝶である。

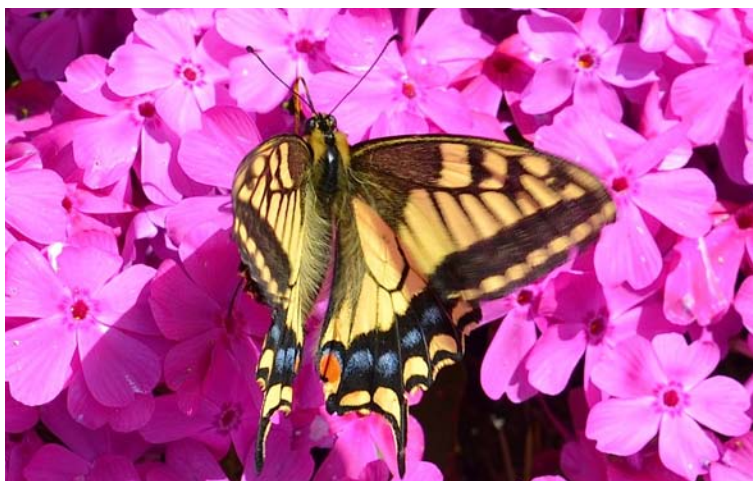
## キアゲハ

Old World Swallowtail

*Papilio machaon hippocrates* C. & R. Felder 1864

前羽の長さ:約54mm

1988年9月11日撮影(佐賀市鍋島町蛸久)



2012年4月27日撮影(佐賀市三瀬村)

日本で蝶といえば、多くの人が、まず、頭に浮かべるのが黄色い大型のアゲハチョウか、モンシロチョウである。前者としては、わが国には、アゲハとキアゲハの二種しか分布しない。

アゲハに似ているが、キアゲハは前翅基部の黒色部が幅広いので容易に区別出来る。(アゲハは同基部に黒色の線が3本ある)

キアゲハは濃い黄色の地色に黒のしま模様の羽を持ち、後ろ羽には細長い尾状突起が一对ある。この蝶は全ヨーロッパ、アフリカ北西海岸からシベリア、ヒマラヤを経て、極東の中北部、さらに北米にも分布する。

わが国では屋久島以北の日本全土に産し、平地から高山地帯にまで生息する。成虫は明るい環境を好み、各種の花に飛来する。雄は山頂を占有する性質があり縄ばりを持つ。

幼虫はニンジン、チクシゼリなどのセリ科の植物を食べる。また、ミカン科の植物を食べることがある。九州の低地では、年に3、4回発生するといわれている。春型は小さく夏型が大きい。

北米は広い。北米には、キアゲハと非常に似た種類の蝶が10種以上もいる。私は1969年秋、フロリダのタンパにアメリカ人の友人を訪問した。彼の家近くに自然環境に恵まれた小さい公園があり、そこに蝶が次から次へと飛来していた。

そのとき採集した蝶の標本を今でも保存しているが、その中にキアゲハに近い種類の蝶が数頭ある。

## ナガサキアゲハ

Great Mormon

*Papilio memnon thunbergii* von Siebold, 1824

前羽の長さ:約65mm

1993年9月10日撮影(佐賀市鍋島町蛸久)



2012年5月5日撮影(佐賀市鍋島町蛸久)

尾(尾状突起)がない大きなアゲハチョウである。雄は黒い蝶であるが、雌には前羽の基部に橙赤斑があり、後羽には白斑がある。この雌の白斑の発達は、南方産のものが強く、西表島では前羽まで白色化が著しい個体が見られていたが、絶滅したらしい。東洋熱帯に広く分布し、外国には有尾型のものもある。わが国では本州の近畿以南、四国、九州に分布する。

九州では通常、年3回発生。佐賀県では普通種で、春から秋までみられる。

戦後、昭和天皇が九州ご巡行のとき、飛んでいる蝶をご覧になって、「あ、ナガサキアゲハだ」と仰せになったと新聞記事に出ていた。それを読んで、天皇陛下は、さすが生物学者だと感銘を受けたことを覚えている。幼虫の主な食草はミカン類である。蛹で越冬する。

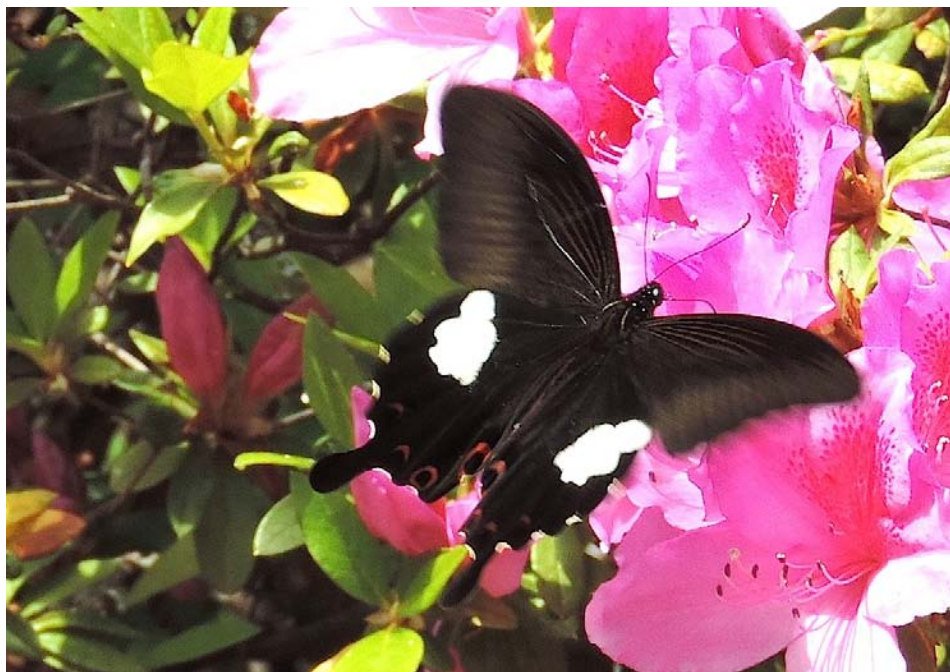
少年の日、蝶の名前も分かりだした頃、高知公園に採集に行くと、大きな黒いアゲハに時折出会った。悠々と飛んでくるが、捕まえられない。その年の夏休みが終わって、小学校で昆虫採集展示会があったが、2、3の生徒の標本箱にこの蝶があった。その頃、平山修次郎著の「原色昆虫図鑑」を持っていたが、その中にこの蝶はない。これがナガサキアゲハだと知ったのは、しばらく経ってからである。

熊本県に転居すると、借家の庭にザボンの木があった。毎年、たくさんのナガサキアゲハの姿がみられた。なかには、白紋の発達した美しい個体も見られた。この蝶は九州全域に分布し、各地に普通にみられる。ナガサキアゲハは、九州を代表する蝶として推薦したい。

# モンキアゲハ

Red Helen

*Papilio helenus nicconicolens* Butler, 1881



前羽の長さ:約65mm

2014年5月5日撮影(小城市松尾)



1980年5月11日撮影(小城市松尾)

後翅に鮮やかな白い紋がある。大型の見事な黒い蝶である。雌雄の斑紋は、ほとんど同じであるが、雌は後羽外縁部の赤い弦月紋が雄より発達する。後羽の白い紋の大きさや形には変異がある。国外では台湾、中国本土から西はインド、東はチモールにかけての東洋熱帯に広く分布する。国内では神奈川県以南の本州西半、四国、九州、南西諸島に多くみられる。九州では、通常、年2回発生する。第1化の春型は5～6月に、夏型の第2化は7～8月に発生する。

幼虫の主な食餌植物は、キハダ、カラスサンショウなどのミカン科の植物である。佐賀県には平地・山地に普通に見られる。1980年4月に私は佐賀市に移転したが、佐賀県にモンキアゲハが多いのに驚いた。とくに、その年は多かったようである。

モンキアゲハには少年の頃の苦い思い出が残っている。

私とO君、K君の3人の昆虫少年は、高知公園の梅の段に採集にきた。梅の木の下には、美しいオニユリが咲き乱れている。真黒い大きな翅に、くっきりとした白い紋のあるモンキアゲハが飛んできて、花壇の中にあるオニユリに止まって蜜を吸いだした。夢にまでみる蝶だ。もちろん、ライバルのO君も捕っていない。私は垣根を越えて花壇の中に入ろうとした瞬間、O君が私の腕をつかまえた。私は大きな声で言った。

「僕が先にみつけたから、捕るよ」

「なんぼ君がみつけても、公園の花壇に入ったらいかんよ、学校で習っただろう」

そんな言葉は聞かず、私はO君を振り払って、垣根を飛び越え、網で蝶をユリの花もろとも上からかぶせてしまった。美しいユリの花は、ばらばらと散った。次の瞬間、私の網の中で、大きな蝶は、ばたばたしていた。はやる心で、私は蝶を三角紙に包んで、O君の目の前に突きつけてみせた。O君は私をにらみつけている。「ざまみやがれ、今日こそ、目の前でO君の捕れなかつ



佐賀昆虫同好会会員 廣川典範氏所蔵標本  
(1990年5月11日撮影 武雄市御船山で採集)

た蝶を捕ったのだ」と思って私は愉快でたまらなかった。

「入っていかん所に入って蝶を捕るのは、誰でもできらあね。そんな悪い奴とは採集しないから」

と言って、O君は怒って帰ってしまった。その夜は嬉しくて、嬉しくて眠れなかった。

しかし、そのうちに、O君の言った言葉が暗雲となって襲ってきた。O君と堂々と競争して、勝ったわけではないのだ。私は起き上がって蝶を出してみた。真っ黒い見事な羽に、くっきりと白斑が入ったモンキアゲハが三角紙の中に取っていた。初めて手に入れたモンキアゲハは、新鮮で完全なものであったが、まだ、私のものではないような気がするのであった。

1980年佐賀医大に赴任してすぐ、小城市松尾の寺の庭に沢山のモンキアゲハがいたので撮影出来た。その後、春になると何回も同場所に足を運んだが、時期が悪かったり、蝶に遭遇しなかったりして撮影のチャンスがなかった。2014年になって、ようやく撮影出来た。実に34年ぶりであった。

## シロオビアゲハ

Common Mormon

*Papilio polytes* Linnaeus, 1758

前羽の長さ:約50mm

1968年11月17日撮影(採集地記録なし)

非常にシックな感じのする熱帯蝶である。地色が黒色の雄の翅には、後羽中央に白色紋が帯状に並び、前翅外縁にも後から次第に小さくなる白色紋がある。雌は雄と全く同じ色彩・斑紋の型のもので、雄とは違った型のもので2つの型がある。後者は、後翅中央に白色紋が2つだけあり、赤色紋が大きい。また、前翅外縁部の白色紋がない。

この蝶は、西はインド、セイロンから東はモルッカ諸島、チモールに到る東洋熱帯に分布する。わが国では、奄美大島以南の南西諸島に産する。日本産のものは尻尾(尾状突起)がある有尾型であるが、マレイ地区のものは尻尾がない無尾型である。幼虫は各種のミカン科の植物を食べる。蛹で越冬する。冬期の低温期を除いて年中連続的に発生している。

私とシロオビアゲハとの最初の出会いは、1961年頃、奄美大島に行ったときである。図鑑に、奄美大島には極めてまれと書いてあったので、この蝶を何頭か見たときには驚いた。1965年、沖縄を訪問して、たくさんのシロオビアゲハに出会った感激は今も忘れない。南国の明るい空のもとに、ホテルの庭に植えてある花に、この蝶が次から次にと飛来していた。その時は、まだ、蝶の生態撮影を始めていなかったが、何回もシャッターチャンスがあったと思うと残念でならない。

シロオビアゲハは佐賀県では、小城市三日月町で採集されたと、1998年報告されている。この個体は南方から飛来したものではなく、植物に付いて運ばれてきた蛹から孵化した個体であろうとの推定もある。この1頭以外に佐賀県では本種の記録はない。



## クロアゲハ

Spangle

*Papilio protenor demetrius* Stoll, 1782

前羽の長さ:約60mm

2010年5月16日撮影 (佐賀市三瀬村)

わが国の昆虫少年は、似通った道をたどるのではないだろうか。私はときどき、そう思う。蝶に魅せられ、自分で標本を集めようとする、まず、家の周りの蝶から集めることになる。それは、やはり、もっとも多い蝶からということになる。

モンシロチョウ、キチョウ、ベニシジミ、アゲハチョウなどを採集してゆくうちに、自分が見たことがある大きな、黒いアゲハを捕ってみたいと思うようになる。初めて自分がかまえた黒い蝶が、網の中でバタバタしている瞬間の感激を忘れる昆虫少年はいない。関東以南であれば、この蝶はクロアゲハのことが多いであろう。

クロアゲハの雄の羽表は、ほとんど真っ黒であるが、雌は前翅が淡色で、翅表に沿う黒条がよく見える。また、雄では後翅前縁に黄白条があるが、雌にはそれがない。本州、四国、九州(南西諸島を含む)に分布するが、東北北部ではまれである。国外では台湾、中国、トンキン、ミャンマーより、西北ヒマラヤにかけて分布する。わが国西南部では、年3回発生する。春型は夏型より小型であるが、斑紋には著しい差はない。幼虫はユズ、ウンシュウミカン、カラタチ、サンショウなどのミカン科の植物を食べる。蛹で越冬する。日本産のクロアゲハは有尾型であるが、台湾では無尾型が普通である。

## オナガアゲハ

Long Tail Spangle

*Papilio macilentus* Janson, 1877

前羽の長さ:約50mm

佐賀昆虫同好会会員 廣川典範氏所蔵標本  
(1991年7月7日採集 大分県九重山黒岳で採集)

翅の形のスマートな黒いアゲハである。ジャコウアゲハに似ているが、ジャコウアゲハには胸部と腹部の側面に、赤色または黄色の毛が生えているが、オナガアゲハには、それがない点で容易に区別できる。

クロアゲハにも似ているが、クロアゲハより、翅の形がほっそりしており、しっぽ(尾状突起)が長い。

オナガアゲハの雌雄の区別も簡単で、雄は後羽の前縁にはっきりした黄白紋があるが、雌にはこれがない。この蝶には春型と夏型があるが、夏型のほうがずっと大きい。北海道、本州、四国、九州に分布する。国外では朝鮮半島、中国本土に産する。

幼虫はコクサギを好むが、ミカン科のカラタチ、サンショウなども食べる。蛹で越冬する。本州中部以北では平地にもいるらしいが、暖地では山地性の蝶である。アゲハ科の蝶としては飛び方が弱く、山間の溪流付近などを飛び花を訪れる。

佐賀県内からは佐賀市や鳥栖市を初め各地から報告があるが、最近では佐賀県内の各地で激減し、稀少種の一つであるという。ところが、1993年5月7日に神埼郡三瀬村でオナガアゲハの雄1頭を捕獲したが、新鮮な個体が次々に飛来して、ツツジの花を訪花した。同地では、この蝶は少なくないと思われる。

# カラスアゲハ

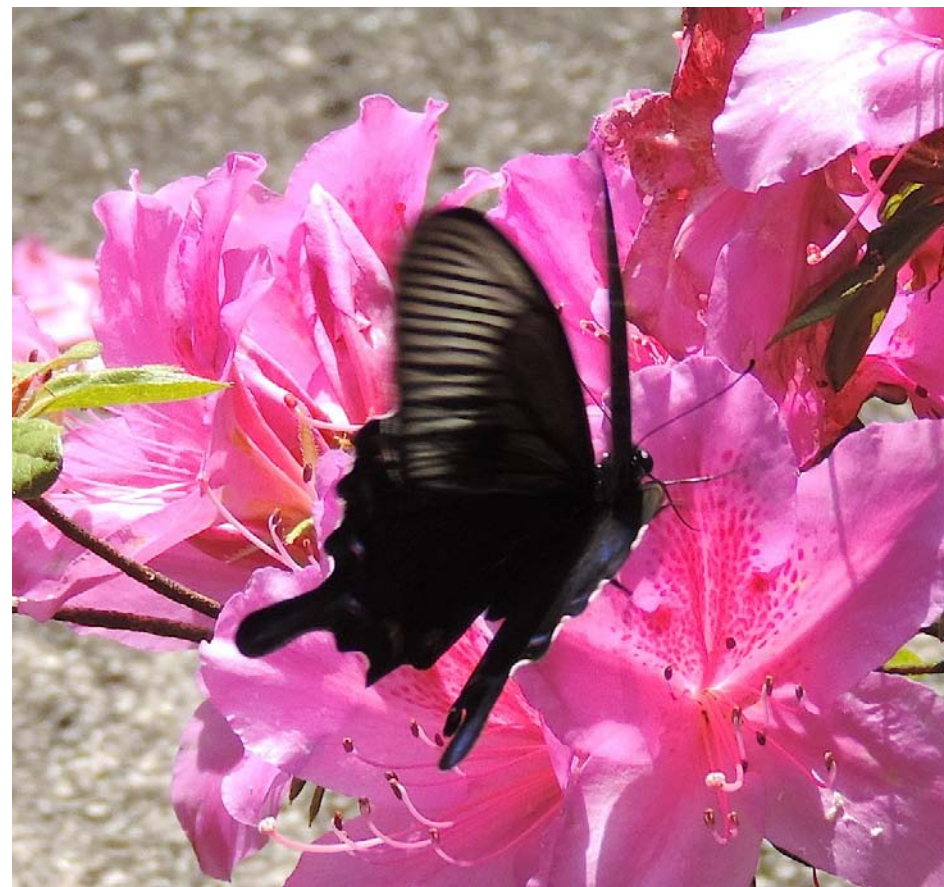
Chinese peacock, Bianor peacock

*Papilio dehaanii* C. & R. Felder, 1864



前羽の長さ:約60mm

1975年8月9日撮影(盛岡市北山)



2014年5月14日撮影(小城市松尾)



1992年8月7日撮影(佐賀市三瀬村)

真っ黒い髪のことを、「髪はカラスのぬれ翅色」という。しかし、カラスアゲハの翅の色は真っ黒ではない。黒地に藍緑色の鱗粉をふりまいたような美しい翅である。カラスアゲハという名前は、むしろクロアゲハにふさわしいと思う。そんなに美しいアゲハチョウである。

カラスアゲハは、私が少年の日に、あこがれ続けた蝶の一種である。

この蝶は日本全国の山地、平地にいるが、佐賀県では山地や山ろくに多く、平地では少ない。国外ではサハリン、朝鮮半島、中国東北部から、台湾、中国、トンキン、北ミャンマーにかけて産し、その分布は広い。

日本西南部では春型は4～5月、夏型は7～8月に発生する。幼虫はコクサギを好み、カラスザンショウ、キハダなどのミカン科植物を食べる。成虫はアザミ類やツツジ類の花に飛来する。

山の林道などに次々に個体が飛来する蝶道をつくる性質がある。雄は川原などに水を飲みに集まってくる。

昆虫少年に日、クロアゲハしか採集したことがなかった私は、初めてカラスアゲハを採集した瞬間、なんと奇麗な、黒い大きな蝶がいるのかと、その驚きと感激は忘れる事は出来ない。

## ミヤマカラスアゲハ

Chinese Windmill, Alpine Black Swallowtail

*Papilio maackii* Ménétrières, 1858

前翅の長さ: 約45mm

2011年5月5日撮影(佐賀県小城市松尾)

カラスアゲハと非常に似ているが、本種はカラスアゲハと比べて、前翅の先端が尖り、後翅の丸みがないが、これは両者を比べてみないと分からない。後翅裏面に黄色帯があればミヤマカラスアゲハと断定出来る。また、前翅裏面の白色帯が、カラスアゲハでは、下より上に末広がりになっているが、本種では、この白色帯が、殆ど同じ幅で、外縁に、ほぼ平行である(雌では区別点にならない個体がいる)。雌雄の差は、雄では、前翅の下部分(第1b, 第2室)に、ピロード状のもの(性斑)があるが、雌には、これがないので、雌雄の区別は容易である。

普通年2回の発生で、春型(4~5月出現)、夏型(7~8月出現)がある。両型とも、雄は集団を作って湿地に降りる事がある。北海道、本州、四国、九州に分布する。国外では朝鮮半島、ロシア南東部、中国、台湾に分布する。山地に見られ、平地には極めて、まれである。幼虫の食餌植物は、キハダ、カラスサンショウなどのミカン科植物。

昆虫少年の日、私は山で何頭のカラスアゲハを採集したが、今思えば、確かにミヤマカラスアゲハも採集したらしい。当時は、私の知識では、未だカラスアゲハとミヤマカラスアゲハの区別は出来ない状態であった。

1991年4月30日(佐賀県経ヶ岳で採集)  
佐賀昆虫同好会会員 廣川典範氏所蔵標本

## ツマキチョウ

Yellow Tip

*Anthocharis scolymus* Butler, 1866

前羽の長さ:約24mm

1988年5月5日撮影(佐賀市鍋島町蛸久)

佐賀地方に桜の花が散り始める頃になると、白い蝶が飛び交うようになる。モンシロチョウが多いが、よく見ると、モンシロチョウよりも、やや小型で、よわよわしく飛ぶ白い蝶がいる。

追っかけて止まったところをみると、なんと羽の先がだいたい色になっており、モンシロチョウとは全然ちがう。これがツマキチョウである。幼虫はタネツケバナ、イヌガラシなどを食べる。

実に可憐な蝶で、春の乙女といったところである。しかし、だいたい色があるのは雄で、雌にはだいたい色の部分がない。私はこの蝶をみると、なぜか万葉集の次の歌を思い浮かべる。

春の園紅匂う桃の花下照る道に出で立つ乙女 大伴家持

小学校6年生になったばかりだったころ、私は高知市の小学校から九州の学校に転校してきた。転校した小学校理科室にある蝶の標本の中に、ツマキチョウがあった。

初めて見る蝶である。さらに採集場所も記されてあった。この蝶は高知市内でみることはなかった。あこがれ続けた蝶である。

私は早速、地図に示された場所に採集に行った。感激して体全体が硬直したような状態になり、蝶を網の中に入れた。これが私とツマキチョウとの最初の出会いであった。



1984年5月6日撮影(佐賀市鍋島町蛸久)



2014年4月21日撮影(佐賀市鍋島町蛸久)

左が雌, 右が雄のツマキチョウ

## モンシロチョウ

Small White, Small Cabbage White

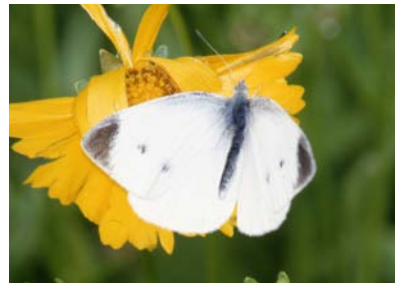
*Pieris rapae crucivora* (Boisduval, 1836)

前翅の長さ:約30mm

2014年5月24日撮影(佐賀市鍋島町蛸久)



1992年4月23日撮影(佐賀市鍋島町蛸久)



1992年4月23日撮影(佐賀市鍋島町蛸久)

からころも

唐衣着つつなれにし妻しあれば、  
はるばる来ぬる旅をしぞ思う

伊勢物語

私は旅をしたとき、まず、そこの蝶を見る。自宅の周囲に全く見ない蝶がいると"遠い所に来た"という気分になる。逆に、自宅付近に普通にいた蝶を見たならば、地理的にはどんな遠い所に来ていても、その感じはなくなってしまう。

モンシロチョウは、ヨーロッパ大陸をはじめ、世界各地に広く分布する。私は、北米でも英国でもモンシロチョウに出会って、がっかりしたことを覚えている。モンシロチョウの原産地は地中海地方といわれ、食草のキャベツに付いて西回り、東回りで世界各地に広がったとされている。

私は2008年、クロアチアを旅行した時、モンシロチョウを沢山見た。

江戸時代の終わり頃には、モンシロチョウが日本にいたことが当時の記録や図、あるいは残された標本などから確認されている。それでは、モンシロチョウはいつ日本に来たのだろうか。日本列島には農耕文化とともに、アジア大陸から渡来したという説がある。そうすると、吉野ヶ里の人々は、モンシロチョウを見たであろうか？これは興味ある問題である。さて、弥生の昔から現代に戻ろう。

紋白蝶(モンシロ)の花なき芝の海に出づ 耕雲

ウインブルドン九州テニスコート(現在のグラスコート佐賀)を作られた故緒方勝徳(耕雲)博士の句である。テニスコート発足当時に、購入された六千坪の土地に1頭のモンシロチョウが飛んできた。それを見て、博士は自らをモンシロチョウにたとえて、事業家の心境を詠まれた。今日の世界一のローンテニスコート誕生の秘話である。

## スジグロシロチョウ

Gray-veined White

*Pieris melete* (Ménétrières, 1857)

前翅の長さ:約30mm

1992年6月28日撮影(佐賀市鍋島町蛸久)

飛んでいるのを見つと、モンシロチョウによく似ている。モンシロチョウは菜の花畑などの明るい場所に多いが、この蝶は樹林などの日陰を好むようである。また、大きいモンシロチョウだなぁと思ってよく見ると、スジグロシロチョウである。翅脈が黒いので、モンシロチョウとは容易に区別できる。

雌雄によって、また、季節型によって斑紋は違ってくる。雄は春型、夏型ともに翅表は雌に比べて白っぽい。雌雄ともに、春型の裏面の後翅の翅脈は太く黒いが、夏型のは黒くないなどの相違がある。わが国では北海道、本州、四国、九州に分布する。南西諸島には産しない。

国外では朝鮮半島、ウスリー、アムールに分布する。春型は関東以南では、モンシロチョウとほとんど同時期に、3月下旬から4月上旬にかけて現れる。夏型は5月中・下旬から出現し、以後、初秋まで発生を繰り返す。

佐賀県では、どこでも見られる普通種である。幼虫はアブラナ科の植物を食べる。蛹で越冬する。スジグロシロチョウに非常に似ているのは、ヤマトスジグロシロチョウ *Pieris nesis* (Fruhstorfer, 1909) である。本種も北海道、本州、四国、九州に分布する。佐賀県では向島、馬渡島、加唐島などから報告されている。さらに、近似種にエゾスジグロシロチョウ *Pieris dulcinea* (Butler, 1882) がいる。本種は北海道石狩平野の東側に分布する。

同じ *Pieris* 属の蝶で台湾モンシロチョウ *Pieris canidia* (Sparman, 1768) 、がいる。この蝶は佐賀県では、馬渡島で迷蝶として発見されている。

またシロチョウ科の迷蝶で、チョウセンシロチョウ *Pontia daplidice* (Linnaeus, 1758) も佐賀県では、東松浦郡から記録されている。



## キタキチョウ

Common Grass Yellow

*Eurema mandarina* (de l'Orza, 1869)

前羽の長さ:約23mm

1992年10月13日撮影(佐賀市三瀬村)



2012年10月7日撮影(佐賀市鍋島町蛸久)

九州では、最も普通の黄色の蝶である。北海道には分布せず、東北北部では、まれである。国外ではエチオピア区、全インド、オーストラリア区に広く分布する。幼虫はマメ科のハギ類を食草とする。早春に出現するものは、越冬した個体である。第1化は、5月上旬から6月上旬にかけて出現し、新鮮な個体である。以後、発生を繰り返し晩秋に及ぶ。晩秋に発生したものだけが成虫で越冬する。佐賀地方では、冬になっても暖かい日には飛んでいるのが見られる。

従来、キチョウと分類されていた種類に、石垣島の種類は別種のものが混在している事が判明した。斑紋にも差がある。

石垣島産のものはキチョウ (ミナミキチョウ)*Eurema hecabe* (Linnaeus, 1758)、本土産のものはキタキチョウと分離された。佐賀県のは、キタキチョウである。

キタキチョウは、私にとって非常に身近な蝶といえる。それは、この蝶と一緒に過ごす時間があるからである。佐賀市にあるグラスコート佐賀のコートは、世界一の天然芝のテニスコートである。美しい緑の芝生と、その管理は他の追随を許さない。このコートでプレーしているときに、飛んでくるのがキタキチョウである。テニスコートに出てきたキタキチョウは、打ち合っているボールを追っかける。ボールが黄色なので、仲間の蝶と誤認しての行動であろう。緑の芝生の上を、ボールを追って飛び回るキタキチョウの姿は、絵になっている。しかし、これは春から秋にかけての光景である。冬はどうか。

テニスクラブのオーナーであった故緒方勝徳(耕雲)博士は、私に次の2句を送って下さった。さすがに俳人の眼は鋭い。

冬の蝶テニスネットが越せぬまま

芝眠る蝶の果ており昼の月

佐賀県の蝶として、ツマグロキチョウ *Eurema laeta betheseba* (Janson, 1878)がいる。本種は普通種であったが、最近では絶滅の危機にある。さらに、ホシボシキチョウ *Eurema brigitta*(stoll,1780)が、1955年9月～10月にかけて、わが国で最初に唐津市で、迷蝶として採集された。食草は、ツマグロキチョウと同じカワラケツメイ(マメ科)。

## モンキチョウ

Eastern Pale Clouded Yellow

*Colias erate poliographus* Motschulsky, 1860

前羽の長さ:約27mm

1985年5月29日撮影(佐賀市鍋島町蛸久)

雄の羽の地色は黄色であるが、雌には地色が黄色のものと、白色のものがある。斑紋は雌雄同様である。南ロシアからヒマラヤ、インド高地、中国全土、台湾、朝鮮半島にわたり、広く分布する。わが国では北海道から九州まで普通に見られる蝶である。3～4月から春型が発生し、5月下旬から6月に夏型が出現し、以後、秋まで発生を繰り返す。幼虫の食草は、コマツナギ、ミヤコグサなどのマメ科の植物である。成虫は日当たりのよい草地などに多く、花に集まる。

この蝶は、かつて成虫で越冬すると思われ、オツネンチョウという別名まで貰っていたが、成虫では越冬せず、幼虫で越冬することが明らかになった。

米国には、橙色を帯びたモンキチョウがいる。

1969年、私は妻と二人で、米国クリーブランドを訪問した。山地を歩いていると目の前にモンキチョウがきた。初めてみる蝶である。私は夢中になって、手で捕まえようと走りだした。妻も一緒になって走り、自分の上着を脱いで、それで蝶を捕るようと私に渡してくれた。二人は走って上着でやっと捕まえた。その時、私は3、4人のアメリカ人に取り囲まれた。私が妻の上着をもって、妻と走っているのを車の中から見ていた人々に、なんと、私は逃げる女性を襲う追剥、強盗おいはぎに間違えられたのである。

## ウスキシロチョウ

Lemon Emigrant

*Catopsilia pomona* (Fabricius, 1775)

前翅の長さ:約36mm

1982年8月1日撮影(沖縄県石垣島)

東洋熱帯地方の国に行けば、よく見かける普通の蝶である。色彩・斑紋が雄雌でかなり違う。雄の翅の地色は白色で、前翅、後翅ともに基部半分が黄色である。前翅の先端部と外縁部が黒色で縁取られている。

雌の翅表の地色は、黄色～黄白色で基部半分が濃い。先端部と外縁部の黒色は幅が広い。裏面の前翅に1個、後翅に2個の銀色の紋がある個体と、銀紋が全くない個体がある。前者は、ギンモンウスキチョウと呼ばれ、後者は、ムモンウスキチョウと名付けられ別種とされていた。しかし、両者の間に交尾器に差がなく、両者が雑交して中間型を生じることが古くから知られている。現在では、両者は同一種で、銀紋型、無紋型とされている。

西はスリランカ、インドから、東はオーストラリア、ソロモン群島に至る広大な地域に分布する。わが国では八重山諸島が安定した土着北限とされている。沖縄、奄美諸島では、年によっては越冬固体も見られるが、移住固体が主であるという。石垣島では、2～3月は銀紋型が多く、6月には無紋型が多いという。幼虫はタガヤサン、ナンバンサイカチ、ハネセンナなどを食べる。

関東以南の本州、四国、九州に迷蝶としての記録が多い。佐賀市からも報告があり、その他、西松浦郡、東松浦郡、唐津市などから迷蝶として報告がある。

2010年7月に、ウスキシロチョウの大量飛来があった。飛来は九州だけでなく、関東まで及んだ。佐賀県では、金立町で同年7月16日から18日にかけて目撃された。その後、佐賀県からは、知る限り報告は見あたらないようである。

佐賀県で記録された、同じ*Catopsilia*属の迷蝶に、ウラナミシロチョウ *Catopsilia pyranthe* (Linnaeus, 1758)がいる。この蝶は、佐賀市、杵島郡、唐津市等から報告されている。私は1983年、タイ国を訪問したとき、この蝶がたくさんいるのを見た。同国では普通種である。

# ウラギンシジミ

## Angled Sunbeam

*Curetis acuta paracuta* de Nicéville, 1901

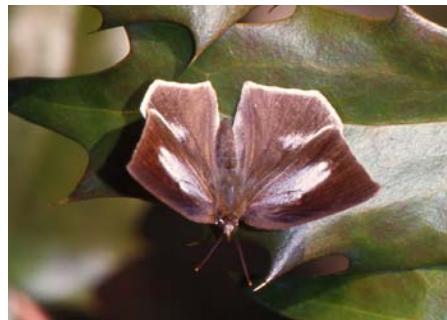


前翅の長さ: 約22mm

2009年9月4日撮影(佐賀市鍋島町蛸久)



2009年9月4日撮影(佐賀市鍋島町蛸久)



ウラギンシジミの雌  
1996年4月7日撮影(佐賀市鍋島町蛸久)

秋きぬと目にはさやかにみえねども風の音にぞおどろかれぬる

藤原敏行

九州の9月下旬は、日中はまだ暑い日があるけれども、もう、はっきり秋を感じさせる。春から夏にかけての蝶の世界の全盛期は過ぎ去ったにしても、まだ多くの蝶がみられる。

ウラギンシジミも、この時期に色彩をそえる蝶である。銀白色の裏面を輝かしながらさっそうと飛んでくる。雄の翅の表面は、黒褐色に縁取られた橙赤色で、雌は同じく黒褐色に縁取られた蒼白色である。

本州では関東以南に分布し、四国、九州では普通種である。北海道には生息しない。国外では朝鮮半島、台湾、中国に分布する。通常、年2回発生する。夏型は6～9月に出現し、秋型は9月ごろから現れる。

秋型は夏型に比べて、前翅端のとがりが著しい。幼虫の食草は、フジ、クズなどのマメ科植物である。越冬した雌は春に出現して産卵し、それより幼虫がふ化して夏型となる。

私とウラギンシジミの出会いは、やはり少年時代である。最初に、この蝶を見たとき、なにか非常にエキゾチックな感じがしたことを覚えている。後年、北九州で張り切って仕事をしていたとき、自宅の前にもものすごく多くのウラギンシジミがいたことが、私の人生の一時期の思い出につながる。

## ゴイシシジミ

Forest Pierrot

*Taraka hamada* (H. Druce, 1875)

前羽の長さ:約15mm

2004年10月25日撮影(佐賀市鍋島町蛸久)

雌雄ともに斑紋色彩に変わりなく、翅表は黒褐色、翅裏の地色は白色で、黒斑が配列している。しかし、雌は翅が丸いが、雄は翅の丸みが少ないので、馴れれば区別出来る。

北海道、本州、四国、九州に分布する。国外では朝鮮半島、台湾、中国、ベトナム、など東南アジアからインド迄広く分布する。日本では、まれと云う程ではないが、産地が限局している。佐賀県では、5月上旬から秋まで見られるが、どこでもいるわけではない。

本種の幼虫は、純肉食性で、タケ・ササ類に付くササコナフキツノアブラムシを食べる。それで、竹林など、そのアブラムシが居る場所に発生する。幼虫で越冬する。

昆虫少年の日には、本種の存在さえ知らなかった。本種との最初の出会いは盛岡市の小高い山の有名人の墓地であった気がする。佐賀市に來てからも、ずっと、この蝶に出会った事はなかったが、2004年10月25日、何と自宅の裏の竹やぶで発見した。その場所には数頭以上いて、時には自宅の庭に迄來ていた。ここ数年は同場所で全然見かけない。

## ムラサキシジミ

Japanese Oakblue

*Narathura japonica* (Murray, 1875)

前翅の長さ:約19mm

2011年11月10日撮影(佐賀市鍋島町蛸久)



2011年11月10日撮影(佐賀市鍋島町蛸久)

翅の裏は茶褐色であるが、表は黒帯に縁取られた美しい紫色の翅をもつシジミチョウである。本州西南部、四国、九州に分布する暖地性の蝶である。

これらの地域では普通種であるが、北へ行くに従ってまれになる。宮城県仙台市が分布の北限とされている。国外では朝鮮半島南部、台湾に分布する。成虫で越冬した個体が春に産卵する。

卵からかえった幼虫は、九州では5月上旬から6月上旬にかけて成虫となる。その後、発生を繰り返し、晩秋まで成虫が見られる。蝶は木立内やその付近に多く、畑や草原では見られない。夏には翅をたたんで止まり、なかなか美しい紫色の翅の表を見せてくれない。

秋が深くなると翅を開いて日光浴をするようになる。

幼虫はアラカシ、アカガシなどのカシ類を食べる。私とムラサキシジミの出会い、シジミといえば、まだヤマトシジミやルリシジミしか知らなかった、少年のころである。

高知市の北山に採集に行った時、カシの木々の間にいるムラサキシジミに遭遇して、何と素晴らしい紫色の蝶がいるものだと感じたことを覚えている。ムラサキシジミとよく似た蝶に、ルーミスシジミ *Panchala ganesa loomisi* (H. Pryer, 1886) がいる。この蝶は、わが国では関東地方以南の暖地に産するが、ムラサキシジミと違い、その分布は局所的で、佐賀県からは知られていない。

## ムラサキツバメ

Powdered Oakblue

*Narathura bazalus turbata* (Butler, 1882)

前羽の長さ:約22mm

1988年10月8日撮影(佐賀市鍋島町蛸久)



1995年11月3日撮影(佐賀市鍋島町蛸久)

雄の羽の表面は暗紫色、ほぼ全面に暗紫色の光沢がある。雌の羽の表は黒褐色の部分が広いが、前羽の基部は美しい紫色である。雌雄ともに、後羽には尻尾(尾状突起)がある。

雌雄の羽の裏面の地色は褐色で、地色よりやや濃色の斑紋ほんもんが散在する。わが国では九州、四国に分布する。佐賀県では珍しい蝶ではないが、平野部のどこでも見られるものでもない。

私が佐賀県内で最初に見たのは、佐賀医大の構内であった。国外では台湾から西はヒマラヤ、南はジャワまで分布する。わが国では幼虫はマテバシイ、シリブカガシなどのブナ科植物を食べる。幼虫で冬を越す。私が少年のころ、高知市の中等学校の生物の先生と親しくなり、ある秋も深まった日に、初めて山に採集につれて行っていただいた。

驚いたことに、何十頭、いや何百頭という数のムラサキツバメの集団に出会った。採集した後で、塩をふりかけた握り飯を頂いたが、そのおいしかったことは忘れられない。先生は、よく蝶を追っかけて谷に落ちる少年が多いと話された。

虫の魅力の虜になり、学業がおろそかになるということである。先生は私が昆虫少年として、深入りしないようにと抑制された。そのこともあって、私は人並みに学業を全うした。このようなわけで、ムラサキツバメは、私の人生と深いかわりをもつ蝶となった。

絶滅危惧Ⅱ類種

## ウラキンシジミ

Golden Hairstreak

*Ussuriana stygiana* (Butler, 1881)

前翅の長さ:約19mm

1975年8月10日撮影(岩手県宮古市)

文字通り翅裏が黄金色の蝶である。雌雄の斑紋は、ほとんど同様であるが、雌の裏面の色彩は、雄に比べてやや明るい。裏面の色彩は地理的変異があり、北海道、東北地方北部のものは明るく、暖地のものは黒っぽくなる。また、遺伝的変異も知られている。北海道、本州、四国、九州に分布する日本特産種で、国外からは知られていない。

暖地でも、低山地に産する所もあるが、通常は、かなりの高山地帯に棲息する。年1回の発生で、低山地帯では、6月に発生するが、一般には7月に発生するところが多い。寒冷地では8月に発生するところもある。

広葉樹林の中や谷川のほとりに棲息することが多い。日中には活動しないで日陰に静止して、夕暮れ時になって活発に樹上を飛び回る。幼虫の食餌植物はトネリコ類である。卵の状態越冬する。

ウラキンシジミは美しい蝶で、その産地が限られている珍蝶の一種で、蝶愛好家の憧れの的である。この蝶は佐賀県では、藤津郡多良岳からのみ知られている。同地には、現在、小数のみ棲息しているという。絶滅が心配されている。

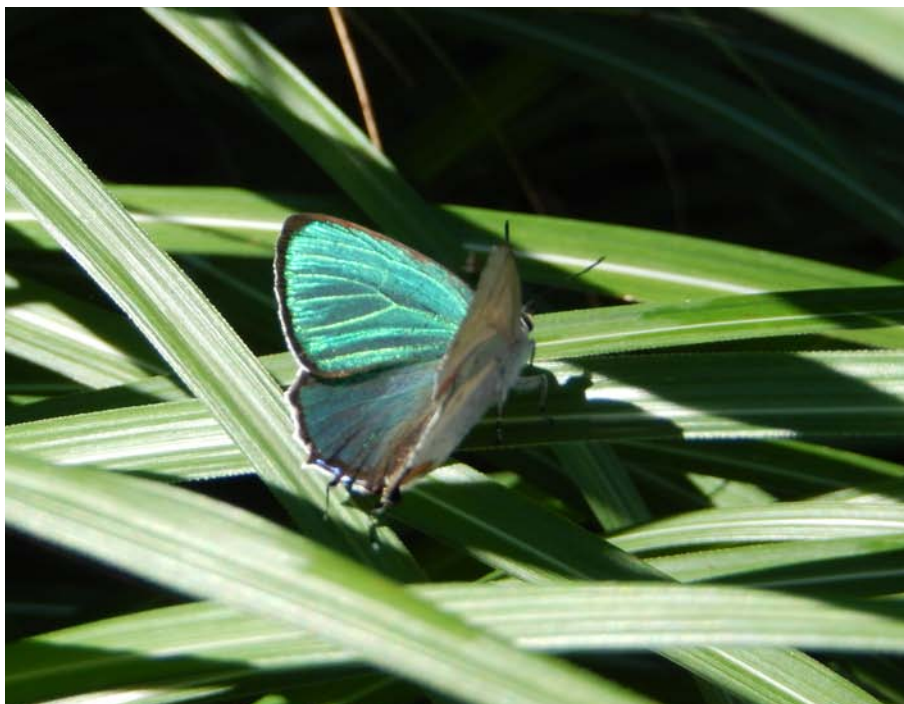
この蝶と私の最初の出会いは、故岡野磨瑛郎岩手大学教授のご案内で、1975年、岩手県岩手山山麓に採集に行った時である。眼の前に、新鮮なウラキンシジミがいた。その時は撮影を忘れて夢中で網を振った。



準絶滅危惧種

## キリシマミドリシジミ

Wonderful Green Hairstreak

*Chrysozephyrus ataxus kirishimaensis* (Okajima, 1922)

前翅の長さ:約20mm

2013年7月21日(神崎市脊振村)  
佐賀昆虫同好会員 坂井文雄氏撮影2013年7月21日(神崎市脊振村)  
佐賀昆虫同好会員 坂井文雄氏撮影

雄 表



雄 裏



雌 表



雌 裏

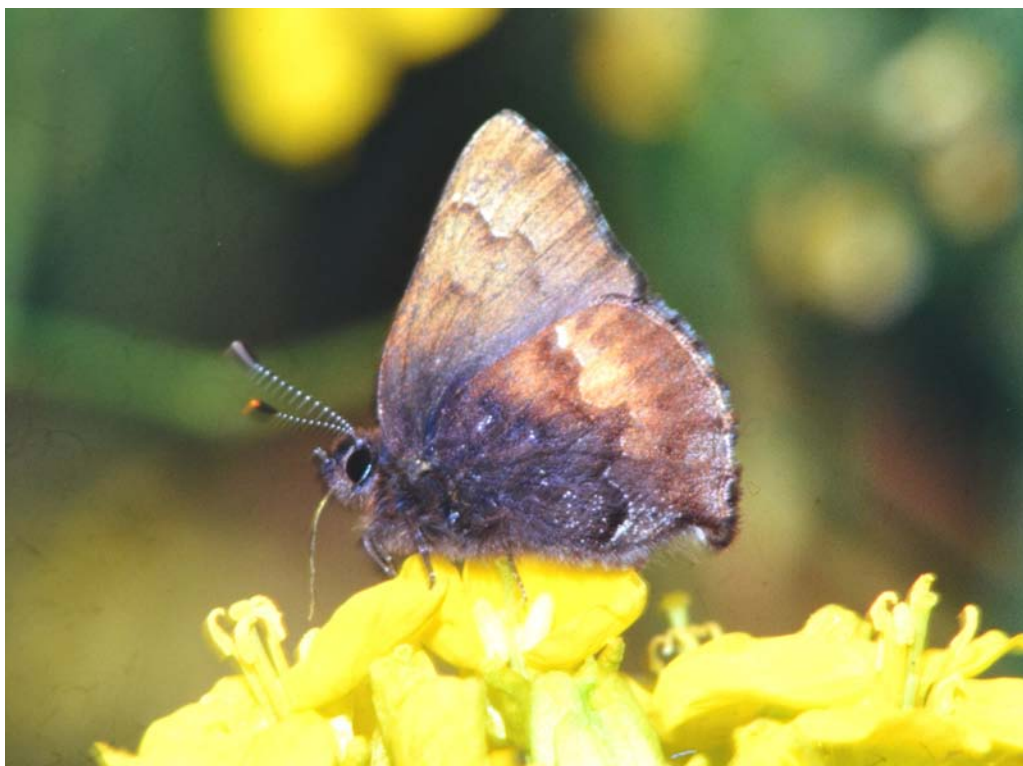
ミドリシジミと名が付く小さい蝶は、クロミドリシジミを除けば、雌の翅の表面は黒色で、雄の翅の表面は種類によって金緑色、青緑色あるいは青色に光る。まさに、蝶の仲間の宝石である。ミドリシジミの種類が谷川の樹上高く太陽の光を受けて、きらきら光りながら飛び交う姿は自然の美の極致であろう。ミドリシジミの仲間は似たようなものが多く、種類の判定は非常に難しいものがある。

ミドリシジミの仲間は佐賀県では少なく、キリシマミドリシジミとフジミドリシジミ *Sibatanozephyrus fujisannus latimarginatus* (Murayama, 1963) を産するにすぎない。キリシマミドリシジミは、ミドリシジミの仲間の中でも、もっとも美しい種類のひとつである。雄の翅表は金属様黄緑色に輝く。雌の翅表の地色は黒褐色で前翅に大きな青色斑がある。雄の裏面は銀白色、雌の裏面は茶褐色で、裏面の色彩・斑紋は雌雄で全く異なる。本州、四国、九州に分布する。屋久島産のものは別亜種となる。

九州には産地が多く知られているが、非常に珍しい蝶で蝶採集家の憧れの的である。国外では中国西部、ミャンマー北部から西北ヒマラヤに到る地域に分布する。年1回の発生で7～8月に出現する。夕方に群をなして飛び交う性質は全くない。幼虫の食草はアカガシ。卵で越冬する。

## コツバメ

Tailless Hairstreak

*Collophrys ferrea* (Butler, 1866)

前翅の長さ:約15mm

1995年4月21日撮影(佐賀市三瀬村)

もっとも早い時期に、羽化した新鮮な個体が出現する蝶である。春まだ浅き3月、若草が萌え出る前後に、ものすごい速さで飛ぶ小さい蝶に出会うことがある。これがコツバメである。飛ぶ距離は短く、近くに止まる。

翅の裏面は茶褐色で地味である。表面は、黒色の部分に囲まれた青色で、この青色部分が雌が雄より広い。地理的変異は知られていない。北海道、本州、四国、九州に分布する。国外では朝鮮半島に産する。九州では、3月中旬から4月上旬に成虫が出現するが、北海道の山地では、5、6月に出現するという。幼虫は晩春に蛹になり、夏秋冬をそのまま蛹で過ごし、翌春羽化する。幼虫は、スイカズラ科のガマズミ、ツツジ科のキリシマツツジ、アセビ、シャクナゲなどを食べる。

私は、高知、熊本、福岡、岩手でコツバメをよく見かけていたが、1980年から佐賀市に住んで以来、まだ佐賀県でこの蝶をみたことがなかった。ところが、1995年4月に三瀬村の菜の花畑に、この蝶が沢山いるのを発見し、撮影したのが、この写真である。佐賀昆虫同好会員の調査では、佐賀市を初め県内各所から、この蝶の採集記録がある。同会員 溝上誠司氏によると、コツバメは1980年頃から減少し始めたが、現在では佐賀県の山地で出会うこともあるという。

2014年現在、山地に入れば、4月頃に出会うこともあるという。

# トラフシジミ

## Japanese Flash

*Rapala arata* (Bremer, 1861)



前翅の長さ:約17mm

1993年4月26日撮影(佐賀市三瀬村)

翅表は、にぶい青色で翅裏には独特の縞模様がある。色彩・斑紋は雌雄ほとんど同様であるが、雄の後翅の前縁の近くに、光沢の無い斑紋がある。雌には、それがないので雌雄を区別できる。

季節による差がはっきりしており、春型は裏面の白帯が白く、夏型は褐色である。しかし、国内での地理的変異は見られない。北海道、本州、四国、九州に分布する。国外では中国東北部、アムールに産する。北海道や本州の寒冷地では、6～7月にかけて年1回春型のみ発生する。暖地では、4～5月に春型が発生、6月下旬～8月に夏型が発生する。

幼虫の食餌植物は、フジ、クズなどのマメ科、バラ科、その他の植物の花、蕾、実を食べる。幼虫は<sup>つぼみ</sup>檸檬<sup>どうも</sup>で、何匹かの幼虫を飼育すると、共食いをする性質がある。蛹の状態<sup>どうも</sup>で越冬する。成虫は活発に飛び、花を訪れることが多い。

トラフシジミは、佐賀県各地から採集されているが、あまり個体数は多くない。通常、市街地では見られない。私は、少年の日に、高知市の北山で、この蝶によく出会っていたが、佐賀県では神埼郡三瀬村で、始めて春型に遭遇した。診療所の隣家の庭で数頭以上目撃した。佐賀市内では、目撃したことはないが、佐賀昆虫同好会員の針貝邦生博士が、1992年に佐賀医大構内で棲息を確認された。

# ベニシジミ

## Small Copper

*Lycaena phlaeas daimio* (Matsumura, 1919)

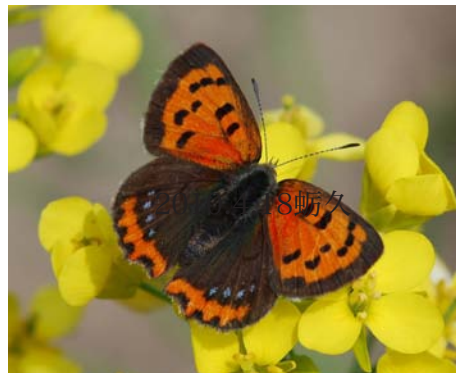


前羽の長さ:約15mm

1993年4月27日撮影(佐賀市三瀬村)



1975年7月22日撮影(岩手県盛岡市大志田)



2010年4月18日撮影(佐賀市蛸久)

シジミ(蛸)とは、本来、淡水に住むシジミガイのことである。蝶のシジミという名は、その大きさから名付けられたものと思う。ベニシジミはヨーロッパ、北アフリカ、アジアの温帯、北米の東部に分布する。

わが国では北海道から九州まで分布する。都会の家の庭、堤防、農道、山道などの、平地、山地に見られる普通種である。4月から晩秋までその姿が見られる。花に飛来し、朱紅色の美しい羽を半開きにして止まる。

かなり近付いても逃げず、そのかれんな姿をはっきり見ることができる。春に出現する個体は、朱紅色が鮮やかであるが、夏型は黒色が強くなる。特に、雄では黒一色に近くなった個体が見られることがある。幼虫はギンギシ、スイバなどを食べる。

ベニシジミよりさらに大型の蝶で、オオベニシジミとも呼ぶにふさわしい種類が、西ヨーロッパに産する。この蝶は、英国では、ハンチングトン州やケンブリッジ州の湿地帯や沼地にいたが、多くの産地で絶滅した。

現在、ハンチングトン州の限られた場所で、かろうじて生きのびている状態である。ケンブリッジ滞在中、隣家に住む熱心なアマチュア蛾研究者が、この蝶の生息場所につれて行ってくれると言ったが、私の都合で機会を逃した。今思えば実に残念であった。

準絶滅危惧種

## クロシジミ

Gray-pointed Pierrot

*Niphanda fusca* (Bremer & Grey, 1852)

前羽の長さ: 約17~23mm

2003年8月3日撮影(神崎市脊振村服巻)  
佐賀昆虫同好会員 坂井文雄氏撮影

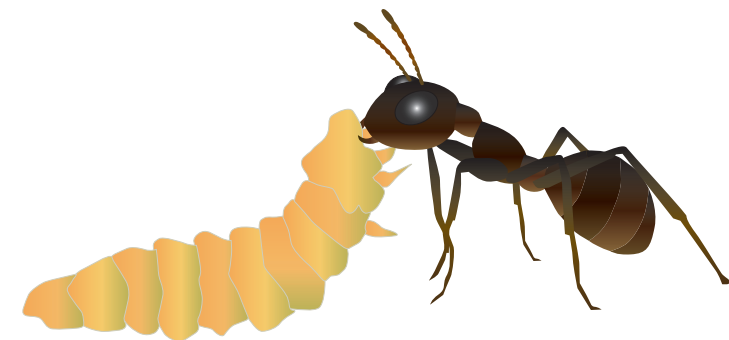
翅裏の地色は、明灰色で白に囲まれた小さい黒灰色の斑点が散らばり、それと、やや大きな濃灰色の斑紋がある。翅表は一樣に黒色で外縁は白色である。雄の翅表は暗紫色に光るが、雌では一樣に暗褐色である。また、雄の翅形は尖るが、雌では幅広く丸みが強い。

本州、四国、九州に分布するが、何処にでも見られる蝶ではなく、局所的である。国外では、朝鮮半島、中国東北部、シベリアに分布する。成虫は年1回6~8月に現れる。

蝶は幼虫の時代、植物を食べて育つが、クロシジミは独特な生活史を持つ。産卵場所は、アリマキ(アブラムシ)やキジラミが寄生している場所の、クヌギやコナラなどのブナ科植物が多い。孵化した幼虫は、アリマキやキジラミの分布する汁を、なめて成長する。

3齢幼虫になると、アリマキやキジラミに寄って来るクロオオアリに、くわえられて地下の巣に運び込まれ、幼虫はアリに口移して餌を貰いながら成長する。これは、同アリが、この蝶の幼虫が出す蜜を好むためである。翌年の6、7月頃蛹になり、巣の中で羽化する。すると急いで巣の外に這出し羽を伸ばす。遅れて羽化すると、同アリに食べられる事もあると云う。このように、越冬はアリの巣の中で幼虫で行う。

本種は近年非常に減少し、環境省の絶滅危惧種に指定されている。私は、1992年7月22日、三瀬村で1頭に遭遇したが、撮影の機会はなかった。



蟻に啜えられるクロシジミの幼虫(イラスト)

# ヤマトシジミ

Pale Grass Blue

*Zizeeria maha argia* (Ménétrières, 1857)



前翅の長さ:約15mm

1995年11月4日撮影(佐賀市鍋島町蛸久)

庭の隅や道端に住んでいる小さい蝶である。雄の翅表は青藍色で、黒い縁取りがある。雌の翅表の地色は、夏型では黒色であるが、春型では青藍色鱗がみられる。雌雄ともに翅表がとくに美しいというわけではなく、目立たない蝶である。春型、夏型、秋型があり、一般に春型が大きい。本州東北地方から奄美諸島までに分布する。わが国各地に、もともと普通のシジミチョウの1種である。その分布北限は岩手県田野畑村とされている。国外では朝鮮半島中部以南、台湾、中国、ミャンマー、インド、中近東にまで分布する。

九州では春型は4月から出現し、夏型は6月から出現する。以後、晩秋まで連続的に発生を繰り返す。

ルリシジミのように、上空高く飛ぶことはなく、常に地上低く飛び、カタバミその他の草花に飛来する。幼虫の食草はカタバミ、幼虫で越冬する。

本種によく似た蝶で、シルビアシジミ *Zizina otis emelina* (de l'Orza, 1869)がいる。本種は本州、四国、九州に分布する。シルビアシジミはヤマトシジミと違って、どこにでもいる種類でなく、産地が限局される。佐賀県では北部の島々と、その対岸にシルビアシジミの産地があり、唐津市や呼子町から報告がある。幼虫はマメ科のミヤコグサを食べる。



1997年10月5日撮影(佐賀市鍋島町蛸久)



1996年5月5日撮影(佐賀市鍋島町蛸久)

# 台湾ツバメシジミ

Indian Cupid

*Everes lacturnus kawaii* Matsumura, 1926



前翅の長さ:約15mm

2013年9月8日撮影(伊万里市大野岳)  
佐賀昆虫同好会員 坂井文雄氏撮影



2013年9月8日撮影(伊万里市大野岳)  
佐賀昆虫同好会員 坂井文雄氏撮影

ツバメシジミに非常に似ているが、本種は裏面の後翅の上の部分(第7室)にある2個の斑点と、その下(中室内)の1個、内縁の1個、および外縁肛角部の2個の斑点だけが黒色で、他の斑点は淡灰色であるが、ツバメシジミは全斑点が黒色である点で区別出来る。また、本種の雌雄とも尾状突起はツバメシジミに比べて、より長い。

本種の裏紋の斑紋は雌雄とも同じであるが、翅表が雌では暗褐色、雄は紫藍色で相違がある。

本州(和歌山県)、四国(高知県)、九州(全県)に分布するが、産地は局地的である。国外では台湾、中国南部、インドなど熱帯地方に広く分布する。幼虫は、マメ科のシバハゴの花蕾、実を食べる。年1回の発生で、8月下旬から10月上旬まで発生する。越冬は4例幼虫で行う。

本種は近年、全国的に減少しており、絶滅した地域もある。

佐賀県では、1982年に、唐津市で発見され、その後、2006年迄報告があった。2004年に鎮西町馬渡島で、26年ぶりに1頭の雌が発見された。2012年現在では、発生地は佐賀県北西部の2カ所になってしまったと云う。発生環境の変化である。これまで私は、この蝶に野外で遭遇したことはない。

## ツバメシジミ

Short-tailed Blue

*Everes argiades* (Pallas, 1771)

前翅の長さ:約15mm

2014年4月21日撮影(佐賀市鍋島町)

庭地や草むらなど、どこにでもいるシジミチョウである。近寄ってみると可憐な蝶である。まさに、路傍の草花といったところであろう。雄の翅表は藍紫色で、黒色で細く縁取られている。雌の翅表は黒褐色、裏翅の色彩・班紋は雌雄同じである。後翅には短い尾(尾状突起)があり、付け根には美しい赤色の部分がある。季節的変異や個体変異があり、とくに裏面の班紋の変化が多い。

南西諸島を除く日本全土に分布する。国外では朝鮮半島、中国よりヨーロッパに至るユーラシア大陸の北部に広く分布する。暖地では、3月から出現し、晩秋まで年数回の発生を繰り返す。幼虫は、ハギなどのマメ科植物の新芽、花蕾、実などを食べる。

クロツバメシジミ *Tongeia fischeri shojii* Satonaka, 2003は同じ属の蝶ではないが、やはり、ツバメシジミに似ている。本州、四国、九州に分布するが珍しい種である。佐賀県からは北部の島々と、その対岸にのみ産する。



## ヤクシマルリシジミ

Common Hedge Blue

*Acytolepis puspa ishigakiana* (Matsumura, 1929)

前翅の長さ:約33mm

佐賀昆虫同好会員 針貝 邦生 博士撮影  
2014年6月24日(福岡市東区香椎)

ルリシジミに、非常によく似ているが、翅表の外縁の黒い部分は、前後翅とも幅広く、殆ど同じ幅である点が違う。翅の裏面にも相違がある。元来は、東洋熱帯の蝶であるが、わが国では、紀伊半島南部、四国南部、九州南部に分布していたが、最近、静岡県まで分布が広がっている。

佐賀県では、1999年、藤津郡太良町で、初めて発生が確認され、以後、藤津郡、鹿島市、東松浦郡、唐津市等から報告された。現在は、北部九州にまで分布を広げている。幼虫の食餌植物は、ヤマモモ科、ブナ科、バラ科、ツツジ科など多種に及ぶ。鹿児島県では、冬でも、成虫、蛹、幼虫、卵の全てが見られると云う。私は未だ本種に遭遇したことはない。

佐賀昆虫同好会員 針貝邦生博士は、宮崎県小林市の熱心な昆虫少年であった。それでも、2頭の本種を採集されたただけだったそうである。

同博士は、佐賀医大を退官後、福岡市東区香椎に、お住まいであるが、2010(平成22)年2月14日、自宅の庭のバラの花を乾燥中の収納戸棚の中に、ヤクシマルリシジミ1頭を発見され撮影された。それが、この写真である。針貝博士の専門は、インド哲学であり、サンスクリット語に造詣が深く、サンスクリット語由来の蝶、蛾の学名を解説しておられ、その業績は、この領域で高く評価されている。

# サツマシジミ

*Albocaerulean*

*Udara albocaerulea* (Moore, 1879)



前翅の長さ:約17mm

2013年5月26日(佐賀市金立町)  
佐賀昆虫同好会員 坂井文雄氏撮影



佐賀昆虫同好会員 廣川典範氏所蔵標本  
(1982年6月22日 西松浦郡黒髪山で採集)

非常に美しいシジミチョウの1種である。雄の翅表の地色は紫青色で、前翅中央部にやや大型の白い紋がある。後翅も大部分が白色である。裏翅は白色で黒い斑点がある。この斑点の配列が他種と違う。雌の翅表は外縁の黒い部分が広く、明色部の青が少なくて白味が強い。裏面は雄と同様である。色彩、斑紋に季節的变化がみられる。

国外では西部ヒマラヤ、ネパール、ミャンマー、中国、マレー半島、スマトラ、ジャバの広い地域に分布する。国内では近畿以南の本州、四国、九州に産する。九州では春型が3月中旬から出現する所もあるが、4月に多く見られる。夏型は6月上・中旬から出現し、その後も晩秋まで連続的に発生を繰り返す。樹上を飛ぶが草花も訪れる。幼虫の食草はハイノキ科のクロキ、スイカズラ科のガマズミなどである。

この蝶と私の最初の出会いは、1961年(昭和36年)の5月だったと記憶する。広島県の病院に出張していた私は、同僚と一緒に厳島に旅行した。そこで多数のサツマシジミを見た。この蝶は佐賀市の市街地では見られないが、佐賀市金立町でも採集されている。その他、佐賀県内の各地から採集されているが、近年は明らかに減少している。

# ルリシジミ

Holly Blue, Holly Hedge Blue

*Celastrina argiolus ladonides* (de l'Orza, 1869)



前翅の長さ: 約15 mm

1993年4月2日撮影(佐賀市三瀬村)

雄の翅表は青藍色で、前翅外縁を縁取る黒色の部分は狭い。青藍色の部分は季節によって違いがあり、春型では暗色を帯びて光沢が強い。夏型では、やや白色を帯びた明るい色となる。雌の翅表は帯白青色で、外縁の黒色の部分が雄に比べて断然広い。春型では後翅が青色であるが、夏型の雌は後翅が黒っぽい。裏面の地色は白色で、黒点がある。この黒点の強さや形には、個体的変異が著しい。

北海道から九州まで広く分布し、わが国でもっとも普通のシジミチョウ科の1種である。国外では、サハリン、朝鮮半島、中国からヨーロッパに至るユーラシア大陸に広く分布する。暖地では、3月中・下旬から春型が出現し、5月下旬～6月上旬に夏型が出現する。以後、引き続き秋まで発生を繰り返す。幼虫はフジ、クララ、クズなどのマメ科植物の花蕾<sup>つぼみ</sup>を食べる。蛹で越冬する。

英国ケンブリッジに滞在中、小さい森(スピニー)で、樹上高く飛ぶシジミチョウを発見したがなかなか採れない。なにか、珍しい種類ではないかと期待して、採集できる機会を待った。やっと捕まえて、はやる心で網から蝶を取り出してみると、なんと、これがルリシジミで、がっかりしたことを覚えている。

オオルリシジミ *Shijimiaeoides divinus asonis* (Matsumura, 1929) は属が異なる。本州、九州に産するが、産地は局所的で、各地で絶滅の危機にある。九州では、阿蘇地方で保護されている。

オオルリシジミ



佐賀昆虫同好会員 廣川典範氏所蔵標本  
(1992年4月7日 藤津郡多良岳で採集)



前翅の長さ: 約20 mm 1970年5月14日採集  
(熊本県阿蘇郡)

絶滅危惧Ⅱ類

## スギタニルリシジミ

Sugitani's Hedge Blue, Sugitani's Holly Blue

*Celastrina sugitanii kyushuensis* Shirôzu, 1943

前翅の長さ:約15 mm

佐賀昆虫同好会員 坂井文雄氏撮影  
(2001年4月8日, 鹿島市奥山)佐賀昆虫同好会員 坂井文雄氏撮影  
(2002年4月7日, 鹿島市奥山)

ルリシジミに非常に似ている。裏面の地色はルリシジミに比べて、褐色を帯びると記されているが、九州産亜種は白色で大型、表面の色彩も本州産より明るい。本種後翅の表面外縁の黒色帯は、ルリシジミに比べて、はっきりしているように見える。ルリシジミと鑑別に苦勞する個体もいる。

北海道、本州、四国、九州に分布する。九州では全県から報告があり、低山地から山地にかけて分布するが、珍しい種類で産地は限局している。国外からは、台湾、中国、朝鮮半島、ロシア東南部、サハラから記録されているという。年1回の発生で、九州では3月下旬から4月中旬頃まで発生する(ルリシジミは、3月中旬頃より秋まで発生を繰り返す)。

山間の溪流付近に見られることが多く、雄は湿地に降りて吸水する事がある。幼虫はトチノキの花蕾を食べる。トチノキがない地域では、ミズキ(ミズキ科)、キハダ(ミカン科)の花蕾を食べる。

東アジアから、7亜種が知られているという。名義タイプ亜種は *Celastrina sugitani* (Matsumura, 1919)。

私は、スギタニルリシジミは標本を見ただけで、未だ野外で本種に遭遇したことはない。佐賀県からは、鹿島市奥山、藤津郡太良町多良岳などから採集報告がある。

## ウラナミシジミ

Long-tailed Blue, Pea Blue

*Lampides boeticus* (Fabricius, 1798)

前羽の長さ:約16mm

1988年11月7日撮影(佐賀市鍋島町蛸久)



1988年11月7日撮影(佐賀市鍋島町蛸久)

その名が示すように、羽の裏面には波の模様があるシジミチョウである。裏面では雌雄の区別はできないが、表面では、かなりの差があり、簡単に区別できる。雄の羽表には特殊の長毛があるが、雌には長毛がない。

南欧、アフリカ、アジア南部の温暖地から、スダ列島、オーストラリアにまで広く分布する。しかし、地理的変異は知られていない。わが国では関東以南に普通に見られる。

寒冷地ではまれであるが、それでも北海道で発見された年もある。この蝶は、夏から晩秋にかけて、わが国の分布地に普通に見られるが、温暖な地域以外では、越冬できず死滅してしまう。平地に多いが、高樫山の山頂でも見られる。

佐賀県では、夏から晩秋にかけて、どこにでも見られる普通の蝶である。この蝶は、春になって越冬地から、世代を繰り返しながら北上する。房総半島に発生した個体が北上し、東京に現れる蝶が三代目ぐらいといわれている。幼虫は、栽培されたフジマメなどマメ類のつぼみや実を好んで食べる。

わが国の本土ではウラナミシジミに似た確実な土着種はいないが、屋久島以南の島々には、アマミウラナミシジミ *Nacaduba kurava septentrionalis* Shirôzu, 1953がいる。この蝶は、奄美諸島ではもともと普通の種である。

アマミウラナミシジミは九州本島でも、大隅半島南端の佐多岬では比較的普通に見られるという。また、八重山諸島にはルリウラナミシジミ *Jamides bochus ishigakianus* Shirôzu, 1953が分布している。

## クromaダラソテツシジミ

## Plains Cupid

*Chilades pandava* (Horsfield, 1829)

前羽の長さ:約16mm

2013年10月16日撮影(佐賀市鍋島町蛸久)

雄は、翅表は、黒縁に彩られた藍色である。雌は黒色部が広く、中央が藍色である。後翅には尾状突起がある。裏面は雌雄とも、白帯に縁取られた薄茶色の紋列があり、尾状突起の基部は橙色に囲まれた黒紋がある。本蝶は本来東南アジアから南アジアに分布する熱帯蝶であるが、1992年沖縄で初めて発見された。

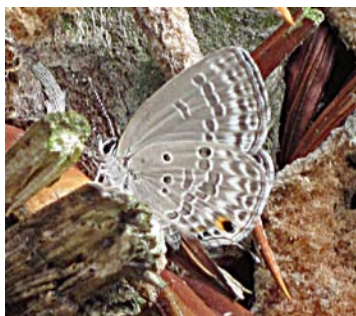
2006年、石垣島、西表島で発生し、2007年から九州本土で発生し、佐賀県でも確認された。2007年秋には関西まで北上した。現在では、関東まで進出している。

幼虫はソテツの新芽を食し、卵から孵化までの期間が2週間程度だと云う。成虫は12月頃まで見られるが、寒さに弱く越冬出来る可能性は低い。飛来する迷蝶と考えられる。

私と、この蝶の最初の出会いは、2009年10月10日、自宅の庭であった。ウラナミシジミと違う蝶が来たので撮影したのが、この蝶であった。2010年秋にも自宅の庭で撮影した。2011年も飛来したが、2012年には、全く姿を見せなかった。その年は佐賀県からは全く報告はなかった。

ところが、2013年には自宅の庭に沢山飛来してくれて写真撮影の機会は多かった。今年は、果たして飛来してくれるだろうか。この蝶は、ソテツの害虫として嫌われているが、私にとっては、南の国から、はるばる訪問してくれる客である。

2014年には、とうとう自宅には来なかった。佐賀県として飛来した報告は聞かない。2015年を期待する。

2011年10月29日撮影  
(佐賀市鍋島町蛸久)2011年10月24日撮影  
(小城市小城町松尾)2011年10月29日撮影  
(佐賀市鍋島町蛸久)

# テングチョウ

## Nettle-tree Butterfly

*Libythea lepita celtoides* Fruhstorfer, 1909



前翅の長さ: 約24mm

2013年3月22日(佐賀県小城市松尾)



佐賀昆虫同好会員 廣川典範氏所蔵標本  
(1984年7月17日 神崎郡脊振山で採集)

この蝶の口の付け根から出ている1対の突起(下唇鬚という難しい名が付けられている)が、長く突出しているところから、天狗を想定し、テングチョウと名付けられたものと思う。この仲間は、化石の蝶としても良く知られている。わが国では、テングチョウ亜科の蝶は、この1種しか産しない。

翅裏は個体によって変化があるが、どれも枯れ葉模様である。翅表の色彩・斑紋は雌雄で大差はないが、雌の翅表の橙斑が雄より大きい。雌雄の決定的な違いは、雄の前脚には、長い毛が密生しているが、雌には長い毛がない点である。

国外では朝鮮半島、台湾、中国、ヒマラヤからヨーロッパの東南部に分布する。わが国では北海道、本州、四国、九州に分布する。北海道では、西南部にのみ産し、まれな種類である。その他に地域では、個体数はあまり多くないが、時に発生直後に群棲することがある。幼虫の食草はエノキ、エゾエノキなどニレ科の植物である。年1回の発生と思われていたが、2回発生するらしい。第1化は、5月上旬～6月上旬である。成虫で越冬する。

この蝶の思い出としては、二十数年前、大分県の高崎山に行ったが、サルの子ととも、岩場に数多くのテングチョウがいたことを覚えている。ちょうど、発生期に遭遇したのであろう。

## サカハチチョウ

Large Map

*Araschnia burejana strigosa* Butler, 1866

前羽の長さ:約20mm

1976年6月11日撮影(宮崎県田野町)

前羽の長さ:約18mm  
1975年6月29日撮影(岩手県盛岡市岩山)

1990年4月17日撮影(佐賀市鍋島町蟻久)

春型と夏型とは、色彩・斑紋が非常に違う。春型の羽表面は、雌雄とも黒と橙色の斑模様であるが、夏型は表面の地色は黒褐色で、中央に太い白帯がある。両型とも、雌は雄に比べて僅かに大きく、羽型は丸みが強い。春型では雌は羽表の黒色部が狭く、橙色部が広い。夏型では、雌の白帯が広いなどの雌雄差がある。

国外では中国大陸、アムール、シベリア、朝鮮半島、サハリン、国後島に産する。わが国では北海道、本州、四国、九州に分布する。分布南限は、大隅半島とされている。わが国西南部の暖地では、山地性の蝶となり、平野部には、ほとんど棲息しない。寒冷地のものは小型である。年2回の発生で、本州以南では春型が4～5月に出現し、夏型は7～8月に出現する。北海道や本州の高地帯などの寒冷地では、春型と夏型の間隔的な斑紋の個体が発見されることもあるという。

山地の溪流のほとりの樹林に多く、トラノオなどの花に吸蜜に訪れる。幼虫の食草は、コアカソ、エゾイラクサなどイラクサ科植物。サカハチチョウは佐賀平野では、まず、見られないが、山に入ると珍しい蝶ではない。特に、5月頃山に登って若葉が萌え出ている溪流のほとりを歩くと、この蝶に出会う。1990年、非常に珍しく自宅の庭に1頭が飛んできたその後、佐賀平野では見たことはない。サカハチチョウに非常によく似た蝶にアカマダラ *Araschnia levana* (Linnaeus, 1758)がいる。この蝶は九州には分布しない。



# ヒメアカタテハ

## Painted Lady

*Vanessa cardui* (Linnaeus, 1758)

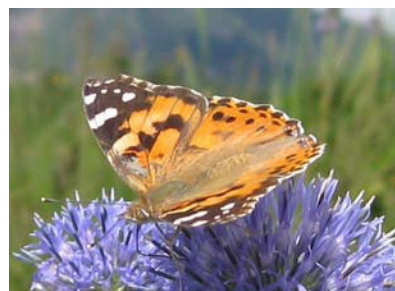


前羽の長さ: 約28mm

1987年11月8日撮影(佐賀市鍋島町蛸久)



1979年9月19日撮影(岩手県盛岡市)



2008年9月3日撮影(熊本県阿蘇市)

色彩斑紋は雌雄同じである。英語でペインテッド・レディーと呼ばれる蝶である。世界中に分布し、コスモポリタンとされているが、オーストラリアでは、西部の一部に限られるという。日本全土に広く分布する普通種である。

佐賀県では、春から初冬にかけて見られる。秋になると個体数を増して、コスモスの花などに来ているのが目につくようになる。国内における季節的、地理的変異は知られていない。ヨーロッパでは、集団で移動するので有名である。

幼虫はハハコグサ、ゴボウなどを食べる。ヒメアカタテハは、わが国では普通種とはいっても、外に出れば、いつでも見られるというものでもない。発見できる場所は、ある程度限られる。

盛岡市郊外の友人の石村実さんが住んでおられた家の近くの花畑は、秋にはヒメアカタテハがいる場所である。二人で、よく撮影に行ったものである。石村さんは、東京の方であるが北大農学部を卒業され、ビール会社でワインとホップの研究に没頭され、業績をあげられた。

定年退職後の1992年6月に、かねて夢に描いておられた中国新疆に、農業指導のために奥さまと二人で赴任された。お二人は異文化の中で元気に活躍された。そこは、写真で見ると砂漠地帯で、あまり蝶のいそうな場所ではないが、もし、ヒメアカタテハに遭遇されたなら、盛岡の日々を懐かしく思われたことであろう。

石村ご夫妻は帰国後、茅ヶ崎に住まれ、冬はスキーに没頭しておられる。家の直ぐ横は、蝶の調査場所であり、蝶同好会の方々が調査に来られたのに出会った。

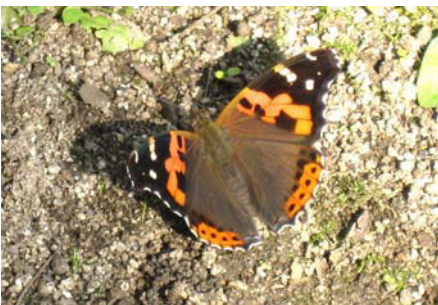
## アカタテハ

Indian Red Admiral

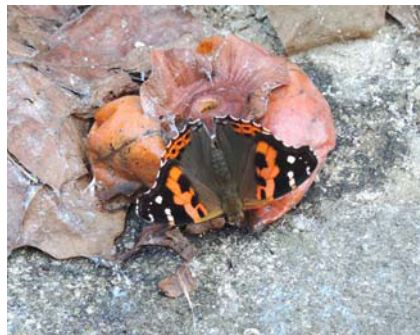
*Vanessa indica* (Herbst, 1794)

前羽の長さ: 約33mm

1992年9月23日撮影(佐賀市三瀬村)



2008年10月11日撮影(佐賀市鍋島町蛸久)



2014年10月10日撮影(佐賀市鍋島町蛸久)

津の国の難波の春は夢なれや 葦の枯れ葉に風わたるなり

西行法師

このような荒涼たる風景には、蝶の姿は全くない。しかし、九州はさすがの南の地、小雪がちらつく日があるかと思うと、厳冬の中でも、小春日和の日がある。そのような日に、ひょっこり姿を現すのが越冬中のアカタテハである。

国外では朝鮮半島、中国大陸から西はインド、東はオーストラリアまで分布する。わが国では、全土に見られる普通種である。国内における季節的、地理的変異は知られていない。

九州では、5月ごろに新鮮な個体が出現して、通常、初冬まで普通に見られる。成虫は花、樹液に集まり、樹幹や路上に止まる。幼虫はイラクサ、カラムシなどのイラクサ科の葉を食べる。

アカタテハに似た蝶は、世界中に何種もいるが、カメハメハタテハ *Venessa tameamea* もその一種である。本種はハワイ諸島の特産種である。その名は、ハワイのカメハメハ大王にちなんで名付けられたものである。

この蝶の表面後羽は、アカタテハと違って赤みが強く、美しい蝶である。今から28年も前に、私がハワイ大学留学中、オアフ島の山の中に入って、カメハメハタテハを1頭だけ見つけ採集した。

その時の感激は忘れられない。その標本は今でも私の手元にある。

# キタテハ

Chinese Comma

*Polygonia c-aureum* (Linnaeus, 1758)



前羽の長さ:約29mm

1987年11月8日撮影(佐賀市鍋島町蛸久)



1973年12月6日(佐賀市鍋島町蛸久)



1973年12月6日(佐賀市鍋島町蛸久)

シータテハ

前羽の長さ:約25mm

タテハチョウ科



1973年4月15日採集(岩手県滝沢市)

九州では、厳冬の中に春の日かと錯覚するような暖かい日がある。そのような日に、陽だまりで日光浴しているキタテハに出会うことがある。これは越冬している個体である。本種は暖地性の蝶で、北海道南西部、本州、四国に分布する。関東、中部地方の平地、低山地帯では極めて普通の蝶である。国外では朝鮮半島、中国、台湾、トンキンなどに分布する東亜の特産種で、ヨーロッパには産しない。

越冬成虫は、アカタテハなどとともに、早春より出現して産卵する。それから生まれた夏型は、5月下旬から6月上旬に出現する。以後、連続的に夏型の発生が9月ごろまで繰り返される。9月ごろから秋型が出始め、晩秋まで羽化が続く。秋が深くなるにつれて、羽の色は赤ずんでくる。

この蝶は、路傍、草地などに多く、また、花を訪れ、樹液に集まる性質がある。幼虫の食草は、カナムグラ、麻などのアサ科植物である。幼虫は食草の葉を折り曲げてテント様の巣を作り、その中に入っている。

キタテハに似ている蝶に、シータテハ *Polygonia c-album hamigera* (Butler, 1877)がいる。この蝶は、北海道、本州、四国、九州に分布するが、キタテハに比べると寒地性の蝶で北海道や東北には多い。九州では、山地性のまれな蝶である。分布の南限は宮崎県小林市とされている。佐賀県ではシータテハは発見されていない。

## ヒオドシチョウ

Large Tortoiseshell

*Nymphalis xanthomelas japonica* (Stichel, 1902)

前翅の長さ:約35mm

佐賀昆虫同好会員 廣川典範氏所蔵標本  
(1984年5月27日 佐賀市鍋島町で採集)

ヒオドシチョウとは、実に良い和名をつけたものだと感心する。翅の縁が黒く彩られ、黒点を散りぼめた橙赤色の翅表は、いにしへの緋織の鎧を思い浮かばせる。翅の色彩・斑紋だけからでは、雌雄の判定はできない。腹端と前脚の構造を調べる必要がある。寒冷地のものは、一般に小型であるが、著明な地理的変異はみられない。

国外では、朝鮮半島、中国、台湾、ヒマラヤからヨーロッパの南東部にかけて分布する。国内では、北海道、本州、四国、九州本土に分布する。屋久島以南の南西諸島からは知られていない。年1回発生する。暖地では、5月下旬～6月上旬に羽化する。羽化後、間もなく休眠に入る。成虫は好んで樹液に集まる。幼虫は、エノキの葉を食べるが、ヤナギ類も食べる。成虫で越冬し、早春に出現する越冬個体は、破損したものが多い。

ヒオドシチョウは、佐賀市内では少ない。私は年に1、2頭見る程度であった。いつか、グラスコート佐賀の垣根に、新鮮な個体が1頭来て止まったことを覚えている。私が高知市から熊本の国民学校(小学校)に転校した年の5月の終わりに、自宅近くのエノキに何百個というヒオドシチョウの蛹が付いており、それらが羽化しつつある状態に出会ったことがある。その後、このような光景には二度と遭遇したことはない。

以前は、平野部に普通に見られたが、数年前に脊振山中に多くいたという報告を除いて、最近是非常に減少していて、見かけたことがない。

# ルリタテハ

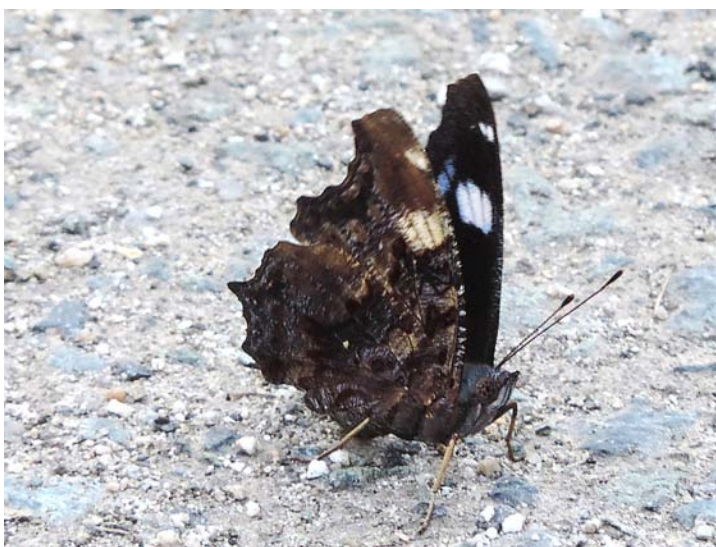
## Blue Admiral

*Kaniska canace nojaponicum* (von Siebold, 1824)



前翅の長さ:約33mm

2014年9月2日撮影(佐賀市鍋島町蛸久)



2014年9月2日撮影撮影(佐賀市鍋島町蛸久)

翅の裏面は茶褐色で目立たないが、翅の表面は藍色のシックな感じがする蝶である。日本全土の平地、山地に見られる普通種である。国外では朝鮮半島、中国、東南アジアに分布する。樹液や腐敗物などに好んで集まるが、路上にも止まる。通常、花には飛来しない。

ものすごく速く飛び去ったかと思うと、一回りして近くに戻ってくる性質がある。幼虫は、サルトリイバラ、ホトトギス、オニユリなどを食べる。九州では夏と秋に発生するので、秋にも普通に見られる。

早春に見られるものは、成虫で越冬した個体である。

同じ種類の生物ではあるが、地方的に分化したものを亜種という。ルリタテハには幾つかの亜種がある。

日本産ルリタテハの亜種の学名は、フォン・シーボルトが命名したと同級生の前山隆太郎博士が教えてくれた。ほかに、フォン・シーボルトが命名したわが国の蝶としては、ナガサキアゲハ *Papilio memnon thunbergii* von Sieboldがある。

昆虫学の故江崎悌三博士は、学名の *nojaponicum* の「no」は、日本語の「ノ」の意味だと書かれている。確かにこの蝶の後ろ翅の裏に片仮名の「ノ」のような斑点がある。

フォン・シーボルトは1823年長崎に来て、わが国に西洋医学を教えると同時に、わが国の動植物を採集して研究したことは、あまりにも有名である。こうなってくると、ルリタテハは九州と関係が深い蝶といえる。

# タテハモドキ

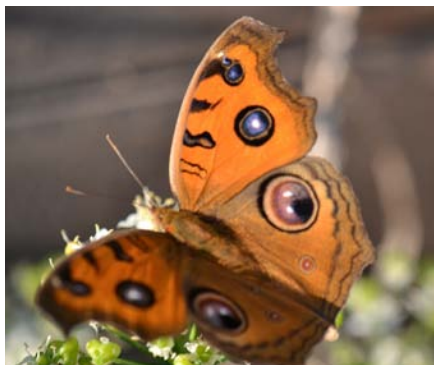
Peacock Pansy

*Junonia almana* (Linnaeus, 1758)



前翅の長さ: 約30mm

2013年11月30日撮影(佐賀市鍋島町蛸久)



2011年9月4日撮影(佐賀市鍋島町蛸久)



2010年11月12日撮影(佐賀市鍋島町蛸久)

"モドキ"とは、「よく似ていて紛らわしいこと」の意味である。タテハモドキの意味は、タテハチョウに似た蝶で、タテハチョウではないことになる。この蝶はタテハチョウ科の一種なのに、なぜ"モドキ"が付けられたのか分からない。

翅表の地色は橙色で、前・後翅に大きな目玉模様がある。雌雄で、ほとんど斑紋・色彩の差はない。季節的変異があり、夏型は前・後翅裏面に小さな目玉模様があるが、秋型は裏面の目玉模様がなく、翅外縁部の凸凹が強い。国外ではインド、スリランカからチモールに至る東洋熱帯に広く分布する。わが国では奄美大島、種子島などに普通にみられるが、近年になって、鹿児島県南部、宮崎県南部に土着するようになった。それ以北でも、迷蝶として、たびたび採集されている。幼虫の食草としては、クマツヅラ科のイワダレソウである。

佐賀新聞(1992年12月18日号)の報ずるところによると、佐賀市高木瀬東2丁目にお住まいの吉田英範氏は、1992年12月5日に、自宅の庭で1頭のタテハモドキを捕獲された。佐賀昆虫同好会員の溝上誠司氏によると、タテハモドキは、佐賀県では迷蝶の中でも非常にまれで、それまでに確実な記録としては、1956年に唐津市で捕獲された例があるだけだそうである。真に貴重な迷蝶であった。

ところが、1999年秋に佐賀市郊外で大発生し、報告が相次いだ。

その後、今日(2014年9月)迄発生が続き、佐賀昆虫同好会員の調査で、食草はオギノツメやスズメノトウガラシである事が明らかになった。越冬も、することがあるらしい。もう佐賀県では普通種となった。毎年、我が家の庭に来る。

## アオタテハモドキ

Blue Pansy

*Junonia orithya* (Linnaeus, 1758)

前羽の長さ:約28mm

1983年7月23日撮影(タイ国チェンライ県メーハー村)

雄の前羽表の半分は濃黒色を帯び、後羽表の地色は、美しいブルーの色である。雌の前・後羽表の地色は淡褐色で、雌雄で、かなり色彩・斑紋が違う。

アオタテハモドキはアフリカから東洋熱帯、亜熱帯、オーストラリア北部に達する広い地域に分布する。わが国では南西諸島や本土で、毎年かなりの個体数が記録されるが、土着地は、八重山諸島の石垣島と西表島といわれている。食餌植物としてはキツネノマゴ科のキツネノマゴが、日本各地でもっとも普通の食草となる。

佐賀県でも、毎年のように成虫が採集されている。とくに、東松浦郡や神埼郡からの記録が多い。さらに、佐賀昆虫同好会員により、幼虫も発見されており、キツネノマゴが食草であることも確認されている。もちろん、これらは、迷蝶、あるいは迷蝶に由来する個体で、夏から秋にかけて発見されている。佐賀県へは初夏の強い南西の季節風に乗って、南方から飛来してくるものと推定される。

迷蝶を採集することは、蝶愛好者の夢でもある。私は高校生のとき、熊本県を流れる球磨川の川原で、アオタテハモドキが採集されたとの古い記録をたよりに、同場所に通ったことを覚えている。しかし、遂に同蝶を発見することはなかった。今日まで、まだ、私は日本本土でアオタテハモドキに遭遇していない。

## メスアカムラサキ

Danaid Eggfly

*Hypolimnna misippus* (Linnaeus, 1764)

前翅の長さ:約45mm

1982年8月1日(沖縄県石垣市)



前翅の長さ:約35mm

佐賀昆虫同好会員 廣川典範氏所蔵標本  
(1986年11月5日 沖縄県石垣島で採集)2004年11月15日撮影  
(Australian Butterfly Sanctuary, Kuranda, AU)

雌と雄は翅の色彩が明らかに違う。雄の翅の表は黒色で、前翅と後翅の真ん中に、白い大きな紋があり、その周囲が紫色に輝く。雌の翅は、表の大部分が橙色である。

オーストラリアを含む東洋熱帯、アフリカ、アメリカの熱帯、亜熱帯に広く分布する。わが国では八重山諸島に産する。地理的変異は知られていない。食草はスベリヒユ科、ヒユ科の植物である。

この蝶は、毎年日本各地で採集されるが、土着種ではなく、南方から飛来したもの、または、それに由来する個体とされている。夏から秋にかけての季節風、あるいは台風に乗ってくると考えられている。

幼虫、さなぎは寒さに弱く、日本本土では越冬できないらしい。メスアカムラサキの採集例は九州に多い。佐賀市郊外の某場所では、毎年のように採集されている。面白いことに発見場所が毎回同じである。

南方から飛んできた雌が近くの食草に卵を産み、そこで、ある数の個体が発生すると推定される。なぜ毎年、同じ場所に飛来するのか、それは大きな謎である。このように、わが国の土着種でなく、海を渡って日本に飛来する蝶は"迷蝶"と呼ばれる。

"迷蝶"の出発地は、フィリピン、台湾が多いが、中国大陸からのものもある。佐賀県では、毎年、メスアカムラサキをはじめとして、何種かの"迷蝶"が採集されている。

同じ属の迷い蝶、リュウキュウムラサキ *Hypolimnna bolina* (Linnaeus, 1758) が唐津市と鳥栖市で記録されている。



## イシガケチョウ

Common Map

*Cyrestis thyodamas mabella* Fruhstorfer, 1898

前羽の長さ:約33mm

2012年5月19日撮影(佐賀市金立)

少年の日、蝶の採集をはじめて間もなくの頃、高知市の北山に行った。崖の上を、すいすいと滑るように飛んでいる白い蝶が2、3頭いるではないか。飛び方がモンシロチョウとは全然違う。崖を登って網を構えていると、かなり近くに来て止まったが網が届かない。羽を開いたまま葉の上に止まっている。全体に白い色で模様がある。真に不思議な形と色彩である。そのうち、葉の裏側に羽を広げたまま止まった。蛾の一種かなとも疑った。崖の上で、ねばって苦闘の末、やっと1頭捕獲した。家に帰って図鑑を見て、初めてイシガケチョウであることを知った。これが、この蝶との最初の出会である。

イシガケチョウの仲間(属)は約20種あり、インド、オーストラリア区を中心に分布する。この仲間は、その色彩から、英語で地図蝶 "map butterflies" とよばれ、イシガケチョウそのものはcommon mapと呼ばれる。イシガケチョウは、インドから東南アジアにかけての地域と、ニューギニアにかけて分布するが、フィリピンやスマトラには分布しない。わが国では本州、四国、九州に分布し、本州に分布北限線がある。土着の北限は三重県あたりと考えられている。九州の低山地域では、夏型は5月中旬頃より出現、9～10月より秋型が発生し、秋型は成虫で越冬する。越冬するのは雌だけといわれている。

最近、減少したり、絶滅の危機にある蝶の種類が各地に少なくないが、イシガケチョウは、佐賀県では各地で増えている蝶である。早春や晩秋には、佐賀市街地でもみられる例が多くなってきている。幼虫の食草は、イヌビエ、イチジクなどのクワ科の植物。

絶滅危惧I(A,B)類種

## オオウラギンスジヒョウモン

Great Eastern Silverstripe

*Argyronome ruslana* (Motschulsky, 1866)

前翅の長さ:約39mm

2014年7月18日撮影(唐津市七山池原字檜原)



1981年9月17日撮影(青森県弘前市)



2014年7月20日撮影(唐津市七山池原字檜原)

ヒョウモンチョウの仲間は、どれも、よく似ている。特に、飛んでいるときは同定ができないことが多い。しかし、標本や図鑑で各々の特徴をつかむのも楽しみのひとつである。オオウラギンスジヒョウモンは、雌雄で色彩・斑紋に大差はないが、よく見ると相違点はある。

雄の翅表は濃橙色であるが、雌はやや赤みが少ない。決定的な相違は、雌には前翅端の近くに三角形の小白斑があることで、雄にはこのような小白斑はない。

日本、朝鮮半島、中国東北部、アムールに分布する東亜特産種である。わが国では北海道、本州、四国、九州に分布し、寒冷地に多く、暖地には少ない。年1回の発生で、7月頃から発生し、暖地では10月頃まで見られる。幼虫の食草はスマレ類で、幼虫で越冬する。成虫は他のヒョウモンチョウ類のように、よく訪花する。

オオウラギンスジヒョウモンは、佐賀県では、極めてまれな蝶とされてきた。ところが、1982年夏には、唐津市七山村で3頭ぐらい生存が確認された。私も、同年7月から10月にかけて、佐賀市三瀬村の診療所裏で2頭採集し、さらに2、3頭を目撃した。また、2014年7月20日唐津市七山池原の檜原湿原で数頭以上の本種を目撃し、撮影した。これらの事実から佐賀県の山地帯には、この蝶はまれでないと思われる。絶滅の危機にある蝶の種類が多い中で、オオウラギンスジヒョウモンの発見は朗報といえる。

## クモガタヒョウモン

Anadyomene Fritillary

*Nephargynnis anadyomene* (C. & R. Felder, 1862)

前翅の長さ:約37mm

1975年7月27日撮影(岩手県岩手山)

ヒョウモン類の後翅裏面は、銀の条や斑<sup>すじ</sup>点があつて、それなりに凝った模様があるが、クモガタヒョウモンだけは、造物主が最後の色塗りをしないで、そのままに放置したような単純な色彩・模様である。このような裏面の特徴から、他のヒョウモン類とは容易に区別できる。雌には前翅の表面と裏面に、先端近くに白い小さな1個の紋があるが、雄にはこれが無いことから、雌雄の区別ができる。

この蝶は、朝鮮半島、中国、アムール、日本に分布する東亜特産種である。わが国では北海道、本州、四国、九州に分布する。分布は広いが、一般的に個体数は少ない蝶である。他のヒョウモン類のように草原に群生することはない。年1回の発生で、暖地では5月中・下旬から発生する。羽化後しばらくは活動するが、間もなく暑さを避けて夏眠に入り、夏場は活動しない。秋に再び出現して花を訪ねる。寒冷地では7月に発生し、夏眠はしない。幼虫はスミレ類を食べる。幼虫で越冬する。

私は佐賀県内で、まだ、この蝶を見たことがない。佐賀昆虫同好会員の溝上誠司氏によると、クモガタヒョウモンは、佐賀県では山地帯にまれに見られ、現在では、著しく個体数が減少している種のひとつであるという。

## メスグロヒョウモン

Sagana Fritillary

*Damora sagana liane* (Fruhstorfer, 1907)

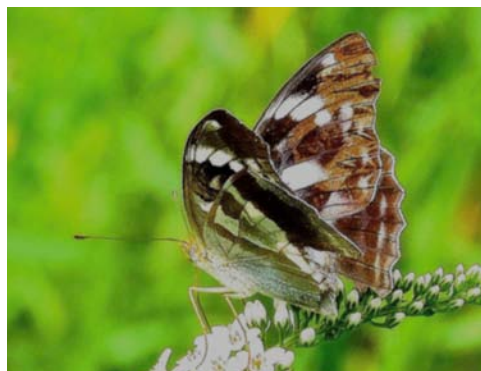
雄



前羽の長さ:約40mm

1979年7月25日撮影(岩手県盛岡市大志田)

雌

前羽の長さ:約40mm  
1979年8月2日撮影(岩手県盛岡群玉山村)

2014年7月20日撮影(唐津市七山池原字榎原)

雌雄で、こんなにも色彩・斑紋が違う蝶は珍しい。知らなければ、全く別種の蝶としか思えない。雌の羽表は緑色を帯びた黒色とでも表現できる黒い色で、前羽には数個の白い紋があり、後羽には、中央に白い帯がある。一見、イチモンジチョウ類に見える。雄は、これこそ、まさにヒョウモンチョウ類の典型的な色彩・斑紋である。交尾している姿はみたことがないが、雄が雌を追っかけているのは目撃したことがある。すがすがしい夏の日、岩手大学の演習林近くで、私の目の前を雌雄もつれながら飛んでいたのは印象的であった。北海道、本州、四国、九州に分布するが、一般に個体数は少ない。

佐賀昆虫同好会員の溝上誠司氏によると、メスグロヒョウモンは、佐賀県には、かつては各地に普通にみられたが、現在では、島嶼をのぞけば、非常にまれであるという。同氏は、この蝶を佐賀県で著しく個体数が減少している種としている。

メスグロヒョウモンは、国外では朝鮮半島、中国、ヒマラヤなどに分布し、ヨーロッパには産しない。年1回発生し、暖地では6月、寒地では7月に出現する。暖地では、酷暑の時期には夏眠に入り、秋になって活動する性質がある。九州では10月下旬から11月上旬まで、野外で飛んでいるのがみられる。草原には少なく、樹林や、その付近に見られる。幼虫の食草はスミレ類。幼虫で越冬する。

少年の日、昆虫採集に行くと、時々、メスグロヒョウモンを見た記憶はあるが、掴まえたことはない。夏休みが終わって、標本展示会で他の生徒が採集した緑黒色の雌の標本をみて、非常に羨ましく思ったことを覚えている。

2014年7月20日唐津市七山池原の榎原湿原で久しぶりに本蝶の雌一頭に出会い撮影できた。最近の貴重なチャンスであった。

## ミドリヒョウモン

Silver-washed Fritillary

*Argynnis paphia tsushimana* Fruhstorfer, 1906

前羽の長さ:約35mm

1975年7月27日撮影(岩手県岩手山)



1975年7月27日撮影(岩手県岩手山)

雄の羽表面の地色は赤みを帯びた橙色で、雌は黒っぽい黄色で雌雄差がある。裏面の色彩・斑紋は雌雄同様に、前羽の先端部と後羽は、やや茶色を帯びた緑色で、後羽には縦に銀色の帯が走る。このような裏面の色彩・斑紋をもつヒョウモンチョウの種類は、他にないので同定は容易である。

ミドリヒョウモンは、日本、朝鮮半島、中国、サハリン、ヨーロッパにかけてのユーラシア大陸の北部に広く分布する。わが国では北海道から九州まで全土に産する。西南部の暖地では、主に山地に住んでおり、平地ではまれである。年1回の発生で、暖地では5月下旬～6月上旬頃から出現する。羽化してからしばらく活動して、酷暑の時期には夏眠し、秋になって再び活動する。寒冷地では、7月になってから出現し、夏眠の現象はない。草原には少なく、樹林あるいは、その近くに多い。幼虫はスミレ類を食べる。1令幼虫で越冬する。ミドリヒョウモンは、佐賀県内ではツマグロヒョウモンに次いで多い種類である。佐賀市三瀬村では普通に見られる。

ところで、この蝶の亜種名として、(*geisha*)が用いられていた(現在は用いられていない)。これは、もちろん、日本の芸者さんのことであろう。しかし、"芸者"の名は、この蝶にふさわしくない。"芸者"はやはり、クジャクチョウに付けてこそ、ぴったりする。

## ウラギンヒョウモン

High Brown Fritillary

*Fabriciana adipe pallescens* (Butler, 1873)

前翅の長さ:約37mm

2014年6月20日撮影(唐津市七山池原字榎原)



榎原湿原 2014年6月20日撮影



オニノカナボウ(鬼の金棒)

*Triploceras gracile* Bailey

顕微鏡撮影 X100

長さ:350 $\mu$ m, 幅(棘を除く) 20 $\mu$ m

2013年10月4日、榎原湿原より採集

採集時の気温:24 $^{\circ}$ C, 水温:23 $^{\circ}$ C, 水のPH:6.0

翅表の色彩・斑紋は、雌雄で大差はないが、裏面の銀白紋の大きさに差があるが、雌雄を見比べてみないと分からない(雌>雄)。ギンボシヒョウモン、ウラギンヒョウモン、オオウラギンヒョウモンの3種は非常に良く似ており、決定的な差は後翅の裏面を見ないと分からない。ただ、ギンボシヒョウモンは九州には産せず、オオウラギンヒョウモンは、佐賀県でも、産地が限局している。九州では、この2種が鑑別の問題となる。ウラギンヒョウモンは、北海道、本州、四国、九州に分布する。国外では、サハリン、朝鮮半島、中国東北部、ユーラシア大陸の北部に分布する。幼虫は野生のスミレ類を食べる。成虫は5月頃から夏の間に出現するが、真夏は夏眠するらしく、姿を消し9月頃から再出現する。低地から山地にかけて普通と記されているが、近年は減少しており、あまり見かけない。この蝶は、昆虫少年時代には、よく見かけたが、佐賀では一度も遭遇しなかった。

ところが、2014年6月20日、唐津市七山の榎原湿原で、この蝶に偶然遭遇し撮影出来た。同湿原は、九州では規模の大きい湿原で、稀少な動植物が生育している。昆虫では、佐賀県では、まれなハッチョウトンボを産する。佐賀県の他の場所では見られない蝶はいないが、クロシジミやホソバセセリなど珍しい種類もいる。ここは、[佐賀県環境保全地域]に指定されており、動植物の採集は一切禁止されている。著者は、県の許可を得て、原生生物(protoist)の調査を行っている。他の池や水田では見られない、珍しい原生生物の種類が沢山いる。本書では、その1種の顕微鏡写真を示そう。

絶滅危惧I(A,B)類種

## オオウラギンヒョウモン

Large High Brown

*Fabriciana nerippe* (C. & R. Felder, 1862)

前翅の長さ:約39mm

佐賀県昆虫同好会員 古川雅通氏 撮影提供  
2003年6月29日撮影(嬉野市岩屋川内平重)

翅の斑紋は、ウラギンヒョウモンと非常によく似ている。決定的な違いは、後翅裏面の最外縁の銀白紋の縁取りはウラギンヒョウモンでは、半月形であるが、本種では中央が突出して、コウモリが翅を広げた形(?)となっている。本種の雌雄の区別は、雌は前翅端に三角形の白紋があるが、雄には、この白紋がない。

本種は本州、四国、九州に広く分布した普通種であった。かつては、東京都内でも見られたと云う。しかし、近年、日本で最も減少した蝶の1種で、四国、本州(山口県を除く)では絶滅したと考えられる。佐賀県でも普通種であったが、次第に減少し、稀種となった。しかし、その後、嬉野市大野原の自衛隊演習地に生存しているのが確認された。そこが県内唯一の安定した産地となっている。国外では、朝鮮半島、中国に分布する。幼虫の食草は、フモトスミレ、ツボスミレなどスミレ科。

本種は、環境省の絶滅危惧種に指定されている。本種は草原性の蝶で、草原の環境変化が絶滅に到ったものと思われる。

私は未だ、一度も本種に遭遇した事はない。

# ツマグロヒョウモン

Indian Fritillary

*Argyreus hyperbius* (Linnaeus, 1763)



前羽の長さ:約37mm

1988年5月5日撮影(佐賀市鍋島町蛸久)



1989年6月17日撮影(佐賀市鍋島町蛸久)  
ツマグロヒョウモンの雄



1986年6月20日撮影(佐賀市鍋島町蛸久)  
羽化したばかりのツマグロヒョウモン



2012年5月4日撮影(佐賀市鍋島町蛸久)





1989年6月4日撮影(佐賀市鍋島町蛸久)



1986年6月20日撮影(佐賀市鍋島町蛸久)

佐賀県内では、どこに行っても春から初冬にかけて、普通にみられる蝶である。その分布は広く、西はアフリカからインド、中国大陸、東南アジア、台湾、朝鮮半島を経て、北は日本、南はオーストラリアまで見られる。

日本はこの蝶の分布北限で、福井県南部、神奈川県南部あたり以南に生息する。雌は前羽の先端が黒く、斜めの白い帯があるが、雄にはこのような色彩の部分がない。

日本にはヒョウモンチョウの種類は多いが、これに似た種類はいないから間違えることはない。現在、佐賀市内で普通に見られる唯一のヒョウモンチョウの仲間といえる。

われわれはこの蝶を見慣れているが、東北の蝶愛好者はこの蝶を初めて見て非常に感激する。ツマグロヒョウモンは、スミレ類を食べて育つ。最近ではパンジーがよく栽培されているが、パンジーも好んで食べるので、害虫という汚名をもらっている。

パンジーを植えておくと、どこからか、この蝶が飛来して卵を産む。ふ化した幼虫は、どんどんパンジーの葉を食べて生育する。ほうっておくと、パンジーの葉は食べられてしまう。幼虫はパンジーか、近くの建物などの1メートル以下の低い場所でサナギになる。

サナギは、普通褐色であるが、黄金色の小さい点がある。ツマグロヒョウモンは、佐賀県では飼育しやすい蝶なので、飼育すれば、自然の妙味的一端に触れることができる。

幼虫は棘を持っており、手でつまんで刺されると痛い。しかし、毒はない。

## スミナガシ

Asian Constable Butterfly

*Dichorragia nesimachus nesiotus* Fruhstrfer, 1898

前翅の長さ:約38mm

佐賀昆虫同好会員 廣川典範氏所蔵標本  
(1992年8月22日 大分県九重山黒岳で採集)

スミナガシとは、まことに、ふさわしい名を付けたものである。翅表の地色は黒いが、単一の黒ではなく、微妙に変化がある黒である。前後翅の辺縁に、V字型の白い斑紋が並んでいる。雌雄で色彩・斑紋は同じである。春型は夏型に比べて小型で白斑は強い。

国内における地理的変異は知られていない。国外では朝鮮半島、台湾、中国、ヒマラヤ、マレー諸島にまで分布する。わが国では本州、四国、九州(南西諸島を含む)に分布する。本州では青森県から山口県まで見られるが、東北地方北部では非常にまれである。年2回の発生で、春型は5～6月、夏型は7～8月に出現する。食餌植物は、アワブキ、ヤマビワなどのアワブキ科の植物である。蛹で越冬する。

スミナガシは、早く飛ぶが、花には来ないで、クヌギなどの樹液や果実に集まる。この蝶は佐賀県内の各地に産地が知られていたが、雑木林の伐採などによる食樹の減少で、現在では県内の稀少種となっている。

私のスミナガシとの出会いは古く、少年時代である。高知市の北山の林で樹液を吸っているのを採集した。1980年に佐賀市に来てからは、国立肥前療養所に医大生をつれて行ったとき、大きな建物の中の天井に近い窓ガラスに、1頭のスミナガシがバタバタしているのを見つけた。それ以後は、県内では一度も遭遇していない。

現在、佐賀県で採集記録が少なく明らかに減少している。

## ホシミスジ

Dod-dash Sailer

*Neptis pryeri* Butler, 1871

前羽の長さ:約30mm

1979年7月25日撮影(岩手県盛岡市大志田)

わが国で、どこにでも、もっとも普通にいるミスジチョウの仲間はコミスジである。コミスジを採集した昆虫少年は、コミスジに似た違った種類を採集したくなる。その対象となるのがホシミスジ、ミスジチョウ、オオミスジなどがある。しかし、これらの蝶はコミスジと違い、そう簡単には採集できない。

ホシミスジは前羽の横に走る中央の白帯が5つに分かれるのが特徴である。また、後羽裏面の付け根に、多数のあざ(黒点)があるので、同定に誤ることはない。色彩・斑紋は雌雄がほとんど同様である。北海道には棲息せず、本州、四国、九州に分布する。国外では朝鮮半島、中国、台湾に分布する。寒冷地では年1回、7～8月に発生し、暖地では年2回、5～7月、8～9月に発生する。通常、山地の草原に棲息する。九州では九重、阿蘇、英彦山、祖母山などの山地帯の産地が知られている。幼虫はコゴメバナ、シモツケなどのシモツケ科の植物を食べる。幼虫で越冬する。

少年の日、ホシミスジは、高知市郊外に産することは知っていたが、その場所に採集に行く機会にはなかった。この蝶に初めて出会ったのは、岩手の時代である。山田線のある駅の近くにたくさんいてシャッターチャンスもあった。この蝶は、1989年以来、佐賀県に局地的に棲息するようになった。食草とともに、佐賀県に搬入されたと推測されている。しかし、佐賀県では、もう絶滅してしまった。一過性の発生であった。国内で、5亜種の報告がある。佐賀に発生したものは、どの亜種か分からないので、名義タイプ亜種を記した。

# コミスジ

Common Sailer

*Neptis sappho intermedia* W. B. Pryer, 1877



前翅の長さ:約27mm

1985年7月8日撮影(佐賀市鍋島町蛸久)

佐賀平野の春の盛りの4月下旬、ツマキチョウやモンシロチョウにみとれていると、別の蝶がどこからともなく、スーッと現れる。「おや」と思って目を移すと、黒地に白いすじが入った翅のコミスジである。モンシロチョウやアゲハチョウなどとは違って、この蝶は、はばたきと滑空を繰り返しながら飛ぶ。

どの本にも「スイ、スイと飛ぶ」と書いてあるが、まさにぴったりな日本語である。英語で"グライダー"とも呼ばれるが、これも飛び方から名付けられたものと思う。

コミスジはヨーロッパからアジア大陸まで広く分布する。日本では北海道から九州の屋久島まで、平地、山地にごく普通に見られる。幼虫はクズ、ハギ類などのマメ科植物を食べる。

奄美諸島以南の南西諸島には、コミスジは分布しないが、そこには非常によく似たリュウキュウミスジ *Neptis hylas luculenta* Fruhstorfer, 1907 が分布する。コミスジと同じ仲間に、オオミスジ、ミスジチョウ、ホシミスジなどがある。オオミスジは九州には産しない。

ミスジチョウは九州にもいるが、非常に少なく、佐賀県では見つからない。これらの蝶はたがいに非常に似ているが、はっきりした特徴がある。その特徴を図鑑や標本で、明らかにするのも興味がある。

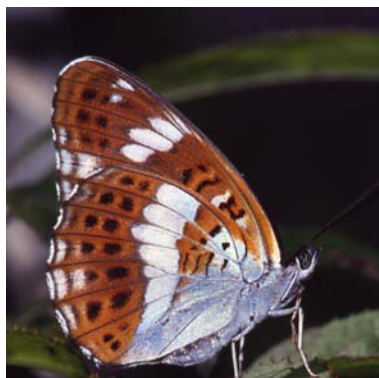
## イチモンジチョウ

White Admiral

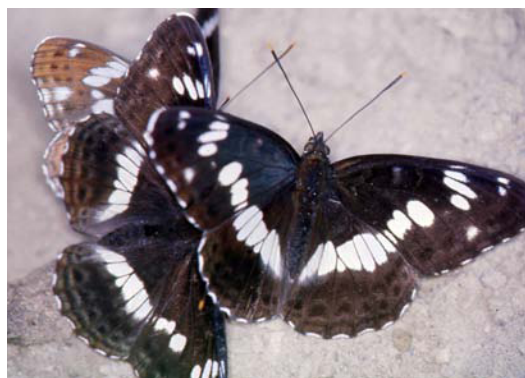
*Ladoga camilla japonica* (Ménétrières, 1857)

前翅の長さ: 約30mm

1992年6月2日撮影(佐賀市三瀬村)



1992年6月2日撮影(佐賀市三瀬村)



アサマイチモンジ

1976年7月21日撮影(岩手県岩泉町安家)

翅の表面には黒地に白の帯が入った模様があり、シックな感じがする蝶である。ヨーロッパ中南部から中央アジア、中国、ウスリー、アムール、朝鮮半島から日本に分布する。

幼虫はスイカズラ科の植物を食べる。わが国では北海道、本州、四国、九州に分布する普通の蝶である。しかし、どこにでもいるが、特に多くいる場所もなく、初めての場所で、この蝶を撮影する目的で歩いても、必ずしも出会えない。

佐賀市三瀬村は自然環境に非常に恵まれた所である。5月の終わりの日、室内はまだ少し肌寒いくらいであったが、外は気持ちよい微風の五月晴れであった。三瀬村公民館の近くに、よく整えられて、きれいな白い花が咲く木が植えてある個人の家の庭がある。

その花に真っ赤なベニカミキリがたくさんいたので、撮影していると、イチモンジチョウが飛んできた。その日はシャッターチャンスはなかったが、6月になって、その家のご主人から蝶がたくさんいると連絡があった。

急いで来てみると、新鮮なイチモンジチョウが何頭も花に来ていた。その庭には、トラフシジミ、イシガケチョウ、ミドリヒョウモンなどが飛来する。まさに蝶の宝庫といえよう。

イチモンジチョウによく似た蝶で、アサマイチモンジ *Ladoga glorifica* (Fruhstorfer, 1909)がいる。この蝶は九州には分布しないので、佐賀県では間違えることはない。

## ゴマダラチョウ

Japanese Circe

*Hestina japonica* (C. & R. Felder, 1862)

前羽の長さ:約43mm

2013年5月6日撮影(佐賀市鍋島町蠣久)

2013年5月6日撮影  
(佐賀市鍋島町蠣久)1984年7月15日撮影  
(佐賀市鍋島町蠣久)

翅の表は黒地に白の斑が入った模様で、裏は地色が少し茶色味を帯びているが、表と殆ど変わらない。雌雄で色彩斑紋に大差はないが、雌は翅形が幅広く丸みを帯びる。北海道、本州、四国、九州に分布する。国外では、朝鮮半島、中国に分布する東アジア特産種である(朝鮮半島、中国産は、それぞれ別亜種)。普通、年2、3回発生する。クヌギなどの樹液に集まる。食餌植物は、榎などのニレ科。幼虫で越冬する。

小学校の同じクラスに昆虫少年のO君がいた。彼は私のライバルであったが、私より、はるかに多くの蝶を採集していた。

初夏の日、私はO君、K君と3人で蝶採集のため、高知市の久万川の北にある榎の下に来た。初めて見る蝶が榎の上を回っているが、なかなか降りてこない。だれも捕っていないゴマダラチョウだ。ゴマダラチョウは普通の蝶であるが、そのころの私たちには、まだ珍しかった。30分もねばったころ、1頭が私の網がとどく所<sup>えのき</sup>にきた。私は狙いを定めて網をさっと振った。

「とれた!」

一瞬胸がときめき網の中をみた。いない。影も形もない。その時、急に後ろで「わあ、とれた、とれた」とO君の歓声が上がった。私が逃がした蝶を次の瞬間にO君が捕らえたのだ。私は完全に負けたのだ。「もう1匹捕ろう」と言ってO君は、その場所を動かそうとしない。しばらくして、O君は網を振った。網が木の枝に当たって木の葉が散った。蝶は逃げて行った。

すると、O君は突然かがみ込んで「ウーン、痛い、痛い」と大声で泣きだした。ハチの巣をたたいて、アシナガバチに襲われたのである。O君は片手で頭を押さえ、片手に網を持って泣きながら、久万川の堤を走って下って行った。

O君はだれも持たない絹製の緑色の捕虫網を持っていた。O君が遠ざかるにつれて、自慢の緑の網がだんだん小さくなってゆく。「あまり、欲張るから罰が当たったんだ」、K君と私は声を上げて笑った。ライバルに敗れた私は留飲を下げた。

本種の近縁種にアカホシゴマダラ *Hestina assimilis shirakii* Shirôzu, 1955 が奄美群島に分布する。後翅亜外縁に赤色斑列がある。

# コムラサキ

Freyer's Purple Emperor

*Apatura metis substituta* Butler, 1873



前翅の長さ:約38mm

1984年7月8日撮影(佐賀市鍋島町蛸久)



1990年7月29日撮影(佐賀市鍋島町蛸久)

クロコムラサキ(黒色型)



前翅の長さ:約35mm

1970年7月11日採集(大分県九重山で採集)

くろっぽい地色に、だいたい色の部分が混じりあった翅をもつ蝶であるが、雄の翅は光の方向によって美しい紫色に輝く。

幼虫はヤナギ類を食べる。この蝶は好んで樹液を吸いに集まる。クヌギの幹に、カブトムシやクワガタと一緒に樹液を吸っている姿をよくみかける。

雄の翅表は光線の方向によって、紫色に輝くが、雌は輝かない。佐賀県では、春から晩秋迄成虫が見られる。越冬は幼虫で行う。

普通に見るのは、だいたい色の帯をもった褐色型の*f. substituta* Butler, 1873の個体だが、橙色部の黒くなったクロコムラサキ *f. mikuni* Wileman, 1910と呼ばれる黒色型の個体があり、これは褐色型より、さらに美しい。

褐色型と黒色型(クロコムラサキ)は同じ種類の遺伝的二つのタイプで、その出現はメンデルの遺伝法則に従う。褐色型は、北海道から九州まで普通に見られる。

黒色型(クロコムラサキ)は分布が限定されている。九州では南部に分布し、佐賀県には分布しないと考えられていた。

ところが、佐賀昆虫同好会員の廣川典範氏が、2008年10月23日佐賀県で、クロコムラサキ1頭を採集された。

しかし、その後は2014年8月迄、全く採集されていない。

同氏は、同年10月12日、20日、22日に、褐色型の表面の褐色部が全て白色になった白化型(albino type)と云える個体を複数採集された。このような個体は、今迄知られていない。極めて価値ある発見である。私は、これまで黒色型は、九重山で1頭採集し、大分県耶馬溪で2,3頭目撃したに過ぎない。



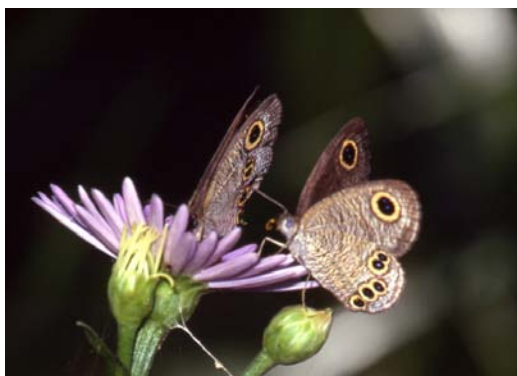
## ヒメウラナミジャノメ

## Argus Rings

*Ypthima argus* Butler, 1866

前翅の長さ:約20mm

1991年7月6日撮影(佐賀市鍋島町蛸久)



1991年7月6日撮影(佐賀市鍋島町蛸久)

どこにでもみられる、ごく普通の蝶であるが、多くの人になじみが少ない蝶と思われる。大きさはシジミチョウ程度で、目玉模様のある翅の色彩も目立たず、この蝶を蛾と誤っている人もあるくらいである。

それにジャノメ(蛇の目)という名をもらっているのも印象を悪くする。この蝶は、日陰の庭の片隅に、ひっそりと生活している。地上低く飛び花に集まる。花や葉に止まると、翅を閉じたり開いたりする。

要するに、形も生活も人目をひかない地味な蝶と言えるが、近寄ってよく見るとかれんなところもある。この蝶は、北海道から九州まで全国各地に普通にみられるが、対馬とトカラ諸島以南には分布しない。

国外では朝鮮半島、ウスリー、中国北部に分布する。幼虫はチヂミザサなどのイネ科の植物を食べる。この蝶に非常によく似た種に、ウラナミジャノメ *Ypthima multistriata nipponica* Murayama, 1969がある。両者は、ちょっとみると見分けがつかないが、後ろ翅の裏側をみると容易に区別できる。ヒメウラナミジャノメは目玉模様が5個あるが、ウラナミジャノメは3個しかない。翅を閉じて止まっているときに見れば、間違ふことはない。

ウラナミジャノメは静岡以西に分布し、ヒメウラナミジャノメより個体数が少ない。ウラナミジャノメに似た種に、リュウキュウウラナミジャノメ *Ypthima riukiwana* Matsumura, 1906がいる。本種は琉球の固有種である。また、ヤエヤマウラナミジャノメ *Ypthima yayeyamana* Nire, 1920とマサキウラナミジャノメ *Ypthima masakii* Ito, 1947がいるが、この2種も石垣、西表島の固有種である。

## ヒメジャノメ

Chinese Bushbrown

*Mycalesis gotama fulginia* Fruhstorfer, 1911

前羽の長さ:約25mm

1983年9月18日撮影(佐賀市鍋島町蛭久)

色彩・斑紋は雌雄で大差はないが、雌の羽の形がやや丸みを帯びており、羽の地色は雄よりわずかに淡い。季節的な著しい斑紋の変化はみられない。地域により、別亜種が存在する。国外では朝鮮半島、中国中・南部、トンキン、アンナン、ミャンマー、アッサムに分布する。

国内では北海道、本州、四国、九州(奄美大島を含む)に産する。奄美大島産のものは、別亜種とされている。本州中部以南の暖地では最普通種であるが、北海道や東北地方北部の寒冷地ではまれである。

九州では第1化は5月下旬で、第2化は7月である。以後、晩秋まで連続的に発生を繰り返す。幼虫はイネ、ススキなどのイネ科植物を食べ、幼虫で越冬する。ヒメジャノメは庭の隅、路傍、山林などいたる所にみられる。色彩・斑紋が地味で目立たないが、身近な蝶といえる。夏には街はずれのオフィスの窓辺で、この蝶がバタバタしている光景は珍しくない。

ヒメジャノメによく似た蝶に、コジャノメ *Mycalesis francisca perddiccas* Hewitson, 1862がいる。この蝶は本州、四国、九州に分布する。ヒメジャノメは明るい場所にもいるが、コジャノメは林間の陰湿な場所を好み、日の当たらない薄暗い林の葉の上に止まっていることが多い。幼虫はチヂミザサ、ススキなどを食べる。

コジャノメは最近、佐賀県から報告がない。近似種のリュウキュウヒメジャノメ *M. madjicosa* Butler, 1868は、奄美、沖縄に分布する。

## ジャノメチョウ

Dryad

*Minois dryas bipunctata* (Motschulsky, 1860)

前翅の長さ:約35mm

1975年7月22日撮影(岩手県盛岡市大志田)



2012年7月27日撮影(神崎市脊振村)

雄の翅表は濃黒褐色で、眼状紋は小さい。裏面の地色は翅表より淡く黄褐色。雌は雄に比べて、著しく大型。翅表の地色は雄より淡く黄褐色で、眼状紋も大きい。裏面は雄の裏面よりさらに淡色で、暗色部の発達も弱い。寒冷地のものは一般に小型で、暖地のものは大型である。本種は大型のジャノメチョウ科の蝶で、色彩・班紋も特徴的であり、わが国には似た種類はいなく、同定は容易である。

国外では朝鮮半島、中国よりヨーロッパに至るユーラシア大陸の北部に広く分布する。国内では北海道、本州、四国、九州に分布する。年1回、7～8月に出現する。幼虫はススキ、スズメノカタビラなどのイネ科植物を食べる。幼虫で越冬する。老熟幼虫は、浅く地中に潜入して蛹窩を作り、その中で蛹化する特別の変わった習性がある。

ジャノメチョウは平地にも発生することがあるが、通常、山地に棲息する。草原性の蝶で、他のジャノメチョウの仲間と違って森林中には発生せず、日の当たる場所を好み、アザミの花やその他の草花を訪れる。また、樹液にも集まる。

この蝶との最初の遭遇は、どこであったか覚えていない。私は、いまだ、ジャノメチョウを佐賀市内で見たことはないが、1992年夏、佐賀市三瀬村で目撃した。佐賀県では特別珍しい蝶ではないが、その棲息場所は限局しているらしい。

## クロコノマチョウ

Dark Evening Brown

*Melanitis phedima oitensis* Matsumura, 1919

前羽の長さ:約40mm

1990年11月3日撮影(佐賀市鍋島町蛭久)

淋しさはいつも分かぬ山里に 尾花乱れて秋風ぞ吹く

島崎藤村

もう、秋が来たことは、だれの目にも明らかである。華々しかった蝶の世界に翳りが見えるころ、クロコノマチョウが蝶愛好家の注目をひくようになる。

羽の形は違うが、大きさはアオスジアゲハ程度である。羽の表面の模様は目立たない黒褐色である。羽の裏は茶色から黒褐色で、まるで落ち葉のようである。静岡以南の本州、四国、九州に分布する。

九州では屋久島まで見られる。国外では台湾、中国本土、西北ヒマラヤに分布し、東南アジアからも知られている。夏型は6、7月から発生、秋型は9～11月に羽化して越冬する。幼虫の食草はススキ、ジュジュダマなどのイネ科の植物である。

この蝶は日当たりのよい草原にはいない。日中は森や木立の暗い木陰にいて、夕方に活動する性質がある。

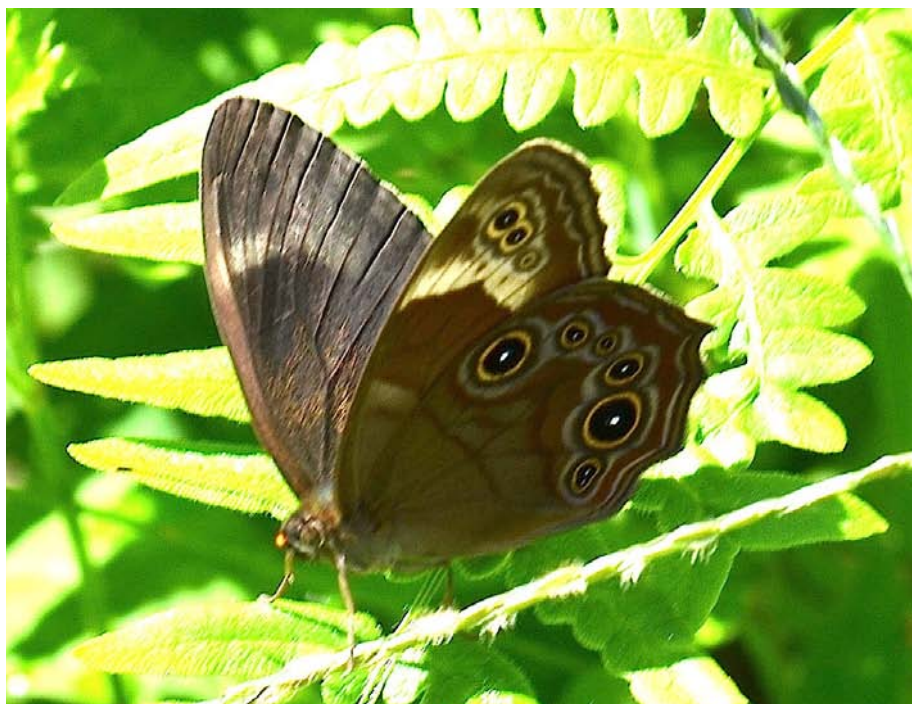
私のクロコノマチョウとの最初の出会いは、やはり少年の日であった。秋が深まったころ、自宅の裏にあまりにも落ち葉にそっくりの蝶がいたので、驚いたことを覚えている。

クロコノマチョウに非常によく似た蝶は、ウスイロコノマチョウ *Melanitis leda* (Linnaeus, 1758) である。特に両種の秋型は混同されやすい。ウスイロコノマチョウは、屋久島以南に住み、国外ではアフリカと東洋熱帯に広く分布する。九州、四国、本州で発見されるウスイロコノマチョウは、土着種ではなく、南方からの迷蝶である。

# クロヒカゲ

Diana Treebrown

*Lethe diana* (Butler, 1866)



前羽の長さ: 約27mm

2011年9月25日(撮影場所不明)



佐賀昆虫同好会会員 廣川典範氏所蔵標本  
(1984年5月9日撮影, 福岡県久留米市吉見岳で採集)

夕暮れ時にものすごい速さで飛び回る、目立たない黒色の蝶に出会うことがある。これがクロヒカゲである。種名 *diana* は、ローマ神話の純潔、月、狩猟の女神から名付けられたものだそうである。

色彩、斑紋は雌雄で大差はないが、よく見ると雌は翅の幅が広く、地色は雄より薄く、前翅にある斜めの白帯は、雄よりやや明確である。寒冷地のものは、小型のものが多い。

国外ではサハリン、朝鮮半島、中国、台湾に産し、国内では、本州、四国、九州に分布する。九州では平地、山地に普通に見られる。暖地では、第1化は4月下旬から5月上旬にかけて出現する。その後は、連続的に秋まで3、4回程度発生する。成虫は樹液に集まるが、訪花はしない。ものすごく速く飛ぶが、同じ場所に戻ってくる性質がある。幼虫はメダケ、マダケなどのタケ、ササの類を食べる。幼虫で越冬する。

本種に似た種類に、ヒカゲチョウ *Lethe sicelis* (Hewitson, 1862) とクロヒカゲモドキ *Lethe marginalis* (Moschulsky, 1860) がいる。クロヒカゲの雌は、しばしばヒカゲチョウと混同される。ヒカゲチョウもクロヒカゲモドキも九州に産するが、その産地は局部的である。両種とも佐賀県からは知られていない。

## サトキマダラヒカゲ

Goschkevitschi's Labyrinth

*Neope goschkevitschii* (Ménétriès, 1857)

前翅の長さ:約35mm

1992年5月28日撮影(佐賀市三瀬村)

気持ち良い初夏の日、低い山の山道を登って行くと、どこからか、あまり目立たない黄褐色の蝶が現れて、周りを素早く飛んでいるかと思うと、自分の体に止まってしまう。そのような経験はないだろうか。この蝶がサトキマダラヒカゲである。

この蝶は、アカタテハぐらいの大きさで、翅の裏面は黄褐色から黄色の地色で、複雑な模様がある。翅の表は、淡褐色に黄色の斑紋が規則正しく並んでいる。北海道、本州、四国、九州に分布し、わが国の特産種である。佐賀県では、春から秋にかけて山間部では普通にみられるが、佐賀市の市街地には少ない。幼虫の食草は、メダケ、マダケ、モウソウチクなどのタケ、ササの類である。通常は、花を訪れることなく、クヌギなどの樹液に集まることが多い。

20年以上前に、みんなで鄙<sup>ひな</sup>びた田舎の温泉宿に旅行したときに、宴席で女性が来て踊りをおどってくれたが、そのとき、キマダラヒカゲが2頭薄暗い電灯にきていたのが印象的であった。長い間、わが国には、キマダラヒカゲ属は一種だと思われてきたが、別種がいることが判明し、それにヤマキマダラヒカゲ *Neope nipponica* (Butler, 1881) と和名がつけられた。形態学的には両者は非常に似ており、その鑑別はかなりむつかしい。ヤマキマダラヒカゲは、佐賀県では脊振山系のみ産することが知られている。

## アサギマダラ

Chestnut Tiger

*Parantica sita niponica* (Moore, 1883)

前翅の長さ:約58mm

1995年6月2日撮影(佐賀市三瀬村)



1992年7月16日採集(佐賀市三瀬村)

山野を歩いて、ゆうゆうと飛ぶアサギマダラに一度出会ったら、その優美な姿が忘れられない。前翅表の地色は黒色で、青白色の紋がある。後翅表の地色は、明るい赤褐色で前翅同様の紋がある。雄には、表裏ともに後翅に暗褐色の性斑があるが、雌には、それがないので雌雄の識別は容易である。季節的変異や国内に於ける地理的変異は知られていない。

国外では朝鮮半島、台湾、中国南部から西北ヒマラヤにかけて分布する。わが国では北海道から九州に分布するが、北海道や本州北部の寒冷地ではまれである。年数回発生する。九州では5月頃から11月頃まで成虫が見られる。幼虫の食草はカモメヅルなどがガイモ科の植物である。幼虫で越冬する。

アサギマダラは、ゆっくり飛んでいるので手で捕まえられそうであるが、捕獲に失敗すると、突然、早変わりして空高く舞い上がり、飛び去ってしまう性質がある。1981年5月30日に、種子島で翅にマークして放された雄の個体が、同年7月16日に福島県白河市で捕獲された例や、その他の実験結果から長距離を移動することが実証されている。山道を歩くと、ものすごい数のアサギマダラに遭遇したことがあるが、この蝶は、通常、いつでも見れる蝶でもない。今でもアサギマダラに出会うと、その優美さに新たな感動を受ける。佐賀県から、近似種の台湾アサギマダラ *Parantica swinhoei* (Moore, 1883) が迷蝶として1頭だけ報告されている。その後、報告は全くない。

## カバマダラ

African Monarch, Plain tiger

*Danaus chrysippus* (Linnaeus, 1758)

1994年10月29日撮影(佐賀市川副町平和)



前翅の長さ:約40mm  
1983年7月23日撮影  
(タイ国チェンライ県メーハー村)



ガガイモ

地色は橙色で、前翅の先端部に黒色の部分があり、その中に白紋部がある。翅脈は黒色ではない。雄では、後ろ翅の中央より、やや下方に、黒い点がひとつあり、裏では、その黒点の中央に白紋があるので、容易に雌雄区別できる。

メスアカムラサキの雌はカバマダラに似ているといわれ、擬態の一例として、この蝶はよく知られている。カバマダラはアフリカからギリシャ、小アジアを経て東洋熱帯に広く分布し、東はニューギニアに達している。熱帯地方では、年中、連続的に発生している。土着北限とされているのは奄美大島で、1959年以後土着し、毎年発生が続いているという。九州本土以北で毎年のように、この蝶が採集されているが、土着種でなく迷蝶である。

食餌植物はガガイモ科植物に限られ、トウワタがもっとも普通の食草である。ガガイモも食すという。成虫は食餌植物の結びつきが強く、トウワタの多い人家周辺、道端、耕作地、草地などにみられる。トウワタのない所では、ガガイモが生える堤防などにみられる。飛翔はゆるやかである。

佐賀県では、毎年、カバマダラが採集され、また秋には多量に発生している場所が知られている。迷蝶として南から飛来した個体の子孫が、秋になって増えるとされている。しかし、佐賀県では越冬した個体はみつからない。



## スジグロカバマダラ

Common Tiger

*Danaus genutia* (Cramer, 1779)

前翅の長さ: 約45mm

1983年11月24日撮影(香港ビクトリア公園)

色彩、斑紋は雌雄ほとんど同じである。ただ、カバマダラと同様に、雄は後翅に黒色の斑紋があるが、雌には、それが無いので雌雄の区別は容易である。翅脈はカバマダラと違って、黒色で太い。

西はインドから、東はオーストラリアに至る東洋熱帯に広く分布するマダラチョウ亜科の一種である。わが国では、八重山諸島に土着している。石垣島や宮古島では、1月から12月まで成虫がみられ、もっとも個体数が多いのが5、6月であるという。全国各地に採集例があり、迷蝶として知られている。

佐賀県でも、川副町や東松浦郡北波多村などから、夏の終わりから秋にかけて採集報告がある。幼虫の食草はガガイモ科の植物である。土着地では、ふわふわとゆっくり飛び、畑地や荒地で訪花しているのに出会う。

土着地での最初の出会いは、どこだったのだろうか。その記憶がないのは、南の国に行けば必ずといっていいほど遭遇するからであろうか。1983年11月下旬に香港を訪問したときに、ホテル近くのビクトリア公園に行った。そこで、1頭のスジグロカバマダラが飛んできて、運よく、花壇の鉄柵のすぐ下の花に止まったので、鉄柵の外から撮影したのがこの写真である。

その後、佐賀市川副町で、複数の個体に遭遇した。

## アオバセセリ

Indian Awlking

*Choaspes benjaminii japonica* (Murray, 1875)

前翅の長さ:約25 mm

佐賀昆虫同好会会員 廣川典範氏所蔵標本  
(1988年9月1日撮影, 熊本県八代郡五ヶ荘で採集)

セセリチョウの仲間では大型の種類である。翅の表裏とも暗緑色で、後翅の後角部に美しい橙色の斑紋がある。雄は後翅表面の周辺の黒色部が広いが、雌は同部が広くない。季節的変異は知られていない。

わが国には他に似たような種類の蝶はいないから、同定を誤ることはない。国外ではスリランカ、インド、シッキム、アッサム、ミャンマー、タイ、トンキン、スマトラ、中国、台湾、朝鮮半島南部に分布する。わが国では本州、四国、九州(南西諸島を含む)に産する。寒冷地には、まれである。

通常、年2回(5～6月、7～8月)発生する。幼虫はアワブキ、ヤマビワなどのアワブキ科の植物を食べる。蛹で越冬する。非常に早く飛び回る。とくに、早朝や夕方活動する。花を訪れ、また湿地に集まる習性がある。

アオバセセリは九州では珍しい蝶ではなく、夏に山地に入ればよく見かけていた。私は1980年に佐賀市に来て以来、この蝶を佐賀県内で見かけた記憶がなかったが、1998年、三瀬村で初めて、診療所の裏に飛来した、1頭を目撃した。佐賀県内では、各地から採集報告がある。

佐賀昆虫同好会会員の溝上誠司氏によると、アオバセセリは、今では佐賀県内では稀少種の1種であるという。平地では環境整備、山地では食樹の伐採などが個体数減少の要因と推定されるという。

## ダイミョウセセリ

China Flat

*Daimio tethys* (Ménétrières, 1857)

前翅の長さ:約18mm

1993年5月27日撮影(佐賀市三瀬村)

ダイミョウとは、"大名"のことであろう。どうして、このように名付けられたかは知らない。翅表の地色は黒色で、白斑がある。雌雄斑紋はほとんど同様に、斑紋だけからでは雌雄の区別は困難である。季節的変異はない。

国外では朝鮮半島、中国、アムール、北ミャンマー、台湾に分布する。わが国では北海道、本州、四国、九州に分布する。わが国に2種の亜種がいる。北海道、東北、関東、中部地方に産するものは、後翅表が一様に黒色で白紋はない。この亜種は、関東型と呼ばれる。近畿、中国、四国、九州に産するものは、後翅表に白帯があり、関西型と呼ばれる。この両型の分布境界は、裏日本では福井県の中中部、表日本では三重県中部であるとされている。薄い白帯や、狭い不完全の白帯を現す中間型も存在する。

関東以南の暖地では年3回発生する。第1化は5月である。東北地方では年2回の発生である。幼虫はヤマノイモ、ツクネイモなどのヤマイモ科の植物を食べる。幼虫で越冬する。

飛び方は速いが葉の上に静止することが多い。物に止まるときは翅を水平に広げる。このために、ダイミョウセセリを蛾と誤っている人もいる。雄は葉の上に止まって、自分の縄張りを確保している。佐賀県では、平地、山地に春から秋にかけて見られる普通の蝶である。

## ミヤマセセリ

Spring Flat

*Erynnis montanus* (Bremer, 1861)

前翅の長さ:約20mm

1976年5月3日撮影(岩手県下閉伊郡川井村)

地色が黒褐色で、黄色の斑点があるセセリチョウである。雌は前翅中央に白い帯状紋があり、雄にはその模様が無いので、雌雄の区別は容易である。雌雄ともに、色彩・斑紋が目立つ蝶ではないが、本種は、コツバメとともに、わが国の早春の蝶の代表種である。まだ、枯れた草木もある3月中旬に山路を歩くと、この蝶が活発に飛びまわっているのに出会う。地面や枯れ草の上に翅を開いて止まり、一見、蛾のように見える。

北海道、本州、四国、九州など、ほとんど日本全国に分布するが、南西諸島に棲息しないという。国外では朝鮮半島、中国、アムールに分布する東亜特産種である。食草はコナラ、クヌギ、カンワなどのブナ科である。西南日本の平地や低山地帯では3月中旬から4月下旬、本州の高地や北海道などの寒冷地では4月下旬から6月上旬に発生する。幼虫は晩秋になって地表の落葉を綴って、その中に入って越冬する。早春に蛹になり、そして羽化する。

ミヤマセセリは、本来、早春の普通の蝶で、私が盛岡市に在住のときは、発生期に盛岡市内の岩山に行けば毎年見られた。ところが、1980年に佐賀市に住んで以来、佐賀県内では一度もこの蝶に遭遇していない。ミヤマセセリは佐賀県内でも普通にみられていたが、現在は山地帯に少数棲息している稀種であるという。

# ホソバセセリ

## Silver-spotted Skipper

*Isoteinon lamprospilus* C. & R. Felder, 1862



前翅の長さ: 約 mm

1994年7月15日撮影(佐賀市三瀬村)



ホソバセセリの環境  
1994年7月29日撮影(佐賀市三瀬村)

後翅の裏面の白斑が、中央の白斑を囲むように配列しているため、他種とは容易に区別できる。雌雄の色彩斑紋は殆ど同じである。山地に見られるが、都会の市街地や住宅地にはいない。夏に出現し、通常年1回発生(暖地では年2回)。幼虫で越冬する。関東以南の本州、四国、九州に分布。国外では、朝鮮半島南部、中国大陸と東部と西部、台湾、ベトナム。食草はススキなどのイネ科植物。

私が、この蝶に最初に遭遇したのは、1994年7月8日、佐賀市三瀬村である。同村の山中地蔵は、脚気地蔵として有名である。横の山道を谷川に沿って100m近く登ると、一面ススキが自生している。そのススキの間を飛んだり、止まったりしていた。7月中に数回は確認した。その後は毎年、夏に同地域を訪れるが本種に遭遇していない。

この蝶も、かつては山地に普通種であったが、全国的に減少しつつある。

## コチャバネセセリ

Japanese swift

*Thoressa varia* (Murray, 1875)

前羽の長さ:約17mm

1993年5月24日撮影(佐賀市三瀬村)

前後羽の表面は黒褐色で、白色の斑紋がある。裏面の地色は、金色に近い黄褐色で脈は黒く、表面の同様な斑紋があるが、その斑紋が黄色であるから、羽をたたんで止まっている時でも、他のセセリチョウの仲間と区別できる。雌雄の斑紋はほとんど同様であるが、よく見ると、雄は前羽表に斜めに走る光沢をもつ線があるが、雌にはその線がない。

コチャバネセセリは日本の特産種といわれている。北海道、本州、四国、九州に広く分布する。本には普通種と書いてあるが、佐賀県では山地性の蝶で採集報告も多くなく、珍しい蝶といえる。寒冷地では年1回6～8月に発生する。暖地では年2回発生する。春型は4～5月、夏型は7～8月に出現する。飛び方は速く、各種の花を訪れる。幼虫はクマザサ、ミヤコザサなどのササ類を食べる。

三瀬村の診療所の中庭にフジの木がある。棚が壊れて久しかったが、1993年5月の初め、職員が余暇を利用して立派な藤棚を作ってくれた。5月16日は5月晴れの快適な日であった。9時過ぎにセセリチョウの仲間が1頭藤棚に飛来したので、近寄ってみるとコチャバネセセリであった。その日は、数頭以上フジの花に飛来した。その後も藤棚では、この蝶をよく見かけるようになった。三瀬村ではコチャバネセセリが多く見られることを知って、非常に嬉しく思っている。

## キマダラセセリ

Japanese Dart

*Potanthus flavus* (Murray, 1875)

前羽の長さ:約16mm

1975年7月27日撮影(岩手県岩手山)

夏の庭に出てみると、ものすごい速さで飛んでいる虫がおり、しばらくすると眼の前の葉にぴたりと止まる。近づいて、よく見ると黒と黄色の斑模様の小さい蝶であった。こんな経験はないだろうか。この蝶がキマダラセセリである。キマダラセセリのことを、まるでジェット機のような形だと書いている人がいるが、まさに、ぴったりである。

色彩・斑紋は雌雄同様であるが、雌は雄に比べて、羽が幅広い。春型は、夏型より大型である。国内での地理的変異は知られていない。

北海道、本州、四国、九州に分布する。トカラ諸島の"中の島"が、わが国における分布の南限、本邦中部以南の暖地では普通種であるが、寒冷地では少ない。国外では朝鮮半島、アムール、中国、ミャンマーに産する。

寒冷地では年1回の発生であるが、暖地では年2回の発生で、6～7月に春型が発生し、8月下旬～9月に夏型が発生する。幼虫はエノコログサ、ススキなどのイネ科の雑草を食べる。幼虫で越冬する。北海道、本州、南西諸島などにはキマダラセセリとよく似た種類が数種類いる。

佐賀県で、一見キマダラセセリに似ている種類は、ヒメキマダラセセリ *Ochodes ochraceus* (Bremer, 1861)である。この蝶は富士町から脊振山にかけて棲息している山地性の蝶である。

## クロセセリ

Restricted Demon

*Notocrypta curvifascia* (C. & R. Felder, 1862)

前羽の長さ:約21mm

1977年7月2日撮影(熊本県熊本市)

羽の地色は黒色で、前羽には、大きな白斑と微小白斑がある。雌雄の色彩・斑紋はほとんど同様であるが、雌は羽型が丸味をおび、微小白斑が雄より、やや大きい。国内における地理的、季節的変異は知られていない。わが国には他に似たようなセセリチョウは産しないので、同定に誤ることはない。

クロセセリは東洋熱帯に分布し、西はインド、スリランカから東はジャワ、ボルネオに至り、日本は分布北限にあたる。わが国では屋久島以南の島々と九州本土全県下に棲息する。平地、低山地帯に多い。九州本土では5月上旬から6月に第1化が発生し、第2化は7月上旬から8月、第3化は8月下旬から9月に発生する。

溪流のほとりや樹陰などの陰湿地に多いが、庭の花にも来る。飛ぶのは速いが、飛んでいるときでも前羽の大きな白斑が目立ち、一見して本種だと分かる。幼虫の食草は、ハナミョウガ、ミョウガなどである。老齢幼虫は、これらの食草の葉の裏面を内側にして筒状に巻いて、その中に入っている。蛹で越冬する。

クロセセリは佐賀県下で、平地、山地に普通にみられるセセリチョウなので、普段は別に意識することなく見過ごしている。しかし、北国に住んで、いつも見慣れている南の国の蝶がいなくなると、やはり、少し寂しい気がする。



準絶滅危惧種

## オオチャバネセセリ

Flower Swift

*Polytremis pellucida* (Murray, 1875)

前羽の長さ:約16~23mm

1994年7月8日撮影(佐賀市三瀬村)

前後翅の地色は、黒みを帯びた茶褐色で、裏面は赤みを帯びた黄土色である。最普通種のイチモンジセセリに似ているが、後翅裏面の白斑で区別出来る。イチモンジセセリでは、白紋が一直線に規則正しく並んでいるが、本種では、それが交互にずれる点で区別出来る。また、前翅長に対して触覚の長さが、1/2を超える点でも区別できる。雌雄の色彩斑紋は、殆ど同じである。

北海道、本州、四国、九州に分布するが、中国、四国、九州では、山地帯に棲息するが、数は少ない。佐賀県では、10年前迄は、各地から報告があったが、その後は極端に少ない。地域によっては、絶滅危惧種に指定されている。国外では、サハリン、中国中・南部に分布する。成虫発生のピークは、7、8月。年2回発生が一般的である。幼虫の食餌植物は、メダケ、クマザサ、ヤダケ、などのタケ科植物や、ススキ、アシ(ヨシ)、エノコログサ、イネなどのイネ科植物。

私のオオチャバネセセリとの最初の出会いは、やはり佐賀市三瀬村であった。1994年7月2日、同村の山中地藏(脚気地藏)の山の裏側に廻った所に水田があり、その横のミヤコグサに本種が数頭飛来して吸蜜していた。同年7月8日、15日に同場所で本種を確認した。三瀬村でも、他の場所では、本種で出会ったことはない。その後は、この場所に行ったことはない。

# チャバネセセリ

Dark Small-branded Swift

*Pelopidas mathias oberthuri* Evans, 1937



前羽の長さ:約17mm

1980年10月30日撮影(佐賀市鍋島町蛸久)

黒褐色の小さい蝶で、後羽の表面に白い紋のないのがチャバネセセリの特徴である。目玉が大きくて愛嬌がある。ものすごく速く飛ぶが、花に止まると近付いても逃げようとしない。

関東以南の平地、低山地に多い蝶である。北部九州では五月ごろ出現して、その後発生を繰り返し、晩秋まで姿がみられる。秋になると、その数が増え庭の花に飛来しているのに遭遇する。

国外では西はインド、スリランカから東はニューギニアまでの東洋熱帯地方に広く分布する。幼虫はイネ、ススキなどのイネ科の植物を食べる。

蝶はアゲハチョウやシロチョウなどのセセリチョウの仲間以外の蝶と、セセリチョウの仲間に二大別される。セセリチョウは、その種類は少ないが分類学上、アゲハチョウなどと対等の位置関係にある。セセリチョウの仲間は英語でスキッパー (skipper) と呼ばれる。

セセリチョウの仲間を蛾と誤っているひともいる。蝶は例外なく昼間に活動するが、蛾の大部分は夜活動する。羽の形や色彩が蝶に非常によく似た蛾もある。

蝶と蛾の主な区別点は触角の形である。しかし、蛾の仲間にも蝶によく似た触角をもつ種類もある。個々の特徴を細かくみれば、蝶か蛾かの判断のつかない種類はない。そうはいつても、蝶と蛾は本来同じものなのである。蝶は蛾の中の一握りともいえる。

ミヤマチャバネセセリ *Pelopidas jansonis* (Butler, 1878) は後翅裏面の中室に銀白色の紋があるのが特徴で、他種との鑑別になる。本種は本州、四国、九州に分布するが、まれである。佐賀県では、報告があるが、近年では極めて、まれである。

## イチモンジセセリ

Straight Swift

*Parnara guttata* (Bremer & Grey, 1852)

前羽の長さ:約18mm

1993年5月17日撮影(佐賀市三瀬村)



2012年8月24日撮影(佐賀市鍋島町蛸久)



2009年8月8日撮影(佐賀市鍋島町蛸久)

家のまわりや市街地の公園など、どこにでも見られるセセリチョウである。触角が体や羽の長さに比べて目立って短いこと、後羽の白い紋が規則正しく一列に並んでいるのが特徴である。

北海道から南西諸島まで全国的に分布する。わが国中部以南の暖地では、最も普通のセセリチョウである。国外では朝鮮半島、中国大陸、台湾から西は西北ヒマラヤ、東はジャワ、バリ、ボルネオ、セレベスに至る広大な地域に分布する。

九州では、越冬幼虫から羽化した成虫が5、6月に出現する。その後、発生を繰り返すが、晩夏から初秋には最も個体数が多くなる。この時期には、しばしば大発生が起り、同一方向に大群で飛ぶ現象が知られている。

幼虫はイネ、イヌムギなどのイネ科の植物を食べるので、イネの害虫という汚名をもらっている。イチモンジセセリはどこにでもいるし、しかも各個体は目立たない蝶であるためか、特別の思い出もない。

ただ、小学校か国民学校の国語の教科書だったと思うが、初秋を述べた文に、「頭でっかちのイチモンジセセリが…」と書いてあった個所だけを不思議に覚えている。

そういえば、イチモンジセセリはモンシロチョウやベニシジミなどのほかの科の蝶に比べて、頭でっかちである。

# 県外・外国の蝶



## ヒメギフチョウ

Small Luehdorfia

*Luehdorfia puziloi inexpecta* Sheljuzhko, 1913

前翅の長さ:約30mm

1976年5月20日撮影(岩手県滝沢市)

東北の春は遅い。4月の中旬になっても、まだ、山肌は枯れ草の冬景色である。日陰には残雪さえある。そのような枯れ草の上を飛んでいる、黄色に黒のだんだら模様の小さいアゲハが、ヒメギフチョウである。その頃、カタクリは花開いており、そのカタクリの花に飛来する。

誰が言い始めたか知らないが、ヒメギフチョウは、"春の女神"と呼ばれる。この蝶が飛んでいるのを見たら、真に、"春の女神"にふさわしいと感じるであろう。雌雄で色彩・斑紋は大差ないが、交尾後の雌は受胎囊を付ける。

ヒメギフチョウは国外では朝鮮半島、中国東北部、シベリアの極東部海岸に分布する。わが国では北海道、本州に分布する。本州では東北地方全県下、新潟、長野、山梨各県の山地帯に産地があるが、その棲息地は北海道と同じく、非常に局部的である。関東地方では赤城山が唯一の産地として知られてきた。

年1回の発生で、北海道では、5～6月、本州では4～5月に出現する。しかも同一場所では、約1週間しかその姿が見られない。幼虫はウスバサイシン、オクエゾサイシンを食べる。嫡で越冬する。ヒメギフチョウによく似た蝶に、ギフチョウ *Luehdorfia japonica* Leech, 1889 がある。この蝶は日本の特産種であるが、本州にのみ分布し九州には産しない。

## ウスバアゲハ

Glacial Apollo

*Parnassius citrinarius* Motschulsky, 1866

前翅の長さ:約36mm

1979年6月10日撮影(岩手県沢内村)

一見、モンシロチョウの仲間のように見えるが、ウスバアゲハはアゲハチョウの仲間である。氷河時代の遺物といわれるパルナシウス属は、中央アジア高地を中心に、ユーラシア大陸、北アメリカ大陸に分布し、約37種があるという。この属の蝶は、ヘルマン・ヘッセの作品に出てくる、ヨーロッパの高貴な美しい蝶アポロウスバアゲハや、大雪山に生息する北海道の特産種キイロウスバアゲハなどを含む。

ウスバアゲハは北海道、本州、四国に分布し、九州には産しない。国外では中国大陸中部に分布する。年1回の発生。西南日本の低山地帯では、4月下旬から6月上旬にかけて羽化する。本州の高地帯では、6月中旬頃より出現する。幼虫の食草は、地域により異なるが、エゾエンゴサク、ムラサキケマンなどである。

高知の少年時代に、父が登山して、この蝶を採って帰ってくれた。

これが私とこの蝶の出会いである。しかし、四国では高山地帯でなければ、ウスバアゲハには遭遇できない。この蝶に憧れて何十年も経った。初めて野外で、この蝶に出会えたのは、岩手県に赴任した1973年の初夏であった。小刻みに翅を動かしながら、飛んでいるウスバアゲハに出会えた感激は、ここに書き表すことができない。

日本で、*Parnassius*属の蝶は、ヒメウスバアゲハ *P. hoenei* Schweizer, 1912, キイロウスバアゲハ *P. evermanni daisetsuzanus* Matsumura, 1926の3種が分布している。

# タイガー・スオローテール

Tiger Swallowtail

*Papilio glaucus* Linnaeus, 1758



前翅の長さ: 約55mm

1981年7月7日撮影(米国フロリダ州ゲインズビル)

アゲハチョウは、英語でスオローテールと呼ばれる。タイガー・スオローテールは、中央アラスカ、カナダから北米の大西洋岸にかけて分布する。

この蝶は、米国東部でもっとも普通のアゲハである。西海岸には、本種と非常によく似たウエスタン・タイガー・スオローテールが分布している。

中年以上の方は、「慕情」という映画をご存じのはずである。ヘンリー・キング監督の映画で、主役は、ウィリアム・ホールデンとジェニファー・ジョーンズで、舞台は香港である。

ホールデンの特派員マークとジョーンズのハン女医は愛し合うようになり、丘の上でデートをする。そのとき、マークの肩に蝶が止まる。その蝶は、シロチョウ科の一種であるが、種類は判定できない。

マークが戦場でタイプを打っているときに、白い蝶がきて、タイプライターに止まる。これはモンシロチョウであった。マークは戦死し、ハン女医は思い出の丘の上に、ひとりでやってくる。

そのとき、1頭の蝶が飛んできて木に止まる。この蝶は、マークの化身である。なんと、この蝶はアメリカ産のタイガー・スオローテールか、ウエスタン・タイガー・スオローテールであった。

マークの魂が、はるばる太平洋を越えてきたことになる。両種とも東洋には分布しないので、香港では、これらの蝶に出会えないのは確実である。

## ヒメシロチョウ

Eastern Wood White

*Leptidea amurensis* Ménétrières, 1858

前翅の長さ:約25mm

1970年7月11日撮影(大分県九重山で採集)

都会地には白い蝶といえば、モンシロチョウかスジグロシロチョウしかない。珍しいシロチョウを求めるのは、昆虫少年の自然の成り行きである。ヒメシロチョウは、それらの目的の蝶の1種といえる。翅の構造も飛び方も弱々しく、この蝶にヒメシロチョウとはよく名付けたものである。

この蝶は系統的に、モンシロチョウとかなりかけ離れた種類とされている。雌の翅端の黒色部の発達は雄より弱い。ヒメシロチョウは、国外では朝鮮半島、アムール、バイカル、中国東南部などから知られる。わが国では北海道、本州、九州に分布する。しかし、その生息場所は局地的である。九州では九重、阿蘇などの高原地帯の火山草原に局所的にみられるだけである。

幼虫はマメ科植物のツルフジバカマを食べる。蛹で越冬する。九州では、通常、年3回発生する。4月中旬～5月中旬、6月下旬～8月上旬、8月下旬～10月上旬に成虫が羽化する。本種は、その発生パターンから旧北区系の蝶であるという。

ヒメシロチョウに似た種類に、エゾヒメシロチョウ *Leptidea morsei* (Fenton, 1882)がいる。本種は、わが国では北海道にのみ分布する。本種は前翅端がヒメシロチョウより、やや丸みを帯びている点で区別できる。場所によっては、ヒメシロチョウとエゾヒメシロチゴウが混棲することもある。



## ツマベニチョウ

Great Orange Tip

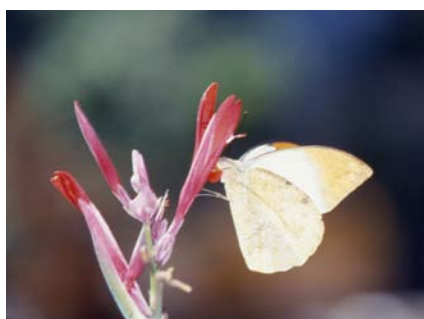
*Hebomoia glaucippe cincia* Fruhstorfer, 1910

前翅の長さ: 約50mm

1985年7月4日撮影(沖縄県与那国島)



1985年7月4日(沖縄県与那国島で採集)



1985年7月4日(沖縄県与那国島で採集)

いかにも熱帯蝶らしい大きな美しいシロチョウである。シロチョウ科のチョウといえば、モンシロチョウやスジグロシロチョウのように、ゆっくり飛ぶイメージがあるが、ツマベニチョウは全然違う。力強く翅ばたき、すごく早いスピードで飛び、旋回範囲も広く、これがシロチョウかと思うほどである。雄の翅表は白色で、前翅先半部は黒色で囲まれた、あざやかな橙赤斑がある。雌の翅表の地色は、通常、灰色で、橙赤斑は赤みが少ない。地域によって多少の違いがあり、いくつか亜種がある。

インド、スリランカからモルッカ諸島に至る東洋熱帯に広く分布する蝶である。わが国では南西諸島に普通で、九州本土では鹿児島県大隅半島南端佐多岬から、薩摩半島南端部にまで分布する。幼虫の食草は、ギョボクである。鹿児島県では、年4回程度の発生と考えられている。ツマベニチョウは、東洋熱帯、亜熱帯に多く、非常に目立つ蝶である。この蝶の力強い飛翔を見れば、ああ、南の国にきたのだとつくづく思う。

私とこの蝶の野外での最初の出会いは、佐多岬であった。学生時代に大学の寮友と一緒に、5里の山道を歩いて行った。途中、数多くのツマベニチョウに出会ったが、ついに1頭も捕れなかった。最初に、この蝶を捕ったのは、奄美大島であった。その後、東南アジアに行ったときに、各地で採集した。  
註:鹿児島県本土産のツマベニチョウの学名は

*Hebomoia glaucippe shirozui* Kurosawa & Omoto, 1955

## エゾシロチョウ

Black-veined White

*Aporia crataegi adherbal* Fruhstorfer, 1910

前翅の長さ: 約38mm

2013年7月13日撮影(北海道定山溪)



蛹



1986年6月17日撮影(飼育個体)

蝶に興味をもって、採集に熱中するようになると、モンシロチョウやスジグロシロチョウでは満足しなくなる。シロチョウで、もっと珍しいものを捕ってみたいと望むのは、蝶採集家の自然の成り行きといえる。エゾシロチョウも、魅力あるシロチョウである。しかし、この蝶は日本では北海道の特産種である。標本の交換をすれば別であるが、九州ではそう簡単に手に入らない。

エゾシロチョウは、雌雄ともに翅表は白色で、翅脈は細くて黒色。雌の前翅基半は半透明に近く、珍しい感じのする蝶である。この蝶は国外ではサハリン、朝鮮半島北部、中国東北部、アムール、中国北部からヨーロッパに到るユーラシア大陸の北部に広く分布する。北海道では年1回の発生で、平地では、6月中旬から7月中旬頃、山地では、7月上旬から8月上旬頃に出現する。市街地の公園や人家の庭でも発生する。飛び方は比較的に緩やかで、アザミなどの花に集まる。幼虫の食草は、カイドウ、ボケなど。また、サクラやリンゴの害虫とされている。幼虫で越冬する。

1986年6月に、私は札幌に出張する機会があった。エゾシロチョウの撮影に、非常に期待して旅をしたが、この蝶を全く見なかった。見かねた友人が、エゾシロチョウの蛹をくれた。佐賀の自宅で羽化したのが右下の写真である。

2013年7月、北海道定山溪を訪ねた時、ホテルの近くにエゾシロチョウが沢山いたが、樹上高く飛んでいた。

しばらく、粘って、やっと降りて来たので撮影出来た。

## ヤマキチョウ

Brimstone, Sulphur

*Gonepteryx rhamni* (Linnaeus, 1758)

前羽の長さ: 約35mm

1974年8月2日撮影(英国ケンブリッジ市)

前羽の先端がとがった、独特の形をしたキチョウである。雄の羽表は濃黄色、雌の羽は蒼白色である。わが国では長野、山梨両県を中心とする本州中部と岩手県、青森県の東南部に産するが、最近、著しく減少しつつある種である。

国外では朝鮮半島、中国東北部、アムールからヨーロッパにかけて欧亚大陸の北部に広く分布する。幼虫はクロウメモドキ科のクロツバラを食べる。ヤマキチョウの分布が狭い地域に局限しているのは、食草がクロツバラに限られていることと、この食草がどこにでもないことによる。

わが国では成虫は7、8月に羽化する。成虫で越冬し、きれいな羽で春出現する。ヤマキチョウは、英語でブリムストーン(硫黄)と呼ばれる。バタフライ(蝶)とは、butter-colored fly(バターの色をした飛んでいる虫)のことだそうである。

4月の快適の晴れた1日、英国ケンブリッジ市のはずれを歩いてみた。驚くことに、それまでは全く見られなかったヤマキチョウが、どこに行っても、一斉に飛んでいた。それをみて、私は、これこそ、まさにbutter-colored flyだと思った。

日本では蝶といえば、アゲハチョウと、モンシロチョウが代表であるが、英国では、ヤマキチョウがバタフライの原型かと思った。もちろん、これは私の独断である。

日本産ヤマキチョウの学名は、  
*Gonepteryx rhamni maxima* Butler, 1879

## スジボソヤマキチョウ

lesser Brimstone

*Gonepteryx aspasia niponica* Bollow, 1930

前翅の長さ:約32mm

1979年7月25日撮影(岩手県盛岡市大志田)

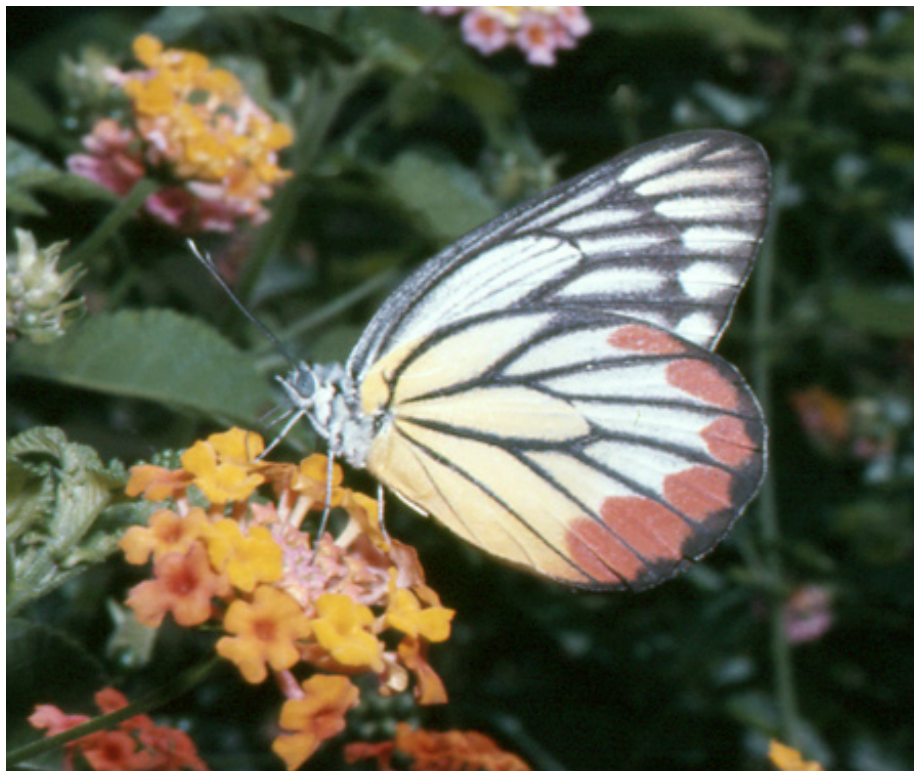
雌雄ともに、ヤマキチョウに非常に似ているが、スジボソヤマキチョウは、前翅表の前ベリが桃色でないこと、後翅裏面の第7脈が細いこと、翅全体がヤマキチョウより薄い感じがすることなどで、両者は区別できる。雄の地色は黄色、雌は黄白色である。ヤマキチョウと同じく、前翅先端が尖り、独特の形をしている。

国外では朝鮮半島、中国、台湾(山地)からヒマラヤ地方にかけて分布する。わが国では本州、四国、九州が分布地とされてきた。九州では九重山、祖母山などの高山地帯からのみ知られていたが、1954年以降は、その報告に接しないようである。年1回の発生で、6～7月に羽化する。岩手県で、何十頭もの群をなして、吸水しているのに出会ったこともある。短期間活動して、弱い夏眠に入り秋に再び出現する。成虫で越冬し、春に出現する越冬成虫は、翅の裏に汚点があり、翅も破損した個体が多い。幼虫の食草は、クロウメモドキ科のクロウメモドキ、クロツバラなどで、ヤマキチョウに比べると、食草の範囲が広い。

スジボソヤマキチョウは、私にとって長い間の憧れの蝶であった。1973年、九州から盛岡に赴任した最初の夏に、盛岡市のはずれの「分かれ」という所で、新鮮な個体に出会った、東北の夏にマッチした、あの"黄色"の乱舞が忘れられない。

## ベニモンシロチョウ

Painted Jezebel

*Delias hyparete indica* Wallace, 1867

前翅の長さ:約39mm

1975年11月17日撮影(タイ国バンコック)

いかにも、熱帯蝶らしい派手な色彩のシロチョウである。雄の翅表は白色、前翅の先端部は黒色で、中に不鮮明な白斑がある。後翅裏面の基半部は黄色を帯び、外側部に橙赤紋が並ぶ。翅脈は黒色である。雌では、翅表の先端部にある黒色部と後翅外縁の黒色部が広いので、雌雄の区別は容易である。裏面は、雄と大差なく、強いていえば、前翅の白色部がやや、黒色を帯びる。

本種は東洋熱帯に広く分布する。台湾にも分布するが、あまり普通ではないという。台湾産のものは、別亜種で後翅裏面の橙赤紋が、黒褐色で縁どられている。食餌植物は、ヤドリギ科の植物である。飛び方は早くない。

私は1975年、タイ国を訪問したが、そのときに、バンコックで、この蝶に初めて出会った時には感激して撮影した。その後、1982年に再びタイ国に行ったが、この蝶は、どこに行っても見かけるシロチョウであった。

印象に残っているのは、国境の町メサイを訪問したときである。メサイの町は、タイ国の最北端で川をはさんで、ミャンマー(当時ビルマ)国境に接するところである。川に懸かった橋の上には、露天商が沢山おり、頭蓋骨の付いた水牛の角などを売っていたのも面白かったが、橋の横の木の上を、ベニモンシロチョウが1頭飛んでいた光景が私の脳裏に鮮明に残っている。

## ウラナミアカシジミ

Zebra Hairstreak

*Japanica saepestriata* (Hewitson, 1865)

前翅の長さ:約20mm

1979年8月2日撮影(岩手県岩手市玉山区)

翅表は橙黄色のシジミチョウである。雌は前翅端に、はっきりした黒帯があるが、雄にはその黒帯がないので、雌雄の区別は容易である。裏面は独特の縞模様で、雌雄同様である。表面の色彩は、他のアカシジミの仲間に似ているが、裏面を見れば同定に迷うことはない。

国外では朝鮮半島、中国東北部、ウスリーに分布する。国内では北海道、本州、四国に分布し、九州には産しない。年1回の発生で、6月上・中旬から発生する。ものすごい数が見られることもある。幼虫はクヌギ、ミズナラ、コナラなどの植物を食べる。幼虫は葉を綴って巣を作り、その中に潜んでいる。卵で越冬する。

この蝶との最初の出会いは、盛岡市郊外の"わかれ"という場所であった。たくさんのウラナミアカシジミが発生していた。

同じ属の蝶に、アカシジミがいる。アカシジミは北海道、本州、四国、九州に分布する。佐賀県内でも鳥栖市、佐賀郡、神埼郡、小城郡、東松浦郡から採集報告がある。しかし、1980年頃から減少の傾向をたどっている。ムモンアカシジミ *Shirozua jonasi* (Janson, 1877) は北海道、本州に分布し、九州には産しない。チョウセンアカシジミ *Coreana raphaelis yamamotoi* Okano は、珍蝶中の珍蝶である。岩手県に産するが、私はまだ見たことがない。私にとって幻の蝶である。

## オナガシジミ

Walnut Hairstreak

*Araragi enthea* (Janson, 1877)

前翅の長さ:約17mm

1979年8月2日撮影(岩手県岩手市玉山区)

岩手県にはオニグルミの木が多い。天気の良い夏の夕方、オニグルミの木の下にいてみると、活発に樹上を飛び交うシジミチョウをみることがある。これがオナガシジミである。翅表は黒褐色一色できれいな蝶ではないが、長い尻尾(尾状突起)があり、翅裏の独特の黒褐色の斑点がある。雌雄の色彩・斑紋はんもんはほとんど同じである。

国外では朝鮮半島、中国東北部、中国西部、ウズベキスタン、アムール台湾に分布する。国内では本州、四国に分布する。本州中部以北の山地のクルミ林にはまれでない。中国地方では鳥取県、岡山県、島根県龍局部的な産地がある。

年1回の発生で暖地では7月下旬に、北海道では8月になってから出現する。昼間はクルミの木の葉の上に静止している。同じオニグルミの木に、多数の固体が発生しているのが普通で、撮影のチャンスは多い。幼虫は、オニグルミ、ヒメグルミなどのクルミ科の植物を食べる。卵で越冬する。属は異なるが、翅裏の斑紋がオナカシジミに、やや似ているのがウスイロオナガシジミ *Antigius butleri* (Fenton, 1882) である。

ウスイロオナガシジミの翅表は灰褐色で、後翅に白斑がある。この蝶は北海道、本州、九州に分布する。九州では、霧島山の栗野岳のカシワ林が産地として知られている。一般に固体数は少ない種類である。

## エゾミドリシジミ

Jezo Green Hairstreak

*Favonius jezoensis* (Matsumura, 1915)

前翅の長さ:約20mm

1975年7月20日撮影(岩手県滝沢市)

エゾミドリシジミは日本の特産種で、北海道、本州、四国、九州に分布する。北海道、本州北部～中部の山地帯にはかなり見られるが、本州の西南部では高地帯のみに産し、まれな種類である。九州では九重山、祖母山からのみ知られている。年1回、6月下旬から8月に発生する。幼虫はミズナラを食べる。卵で越冬する。

岩手県はミドリシジミの仲間の宝庫といえよう。1972年の夏、私は盛岡を訪問した。市の北側にある観光地の岩山の頂上に登ると、ブナ科の木が植えてあるのが眼についた。ミドリシジミの仲間がいるかもしれないと、あまり期待しないで木をゆすってみた。2、3頭のミドリシジミの仲間が飛び出してきた。種類はわからなかった。

翌年の正月に、私は盛岡の大学に赴任した。岩手大学教授の故岡野磨瑛郎先生と親しくさせて頂き、山野の採集にご一緒させて頂いた。また、私自身も出張したときの余暇には、積極的に蝶を求めて付近を探索した。そのおかげで、盛岡滞在中にミドリシジミの仲間をはじめとして、いわゆるゼフィルスといわれる種類を何種類も撮影したり、採集することができた。

私の盛岡時代は本職も順調に進み、ゼフィルスをはじめ、それまでまだ見たこともなかった多くの蝶に出会えて、人生で真に素晴らしかった日々であった。



# ジョウザンミドリシジミ

Cognatus Green Hairstreak

*Favonius taxila* (Bremer, 1861)



前翅の長さ:約20mm

1975年6月20日撮影(岩手県滝沢市)



1975年7月20日撮影(岩手県滝沢市)



1975年7月20日撮影(岩手県滝沢市)

ミドリシジミの仲間が多いが、どれも限られた場所に、しかも、限られた時期にしか出現しないので、日常、目にふれることは、ない。戦前まではミドリシジミの仲間は、ゼフィルス(Zephyrus)属として扱われていた。ゼフィルスとは、ギリシャ神話の"そよ風"あるいは"西風"の精であるという。その後、再検討されて属が細分されたために、この属名は用いられなくなったが、今でも、ゼフィルスといえば、ミドリシジミの仲間を指す言葉として残っている。

ジョウザンミドリシジミは、エゾミドリシジミとよく似ており、その鑑別には熟練を要する。北海道、本州に分布する。本州では山地に産し、群棲することが多い。北海道産は本州産に比べて、一般に小型である。国外では朝鮮半島、中国東北部に分布する。成虫は年1回の発生で、7～8月に出現する。幼虫は、ミズナラを食す。卵で越冬する。

私がミドリシジミの仲間と野外で初めて出会ったのは、職に就いてからである。その年の7月上旬、先輩に九重山に案内して頂いた。2、3種のミドリシジミを採集して山に登った。カシワの林に出会い、木々を叩くと、ものすごい数のハヤシミドリシジミがいる事を発見した。今思うとシャッターチャンスが何回とあったが、その頃はまだ、蝶の撮影を始めていない時期であった。

# キベリタテハ

Camberwell Beauty, Mourning Cloak

*Nymphalis antiopa asopos* (Fruhstorfer, 1909)



前翅の長さ:約40mm

1975年8月10日撮影(岩手県宮古市で採集)

キベリタテハは、クジャクチョウとともに、代表的な北国の美人といったところである。翅表の地色は黒色で、外べりは黄色に縁取られ、その内側には瑠璃色の斑点が並び、真にシックな美しい蝶といえよう。色彩・斑紋は雌雄同様である。

国外ではサハリン、朝鮮半島、中国よりヨーロッパ、北米大陸に分布する。わが国では北海道、本州に産する。分布の西限は白山山塊とされている。北海道では全島の平地、山地に普通にみられる。本州では東北、関東、中部のおよそ1500～2500メートルの山地帯にみられる。平地で発見されることは、極めてまれである。国内での地理的変異は知られていない。

年1回の発生で羽化が遅く、7月下旬頃から成虫が出始め、8月が羽化の最盛期となる。成虫は活発に飛び、路上や岩上に静止することも多い。カエデ類、ミズナラなどの樹液を吸う。幼虫は、ダケカンバなどのカバノキ科、ドロノキなどのヤナギ科の植物である。成虫で越冬する。

キベリタテハは、九州や四国などの暖地にはいないので、盛岡市に赴任するまでは、その生きた姿をみたことはなかった。1975年、故岡野磨瑳郎教授の案内で、岩手県川井村の平津戸に行った時に、初めて出会った。新鮮な個体を採集することができたが、とうとう撮影の機会はなかった。

## クジャクチョウ

Peacock

*Inachis io geisha* (Stichel, 1908)

前翅の長さ:約30mm

1981年9月17日撮影(青森県弘前市)

クジャクが翅を広げた模様のような、美しい色彩の翅を持つ蝶である。英語でも、この蝶はピーコック peacock(クジャク)と呼ばれる。わが国では北海道、東北地方、関東地方、中部地方に産する。

分布の北限は白山山塊とされている。九州にはクジャクチョウは分布しない。国外ではイギリスを含むヨーロッパからシベリア、アムール、中国東北部、朝鮮半島、サハリン、国後島、択捉島に分布する。

この蝶の学名のイオはギリシャ神話のゼウスの恋人イオの名である。日本産の亜種名はゲイシャであるが、これはもちろん、芸者さんの意味である。この蝶が美しいところから、ゲイシャと名付けられたと思う。

クジャクチョウは私の忘れ得ない蝶である。私は1973年の正月、福岡市から北国の盛岡に赴任した。クジャクチョウは、盛岡市では全く普通種だと聞いていたが、春から初夏になっても一度も見なかった。

本当に普通種だろうかと思っていたとき、1973年7月7日に盛岡市内の岩山で、サナギからかえったばかりの新鮮な個体に出会った。思わず「ザ・ピーコック」と叫んでしまった。

クジャクチョウにはカラフルな南方系の蝶とは違ったシックな美しさがある。まさに北国の美人といったところであろう。この写真は、私が弘前大学での講義を終えて撮影したものである。

## ミスジチョウ

Sailer

*Neptis philyra excellens* Butler, 1878

前翅の長さ:約40mm

1973年7月8日撮影(岩手県川井村区界)

雌雄で色彩・斑紋で大差はなく、雌が雄に比べて大型である。大きさや色彩・斑紋がオオミスジに似ているが、前翅表面の付け根から中央に走る白線が、オオミスジでは上向きに凸凹があるが、本種は、その白線が一直線なので、両種は容易に区別できる。

日本、朝鮮半島、中国、台湾に分布する東亜の特産種である。わが国では北海道、本州、四国、九州に分布する。国内での地理的変異は知られていない。わが国本土の全土に分布する割には、いずれの地でも個体数は少なく、樹上高く飛び、めったに低く下りてこないで採集は容易ではなく、非常に珍しい種類といえる。

年1回の発生で、低山地は5月頃から出現する。幼虫はイロハカエデ、タカオカエデなどのカエデ科の植物を食べる。幼虫はカエデの葉に止まって越冬するが、枯れた葉が落ちないように吐糸で、その葉を枝にくくりつけておく性質がある。他の葉が枯れて落葉しても、幼虫が付いている葉は落ちないので、それらの葉を探せば幼虫を容易に発見できる。

私とミスジチョウの出会い<sup>くざかい</sup>は、1973年7月8日のことであった。盛岡市から山田線に乗って川井村区界<sup>くざかい</sup>に行った。そこで、偶然目の前に飛んできた蝶を網の中に入れたのが、ミスジチョウであった。その後は、一度もこの蝶に出会っていない。

## オオミスジ

Large Sailer

*Neptis alwina* (Bremer & Grey, 1852)

前翅の長さ:約42mm

1975年7月22日撮影(岩手県盛岡市大志田)

わが国では、最大のミスジチョウの仲間である。前翅の前へりに沿う白帯の形は、この蝶の仲間の同定に重要である。オオミスジは、その白帯が一本で分割されてなく、しかも、ギザギザがあるのが特徴である。雄は翅の形が狭長で、前翅端のとがりが雌より強い。

国外では朝鮮半島、中国大陸に分布する。わが国では北海道と本州に分布する。北海道では南西部に棲息するが、極めてまれである。東北地方から中部地方の山地では、まれでない。分布の西南限は、伊吹山脈といわれている。年1回の発生。平地～低山地では、6月上・中から発生する。山地では、7月が盛期で、8月までみられる。幼虫は、ウメ、アズキ、スモモなどを食べる。幼虫で越冬する。

蝶の採集を始めて、コムスジを捕ると、コムスジより珍しいミスジチョウの仲間が欲しくなる。オオミスジは憧れの的となる。1973年の夏は、私が始めて盛岡市に住み始めた年である。休日には、よく蝶を求めて歩いた。オオミスジは、盛岡周辺では、そんなに珍しい蝶ではないが、必ず出会えるものでもない。私は電車に乗って山の中の駅に行った。駅の近くに、沢山のウメの木を植えてある農家の庭があった。そこに少年の日から憧れ続けたオオミスジがたくさんいた。シャッターチャンスも十分あった。

## オオムラサキ

Great Purple Emperor

*Sasakia charonda* (Hewitson, 1863)

前翅の長さ:約55mm

飼育、1985年6月23日羽化(大分県日田郡大山町産)

私が北九州市のある病院に勤務していた時のことである。私は外来診察室の壁に、台湾の蝶の標本を掛けていた。それをみて、1970年(昭和45年)7月上旬、通院していた小学校の女の先生が、家の近くにオオムラサキがいるという。私は、自分でも生きたオオムラサキは、熊本県葦北郡でそれらしいのを中学生のとき一度見ただけで、そんな簡単にいるはずがなく、おそらく、カラスアゲハでも、オオムラサキと思っているだろうと本気にしなかった。ところが、4、5日して、「オオムラサキを採りました」といって、先生は紙の箱に蝶を入れてきた。箱の蓋を開けてみると、なんと、正真正銘のオオムラサキが3頭も入って、ばたついているではないか。もう、その時の驚きといったら表現できないくらいであった。紙の箱の中で暴れたので、鱗粉が落ちてしまって標本にはならない。

それで、早速、1970年7月19日に、その場所にいった。暑い夏の日であった。たしかに、そこでは眼の前にオオムラサキが何頭も飛んでいた。少し離れた場所にクヌギ林があり、1本のクヌギの木の根元に2、3頭のオオムラサキが樹液を吸っていた。網をかぶせて捕らえようとしたが、うまく網がかぶせられない。手を蝶の近くに持っていったが、逃げようとしな。さっと指を伸ばせて、オオムラサキをつかんでしまった。なんと、珍蝶オオムラサキをつかみとってしまったのだ。こうして、2頭のオオムラサキをつかんで採集した。その標本は今も、私の標本箱の中にある。その後、オオムラサキを見たのは、九重山で一度だけである。

オオムラサキは、国外では、台湾の北部山地、中国大陸、朝鮮半島

蛹



に分布する。わが国では、北海道南西部、本州、四国、九州に分布する。佐賀昆虫同好会の故古賀善十前会長は、何十年も、佐賀県内で、オオムラサキを追っておられるが、今日まで、まだ発見されておらず、採集記録もない。佐賀県、長崎県には、この蝶は分布しないと考えられている。

オオムラサキは、タテハチョウ科の中で最大級の大きさである。雄の羽の表面は、強く輝く基半部の紫と、それを囲む周辺部の黒で、黄斑、白斑が散在する。雌は、雄より、さらに大型であるが、紫色の輝きはない。オオムラサキの高貴な美しさは、世界に誇る日本の国蝶にふさわしい。日本の切手にも採用されているので、この蝶は広く知られている。わが国西南部の暖地では、主に山地帯にのみ産し少ない。年1回の発生で、暖地では、6月下旬から、寒冷地では、7月中・下旬から羽化する。クヌギ、コナラ、エノキなどの雑木林に生息することが多い。集団でクヌギの木に止まって吸蜜することがある。食餌植物は、ニレ科のエゾエノキ、エンキである。

オオムラサキの生態写真集も発刊されているが、私はまだ、この蝶の野外での生態撮影の経験はない。この成虫の写真は、佐賀昆虫同好会の会員坂井文雄氏から贈られた蛹が、1985年6月23日に自宅で羽化したものである。

## キバネセセリ

Yellow Awl

*Burara aquilina chrysaeglia* (Butler, 1882)

前羽の長さ:約23mm

1975年8月10日撮影(岩手県)



2013年7月19日撮影(北海道定山溪)

大型のセセリチョウである。雌雄で斑紋ほんもんが違う。雄の羽表は黄褐芭で紋がない。雌では前羽表に1個の黄色斑と、その外側に黄色斑が曲線状に並んでいる。

国外では朝鮮半島、中国東北部、ウスリー、アスコルド、アムール、中国西部に分布する。北海道では平地、山地にかけて全島に普通にみられる。本州では、東北地方、関東北部、中部地方の山岳地帯にみられ、近畿、中国、四国、九州では山地に棲息するが、まれである。

年1回の発生で、7～8月に出現する。幼虫はハリギリ科のセンノキを食べる。幼虫で越冬する。キバネセセリは、花や獣糞に集まり、湿地にも来る。止まるときには、ダイミョウセセリのように羽を開かない。私がキバネセセリに初めて出会ったのは岩手県である。九州では見たことがない。

2013年7月、北海道定山溪に行った時、ホテルの玄関の壁に沢山のキバネセセリが止まっているのを発見した。シャッターチャンスは、いくらでもあった。九州では、極めて稀なのに、ここでは最も普通種であった。この旅行で、エゾシロチョウとキバネセセリが撮影出来たのが大きな収穫であった。



## ギンイチモンジセセリ

Silver-lined Skipper

*Leptalina unicolor* (Bremer & Grey, 1852)

前翅の長さ:約15mm

1979年7月1日撮影(岩手県)

翅表は一様に濃い黒褐色で斑紋はない。後翅裏面は地色が黄色で、中央に銀色の帯が1本存在する。この帯は、春型で銀白色で鮮やかであるが、夏型では、地色に近くなり目立たない。雌の翅表の黒色は雌が雄より、ややうすい傾向がある。また、雌の前翅端は雄に比べて尖りが強い。このように、雌の前翅端が雄より尖るといふ事実は、他の蝶とは全く逆で異例のことである。雌雄ともに、腹部が長いのも特徴のひとつである。

本種に似た蝶は、わが国にはいないので、同定を誤ることはない。地理的変異の存在は知られていない。国外では朝鮮半島、中国東北部、中国北部に分布する。わが国では北海道、本州、四国、九州に分布するが、産地は局部的である。寒冷地では、年1回6～7月に発生する。暖地では、年2回の発生で、春型は5～6月、夏型が7～8月に発生する。場所によっては、さらに、第3化(夏型)が8～9月に発生する。幼虫の食草はイネ科のススキ、幼虫で越冬する。

この蝶は一般に山地性の蝶で、日当たりのよい草地を弱々しく飛び、蛾のように見える。ギンイチモンジセセリは、佐賀県からは知られていない。私とこの蝶の最初の出会いは、九重山の草原であった。その後は、岩手県でよく見かけた。岩手県では、珍しい蝶とは思わなかった。

# 外国の蝶



## 英国ケンブリッジの蝶

### 英国の蝶

英国の蝶の種類は日本のそれに比べてはるかに少ない。Howarth(1973)は全英国の蝶75種をあげているが、それらの中には、絶滅した種類、迷蝶および他の国から移動してくるが土着しない種類も含まれており、土着種は53種に過ぎない。

絶滅した種類としては、*Aporia crataegi* (Black-veined White 日本産亜種エゾシロチョウ)が広く知られている。本種は、かつてはイングランド及びウェールズに広く分布していたが、今世紀初頭に絶滅した。

迷蝶としては、1953年1頭だけ採集された*Nymphalis xanthomelas*(Scarce or Eastern Tortoisell、日本産亜種ヒオドシチョウ)、*Everes argiades*(Short-tailed Blue、日本産亜種ツバメシジミ)、ならびに*Danaus plexippus*(Monarch or Milkweed、オオカバマダラ)等がある。

土着種でないものとしては、*Vanessa atlanta*(Red Admiral、日本産近似種アカタテハ)、*Vanessa cardui*(Painted Lady、日本産種ヒメアカタテハ)、*Colias croceus*(Clouded Yellow、日本産近似種モンキチョウ)等がある。英国特産種というものはなく、ただ、亜種として、キアゲハの英国産亜種*Papilio machaon britannicus*があるに過ぎない。このように、英国の蝶相は日本に比べて貧弱であり、その上、日本産との共通種も少なくない。

著者は1973年12月より、1975年1月まで、英国ケンブリッジに滞在する機会があり、ケンブリッジの蝶を一夏だけ採集した。

### ケンブリッジ採集記

ロンドンからケンブリッジに行く間には、山は見えない。時々、丘が見え、麦畑が広がっている。ケンブリッジに着いても、山は全く見えない。平野が遠くに広がっている。1974年の冬は思ったほど寒くなく、雪は1日、しかも粉雪しか降らなかった。年によっては雪が積もることもあるという。北に位置するにもかかわらず、冬の寒さは、ちょうど九州の冬のようにであった。ただ、夏は東北の夏より涼しい。

1974年1月1日から勤務したが、2、3月の寒い間は全く蝶の姿は見なかった。

3月末、突然暖かい日がやってきた。周囲が麦畑にかこまれた病院の3階から下を見ると、1頭のタテハがいるではないか。しかし、そこには直接下りられないので種類は確認できなかった。

4月になると寒い日が続いたかと思うと、暖かい日が2・3日続いた。ふと外を見ると、黄色い蝶がとんでいる。近寄ってみるとヤマキチョウだ。春の陽気に誘われて、越冬した個体が一時にとび出てきたらしい。

近くの森(spinney)に入っていくと、植物はまだ全く冬景色で、若草は萌え出していない。そこに1頭の小型タテハが飛来した。すぐ近くで止まる。何と、コヒオドシだ。みると、あちらこちらに少なくとも数頭以上いる。急いで家に帰り、カメラを持参する。撮影成功。

5月になると、春がくるのは日本の東北地方に似ている。5月19日、うららかな春の日に自宅の庭に白い蝶が舞い込んできた。クモツマキチョウだ。日本では少なくとも平地には産しない。日本産のものには、2つの亜種があるのを思い出したが、もちろん、どちらもいまだ野外でおめにかかったことはない。我家の庭にクモツマキチョウが飛来するといえば、日本ではどんなにうらやましがられるだろうなどと想像する。これだけでも、英国にきた甲斐があったというものだ。1頭だけでなく、隣家の庭にもきている。

家の近くで、2、3頭採集した後、例の森に行く。もう若草の時期となっており、モンシロチョウ、エゾスジグロシロチョウ等が多く飛んでいる中に混じって、クモツマキチョウが次から次へと飛来する。ちょうど、西洋の春の原野に乱舞する女神のようだ。ああ、この光景を日本の蝶仲間に見せてやりたい。

クモツマキチョウはなかなか止まらず、ついに撮影は断念する。そのうち、大きなモンシロチョウが力強く飛んでいる。モンシロチョウよりは大きいばかりでなく、飛び方も力強い。ネットの中に入れる。予想した通りLarge Whiteだ。日本にはいない種類だ。オオモンシロチョウと呼ぶことに1人で決めてしまった。

向こうの高い木から、こちらの木に1頭のシジミが飛び移る。何だろう。30分に1頭ぐらいの割合で目撃したが、遂にとれなかった。

その後、5月中はこのシジミを見たが、6月にはもう見られなくなった。6月上旬までは、モンシロチョウ、エゾスジグロシロチョウ、オオモンシロチョウがみられた。

7月6日ヨーロッパ各国の訪問から帰って、何か変わった蝶がいてくれと念じつつ、急いで例の森に行く。

もう、若草の時期は過ぎて、夏草の時期になっている。その繁った夏草の間を1頭のジャノメチョウ科の蝶がとんでいる。

近付いてみると、日本にはいないMeadow Brownだ。もちろん初めてみる蝶だ。あまり速く飛ばず、採集は容易であるが、撮影は植物がじゃまして仲々近づけない。それでも、何回かシャッターチャンスに恵まれた。

7月7日森に行く。

Meadow Brownを撮影した。7月14日の観察では、Meadow Brownはまだいたんでなかったが、7月21日の観察では、もう新鮮なものはほとんどなかった。

その日、ジャノメチョウ科の1種のRinglet 1頭採集した。

7月21日自宅の庭で新鮮なシートテハ目撃。

7月28日例の森で、新鮮なヤマキチョウを目撃、新鮮なコヒオドシを採集。前から疑問におもっていた例の高い木から時々下りて来るシジミをまた発見したので、網をふると捕獲に成功した。はやる心をおさえながら取り出してみると、何とこれはルリシジミ。

8月2日、また例の森に行く。モンシロチョウが相変わらず多い。ヤマキチョウの撮影成功。また、Gatekeeperを撮影し、採集した。場所を変え、公園の裏で、コヒオドシとGatekeeperを撮影。植物のトゲがささり痛い。

8月6日森で、クジャクチョウ1頭採集した。日本に帰って、盛岡産と比較しようと思う。

8月18日朝、自宅の庭でヤマキチョウ目撃。例の森には、モンシロチョウが相変わらず多い。Meadow Brown数頭目撃。ルリシジミ1頭目撃。

8月20日例の森で、今までみたこともないシジミを発見、早速撮影する。本種はCommon Blueといい、日本には産しない。

以上で、採集日記は終わる。その後は、オックスフォード大学に国内留学し、再びケンブリッジに帰ってきたが、蝶のシーズンは終わっていた。9月上旬オックスフォード大学の庭にコヒオドシが数頭いたのは印象的であった。

本種は英国では、もっとも普通のタテハと思われる。

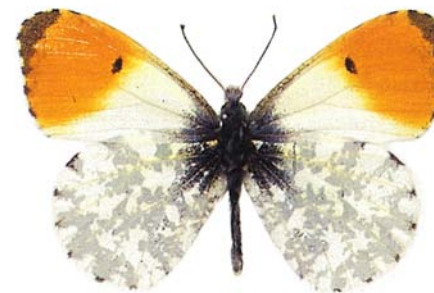
(北九州の昆虫 第22巻・第1号 1976年2月発行)

コヒオドシ



(1974年8月2日 撮影)

クモマツマキチョウ



(1974年5月19日 採集)

Gatekeeper



(1974年8月2日 撮影)

## フロリダに蝶を追う

1981年7月から8月にかけて、米国フロリダ州に滞在する機会があった。

私にとって、今回の米国訪問は1964年から1965年にかけてハワイ大学留学をはじめとして4回目になる。

フロリダ訪問は今回は2度目で、最初は1969年、タンパ近くの親友を訪問して、そこに1週間滞在した。その時、近くの公園で短時間に多くの蝶に出会い、それらの何頭かを採集し今も標本として保存している。

その時の経験から、フロリダに2ヶ月近くも滞在するならば、かなりの蝶にめぐりあえるかもしれないと私は大きな期待を抱いた。私は現在、蝶の採集は全くといていいほど行っておらず、もっぱら野外における蝶の撮影を行っている。今回も、仕事の余暇を利用してフロリダの蝶を撮影するため、愛用のカメラを持参した。

### 野外に蝶を求めて

1981年6月30日

佐賀の自宅を出る時はひどい雨であった。14時25分JAL80便で福岡空港を出発、成田に向かう。成田空港ではあまり待つことなくJAL002便に乗り込み18時10分離陸、同日10時30分頃サンフランシスコに到着。空港近くのホテルにチェックインした。

15時頃、ホテルの横のブーゲンビリアによく似た花にスオローテール(Swallowtail、キアゲハの類)が2、3頭来ていた。

7月1日

朝7時にサンフランシスコ空港を出発し、途中、アトランタで乗り換え、夕方6時20分、やっと目的のフロリダ州のゲインズビュに着く。

同地はみわたす限り平地で、樹木は亜熱帯や熱帯性のものである。蝶は1頭も見なかった。

7月2日

フロリダ大学に行く。構内は広い。黄色い蝶が1頭構内を飛んでいた。

オオカバマダラ



(1969年9月20日米国クリーブランドで採集)

7月6日

フロリダ大学動物学教室を訪問し、蝶の研究者として知られているエミール博士とブローワー博士に逢う。ブローワー博士は自作のオオカバマダラ(Monarch)の映画をみせてくれる。

オオカバマダラのもつ食草milkweedに由来する毒性物質の研究は大変興味があり、また、ものすごい数のオオカバマダラがメキシコの山中に乱舞する姿は表現しようのないぐらい壮麗であった。

7月7日

エミール博士とブローワー博士の好意で、大学院生のエアザー君と他の2人の大学生が私を車で郊外につれて行ってくれる。外はものすごく暑く日本の夏の比ではない。

いつも蝶が多いという湖のほとりに行ったが、蝶の姿は全くみられない。

別の場所に行くと、やっとキチョウ(Sulphur)の一種、ジャイアント・スオローテール(Giant Swallowtail)、タイガー・スオローテール(Tiger Swallowtail)、Checkered White、Gulf Fritillaryがとんでおり、これらを撮影した。

キチョウの一種は多分、メキシカン・イエローではないかと思うが自信はない。日本のキチョウや、スジボソヤマキチョウと同様に、水を求めて多数の個体が集まるのを確認した。

タイガー・スオローテールは運よくちょうど目の前の花に止まった。急いで近付くと近付き過ぎたが、もう時間の余裕もないのでシャッターを押した。

Giant Swallowtail



(1981年7月9日撮影)

7月11日

日曜日なので朝ゆっくり起きて、10時頃宿舍のまわりを歩く。ジャイアント・スオローテールを目撃したが、撮影できなかった。

池のほとりで、Viceroyを撮影する。

7月24日

今回の渡米の目的のひとつであった1週間の研修コースを終えた。そのコースはかなりハードスケジュールなもので全く疲れはてた。しかし、やっと終えた満足感があった。

前から約束していた通り、午後6時にフランク博士が私を迎えに来てくれた。

フランク博士は昆虫学者で、蚊の専門家である。1980年、わが国で行われた国際学会に出席され、その後、蚊の専門家である茂木幹義博士の家を訪問された。そのとき以来の出会いである。

今回は週末を利用して、私をここゲインズビュから車で数時間もかかるマイアミに近いベロビーチの彼の家に乗れて行くというわけである。

ゲインズビュで夕食して彼の運転で出発、私はその日までのコースの疲れでほとんど車中は眠っていた。彼の家に着いたのはちょうど真夜中であった。

Viceroy



(1981年8月1日撮影)

7月25日

フランク博士につれられて彼の勤務地であるMedical Entomology Laboratoryに行く。ここは、フロリダ大学の附属研究所になっている。

研究所の裏のジャングルに入ってゆく。ちょうど、ターザン映画に出てくるシーンそっくりである。蚊の多いのに閉口する。蚊の研究所がここに設立されている理由がうなづける。

白い蝶がいるが種名は判断できない、Buckeyeがかなりとんでいる。研究所に帰り、構内の林に入る。

Zebra Longwing



(1992年4月11日 グアテマラで採集)

ここでは時々あるゼブラ(Zebra)がみられるという。1時間以上探したがとうとうゼブラに出会わず残念。

7月26日

朝から研究所の裏のジャングルに行く。Buckeye、白い蝶、セセリチョウの一種を撮影した。午後、研究所長の自宅の庭に行く。庭には多くの花が咲いていた。見事なジャイアント・スオローテールがとんできたので撮影する。

夕方はGillman家に招待された。奥様は日本人でしかも福岡の方。日本食をご馳走になる。大変豪華な食事で、久しぶりの日本食に感激した。

7月27日

朝7時40分頃、フランク博士の運転で家を出る。カナダの昆虫学者と3人で、フロリダ半島のちょうど反対側のメキシコ海岸のSarasotaにある有名な蝶の博物館を訪問するためである。

フランク博士が運転する。行けども行けども同じような景色が続く。オレンジの畑の広大さに驚く。途中、植物園に寄って、ワニ(アリゲーター)をみたりして、昼過ぎやっとSarasotaの街に入る。約束の時間をかなり過ぎてAllyn Museumに到着した。

この博物館は実業家であるAllyn氏が創立した個人のものであるが、近くフロリダ大学に移管されるとの由である。

館長に紹介される。館長Allyn氏は穏やかな老紳士で、日本から見学に来たことに大変喜んで館内を案内して下さった。この博物館は標本の保存のみでなく、プロフェッショナルの昆虫学者が何人もいて、蝶の研究を行っており、館長自身も電子顕微鏡を用いて蝶の鱗粉の形態学的研究を行っておられる。

館内には約85万の世界中の蝶の標本が保存されている。

未整理の標本室には、みたこともないような蝶が展翅板にのせられてあった。

岡野磨瑛郎岩手大学教授のキシタアゲハ(*Troides*)の研究に興味をもっていたので、世界中のキシタアゲハの標本をみせていただいた。

図書室にはたくさんの文献があり、その中には日本の図鑑もあった。

私達はさめやらぬ感激で博物館を去り、その日の夕方、私はフランク博士とわかれて、1人でバスに乗り、再びゲインズビルに帰った。到着した時は0時を過ぎていた。

7月29日

宿舎の近くの橋の上でSkipperを撮影した。キマダラヒカゲに似たのがいて、撮影を試みたが失敗した。

8月1日

フロリダ大学構内の池の近くでGulf Fritillary、Long-tailed Skipperを撮影した。

メキシコ北部を含めて、北アメリカには約700種の蝶がいるといわれる。

1970年、フロリダ訪問の経験から、今回は1ヶ月以上もフロリダに滞在するので、かなりの蝶に出会う機会があるだろうとおおいに期待して出発した。

ところが運悪く蝶の少ない季節であって、1カ所に多くの蝶がいる光景を目撃することがなく、また、今回はじめて見る蝶の種類はほんのわずか、数種にしか過ぎなかった。

しかし、フロリダ大学でエミール博士、ブローワー博士にオオカバマダラのすばらしい映画をみせてもらったことや、野外に連れて行ってもらったことは予想外の好運であった。また、珍蝶ゼブラはみることができなかったけれども、フランク博士にフロリダの大自然を案内してもらったときは、少年の日の昔にかえったようで嬉しかった。

Allyn Museum of Entomologyを訪問できたことも大きな収穫であった。

一度は、このような素晴らしい博物館を訪問してみたいと、長い間夢みていたからである。

(北九州の昆虫 第30巻・第1号 1983年2月発行)

Gulf Fritillary



(1981年8月1日 撮影)

Long-tailed Skipper



(1981年8月1日 撮影)

## タイ北部蝶採集記

1983年夏、著者はタイ国北部に、約1カ月滞在して、蝶採集ならびに野外での蝶撮影の機会を得た。その場所は、チェンマイ大学構内ならびに、チェンライ県の一部である。タイ国北部は蝶の宝庫ともされ多くの美しい蝶と出会うことができた。ここに、その採集記を記録する。

### 蝶採集記

July 12, 1983

バンコックから空路チェンマイに着く。タイ国に来て、初めて近くに山を見る。チェンマイ大学の宿舎に入る。チェンマイ大学は、8000エーカーもある広大な敷地をもっており、そのキャンパスの中には森があり大きな池があつて、至る所に美しい花が咲いている場所があり、その豊かな自然環境は真に素晴らしい。

宿舎に到着したのは、もう17時過ぎであつたが、宿舎のまわりに咲いている赤い花に白斑の大きなナガサキアゲハが1頭来ていた。また、数頭以上のオナシアゲハがひっきりなしに、その花を訪れていた。

July 16, 1983

チェンライ県メーハー村の診療所に行く。診療所の裏は低い山になっている。ネットを持って山に登って行く。人家の横の小道に大きな褐色のタテハが止まっているのではないかと。急いで網をふる。捕獲成功!あとで調べたら、*Vindarlarota erota*であつた。夕方、チェンライ市の宿舎の庭で、オナシアゲハを撮影した。

July 17, 1983

メーサイの町を訪問する。ここは、タイ国の最北端で、川を挟んでビルマ(現ミャンマー)の国境に接する所である。川岸の木に、ベニモンシロチョウ(*Delias hyparete*)が飛んでいるのが印象的であつた。帰りに、Fish Caveという所を訪問する。

池のほとりに、沢山の白い蝶がいた。容易に採集する。これは、カワカミシロチョウ(*Apias albina*)であつた。また、テングチョウ科の1種(*Libythea myrrha sanguinalis*)を1頭採集した。

1頭の美しいマダラチョウの類、多分、*Euploea*の1種と思われる蝶が飛来した。網をふりながら、かなり格闘したが、とうとう取り逃がしてしまった。

July 20, 1983

13時30分頃、メーハー村の診療所の小高い裏山に行く。古びた小屋があり、その横の土の上に、大きなタテハが1頭いた。上から網を被せて捕獲する。トラフタテハ(*Parthenos sylvia*)である。本種は、日本では、1961年に、沖縄で1頭のオスが迷蝶として採集されているが、台湾には分布しない。

小道を歩いている中に、長い尾状突起がある橙色のシジミに出会い、容易に採集する。もちろん、始めてみる種類だ。後で調べたところでは、(*Loxura cassiopeia cassiopeia*)であつた。本種も台湾には分布しない。

夕方、再びこの近くで、キマダラルリツバメ(*Spindasis tahanonis*)と同じ属のタイワンフタオツバメ(*spindasis lohita*)を1頭採集した。本種は台湾に産する。近縁種であるミツボシフタオツバメ(*Spindasis syama*)も台湾にもタイ国にも分布する。

July 22, 1983

9時30分頃から山に入る。目的は肺吸虫(*Paragonimus*)の第2中間宿主であるサワガニの採集である。最も蝶採集に恵まれた機会であるので張り切って出発する。藪の中の小道を通ると、まずシロオビヒカゲ(*Lethe eurapa*)に出会い、これを採集する。シロオビヒカゲは、わが国では八重山諸島の石垣島と西表島だけに分布し、その亜種名は(*Lethe eurapa pavidata*)である。本種は多くの亜種に分類されており、今回採集した亜種は(*Lethe eurapa niladana*)と同定された。

沢を進んで途中休んでいると、目の前にアオスジアゲハ、ミカドアゲハが飛来する。網を振ったが、取り逃がしてしまう。さらに沢を進んで、日陰の場所に来たとき、1頭のシジミが来て、近くの葉に止まった。



(1983年7月13日撮影)



翅の裏面は全体に黄色で、後翅の後縁には赤い帯がある。とにかく、初めてみる種だ。網をふる。採集成功。蝶を網から取り出してみると、傷んではいない。極めて珍しい種類ではないだろうかと期待する。後で調べてみると、なんと、これは、普通種のウラフチベニシジミ(ベニモンシジミ、*Heliophorus epicles*)の1亜種で、(*Heliophorus epicles indicus*)であった。

本種はRiley(1929)により、7亜種に分けられているという。

帰路に、速く飛ぶアオスジアゲハ属(*Graphium*)と思って採集した1頭は、なんと、フタオチョウの*Polyura arja arja*だったのは、大きな収穫であった。

やはり、山に入った甲斐があって、この日は蝶採集には最も恵まれた日であった。

July 23, 1983

メーハー村の診療所の小高い裏山で、アオタテハモドキ、タテハモドキ、*Loxura cassiopeia cassiopeia*などを撮影した。なお、キシタアゲハらしい蝶1頭を目撃する。キシタアゲハは、その後、チェンライ市内で採集することができた。

August 7, 1983

われわれの仕事も無事終わって、いよいよ、チェンマイに帰ることになる。車でチェンライを出発する。途中、おもいがけなく、Ban Pa Aieという所にある山の中の診療所に立ち寄る。診療所の門の所に、一見、ツマグロヒョウモンに似ている *Cothosia cyane* と、ナガサキアゲハが飛んでいた。網は別の車に入れていたので、仕方無く、これら両種を手で捕獲した。同場所で、10時15分から、ちょうど2時間滞在したが、少なくとも、20種以上飛来したのを目撃した。網を手元に持っていなかったのが悔やまれてならない。

ベニモンシロチョウ



(1983年7月25日撮影)

チェンマイには午後到着した。宿舎の前の高い木に、今まで見たこともない、白い尾の長いシジミが多数いる。なかなか、下には下りてこない。その中、やっと、1頭採集した。*Neomyrinivea nivea* という種類で、図鑑には **rare** と書いてある。その後かなりの時間ねばったが、とうとうそれ以外は採集できなかった。

(ちょうちょう9巻5号1986年)

ウラナミシロチョウ



(1983年7月13日撮影)

キベリアゲハ



(1983年7月13日撮影)

Leopard Lacewing



(1975年11月20日撮影)

ジャノメタテハモドキ



(1983年7月23日撮影)

Larger Yamfly



(1983年7月23日撮影)

Grey Pansy



(1983年7月23日撮影)

## タイ国北部にキシタアゲハを追う

キシタアゲハ属(*Genus Troides*)の蝶は代表的な熱帯蝶で、その美しい姿にあこがれない蝶愛好家はいないであろう。

著者が、野外における本蝶との最初の出会いは台湾であった。台湾の南端にあるガランビー公園を訪問したとき、1頭のミノスキタアゲハが頭上に飛来した。思わず網を振ったが、わずか、10センチ程度の差で蝶にとどかず取り逃がしてしまった。太陽の光をうけて黄金色に輝いたその姿は今でも忘れ得ない。

次の機会は1975年、タイ国バンコックにあるルンピニ公園に行ったときである。初めて野外でみる熱帯蝶の生態撮影に夢中になっていたとき、突然、目の前に1頭のミノスキタアゲハがゆっくり樹上から下りて来た。私はわれを忘れてカメラを投げ、急いで網を振った。次の瞬間、網の中でバタバタしている蝶を認めたときの喜びは表現しようもなかった。その個体は今も私の標本箱の中に収まっている。

1983年、7月から8月にかけて約1カ月間再びタイ国を訪問する機会を得た。この期間中に多くの蝶を採集したが、今回はキシタアゲハを追った記録を記す。観察、採集を行った場所は、タイ国北部のチェンライ県とチェンマイである。なお、本文で単にキシタアゲハと記すのは正確に言えば、キシタアゲハ属の種を指す。

July20, 1983

チェンライ県のメーハー村の診療所で仕事をしていた。天候は雨期で、雨が強く降ったかと思うと熱帯の太陽が輝く。そのような時に蝶が多い。タイ国に来てもう10日以上も過ぎた。その間、多くの蝶を採集したが、いまだキシタアゲハは一度もみない。キシタアゲハはここでも非常に珍しいのか、あるいは時期が悪いのかもしれないと思ったりしていた。診療所の周辺をまわって、昼食のため帰りかけたとき、1頭のキシタアゲハが目の前を飛んで過ぎ去った。ちょうど、網をたたんだばかりで運悪く取り逃がしてしまった。

July23, 1983

診療所の裏山で採集を行う。その時、キシタアゲハらしい蝶が1頭飛んでいたが確認できなかった。

July25, 1983

朝から雨が降る。今日はわれわれの休日。一行はチェンライの市内見学することになり、10時頃宿舎を出発。網を持参する。タイ国には寺(wat)が多い。今日は主として寺を回る予定である。最初の寺から次の寺に車で行くと、寺の庭に赤い花、多分ハイビスカスが咲いており、ツマベニチョウが飛来していたので採集した。三角紙に入れ終わるとほとんど同時に1頭のヘレナキシタアゲハが飛来した。

網をつかんで10メートルぐらい走る。犬がほえながら追ってきたが、かまっちはられない。蝶に近付いてさっと網をふる。遂に捕獲!! またキシタアゲハが1頭飛来する。同僚の1人が私の網を持って走る、彼も捕獲した。これはミノスキタアゲハであった。

再び車に乗って次の寺に行く。そこで、同僚はさらにミノスキタアゲハ1頭を採集した。宿舎に帰ると、何とかしてキシタアゲハを採集した寺に再び行きたくないので1人で出かけた。15時30分頃再び1頭のミノスキタアゲハを採集した。

July26, 1983

メーハー村の隣のパラエ村の寺の庭で診療を開始する。午前中、キシタアゲハらしき蝶1頭を目撃。午後、確実に1頭のミノスキタアゲハを確認した。

July30, 1983

チェンライからメーハー村に行く途中に、メチャアン病院がある。その病院の門で車を待っていると、2、3頭のキシタアゲハが飛来した。そのうちに大きな雌1頭が飛来、取り逃がしてしまった。山を越えて部落に入ったが、そこでも雨の中を2、3頭キシタアゲハが飛んでいるのを目撃した。

July31, 1983

7月25日にヘレナキシタアゲハとミノスキタアゲハを採集したチェンライ市内の寺に同僚と2人で9時30分頃行く。雨が降っていたが既にキシタアゲハが2、3頭舞っていた。しかし、取り逃がしてしまう。次々に飛来する。観察すると、数分間に1頭の割でどこからか飛来してくる。あまり速くはないがなかなか採集できない。その理由のひとつとして、どこでもそうであるが、寺の中には10匹以上の犬がおり、蝶を追って走ると吠えながら一斉に飛びかかってくるので、あまり走り回れない。それと蝶は花にもくると、寺の中の花を傷めることはできないので、花にきたとき花と共に網をかぶせられない。

太陽の光を受けて黄金色に輝くキシタアゲハは実にすばらしいが、雨の中を悠々と飛ぶこの蝶の姿も印象的であった。

ここでやっとミノスキタアゲハ1頭捕獲、同僚も同種を1頭捕獲した。しかし、雄ばかりで雌は全然みられなかった。

おわりに

Pinratanaはタイ国のキシタアゲハ属として、次の種を記録している。

1. *Troides helena cerberus* (C.&R.Felder)
2. *T. aeacus praecox* (Fruhstorfer)
3. *T. aeacus aeacus* (C.&R.Felder)
4. *T. aeacus thomsoni* (Bates)
5. *T. amphrysus ruficollis* (Bates)

Okano & Ohkuraならびに岡野によれば、*T. aeacus*は南インドの*T. minos*と同種と考えられるという。両亜種を分ける立場をとるとすれば、2は*T. minos praecox*、3は*T. minos aeacus*、4は*T. minos thomsoni*となる。また、Pinratanaによれば、*T. minos aeacus*はタイ国では北部のメーホンソンとチェンマイから採れているとしているが、標本の図示はない。今回著者が採集した個体は次の種であった。

1. *Troides helena cerberus* (C.&R.Felder)  
1 male Chiang Rai 25 VII 1983
2. *T. minos praecox* (Fruhstorfer)  
2 males Chiang Rai 31 VII 1983

なお、*T. minos thomsoni*および*T. amphrysus ruficollis*はともにタイ国の半島部に分布しており、まれな種とされている。

従って、今回の調査では7月中旬から8月上旬にかけてはタイ国北部には*T. helena cerberus*と*T. minos praecox*が普通に見られたが、*T. minos aeacus*の存在は確認できなかった。

終わりに、種名を同定していただき、*Troides*の分類について御教示をいただいた岩手大学教授岡野磨瑛郎博士に感謝する。

(佐賀の昆虫No.14)

ミノスキタアゲハ



(1983年7月31日 タイ国チェンライ市で採集)

## 香港ビクトリア公園の蝶目撃・撮影記録

1983年11月23日香港で行われた学会の昼休みを利用して、会場のエクセルシアホテルのすぐ近くにある市内のCauseway Bayに面したビクトリア公園に行った。

天候は快晴で、ちょうど九州の5月の終わりのような気候であった。ビクトリア公園は日比谷公園の約2倍の大きさといわれており、香港市民のレクリエーションの場でもある。

公園内の花が咲いている場所を探しているうちに、Omega Clockと書いてある花時計のところに来た。花時計の周辺の花にスジグロカバマダラがいるのを発見した。よくみると、花壇の中に、さらに2、3頭いる。柵があつて中には入れない。仕方がないのでその花壇の上の方が丘になっているので、回り道をして丘の上に登る。そこには低い木々が植えられており、シロオビアゲハが飛んでいた。突然、ツマベニチョウが飛来してきて、頭上高く舞上がって行った。いつも、力強く飛ぶこのシロチョウをみるとつくづく南国にきたなあと思う。遠くの方にセセリチョウの類が2、3頭飛んでいるのを目撃する。

この公園内では採集はできないし、また、当日はカメラも持参していなかった。バードウォッチングに対してバタフライウォッチングという言葉は聞かないが、初めての土地、とくに外国に来て採集はしなくても、飛来する蝶を見るだけでも結構楽しいものである。それでしばらくの時間、この公園にどんな蝶がいるか野外観察することにする。

シロオビアゲハが次々にこの丘の上に飛来する。小型の個体が多いようだ。ときどき、*Catopsilia*属の蝶、多分ウスキチョウの類が飛来するが、ツマベニチョウのように力強く飛ばない。キチョウ属(*Eurema*)の種も2、3頭目撃した。ルリマダラ属(*Emploea*)の蝶も時々飛来した。ミスジチョウ属(*Neptis*)の蝶は1頭だけ目撃したにすぎない。低い木立の上をアゲハが舞い上がる。

多分、オナシアゲハと思われるが、ミカドアゲハのようにみえないこともない。ただ、ミカドアゲハとすれば、もう少し青色を帯びていてもいいのではないかと思ったりする。そのうち、近くに来たのでよくみるとオナシアゲハであった。

こうして時間を過ごしているうちに、2頭のシロオビアゲハが求愛行動をしながらかゆく近づいて来た。

眼の前をゆっくり飛び、手でつかまえられる所まで近寄って来た。なかなか得られないシャッターチャンスであったが、残念なことにそのときカメラを持参していなかった。その後、チャバネセセリ群の一種と思われるセセリチョウ1頭が眼の前の近くの葉に止まった。静かに手を差し出しても逃げようとしないので、示指を脚の下にもってゆくと、蝶が指に乗り移ってきた。しばらくの間、指の上にこのセセリを乗せて楽しんだ。

公園に来てから約1時間以上このように飛来する蝶を見て楽しんだ。帰りに、同公園内で1頭のタテハモドキと1頭のアカホシゴマダラらしい蝶を目撃した。

翌1983年11月24日、フリーの日であったから10時過ぎに再びビクトリア公園に歩いて行った。もちろん、今回は愛用のカメラを持参した。

本日も快晴。九州の初夏のような気候であった。公園に入って、真っ直ぐに例のOmega Clockの花壇の前に行く。赤い花にスジグロカバマダラが来ていた。花壇の中には他に2、3頭の蝶が花に止まっている。花壇の中には入れないので、遠くからこれらの蝶を撮影するか、蝶がこちらに近寄ってくるのを待つ以外はない。今まで、蝶の近接撮影のみ行ってきたが、少し離れた所からの撮影もときにはいいだろうと思って数回シャッターをきる。花壇の中には、ヤマトシジミのようなシジミの類もいたが種類は確認できなかった。

Clockの上方、つまり丘の上に登って蝶を探す。シロオビアゲハがいたが、シャッターチャンスはない。昨日と同じく、ツマベニチョウと*CatoPsilia*属の蝶が時々飛来する。再び、丘を下って、Omega Clockの花壇の入口に来た。鉄柵のすぐそばの花にスジグロカバマダラが来ていたので、そっと近づいて鉄柵の間から数回シャッターをきった。花壇の奥の方をみると、リュウキュウアサギマダラか、*Tirumala*属の蝶が1頭いるではないか。しかし、どうしても撮影するには距離があり過ぎる。近付いてくるのを待つことにする。しばらくねばっていると、数メートルのところに来たのでシャッターをきる。

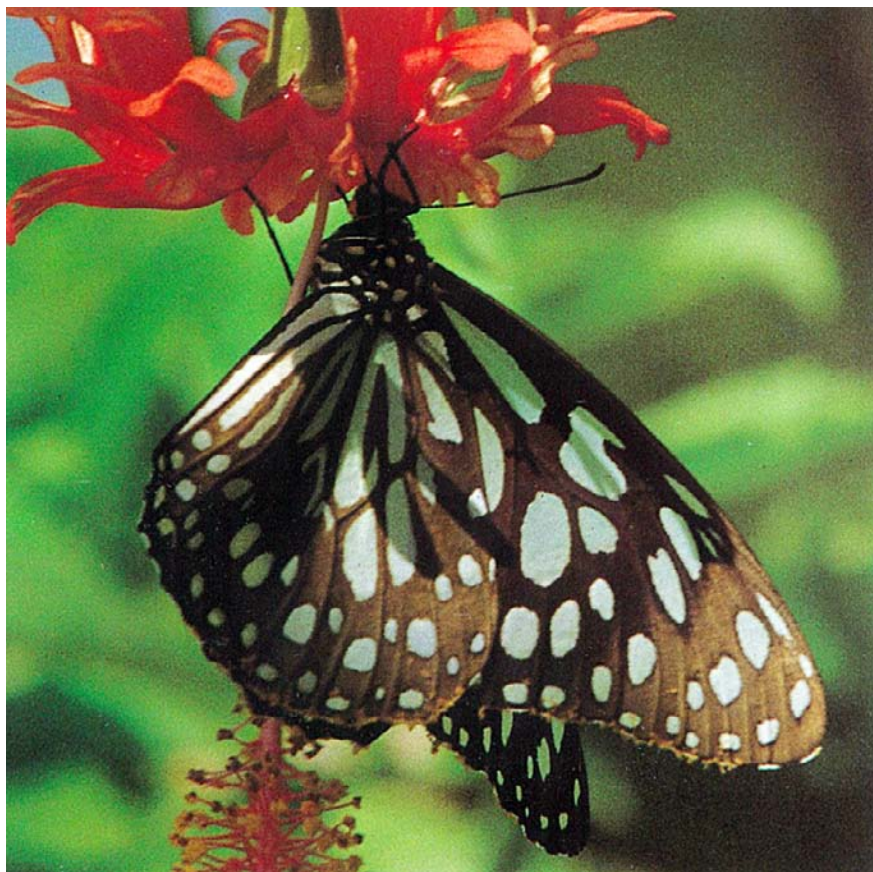
また、花壇の上の丘に登る。*Catopsilia*属の蝶1種が飛来して花に止まったので、近づいて撮影した。そのうち、昨日と同じように、2頭のシロオビアゲハが求愛行動しつつ、ゆっくり飛来し、近くの葉に止まったので急いでシャッターをきる。1回しかシャッターチャンスがなかったが、うまく撮れていることを期待する。ツマベニチョウが葉に止まった。近付いたが、逃げられてしまう。次に、例のリュウキュウアサギマダラか、コモンアサギマダラ属*Tirumala*の1頭が近くに来て止まった。何回もシャッターチャンスがあった。

その後しばらく丘の上にはいたが、12時の大砲の音ドンを聞いて公園を去った。

以上で、この2日間、目撃した蝶の種類は少なかったが、結構楽しい時間を過ごすことができた。

(佐賀の昆虫No.14)

ウスコモンアサギマダラ



(1983年1月24日 撮影)

## マレーシアの蝶

台湾シロチョウ



1975年11月24日撮影

スジグロカバマダラ  
(1975年11月13日撮影)



アオタテハモドキ  
(1975年11月24日撮影)

Nigger  
(1975年11月25日撮影)





Striped Ringlet  
(1975年11月25日撮影)



Banded Demon  
(1975年11月25日撮影)



## グアテマラの蝶



Giant Sulphurの1種  
(1992年4月12日撮影)



セセリチョウノ1種  
(1992年4月12日撮影)

# 採集記



## 与那国島蝶採集記

晴れた日には台湾が見えるという、わが国最西端の島、与那国島。そこには世界最大の蛾といわれるヨナクニサンが棲息し、わが国ではそこにだけにしかいない蝶もいる。八重山諸島のなかでも、石垣島や西表島には行ったことがあるが、与那国島にはまだ足をのびたことがなく、一度、訪問してみたいと前から憧れていた。

ところが今回、はからずも沖縄訪問のチャンスが来た。この機会を逃がすと、与那国島採集の可能性はますますすくなる。なんとかして、この島に渡ろうと計画した。ところが、与那国島に行くには福岡から那覇に飛び、那覇で南西航空に乗り換えて、石垣島までボーイング737で行けるが、石垣島から与那国までは、僅か19席しかないDHC-6の小型機が就航しているだけである。しかも、その座席を沖縄以外で確保することは、非常に難しい。このようなわけはかなり無理して日程を組んだ。

1985年7月3日、16時40分頃、私は初めて与那国島に足跡を印した。福岡を発つ時は雨であったが、ここは焼けつくような真夏の太陽が輝いている。

タクシーで予約してあった祖納部落の民宿に着く。夕方の五時頃とはいえ、まだ、太陽が高い。旅装を解くと明日のために下見でもしておこうと、網とカメラを持ってでかける。

テンダバナと書いてある方向表示に従って少し歩くと、川があり島仲橋という名前の橋を渡る。下を見ると、大きなカニが洲から川岸の方に逃げて行く。こんな大きな陸産のカニは初めてみる。なんだろう？あとで話に聞いたところ、ヤシガニであつたらしい。橋を渡って約50メートル先に、ハイビスカスの花が沢山あるのが見える。ツマベニチョウが2、3頭飛んでいる。

ツマベニチョウ、私が最も好きな蝶のひとつだ。ツマベニチョウを見ると、数々の思い出が蘇る。小学校低学年で理科の授業も始まっていなかった頃、理科室の準備室のドアが開いていたので、何気なく覗くと、真正面に置いてある蝶の標本が目に入った。今思えば、台湾の蝶の標本であつたらしい。見たこともない蝶ばかりがあるなかに、なぜか、ツマベニチョウに強く魅せられた記憶がある。毎日、毎日、蝶の標本を見るために、理科室の前を行ったり来たりした。しかし、そのドアが開いている時は少なかった。

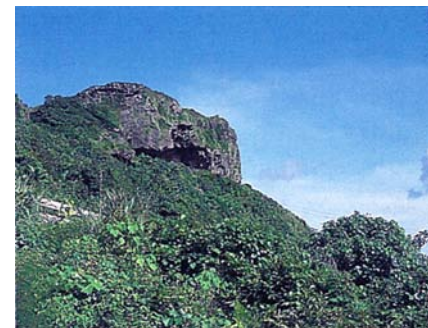
大学に入って夏休みに友人と二人で、鹿児島県大隅半島を訪れた。もちろん、

シロミスジ



(1985年7月4日 与那国島で採集)

テンダバナ



▲与那国島の象徴。その山頂付近にはツマベニチョウ、タイワンシロチョウが多い

その目的はツマベニチョウを採集するためであった。その頃は、今と違って、交通の便は悪く20キロメートルぐらいは歩いて行った。初めて野外で生きたツマベニチョウを見た感激は忘れられない。シロチョウのくせに、こんなに速く飛ぶとは、全く夢想だにしていなかった。その時は蝶の近くで、何回か網を振ったが、とうとう、1頭もとれなかった。その後、奄美大島で初めて本蝶を採集し、フィリピン、タイ国でも採集した。また、熱帯地方に行く度に何回かツマベニチョウに出会った。

ここ、与那国のツマベニチョウは黄色味を帯びている。すぐに近くに飛来してくるので採集しやすい。2、3頭を網に入れ、破損していないものだけ選び、他は逃がしてやる。カラスアゲハ、タテハモドキがいる。キチョウらしきものがある。網にいれる。ふっと目の前をセセリが横切る。さっと網を振って捕獲する。小さいシジミがいる。ハマヤマトシジミだろうか。とにかく、この三種は同定が難しいので、帰ってからゆっくり検討することにする。ふと前の方を見ると、ミスジの類がいる。ここに産するのは、リュウキュウミスジか目的のシロミスジだ。急いで走り寄ろうとすると、なんとということか、後ろから2台車が来た。あっという間に逃げてしまう。大きさからシロミスジのように思われてならなかったが、確認できなかった。残念で仕方がない。明日に期待するほかはない。かなり疲れていたもので、民宿に帰る。

明けて1985年7月4日、7時に起床する。空は晴れ渡り、風も無い。7時30分には出発する。祖納からタクシーでテンダバナ頂上近くまで、車の行ける所まで行く。テンダバナは、与那国景勝地のひとつである。清水が湧きでており、ここから祖納の部落が一望できる。かつてこの島を支配した、女傑サンアイソバの記念碑もある。車を下りて大きな岩を見ながら、清水の湧く場所に通じる熱帯植物の茂った道を進む。

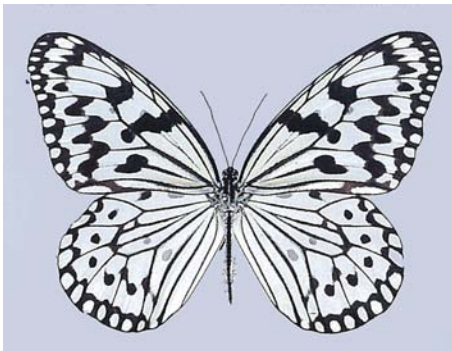
ツマベニチョウはシロチョウでありながら、ものすごく速く飛ぶが、ツマベニチョウよりもさらに速く飛ぶシロチョウが、ツマベニチョウに混じって何頭も飛んでいる。目指す台湾シロチョウであろうか、網を振るがなかなか捕獲できない。そのうち、やっと1頭を網に入れる。やっぱり、台湾シロチョウだ。ツマベニチョウ、台湾シロチョウの乱舞のなかにカタブシリアが来る。また、アオシミアゲハ、ナミアゲハ、ミスジの類も来る。向こうから、大きな白い蝶が来る。急いで近くに行く。オオゴマダラだ。網に入れる。少し破損している。ツマベニチョウを4、5頭網に入れて比較的破損が少ない2、3頭のみ捕獲して他は逃がしてやる。

ずいぶん長い間、そこにいたようであるが、まだ、わずか1時間ぐらいしか経っていない。ツマベニチョウ、台湾シロチョウは多いが、撮影のチャンスはない。採集案内書にしたがって、製糖工場の前に移動することにする。テンダバナと書いてある標識の所から、舗装した広い道路を下って、昨日のハイビスカスの所にくる。やはり、ツマベニチョウが多い。橋を渡って、炎天下を案内書を見ながら、製糖工場の方に歩いてゆく。その場所はテンダバナのちょうど下にあたる。案内書に書いてあるように、崖の上からツマベニチョウ、台湾シロチョウが舞い下りてくる。しばらく、その付近をうろうろする。オオゴマダラが2頭もつれながら飛んでいる。道路のすぐ側に、赤い花が咲いている場所があり、そこに、ツマベニチョウが入れ換わり飛来している。すぐ近くまで接近しても逃げない。急いで、カメラを出して構える。何回かシャッターチャンスがあった。うまく

撮れていることを祈る。

近くの食堂で昼食後、12時30分頃、こんどはタクシーで宇良部岳付近に行く。コンクリート道を登り、左に折れる所から歩いて登る。ミスジの類がいるので網を振る。シロミスジだ。だがかなり、破損している。メスアカムラサキが飛来する。捕獲に失敗。タテハモドキ1頭捕獲する。さらに登ると、与那国林業圃場の入口の前に来る。

オオゴマダラ



(1985年8月20日 沖縄県で採集)

圃場内には、ハイビスカスが植えてあり、ツマベニチョウやクロアゲハが飛んでいるのが見える。圃場には、立ち入り禁止と書いてあるので、そこから引き返す。川に沿って歩き続け、島仲橋の所まで来る。

かなり疲れていたが、シロミスジを採集する目的で再びテンダバナに歩いて登る。標識のある場所まで来たが、蝶の状態は午前中と変わりはない。シロミスジもいない。そこで、また、昨日のハイビスカスの所に下りてきた。そこでは、あいかわらず、ツマベニチョウが多い。イシガケチョウ、アオタテハモドキを目撃する。メスアカムラサキ、ウスキチョウ(ギンモンウスキチョウ)を採集する。碑の立っているところで、シロミスジ1頭を網に入れる。破損していない新鮮な個体だ。やっと、目的を達する。

東・湊氏は、与那国島の蝶として、偶産種、迷蝶を含めて、アゲハチョウ科9種、シロチョウ科14種、マダラチョウ科8種、ジャノメチョウ科1種、タテハチョウ科15種、シジミチョウ科11種、およびセセリチョウ科10種の合計68種をあげている。今回、著者が採集または目撃して確認した種類は、アゲハチョウ科6種、シロチョウ科5種、マダラチョウ科3種、タテハチョウ科7種、シジミチョウ科1種、およびセセリチョウ科1種の計23種であった。

終わりに、今回の採集地についてご教示いただいた白水隆博士に感謝する。

#### 引用文献

1. 小路嘉明: 沖縄・八重山蝶採集ガイド、蝶研出版、1985。
2. 東清二、湊和雄: 琉球の蝶、新星図書出版、1983。  
(北九州の昆虫 第32巻・第2号より 1985年7月発行)

台湾シロチョウ



(1985年7月4日 与那国島で採集)

# 佐賀県神埼郡三瀬村の蝶補遺

西村 謙一

## I.はじめに

著者は、1992年4月1日から1993年6月1日までの期間、佐賀県神埼郡三瀬村の蝶を観察し、その結果を報告した。その後も、さらに機会ある毎に、同地を訪問し、蝶の観察を続けた。前回は、主として三瀬村大字三瀬字岸高で観察・採集を行ったが、1994年度は、三瀬村大字三瀬字山中にある脚気地蔵から、金山に至る谷川に沿った道を、主な観察場所とした。しかし、金山頂上付近、および周辺の自然林は調査していない。今回は、著者の両観察記録に文献例を加えて、三瀬村の蝶相を明らかにしたい。

同村は、北は福岡県に接し、佐賀県富士町、脊振村、大和町に囲まれた、広さ40.74km<sup>2</sup>の山村である(図1)。役場がある場所で海拔約400m、最高標高は金山山頂で海拔967mである。山に囲まれた村は、比較的平坦な盆地状を呈している。山林の約7.5割は杉林で、自然林は少ない。冬はかなり寒く、積雪をみる日がある。人口は約1,800人の過疎地である。主な産業は農業で、次が林業である。

## II.1994年度の採集・目撃記録

1994年4月16日から、同年9月23日までに採集・目撃した種類は43種である(表1)。



図1 佐賀県に於ける三瀬村の位置

観察月日	4月16日	5月21日	6月4日	7月2日	7月8日	7月15日	7月17日	7月21日	7月29日	8月6日	8月27日	9月2日	9月18日	9月23日
蝶の種類														
ダイミョウセセリ			○		○					○				
コチャバネセセリ		○												
ヒメキマダラセセリ			○	○	○									
キマダラセセリ														
ホソバセセリ						○	○		○	○				
オオチャバネセセリ					○	○	○							
チャバネセセリ					○	○				○				○
イチモンジセセリ		○		○	○	○						○		
クロセセリ														○
ジヤコウアゲハ		○	○				○			○				
アオスジアゲハ			○		○	○	○	○	○	○	○	○		○
キアゲハ	○													○
ナミアゲハ	○		○											○
クロアゲハ						○								
オナガアケバ		○								○				
カラスアゲハ								○						
モンキチョウ			○											
キチョウ	○	○	○		○	○		○		○	○	○	○	○
スジグロシロチョウ	○	○	○		○		○	○						
モンシロチョウ	○													○
コツバメ	○													
ベニシジミ	○													○
ヤマトシジミ									○					○
サツマシジミ						○	○	○	○					
ルリシジミ														○
テングチョウ	○				○									
アサギマダラ			○				○	○	○			○	○	
ミドリヒョウモン					○							○	○	
ツマグロヒョウモン					○	○								○
イチモンジチョウ			○				○			○				○
コムシジ			○				○	○	○					○
サカハチチョウ					○	○	○	○		○				
キタテハ														
ルリタテハ				○			○			○				
ヒメアカタテハ														○
アカタテハ		○		○										○
イシガケチョウ			○		○	○	○	○	○			○	○	○
コムラサキ									○					
ヒメウラナミジャノメ		○	○							○	○		○	
クロヒカゲ		○	○	○				○	○	○	○			○
サトキマダラヒカゲ													○	
ヒメジャノメ										○	○		○	○
クロコノマチョウ?							○		○					

### III. これまでに確認された種類

文献例を含めて、これまでに確認された蝶の種類は、70種である(表2)。

### IV. 考察

三瀬村の蝶は、金山を中心に、1969年、修猷館高校生物部「以下、修猷館高と略記」の報告<sup>2)</sup>に始まる。1970年には、佐賀北高校生物部「以下、佐賀北高と略記」が調査を始めて、その結果を報告している。<sup>3,4,5)</sup> 引き続いて、1970年代には、佐賀昆虫同好会「以下、同好会と略記」会員により、積極的に採集・調査が行われるようになった。これらの調査で、三瀬村の蝶は、1970年代の終わりまでに、殆どが明らかになっている。1980年代には、報告は少ない。1993年になって、著者の報告が出た。以下、特記すべき種について、採集・目撃の報告例を述べる。なお、これらの記録は、同一の採集記録を重複して発表されたものも含んでいる。

セセリチョウ科では、佐賀県に記録されている全種12種<sup>6)</sup>が報告されている。ミヤマセセリは、修猷館高(1969)<sup>2)</sup>、牟田(1974)<sup>7)</sup>、牟田ら(1975)<sup>8)</sup>による報告がある。アオバセセリは、修猷館高(1969)<sup>2)</sup>の報告があるが、西村(1993)<sup>1)</sup>の報告まで、採集記録に接しない。当地では、珍しい種といえよう。コチャバネセセリは、修猷館高(1969)<sup>2)</sup>、佐賀北高(1970)<sup>3)</sup>、佐賀北高(1971)<sup>4)</sup>、牟田ら(1975)<sup>8)</sup>、脇部、中島(1975)<sup>9)</sup>

セセリチョウ科(12種) ミヤマセセリ * ダイミョウセセリ アオバセセリ コチャバネセセリ ヒメキマダラセセリ キマダラセセリ ボソバセセリ オオチャバネセセリ ミヤマチャバネセセリ * チャバネセセリ イチモンジセセリ クロセセリ	シロチョウ科(6種) モンキチョウ ツマグロキチョウ * キチョウ スジグロシロチョウ モンシロチョウ ツマキチョウ	マダラチョウ科(1種) アサギマダラ
アゲハチョウ科(10種) ジヤコウアゲハ アオスジアゲハ キアゲハ ナミアゲハ モンキアゲハ * クロアゲハ オナガアゲハ ナガサキアゲハ * カラスアゲハ ミヤマカラスアゲハ *	シジミチョウ科(16種) ムラサキシジミ ムラサキツバメ アカシジミ * ミズイロオナガシジミ * キリシマミドリシジミ * トラフシジミ コツバメ ベニシジミ ゴイシジミ * クロシジミ ウラナミシジミ ヤマトシジミ サツマシジミ ルリシジミ ツバメシジミ ウラギンシジミ	タテハチョウ科(15種) ウラギンシジモウモン * オオウラギンシジモウモン ミドリヒョウモン ウラギンヒョウモン * ツマグロヒョウモン イチモンジチョウ コムシジ サカハチチョウ キタテハ ヒオドリシチョウ * ルリタテハ ヒメアカタテハ アカタテハ イシガケチョウ ゴマダラチョウ
	テングチョウ科(1種) テングチョウ	ジャノメチョウ科(9種) ヒメウラナミジャノメ ウラナミジャノメ * ジャノメチョウ クロヒカゲ ヤマキマダラヒカゲ * サトキマダラヒカゲ ヒメジャノメ コジャノメ * クロコノマチョウ

計 70種 \* 1992~1994年に確認できなかった種類

廣川(1982)<sup>10</sup>、西村(1993)<sup>1</sup>の報告がある。ヒメキマダラセセリは、修猷館高(1969)<sup>2</sup>、山崎(1975)<sup>11</sup>、市場(1977)<sup>12</sup>、廣川(1985)<sup>13</sup>、西村(1993)<sup>1</sup>、西村(1994)<sup>14</sup>、西村(1994)<sup>15</sup>により報告されている。ホソバセセリは、修猷館高(1969)<sup>2</sup>、佐賀北高(1970)<sup>3</sup>、佐賀北高(1971)<sup>4</sup>、市場(1972)<sup>16</sup>、奥山(1973)<sup>17</sup>、牟田ら(1975)<sup>8</sup>、西村(1994)<sup>18</sup>が報告している。これら3種のセセリは、現在、佐賀県全体では、希少な種類となっている。しかし、1992～1993年の著者の観察<sup>1</sup>、ならびに1994年の観察では、3種とも、三瀬村では、まれでないことが明らかになった。オオチャバナセセリは、市場(1972)<sup>16</sup>、市場(1974)<sup>20</sup>、牟田ら(1975)<sup>8</sup>の報告があるが、1992～1993年の著者の観察<sup>1</sup>では、本種を発見できなかった。1994年の観察では、ウツボグサを吸蜜していた本種の複数の個体を採集し<sup>21</sup>、写真撮影も行った(写真4)。佐賀県内では、近年、本種の採集報告がみられない<sup>19</sup>。本種は、三瀬村では少なくないらしく、今後、注目すべき種である。ミヤマチャバナセセリは、牟田(1974)<sup>7</sup>、牟田ら(1975)<sup>8</sup>、脇部、中島(1975)<sup>9</sup>による採集記録があるにすぎない。

アゲハチョウ科としては、モンキアゲハが1960年代の終わりから、1970年代の始めにかけて、修猷館高(1969)<sup>2</sup>、佐賀北高(1970)<sup>3</sup>、佐賀北高(1972)<sup>5</sup>、奥山(1973)<sup>17</sup>により報告されているが、著者は全く目撃したことがない。この蝶は、佐賀県内の平地・山地に多い種であるが、現在、三瀬にみられないのが特記すべきことである。ナガサキアゲハも、修猷館高(1969)<sup>2</sup>、奥山(1973)<sup>17</sup>により報告されているだけである。この蝶も佐賀平野に多い種である。三瀬村では、食樹植物のミカン類の栽培は行われていない。オナガアゲハは、近年、佐賀県内で、非常に少なくなった種である。三瀬村からは、修猷館高(1969)<sup>2</sup>、佐賀北高(1970)<sup>3</sup>、市場(1972)<sup>16</sup>、牟田ら(1975)<sup>8</sup>、山崎(1975)<sup>11</sup>、市場(1977)<sup>12</sup>、廣川(1982)<sup>10</sup>、西村(1993)<sup>1</sup>の報告がある。本種は、現在、三瀬村に普通にみられる蝶である。ミヤマカラスアゲハは、修猷館高(1969)<sup>2</sup>、佐賀北高(1971)<sup>4</sup>、市場(1977)<sup>12</sup>による報告があるだけで、やはり、まれな蝶といえる。

ツマグロキチョウは、修猷館高(1969)<sup>2</sup>、佐賀北高(1972)<sup>4</sup>、牟田ら(1975)<sup>8</sup>により報告されているが、著者は、未だ遭遇していない。本種は、その産地が限局しているのが、キチョウと違う点である。

キリシマミドリシジミは、修猷館高(1969)<sup>2</sup>、佐賀北高(1970)<sup>3</sup>、佐賀北高(1971)<sup>4</sup>、奥山(1972)<sup>22</sup>、市場(1972)<sup>16</sup>、小林(1972)<sup>23</sup>、奥山(1973)<sup>17</sup>、牟田ら(1975)<sup>8</sup>によって報告されており、金山は佐賀県内の本種の産地として知られてきた。現在の状態が知りたいところである。トラフシジミは、佐賀北高(1970)<sup>3</sup>、奥山(1973)<sup>17</sup>、森(1973)<sup>24</sup>、牟田(1974)<sup>7</sup>、山崎(1975)<sup>11</sup>、牟田ら(1975)<sup>8</sup>によって報告さ

れている。現在でも、本種は三瀬村には普通の種である。コツバメは、修猷館高(1969)<sup>2</sup>、山崎(1975)<sup>11</sup>、牟田ら(1975)<sup>8</sup>、吉田ら(1976)<sup>25</sup>、西村(1994)<sup>26</sup>より報告されている。本種は、佐賀県内では、かつては何処にでもみられる普通種であったが、近年、個体数が著しく減少している種である。クロシジミは、修猷館高(1969)<sup>2</sup>、佐賀北高(1970)<sup>3</sup>、佐賀北高(1971)<sup>4</sup>、市場(1972)<sup>16</sup>、牟田ら(1975)<sup>8</sup>、古賀(1976)<sup>27</sup>、廣川(1982)<sup>10</sup>、西村(1993)<sup>1</sup>による報告がある。とくに、古賀は同村合瀬林道で、1975年に4♀、1976年に4♀の異常型を採集している。著者は、1992年に正常型を1頭を採集したに過ぎない<sup>1</sup>。サツマシジミは、修猷館高(1969)<sup>2</sup>、佐賀北高(1970)<sup>3</sup>、市場(1975)<sup>12</sup>、牟田ら(1975)<sup>8</sup>が報告している。著者は前回の観察では、全く本種に遭遇しなかったが、1994年には、同村山中の脚気地蔵付近で多数目撃し、採集した。同地では普通種と思われる。ミズイロオナガシジミは、奥山(1973)<sup>17</sup>、奥山(1973)<sup>28</sup>、牟田ら(1975)<sup>8</sup>、同好会(1976)<sup>29</sup>によって報告されている。アカシジミは、坂井(1974)<sup>30</sup>、市場(1974)<sup>20</sup>、牟田ら(1975)<sup>8</sup>、同好会(1976)<sup>29</sup>、廣川(1982)<sup>10</sup>、廣川(1985)<sup>13</sup>により採集報告されている。ゴイシジミは、奥山(1973)<sup>17</sup>、市場(1974)<sup>20</sup>、牟田ら(1975)<sup>8</sup>により報告されているが、著者は全く目撃していない。

テングチョウは、現在では、当地でよく見かける蝶であるが、西村(1983)<sup>1</sup>の報告を除いて、牟田(1975)<sup>31</sup>の報告しか発見できなかった。

アサギマダラは、当地では、普通種である。これまでの報告としては、修猷館高(1969)<sup>2</sup>、佐賀北高(1970)<sup>3</sup>、佐賀北高(1971)<sup>4</sup>、佐賀北高(1972)<sup>5</sup>、牟田ら(1975)<sup>8</sup>、市場(1975)<sup>12</sup>、西村(1983)<sup>1</sup>がある。

タテハチョウ科では、ウラギンスジヒョウモンの記録は、修猷館高(1969)<sup>2</sup>、佐賀北高(1971)<sup>3</sup>、市場(1972)<sup>16</sup>、市場(1974)<sup>20</sup>、牟田ら(1975)<sup>8</sup>による報告がある。ウラギンヒョウモンは、修猷館高(1969)<sup>2</sup>、市場(1972)<sup>16</sup>、市場(1974)<sup>20</sup>、牟田ら(1975)<sup>8</sup>によって報告されている。オオウラギンスジヒョウモンは、奥山(1973)<sup>17</sup>、市場(1974)<sup>20</sup>、森(1974)<sup>32</sup>、牟田ら(1975)<sup>8</sup>、西村(1983)<sup>1</sup>による報告がある。これら3種のヒョウモン類は、佐賀県では、近年報告が少なく、著しく減少している。とくに、オオウラギンスジヒョウモンは、非常にまれな蝶とされてきた。ところが、著者は1991年に2頭を採集した<sup>1</sup>。また、それらしき個体を数頭以上目撃しており、本種は、当地では、まれでないと思われされる。これは特筆すべきことである。ヒオドシチョウは、修猷館高(1969)<sup>2</sup>、市場(1977)<sup>12</sup>、廣川(1982)<sup>10</sup>、廣川(1985)<sup>13</sup>による報告があるが、最近は見かけない。イシガケチョウは、当地では、現在、ごく普通の蝶であるが、西村(1993)<sup>1</sup>の報告を除くと、市場(1972)<sup>16</sup>の目撃記録しか見だせなかった。本種は、各地で増加しつつある種であり、当地でも、最近、増加したことが考えられる。サカハチ

チョウも、当地では、ごく普通種である。これまでの報告としては、修猷館高(1969)<sup>2)</sup>、佐賀北高(1970)<sup>3)</sup>、佐賀北高(1971)<sup>4)</sup>、佐賀北高(1972)<sup>5)</sup>、江島ら(1973)<sup>33)</sup>、牟田(1974)<sup>7)</sup>、牟田ら(1975)<sup>8)</sup>、西村(1993)<sup>1)</sup>がある。

コジャノメは、佐賀県内各地に分布していたが、現在では、産地が限局している。本種の三瀬村における記録としては、修猷館高(1969)<sup>2)</sup>、佐賀北高(1970)<sup>3)</sup>、佐賀北高(1971)<sup>4)</sup>、佐賀北高(1972)<sup>5)</sup>があるが、1960年代の終わりから、1970年代の初期である。現在では、他地方と同様に、当地では絶滅した可能性がある。ジャノメチョウは、現在では、まれである。西村(1993)<sup>1)</sup>の他に、修猷館高(1969)<sup>2)</sup>、佐賀北高(1970)<sup>3)</sup>、佐賀北高(1971)<sup>4)</sup>、佐賀北高(1972)<sup>5)</sup>、市場(1972)<sup>16)</sup>、牟田ら(1975)<sup>8)</sup>の報告がある。ヤマキマダラヒカゲは、市場、奥山(1973)<sup>34)</sup>によって佐賀県から最初に発見された。その後、市場(1975)<sup>12)</sup>、山崎(1975)<sup>11)</sup>、牟田ら(1975)<sup>8)</sup>の報告がある。クロノマチョウは、これまでの報告にはみあたらないようである。著者は、1994年度に2回目撃したが(表1)、2回とも採り逃がしてしまった。本種は、*Melanitis sp.*に間違いはなかった。採集してないので、断言は出来ないが、ウスイロノマチョウの可能性は少なく、まず、クロノマチョウであると思われる。今後の検討を要する。著者の観察と、1969～1970年代の文献例と比較すると、次の結果を得る。近年、佐賀県内で減少している種は、全般的にみれば、三瀬村でも減少、あるいは絶滅したのではないかとと言える。しかし、セセリチョウ科では、ミヤマセセリとミヤマチャバネセセリを除いて、他は、現在でも分布している。現在、平地～低山地に普通なモンキアゲハとナガサキアゲハは見られなかった。これまでに文献的に記録の少ないイシガケチョウとテングチョウは、普通にみられる。自然林が多い金山とその付近は、著者の観察外の場所であったので、キシマミドリシジミ、ミズイロオナガシジミが、現在も棲息しているか、どうか不明である。今後の調査が望まれる。

有益なご助言を頂き、文献の収集にご援助を得た、市場利哉氏に感謝する。

## 文献

1. 西村謙一: 佐賀県神埼郡三瀬村の蝶. 佐賀の昆虫, No27, 487-490, 1993.
2. 修猷館高校生物部: 金山の昆虫相. 生物の世界, 26:9-39, 1969.
3. 佐賀北高等学校生物部昆虫班: 金山・井手野一帯の生物相(1)昆虫. 生物記 No8:21-58, 1970.
4. 佐賀北高等学校生物部昆虫班: 金山・井手野一帯の生物相研究(2)昆虫目録. 生物記 No9:9-52, 1971.
5. 佐賀北高等学校生物部昆虫班: 金山・井手野一帯の生物相研究(その3)昆虫目録. 生物記 No10:7-55, 1972.
6. 溝上誠司: 佐賀県産蝶類文献目録(1924-1991). 佐賀昆虫同好会, 1994.
7. 牟田澄雄: 第15回例会の報告(5月12日金山). 佐賀むし通信, No18, 77, 1974.
8. 牟田澄雄, 坂井文雄, 野村周平: 金山の蝶類. 佐賀の昆虫, No4:123-126, 1975.
9. 脇野彦彦, 中島裕文: 佐賀県の蝶 その1. 佐賀の生物, No3:18-22, 1975.
10. 廣川典範: 佐賀県における蝶の採集記録. 佐賀の昆虫, No13, 314-318, 1982.
11. 山崎浩: 第21回例会の報告(5月18日金山). 佐賀むし通信, No26, 113, 1975.
12. 市場利哉: 第33回例会の報告(6月5日金山). 佐賀むし通信, No44, 191, 1977.
13. 廣川典範: 佐賀県における蝶の採集記録III. 佐賀の昆虫, No16, 25-29, 1985.
14. 西村謙一: 佐賀県三瀬村でヒメキマダラセセリを採集. 佐賀むし通信, No156, 752, 1994.
15. 西村謙一: 三瀬村で再びヒメキマダラセセリを目撃. 佐賀むし通信, No157, 757, 1994.
16. 市場利哉: 第3回例会の報告(7月23日金山). 佐賀むし通信, No4, 13, 1972.
17. 奥山輝彦: 第10回例会の報告(7月22日金山). 佐賀むし通信, No12, 51, 1973.
18. 西村謙一: 神埼郡三瀬村でホソバセセリを採集. 佐賀むし通信, No157, 760, 1994.
19. 溝上誠司, 高橋篤美: 佐賀県蝶類覚書VI. 佐賀の昆虫, No27, 435-482, 1993.
20. 市場利哉: 第17回例会の報告(9月29日金山). 佐賀むし通信, No21, 91, 1974.
21. 西村謙一: 神埼郡三瀬村でオオチャバネセセリを採集. 佐賀むし通信, No157, 757, 1994.
22. 奥山輝彦: 金山で採集したキシマミドリシジミ. 佐賀むし通信, No5, 20, 1972.
23. 小林通昭: 金山(脊振山地)で採集したキシマミドリシジミ. 佐賀むし通信, No2, 7, 1972.
24. 森展一: トラフシジミの第二化を採集. 佐賀むし通信, No12, 54, 1973.
25. 吉田喜美明, 江口純正, 古川雅通, 野村周平: 佐賀県産蝶類分布・発生資料(1). 佐賀の昆虫, No6:179-193, 1976.
26. 西村謙一: 神埼郡三瀬村でコツバメを採集. 佐賀むし通信, No155, 748, 1994.
27. 古賀善十: クロシジミ異常型を三瀬村で採集. 佐賀の昆虫, No.6, 30, 1976.
28. 奥山輝彦: 金山でミズイロオナガシジミを採集. 佐賀むし通信, No.12, 53, 1973.
29. 佐賀昆虫同好会: 佐賀県の特徴あるチョウ・トンボ. 1976.
30. 坂井文雄: 脊振山系金山のアカンジミ. 佐賀むし通信, No.19, 83, 1974.
31. 牟田澄雄: ゼフィルス2種の新産地. 佐賀の昆虫, No.5:5, 1975.
32. 森展一: オオウラギンスジヒョウモンの採集記録. 佐賀むし通信, No.15, 68, 1974.
33. 江島正郎, 市場利哉, 吉田喜美明: 佐賀県蝶類覚書. 佐賀の昆虫, No.1:11-24, 1973.
34. 市場利哉, 奥山輝彦: 佐賀県内で採集されたヤマキマダラヒカゲ. 佐賀むし通信, No.9, 40, 1973.



# 隨筆集



私は、幽霊、祟り、靈魂、背後霊、宇宙から飛来するUFOなど、そういったものの存在は一切信じない。しかし、これらの話は物凄く好きである。その理由は面白いからである。これらの怪奇現象と言われてきたものの一つに、人魂がある。人魂は、鬼火、狐火、火の玉などと呼ばれ、怪奇現象の一つとして、広く馴染みがある。子供の頃に、人魂の話に、震え上がった思い出を持つ人は多いであろう。私は、怪奇現象は別として、暗夜の中に発光するなものかが存在するだろうと考えて、一度は、人魂を見たいものだと思っていた。

高校2年生の時だったと思う。正確な時期は覚えていないが、春から夏にかけての、生温かい、雨がシトシトと降る夜で、全く、怪談にぴったりの天候であった。私は遅くまで受験勉強をしていた。疲れたので雨戸を開けて外をみた。すると、約10m離れた小さい流れの上あたりで、くるみの大きさ程度の青白い光が、2、3個ぼうーと見えるではないか。しかも、それらの燐光は少しずつ移動している。やや、はっきり見えたり消えたりもする。ああ、これが世に言う人魂かと思い、暫く様子を見ていた。個々の燐光は消えたり見えたりするが、全部の燐光が消え去ることはない。よし、人魂を捕まえてやろうと思って、私は、懐中電灯、捕虫網、ピンセット、瓶をもって、下駄を履いて雨の中を厭わず、ゆっくり燐光に近づいていった。

近づくとつれて、燐光がはっきりする。移動する燐光があることは間違いない。私は、捕虫網を構えて進んだ。すぐ、傍にくると、燐光は流れの石垣の上から出て、盛んに移動しているのが分かった。何かがいるらしい。私は、さっと懐中電灯を照らしてみた。なんと、そこに見たのは、ゲンジボタルの幼虫であった、石垣の所に、幼虫が沢山いて動き回っている。"幽霊の正体みたり、枯れ尾花"ではないが、燐光の正体はゲンジボタルの幼虫であった。

ホタルの幼虫を人魂に間違うなんて、どうかしていると思うかもしれないが、これは事実である。私は、今度は逆に流れから離れて行った。数m離れると個々の幼虫の姿は見えないし、数匹の幼虫の光が一緒になったり離れたりする。光だけが水面に映って幼虫の移動とともに光が移動し、雨の効果もあって、まさに、見事に動いている人魂の姿を演じていた。他の人々に見せる機会が無くて、非常に残念であったが、自然が演出した見事な舞台装置であった。

火の玉や人魂は昔から人々の間に語り継がれ、長い間の謎であったが、近年、早稲田大学の夫槻義彦教授によって科学的に研究された。同教授は実験を基にして、火の玉の正体は大気電気の異常な乱れによって発生するプラズマ発光体によ

るものであると主張されている。プラズマとは、電気を帯びた粒子、すなわち原子や分子が壊れた状態を指す。人魂は火の玉と同じものだそうである。この研究は真に素晴らしいものであると思う。

人魂の大部分は、プラズマ発光体で説明できるものであろうが、しかし、これまで目撃された、所謂人魂といわれる暗夜に光るものの中には、生物の発光によるものが含まれている可能性がある、私の経験は、そのような例の一つであると言えよう。

## 胡蝶の夢

古代においては、夢は神秘的な現象で将来を予言するものと考えられ、いわゆる夢占いが重んじられていた。夢についての画期的な科学研究を発表したのは、1900年に、「夢解釈」を発表したフロイドとされている。また、ユングは夢は人が精神活動を行ってゆく上で、重要な役割を担っているとした<sup>1)</sup>。人はいつ夢を見るのであろうか？

この問題は、アセリンスキーとクライトマンによるREM睡眠(逆説睡眠)発見により解明された<sup>2)</sup>。REM睡眠とは、頻発する急速な眼球運動、低振幅速波の脳波、筋肉の筋緊張の低下が出現する睡眠の時期である。REM睡眠は、約90分おきに、一夜に4～5回出現し、合計は約2時間である。人は、このREM睡眠の時期に夢をみるのが、明らかになった。ついでに述べると、昔から怪奇現象のひとつとされてきた、いわゆる"金縛り"もREM睡眠の事実で解明されている。まあ、夢についての固苦しい話は、これくらいにして本題に戻ろう。

虫屋なら、誰でも虫の夢をみるのが自然である。どんな夢をみるのか、虫屋の方達に聞いてみれば、多分、面白い話が集められるであろう。私も少年時代から、ずっと現在まで蝶の夢をみる。その夢を辿ってみれば、一定の傾向があるようである。私の夢に出てくる蝶はゼフィルス(ミドリシジミの類)と、現実には存在しない蝶が多い。夢の中では、沢山のゼフィルスが私の身の回りを飛び回る。その土地は、九州であったり東北であったりする。少年の日から、ゼフィルスに憧れ続けたから、このような夢を見るのであろう。私とゼフィルスとの最初の出会いは、九州の九重山であったが、その時は木々を叩いてゼフィルスを採集するのが主であった。沢山のゼフィルスが身の回りを飛び回るのは、岩手県に行ってはじめて経験した。その時の強い印象が、夢となって私を楽しませてくれるのであろう。

次に夢の中にしばしば出現するのが、枯れ葉に似た蝶である。毎回、同じではないが、コノハチョウやコノマチョウのような形の蝶ではない。羽を開いて止まる蛾のような蝶である。春の日に、桜の木にくる普通の蝶を追っているようなとき、どこからか枯れ葉に似た蝶がさっと飛来してくるのがいつものパターンである。採集できたり、逃げられたりするが、私は夢の中で、初めての出会いに感激し、一生懸命種類は何だろうかと思って目が覚める。勿論、このような蝶は地球上に存在しない。蝶採集を始めて初期の頃、アカタテハやキタテハを追っているときに、どこからか赤みを帯びたヒョウモンが飛来し、逃げられた経験が何回もある。今思えば、それはメスグロヒョウモンの雄ではなかったかと考えられる。この蝶が、私の夢の中で、枯れ葉と化

して出現するのであろうか。夢の中で、美しい花にくる蝶を追っているとき、ふと目撃したり採集するのが迷蝶である。それも、南方系のタテハか、シロチョウのことが多い。その殆どが現実に存在しない形態、色彩の蝶である。しかも、1頭ではなく沢山目撃し、何だ、この迷蝶はここには沢山いるのだ、とその発見を喜んでる中に目が覚める。これは、蝶屋が誰でも持つ迷蝶の憧れが潜在意識となり、夢で出てくるのだろう。しかし、なぜ現実に存在しない蝶ばかりが出て来るのか、その点は解釈出来ない。

最初に述べたように、夢はREM睡眠時にみるので、REM睡眠の存在がはっきりしているイヌやネコも、当然夢をみると考えられる。それでは蝶はどうか。蝶の脳からも脳波を記録した研究があると、同級生の前山隆太郎博士が教えてくれた。蝶にREM睡眠があるか、どうかは知らないが、もし、それがあれば蝶も夢をみることになる。それは、まさに胡蝶の夢である。その場合夢に出てくるものは、食草、花、異性の蝶などであろうと思われる。

1) 渥美義賢、融 道男：夢について。中外医薬、46:299-303、1993。

2) Aserinsky E, Kleitman N: Regularly occurring periods of eye motility and concomitant phenomena during sleep. Science, 118:273274, 1953.

## 昆虫博士

1993年12月28日の佐賀新聞に、"頼もしい小6昆虫博士"という文が掲載された。佐賀市で迷蝶を採集した2人の少年のことが書いてあった。私は、この文の見出しで、"昆虫博士"という言葉に、非常な懐かしさを感じたが、"むし屋"なら誰でも同じ思いをしたらと思うが微笑んだ。幼き頃からの"むし屋"であれば、この"昆虫博士"というあだ名を頂戴しなかった者はいないといっているだろう。それまで自分の家族のことや、学校で習ったことしか知らなかった少年は、"むし"を通して、全く別の広い世界をかいま見ることになる。そして、どれもが大きな驚きと、もっと知りたいという好奇心をかきたてる。明けても暮れても、"むし"の虜となった昆虫少年は、学校の授業中でも、"むし"のことばかり考えるようになる。

この年代では、未だ異性に全く興味をもたない。授業など、そっちのけで早く採集に行きたくなる。昆虫少年の中には、"むし"については、専門家も驚くほどの知識をもつようになる者もいる。"むし"に興味を持たない大多数の少年達からみれば、"むしけら"に興味をもつ少年は奇異に映る。"むし"のことは何でも知っている少年という印象から昆虫少年は、"昆虫博士"というあだ名をもらう羽目になる。

私は少年の日に、"昆虫博士"というものが本当にあると思っていた。そして、"昆虫博士"になりたいと憧れていた。一般の人の中には、"昆虫(学)博士"という博士号が存在すると思っている人もあるらしい。現実には、私の友人は、"昆虫学博士"〇〇先生という手紙をもらったことがあり、その手紙を私に見せてくれた。欧米と違って、わが国には"博士"の種類が非常に多い。日本語大辞典によれば、"博士"の種類は19あると書いてある。その中には、"昆虫(学)博士"はない。わが国で昆虫の研究で、博士号を得るならば、それは、理学博士、農学博士、医学博士のいずれかが普通であろう。欧米でも、Doctor of Entomology(昆虫学博士)という学位はないと思う。

欧米で、昆虫学の研究で学位を取った人なら、Doctor of Philosophy(Ph.D.)か、Doctor of Science(D.S.)であろう。Ph.D.は、アメリカ合衆国では、広い範囲の学問領域の研究の学位で、人文科学の研究でも、自然科学の研究でも与えられるものである。Ph.D.が哲学博士と訳されることがあるが、これは明らかに間違いである。この場合のPhilosophyの意味は、人文科学領域の"哲学"を意味するのではなく、"高等な学問"という意味である。したがって、Ph.D.の適切な日本語訳がない。強いて訳せば、"博士"とでもせねばならない。Ph.D.の学位を持っている人が、専門領域の研究を明示する時には、Ph.D.in chemistryや、Ph.D. in English literatureなどと言われることもあるので、"昆虫(学)博士"は、Ph.D. in Entomologyと言って

良いように思うが、その点確認していない。Doctor of Science(D.S.)は、日本の理学博士と同じである。"昆虫(学)博士"がないと知った後の、私の憧れは理学博士となった。昆虫や動物の図鑑に、その著者の肩書として、理学博士と書いてあるのが、昆虫少年である私の夢をかきたてた。私は医学博士の学位を得たが、今でも理学博士に憧れている。しかし今日まで、それを得る機会はまったくない。おそらく、私は生涯、理学博士に憧れを抱き続けるであろう。

追:1991年以降は、括弧付きで博士の名称を後ろに付記する表記になり、博士(医学)のように表記するよう定められた。括弧内には多くの専攻分野が認められているがその中に博士(応用昆虫学)がある。(2015年1月30日)

## ハワイの蝶

戦後の日本人にとって、ハワイは憧れの的であった。岡春夫の"憧れのハワイ航路"や、米国の歌、"アロハ・オエ"、"さんご礁のかなたに"などを聞くにつけ、この太平洋の楽園への夢をかきたてられたものである。しかし、現実はきびしく、戦後20年たっても、未だ日本人には海外渡航は容易に許可されない状態であった。1964年になって幸なことに、ハワイ大学から私に留学の招待状が来た。その頃、私は肺吸虫(肺ジストマ)が脳を侵す脳肺吸虫症の研究をしていたので、他の寄生虫による脳疾患にも興味をもっていた。そこに登場したのが、南太平洋の寄生虫によって起こる髄膜脳炎であった。その疾患について、ハワイの研究者と手紙のやりとりが実を結んだわけである。私は妻と未だ1歳にならない長女をつれて、羽田空港から旅立った。私達が乗ったのが、この航空路に就航した最初のジェット機であった。乗客は少なく殆どがアメリカ人であった。ホノルルに到着すると、まず、その爽やかな気候に感激した。熱帯であるのに、涼しい風が吹いていて汗が出ない。空港には、ハワイ大学の研究室の教授秘書と、テクニシャンが迎えにきてくれて私達にレイを掛けてくれた。

ホノルルで最初に出会った蝶は、オオカバマダラであった。市内のどこに行っても、庭の花に、この蝶がゆうゆうと飛んでいる。オオカバマダラは米大陸では、北米から南米まで分布し、太平洋地域では、ハワイからオーストラリアまでも分布する蝶である。この蝶は明らかに大西洋を渡って英国に達し、ヨーロッパの迷蝶としても知られている。わが国では、東京都、小笠原島、奄美大島、沖縄島、石垣島などから迷蝶として採集されている。また、かつては台湾に分布していた。食餌植物はガガイモ科のトウワタ(milkweeds)である。トウワタには毒があり、それを食べて成長したオオカバマダラも、体内に毒をもっており鳥から捕食されるのを防ぐことが実験的に証明されている。この蝶は米国の北部から、はるばる大陸を横断してメキシコの特定の場所で、集団で越冬することで有名である。私は米国訪問の度に、この蝶に出会う。実に、オオカバマダラは米国の蝶といえる。ホノルルでは年中この蝶を見たように思う。

ハワイの蝶相は貧弱である。モンシロチョウは、どこでも見られる。これらの貧弱な蝶相の中でハワイの特産種が2種ある。それは、カメハメハと呼ばれるアカタテハに近い種類と、シジミチョウ科のブラックバーンズ・ブルーイット(ハワイアン・ブルー)である。カメハメハとは、ハワイのカメハメハ大王に因んだ名である。オアフ島では、やはり珍しい蝶である。私は現地の人に案内してもらって、山の中でやっと1頭目撃して採集することが出来た。それ以外は目撃していない。ブラックバーンズ・ブルーイットは、ある日、ホノルル郊外の山にドライブに行った時、多分タンタルス峠という名であ

ったと思うが、そこで多数の個体を目撃採集した。本種は小さいシジミチョウで、裏面の上下羽が一面に緑色の非常に美しい蝶である。この蝶は、タッパンルリシジミにもっとも近い系統であるという。これらの2種は今でも私の標本箱に納まっている。

私はハワイといえば、まず、この2種の蝶を思い浮かべる。今はどうなっているであろうかと気にしていたとき、写真家の青山潤三氏が、両種の生態写真を発表された。同氏は、カメハメハの成虫のみでなく、卵、幼虫、蛹も撮影されている。これらの2種が健在であることが分かって、ほっとしている私である。

1)青山潤三:渡来経路の謎秘めて、ハワイ固有の2種のチョウーカメハメハバタフライとハワイアンブルー。科学朝日、12:9-11、1994

## 感銘を受けた本

小学校4、5年生の頃だったと思う。植村という人が書いた「お庭の動物研究」という小学生向けの本があった。著者は、たしか学校の先生と書いてあったように記憶する。この本は父親が小学生の子供に、各家庭の庭に見られる動物のことを分かりやすく、対話形式で書かれた本であった。まず、モンシロチョウが黄色い葉の花に多く来るのか、白い大根の花に多くくるのか、それを観察しようというのが印象に残っている。この本は、それまで、むしの標本集めばかりに熱中していた私に、自然の観察ということを教えてくれた最初の本であった。蛙では、ガマは非常に珍しい動物なので、まず年寄りにガマ目撃の経験を聞かなければならないと書いてあったことを記憶している。後年熊本県に住むようになって、初めてガマをみた時の感激の大きかったのは、この本のせいである。

蜘蛛では、縁の下にトタテグモがいると書かれてあり、その生態を詳しく記されていた。私は近所の家々を回ってトタテグモを探したが、全く発見出来なかった。今日まで、未だ実際にはトタテグモは見たことがないが、その巣を見たように錯覚するのは、この本の印象があまりにも強かったからであろう。

第2次世界大戦が始まって、日本が南方諸国に進出してから、「南の動物」という本が出版された。著者は当時の新進気鋭の動物学者の高島春雄、古川晴男の両氏であった。この本は厚さ3センチ以上の黒い表紙の本であった。南方には蝶だけではなく、珍しい動物が沢山いることは知っていたが、具体的には、どのような動物がいるかを紹介した本は未だ、ほとんど無かった。著者らは、未だ南方に行ったことはないと書いてあったが、この本は、われわれの好奇心を満たすのに、誂え向きの本であった。哺乳類のことは覚えていないが、極楽鳥、毒蛇、昆虫、ムカデ、ヤスデ、サソリのことなど記憶にある。その本の中に出てくる新しい和名で、今でも覚えているのはアレキサンダーアゲハ(トリバナアゲハの事)、ヒノモトサソリ、マンネンヒツヤスデなどである。

長い間憧れ続けた南の国の蝶とは、1965年に私が米国留学からの帰りに、立ち寄ったフィリピンで初めて出会うことができた。そのとき真先に頭に浮かんだのが、この本の記憶であった。また、その後タイ国を訪問したとき、バンコック毒蛇研究所を訪問したのも、その研究所のことを、この本で知っていたからである。

この本は、私にとっては未知の多くの珍しい動物のことを知るだけでも、非常に興味深い本であった。しかし、もっとも興味をそそられたのは、この本では、進化論が紹介されていたことであった。ダーウィンの進化論のことは、おぼろげながら知って

いたが、この本によって、初めて進化論を私なりに理解したとあってよい。さらに忘れ得ないのは動物地理学上のウォーレス線のことである。英国の生物学者Alfred Russel Wallace (1823-1913)は、インドネシアのバリ島では、東洋区の動物が分布するが、その島の東に横たわるロンボク島以東の小スンダ列島には、オーストラリア区に属する動物が分布することを知った。そして、バリ島とロンボク島間のロンボク海峡に、動物分布の境界線があることを、1860年に提唱したという意味のことが書いてあった。

この本には、その当時の敵国の学者の業績を遠慮がちに紹介してあったように思う。しかし、その業績は少年の私にも理解できるものであった。私は今でも、観光案内の「バリ島」のポスターを見ると、まず、観光やバリ島の美女よりも、ウォーレス線が頭に浮かぶ。敵国の学者の研究のことを読んでみると、初めて日本人学者が登場する。ここで拍手喝采というところである。ウォーレス線の延長線は、フィリピンと台湾との間を通ると思われていたのが、鹿野雄雄博士により、台湾の紅頭嶼と台湾本島の間を通ることが明らかになり、これが鹿野線と名付けられたという文章に深く感激したことを覚えている。紅頭嶼(蘭嶼)は、コウトウキシタアゲハやコウトウマダラなどの産地として、むし屋には広く知られている台湾本島の南端から、約80キロ東方の太平洋上の小さい島である。私は紅頭嶼に憧れ、一度は同地を訪問したいと思っているが、今日まで未だ、その機会がない。

ウォーレス線の他に、新ウォーレス線、ブラキストン線、渡瀬線などの動物地理学上の線の存在を知ったのは、高校生になってからである。これらの動物分布の境界線が、現在どのように考えられているか不勉強のため分からないが、ウォーレス線のことには忘れない。以上、少年時代に感銘を受けた2冊の本をのべたが、勿論、この他に昆虫図鑑や動物図鑑、医学専門書などの素晴らしい本に出会った。また、小説や他の文学書などの中にも、精神の糧になるような本があった。しかし、今日まで、ずっと思い出に残る本を挙げよと言われれば、私は躊躇することなく上記の2冊の本を選ぶ。

## 昆虫採集道具

捕虫網、毒壺、三角缶、展翅板……。これらの昆虫採集用の道具は、昆虫少年に、虫の世界の魅力に劣らない興味を起こさせる。これらの道具は、どれ一つをとってみても、今までに全く接したことのないものばかりである。これらは昆虫少年にとって、なんと素晴らしい玩具であろうか。少年は、これらの道具を扱うことによって、理科の世界に足を踏み入れてゆく。小学校4年生の時であったと思う。春頃、学校全体で昆虫採集用具の購入申込を受け付けた。私は胸をときめかして捕虫網や展翅板などを注文した。校内放送で、理科担任が放送する度に、採集用具が到着したかと期待したが、いつも裏切られた。それらが送られてきたのは夏になってからであった。

私の場合は、虫の不思議な世界に誘いこまれると同時に、化学の世界の虜にもなった。それは、おそらく昆虫採集用のアルコール、ナフタリンなどの化学物質の興味からであったと思う。父が女学校の同僚からもらってくれた無機化学の教科書を読んで元素の存在や化学反応のことをしった。そうなってくると、化学実験道具が欲しい。私は小遣いをためて数本の試験管を買った。試験管に石灰石の破片を入れて、塩酸を注いで、石が溶けるのを楽しんだりした。その頃は、家庭の便所の消毒用に濃塩酸があったので、それを手に入れるのは容易であった。私は小遣いを蓄めては、フラスコ、コルベンなどを少しずつ買ったものである。

理科の器械屋なんて、そう多くあるものではない。ライバルの昆虫少年が、新型の捕虫網をみせびらかしたので、私は欲しくて仕方がない。どこで、その捕虫網が売ってあるかと聞いても彼は教えようとしなない。ある日、私は彼の機嫌をとって、やっと、その店を教えてもらった。私は、未だ一度も訪ねたことがない高知市内の外れの町に歩いていった。自宅から、かなり遠かったことを覚えている。彼が教えてくれた町の番地を訪ね当てたが、そこは普通の住宅街で店など全くない。私は彼を大嘘つきと罵ったが、嘘ではないと彼は言う。私は2、3回、その場所を訪ねると、なんと普通の住宅の座敷に、理科器械、とくに昆虫採集用具が所狭しと置かれてあるのが眼についた。それまで、座敷の戸が閉まっていたので分からなかったのである。その家は普通の店でなく理科器械の卸屋だった。このようなこともあって、私は高知市内の理科器械店を全部知るようになった。当時は、たしか理科器械を販売する店は、3、4軒であったと思う。

私がむし屋を自称しているのを人が知ると、「さぞ多くの標本をお持ちでしょう」と問われるのが普通である。ところが期待に反して、私は殆ど標本を持っていない。私のドイツ箱の蝶の標本は僅か数箱に過ぎない。むし屋の会合で芸術的とも言える

立派な昆虫標本を見せられる度に、自分をふりかえって、いつも情けない思いをする。実際、私はむしの採集、標本作りに非常に消極的である。私が標本作りが苦手ということが標本が少ない主な理由であろう。しかし、私が昆虫少年であった時は違っていた。私の宝石箱ともいえる標本箱には、カラスアゲハ、アサギマダラ、イシガケチョウなどがさん然と輝いていた。私は、最近これでは駄目だと思うようになり、積極的に昆虫を採集し、標本作りを試みるようになった。そうなってくると、先ず必要なのは標本箱である。熊本市で昆虫採集用具を戦争中から販売していたのは、有名な老舗のN店である。早速N店を訪ねると、昆虫採集用具は扱ってないという。仕方がないので熊本のむし屋さんに聞くと、1軒だけ昆虫採集用具を扱っていた店があったが、最近、どこかに移転したらしく消息が分からないという。佐賀市には、勿論そのような店は無いので、皆我が国の代表的な店から購入しているという。こうなってくると、昆虫採集用具を購入するのは、50年前と変わらない、というより状況がさらに悪化しているのではないか。かつては、小、中学校で夏休みの宿題として昆虫採集があり、子供達は昆虫採集を通じて自然に限りない親しみを抱くことができた。現在は子供達の昆虫採集がないので、用具の販売は商売として成り立たないのであろう。そうすると採集用具を得ることが、珍蝶を得るのと同じように困難な時代になったといえる。

## 日本産蝶の命名者のプロフィール

試みに、「原色昆虫大図鑑1(蝶蛾編)、再版、北隆館、1962)に掲載された211種の蝶の学名の命名者を調べてみた。

多い順から記すと、Butler 38、Fruhstorefer 26、Matsumura 23、Linné 14、Ménétrières 9、Shirôzu 6、C.et R.Felder 6となる。

日本の蝶の学名をみると、Butlerの名がしばしば出てくるのは、皆経験するところであろう。今回の検討でも、やはりButlerがトップである。私は、前からButlerに関心をもっていた。私の知る限りでは、彼の生涯については、日本に紹介されていない。ただ、江崎悌三著作集<sup>1)</sup>によると、Arthur G.Butler(1844-1925)は、大英博物館で、Fenton、その他の日本在住の採集家や、旅行家によって送られた材料を記載していた。1876年、石川千代松が採集したミスジチョウの標本が1頭しかなく、Fentonが、石川千代松が写生した図だけをButlerに送ったところ、Butlerは、その図をもとに、*Neptis excellens*と命名記載した。この*excellens*は、図が優れてとの意味である。

これが、後で実物を見ずに、図だけで新種を記載したと問題になった種である。また明治期に来朝した英国のPryerは、Butlerは博物館の分類学者であると、鋭い批判を加えている。

このようなことがあっても、Butlerは大英博物館の優れた分類学者であったことは間違いなさであろう。ただ、彼が山野に蝶を求めて歩くnaturalistであったかどうかは、知りたいところである。

前回、日本の蝶の命名者を多い順に挙げた。これらの人々の活動は、例外を除いて、わが国の文明開化期の明治に行われた。故江崎悌三博士は、明治の初期に活躍した来朝外人に興味をもたれ、優れた記事を多く書いておられる。これらは、1930年代の初期から書いておられるが、1984年発行の「江崎悌三著作集<sup>1)</sup>」にまとめられてある。この本は、われわれ"むし屋"にとって、非常に興味ある本であるので、未だ読んでない方には、ぜひ、一読をお勧めしたい。以下に述べる「日本産蝶の命名者のプロフィール」の大部分は、この本からの抜粋であることを、お断りしておく。

### Hans Fruhstorfer

台湾の蝶の亜種名の過半が彼の命名による。1866年3月7日に、オーストリアの国境近くのBayernのPassauに生まれた。小学校を終えたのみで、仕立屋から商人になった。欧州その他の語学、歴史、神話学に精通し、顕微鏡の使用を習得した。18歳から南米、インド、ジャバを旅行し、昆虫の調査を行った。晩年はBerlinからGenevalに移り長い間住んだ。この間に収集した材料で多くの論文を発表した。1899年(明治32年)日本に来て、約2か月滞在して各地を採集旅行した。長崎、壱岐

まで足を延ばしている。1922年4月9日に、55歳でミュンヘンで癌で死亡。彼の命名した新種は5000近い。

### 松村 松年

明治28年(1895年)に、札幌農学校を卒業した。翌、29年助教授となって、同校に初めて昆虫学が独立した。明治31年、「日本昆虫学」1巻を著す。明治32年から35年までヨーロッパに留学。日本昆虫分類学の基礎を確立した。その功績は不滅である。

### Edouard Ménétrières

1802年10月2日Paris生まれ、最初は医学を学んだが、博物学に転じた。1821年ブラジル探險に参加し、5年間ブラジルに滞在して大きな業績を挙げた。St.Petersburg科学院の博物館の創設に参加。1861年4月10日死亡。アムール地域の鱗翅類の大著がある。

### C.et R.Felder

Cajetan FelderとRudolf Felderのことで、兄弟でなくて親子である。父のCajetan Felderは、Wienの市長であった。蝶・蛾の大収集家であったが、公務で多忙なため、自分では研究してはいなかった。Rudolfは、彼のひとり息子で法科大学を卒業したが、幼時から好きであった蝶・蛾の研究に没頭した。彼はSieboldの日本からの材料も研究した。1859年に最初の論文を発表したが、その時は弱冠17歳の少年であった。1866年、24歳で肺の疾患(肺結核?)にかかり、1871年3月29日僅か28歳で死亡した。父Cajetanは、80歳の高齢に達した。

### Takashi Shirôzu

記すまでもなく、九州大学名誉教授白水隆博士である。これまで述べた人達が、明治の初め、欧米の昆虫学の導入期に活躍したのに対して、白水隆博士は、わが国の蝶学が世界のトップレベルになった時期に活躍されていることに、大きな意義がある。同博士は、近代分類学の立場から、これまでの分類を検討されて、わが国の蝶を命名記載された。

蝶の学名の命名者をみると、わが国の近代国家への発展期には、主として、外国人学者によってわが国の蝶が研究された。その中に、松村松年のように彼らに伍して引けをとらない日本人の研究者がいて、光り輝くものを残している。これは、まさに、わが国の自然科学発展の歴史の縮図そのものであるといえよう。

1)上野益三、長谷川仁、小西正泰編集:江崎悌三著作集、第1、2、3巻、思索社、1984



# 「虫というもの」

無視できない虫の話  
大塚 葉 報 No.605,2005



## 1. 「虫」と人間

「虫」は、人間社会に良い地位を与えられていない。"虫けらのような奴だ"、"弱虫"、"虫がつく"などといわれる。さらに、"虫が好かない"、"虫の居所が悪い"、"虫酸が走る"などと、人間の感情を「虫」に責任転化させたりする。しかし、こんなに多くの言葉があるからには、裏を返せば「虫」と人間の関係が深いことを示している。このように、「虫」との関係は一般的には良くはないが、悪いばかりでもない。特に、自然を愛する日本人は「虫」との良い関係を築いてきた。まず、日本の国を"秋津島"と呼んだ。秋津とは、トンボの意味である。田畑の上を悠々と飛ぶトンボは、古代の人びとにとっても身近な「虫」であったであろう。また、日本固有の和歌や俳句にも「虫」が取り入れられてきた。特に、秋に鳴く虫はものの哀れを感じさせる。

庭草にむら雨降りて蟋蟀の  
鳴く声聞けば秋づきにけり

万葉集

いとどしく虫の音しげき浅茅生に  
露置き添ふる雲の上人

源氏物語

霧ふかき好摩の原の  
駐車場の朝の虫こそすずろなりけれ

啄木

閑さや岩にしみ入る蟬の声

蕉芭

やれ打つな蠅が手をする足をする

一茶

## 2. 「虫」と呼ばれる動物たち

「虫」と呼ばれる動物は、原生動物から節足動物まで広い範囲にわたる。エビ、カニは日本語では「虫」とは呼ばれないが、漢字で書けば蝦、蟹となるので、やはり中国では虫の一種とされているのであろう。このように、多くの動物を包含する呼び名は、英語やドイツ語には見当たらない。

あまりにも「虫」と呼ばれる動物が多いが、「足のある虫」と「足のない虫」に大別することができる。「足のある虫」とは、昆虫や他の節足動物である。昆虫の特徴は6本足である。「足のない虫」も多いが、身近な「虫」は、何といても、カイチュウや蟻虫な

どの人体寄生虫であろう。

「虫」というと、通常セミやカブトムシ程度の大きさを思い浮かべることが多いが、なんと長さ10mを超えるサナダムシがおり(図1)、昆虫の蛾の一種ヨナクニサンでは、前翅の付け根から先端までの長さ(前翅長)が11cm以上もある。蝶ではニューギニア産のトリバナアゲハが世界最大の蝶で、雌の前翅長が120mm前後が普通であるが、135mmを超える個体も知られている。1884年頃、この蝶がヨーロッパ人に最初に発見されたときには、銃撃して捕らえられたとの話は有名である。

小さい虫としては、原生動物がいる。ゾウリムシや夜光虫などは目を近づけてよく見ると、動いているのでその存在を肉眼でかろうじて見ることができるが、原生動物は、通常顕微鏡下でなければ見えない。また、昆虫では昆虫の卵に寄生する寄生蜂一種は、体長わずか0.14mmであるという。

## 3. 進化の"鬼っ子"

1909年8月30日、米国スミソニアン研究所の研究者が、カナダ側のロッキー山脈のバージェス山で、それまで知られていなかった甲殻類の動物のような化石を発見した。その発見者の名は、チャールス・D・ウォルコット(Charles Doolittle Walcott)。彼は有名な地質学者、古生物学者であった。1910~1913年まで、さらに1917年にも、彼は精力的に化石採集を行った。彼は化石群が含まれる地層をバージェス頁岩と命名した。この命名は、不朽の名を残すことになる。

彼は、それまで全く知られていなかった何十種もの動物の化石を、このバージェス頁岩から発見した。バージェス頁岩は、今から5億7000万年前の古生代カンブリア期のものである。バージェス頁岩からの未知の動物化石群の発見は、世紀の大発見であったが、ウォルコットは、これらの化石のきわめて重大な意義には気付かなかった。彼はこれらの新発見の動物たちを、現在の地球上の動物のどれかの祖先として位置づけたのである。

ケンブリッジ大学教授のウィティントン<sup>けつがん</sup>は、2人の研究者とともに、スミソニアン研究所に保管してあったバージェス頁岩から採集した標本を徹底的に検討した。そして、驚くべき大発見をした。現在の動物分類体系は、界(動物界)、門、綱、目、科、種となっている。彼らは、これらの標本の動物には、現在の節足動物門には属さない節足動物、さらに、現在のいかなる門にも属さない動物をも確認した。カナダの科学イ

ラストレーターであるマリアン・コリンズは、これらのバージェス頁岩動物の見事な復元図を発表している<sup>1)</sup>。オパビニア(opabinia)は類縁不明の節足動物で、体長約80mm、5個の眼を持っている。また、ハルキゲニア(hallucigenia)は体長約25mm、いずれの門にも属さない。体の上下前後もわからない奇妙な動物である。これらのバージェス頁岩の動物たちの生きている姿は、インターネットで想像図として見ることができる。カンブリア期には、多くの生物が出現し、カンブリアン・エクスペロージョンとして知られている。その代表的な節足動物は三葉虫である(図2)。三葉虫は、現在の虫に似ているが、バージェス頁岩の動物はまことに奇妙な形のものが多い。これらの動物は、まさに生物進化の鬼っ子といえよう。

#### 4. 女性と「虫」

一般的に言って、女性は「虫」がお嫌いなようである。もちろん、女性の優れた昆虫研究者はおられるが、それは少数派である。小さい男の子は車や電車など動くものに興味を持ち、女の子は花や人形に興味を持つものである。これは、世界共通のことであるという。虫を追っ掛け採集するのは男の子で、そのような行動をする女の子には出会ったことがない。私は、昆虫少年に対する昆虫少女というものはないと思っていた。ところが、梅谷献二氏は、中国雲南省の大理市で、飼育するためにカイコを買う少女を昆虫少女として紹介しておられる<sup>2)</sup>。

有名な女性昆虫研究者は、12～14世紀に書かれた『堤中納言物語』に出てくる「虫愛ずる姫君」である。この女性は身分の高い貴族の姫君で、人の嫌がる毛虫を飼って、それがどんな風に変化するかを観察していた。姫君は、世間では蝶よ花よと外見の美しさのみ愛するが、本来の姿を追求することこそが大切だという信念を持っていた。約千年もの昔の姫君が、現代の自然科学の研究心を持っていたとは、大きな驚きである。

昆虫少年が虫を追うのは、動くものが好きなことに加えて、ハンターとしての性質があると考えられる。雲南の昆虫少女や「虫愛ずる姫君」は、女性本来の養育する本能から育てるという点に興味を持ち、ハンターの昆虫少年と違うと思うが、どうであろうか。

#### 参考文献

- 1)『このすばらしき生きものたち—カンブリア大爆発から人工生命の世紀へ—』(荒俣宏編、角川書店、1992)
- 2)『虫を食べる文化誌』(梅谷献二著、創森社、2004)

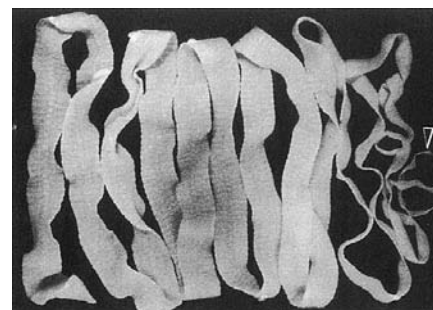


図1 広節裂頭条虫  
出典:『図説人畜共通寄生虫症』  
(宮崎一郎、藤幸治:九州大学出版会、1988無、415頁)



図2 三葉虫  
出典:『化石』  
(東海化石研究会編、北隆館発行、1995年、60頁)

# 人を食う「虫」

無視できない虫の話  
大塚薬報 No.606,2005

"人は、「虫」に食い尽くされることがある"という話をすると、"人間様がたかが「虫けら」なんかには食べ尽くされるなんて、そんなことがあるものか"と言う人があるかもしれない。しかし、これは文字通り、「人を食った話」である。

## 1.死体を食う「虫」

人や動物が死亡すると、死体は死後変化をたどってゆく。死体が山野に放置されると、ハエの活動する季節の昼間では、遅くとも30分以内に死体にハエが集まるといふ。しかし、雨の日はハエはほとんど集まらない。主なハエは、キンバエ属である。死体が新鮮な時より、多少腐敗が進行したときの方がハエは多く集まる。ハエは、人の死体では、眼裂、鼻口、肛門などの粘膜に近い部分や傷口に産卵する。卵は、10～24時間で孵化して幼虫(蛆虫)になる。孵化した蛆虫は、消化酵素を分泌し、死体組織を化学的に分解し、それを食べる。こうして、死体は驚くほど早く食われてしまう。成人死体が10日間で骨ばかりになった例もあるという<sup>1)</sup>。

その他の死体に集まる「虫」としては、トビケラ、ハサミムシ、シテムシ、ゴキブリ、アリなどが知られている。これらの「虫」は、死体を蚕食するが、蛆虫のように死体を崩壊してしまうようなことはない。シテムシ(図1)は、死出虫と書くのだろう。わが国から30数種が知られている。多くの種類は、腐敗動物質に集まる性質がある。私は、昆虫少年の時に直径10cm程度の広口の瓶の中に、腐りかけた動物の肉片を入れて、瓶の口を地面すれすれに埋めておくと、翌朝、瓶の中に数匹のシテムシが入っていたのを採集した思い出がある。

水中にある死体は、エビ、カニ、魚類によって食われることはよく知られていた。法医学者の錫谷徹博士らは、スナホリムシモドキ(ニセスナホリムシ)*Cirolana harfordi japonica* Thielemann(図2)というスナホリムシ科に属する海産の節足動物が、一夜で成人の海中死体を骨化することを南紀の海岸で発見した。○○モドキというのは、○○に似て非なるものという意味で、スナホリムシに似て異なるものの意である。ただ、スナホリムシ科(*Cirolanidae*)という科はあるが、スナホリムシという和名がある種はないようである。スナホリムシモドキの体の色は、灰白色から灰褐色。沿岸の岩礁の石の下に多く、時に群生する。昼間は水底の石の下に潜み、夜間は水中を泳ぎ、無数に死体に集まり、食べる。日本各地から、韓国マレーシアにかけて分布する。同博士らは、52歳の女性の入水自殺死体が十数時間で顔面・手が完

全に骨化した例を報告している<sup>1)</sup>。とにかく、短時間に死体を食い尽くす恐ろしい「虫」である。

本種とよく似た種に、ホヤスナホリムシ(*C. avida* Nunomura)という種がいる。本種は、魚網にかかった魚などを食害するので知られている。また、ヒメスナホリムシ(*Excirrolama chiltoni* Richardson)というヒメスナホリムシ属の「虫」がいる。ヒメ○○というのは、○○に似ているが、より小さい、より可憐、より色彩が豊かななどの種に付けられる和名である。アカタテハに対するヒメアカタテハ、モンシロチョウなどに対するヒメシロチョウ、ハブに対するヒメハブなど、動物図鑑を開けば数多くヒメの名が付く動物があることがわかる。ヒメスナホリムシは、細かい砂の海岸の波打ち際にいる体長10mm程度の白っぽい「虫」である。波が打ち寄せてくる時、砂の中から出てきて海水浴客のお尻を噛み、波が引く前に砂の中に潜り込むエッチな虫として知られている。

## 2.生きた人を食う虫

人の死体を食う「虫」も驚きであるが、さらに生きている人を食う虫がいる。

1904年(明治37)の春、東京在住の33歳女性が、鼠径ヘルニアの治療のために、近藤次繁教授が主催する東京大学外科を訪れた。左鼠径ヘルニアの部に一種の寄生虫が認められた。この女性の体の全身に腫れ物ができており、その腫れ物の中に「虫」が入っていた。これらの腫れ物には、2年前初めて気づいたという。左大腿部の切開によって生きている寄生虫が得られた。この「虫」は、東京大学動物学教室 飯島魁教授によって詳しく調べられ、新種であることが判明し、新種として、*Plerocercoides prolifer*と命名された。この発見された「虫」は幼虫であった。親虫が未知の幼虫でも新種の命名はできる規則になっている。

同様の寄生虫による感染の2例目は、48歳の米国フロリダの漁師であった。この症例は、米国の寄生虫学者スタイルスによって1908年報告された。彼は、学名を*Sparganum proliferum*と改めるように提案した。以後、この学名が用いられるようになった。なお、和名は「がしよくちゆう芽殖孤虫」(図3)

第3例目は、36歳男子で、東京大学青山外科の症例である。この症例は、最初の解剖例となった。第4、5例目の症例は、京都大学から報告された。5例目の症例は、解剖例として第2例目となった。第6例目は、九州天草の24歳女性で

ある。この女性は、生来健康で、医療を受けたことがなかった。1915年9月15日、18歳の時、悪寒、戦慄、強度の頭痛をきたした。3日後、左大腿部に、痛みがある限局した瘤に気付いた。それ以後、左大腿部は、びまん性に腫れてきた。20歳の時には、次々に瘤が出現して、ちょっと引っ搔くと瘤は破れて、膿、血液に混じって生きている糸状の「虫」がたくさん出てきた。このようなわけで、彼女は九州大学外科に入院した。入院後は、下腹部と大腿部の肥厚した皮膚を取り除く形成手術が数回行われた。手術時には、生きている条虫の幼虫が確認された。彼女の病状は回復せず、体温上昇し、嘔吐も起こり肺炎症状が出現し死亡した。死後、解剖が行われ、田代規矩雄により報告された。解剖所見では、顔面、頭部を除く全身の皮下組織(図4)、胸腹腔内臓器、頭蓋内にも「虫」が見られた。要するに、全身「虫」だらけであったわけである。「虫」は、「芽殖孤虫」と診断された。

「芽殖孤虫」は、大きさも形も変異に富んでいるのが特徴で、長さは1mm～10cmを超えるものまである<sup>2)</sup>。芽を出して、人の体の中で薄い袋に包まれて、どんどん増殖してゆく。歯があつて人体を噛みちぎるわけではないが、人体組織から養分を取っているのだから、結果として人を食って生きていることになる。そして、人は全身「虫」だらけになって死亡してしまう。この「虫」は、条虫の幼虫であることは確かであるが、親虫は全く判明していない。「芽殖孤虫」はウイルス感染などによる「マンソン孤虫」の異常型ではないか、などの説があるが、確証はなく憶測に過ぎない。

発育史も不明である。上記の「芽殖孤虫症」の症例からは、発育史の解明の手掛かりは何も得られていない。

「芽殖孤虫症」は過去の疾患だと思われていたが、1990年に東京から1例報告されたのは驚きである。現在までに、日本6例、台湾3例、パラグアイ1例、ベネズエラ1例、米国1例、計12例の報告がある。「芽殖孤虫症」は、このようにきわめてまれな疾患であるが、その病原体は、人の体の中で増殖し人を死亡させてしまう恐ろしい「虫」である。

参考文献

- 1) 錫谷徹=『法医診断学』第2版(南江堂、1985)
- 2) 宮崎一郎・藤幸吉:『図説人畜寄生虫病』(九州大学出版会、1988)  
(原著論文は省略した)



図1ヒラタシテムシ  
出典:『原色日本昆虫図鑑(上)一甲虫編一』  
(中根猛彦監修、保育社発行、2002年)

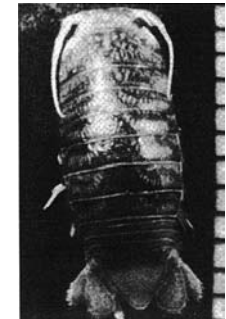


図2スナホリムシモドキ  
出典:『死の法医学』  
(錫谷徹=北海道大学図書刊行会、1983年)

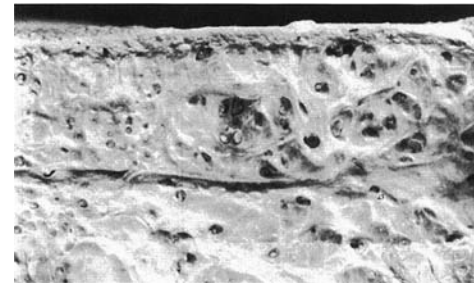


図3芽殖孤虫  
出典:『月刊臨床と研究別冊』  
(宮崎一郎=大道学館出版部、1961年、第38巻第3号)

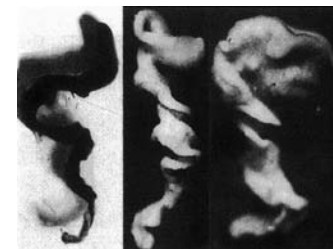


図4芽殖孤虫症患者の皮下組織薄い膜に包まれた孤虫が100個近くみられる。  
出典:『月刊臨床と研究別冊』  
(宮崎一郎=大道学館出版部、1961年、第38巻第3号)

# 人が食う「虫」

無視できない虫の話  
大塚薬報 No.607,2005

## 1.人と食べ物

前回は、人を食う恐ろしい「虫」のはなしを書いたが、今回は、逆に人が「虫」を食うはなしを記そう。このことは、食文化として興味ある問題である。

世界各地で、人びとは古くから「虫」を食材としてきた。その食材には、珍味や嗜好品として、あるいは貴重な蛋白源として食べられているものがあると同時に、吐き気を催す「いかもの食い」としかいいようのないものがある。

「虫」の中でも、ゴキブリは人に最も嫌われる昆虫である。不潔な「虫」という先入観もあるが、見た感じが嫌がられる最大の原因であろう。あるアメリカ人の軍人が捕虜となり、食べ物が与えられないので、これでは餓死すると思い、そこら辺にいるゴキブリを食べて生き延びたという話を讀んだことがある。これは飢餓の危機の場合であって、食文化とは関係がない。また、イギリスの船員は船の中でゴキブリを捕らえ、スープにしたり、生で食べていたりしていた話がある<sup>1)</sup>。この例は、ゴキブリは日常食べられているのではなく、好奇心から始まったのだろうか。

好奇心からの試食は、まれにグルメになる可能性がまったくないわけではないが、このように「いかもの食い」になることが多い。多くの人には「いかもの食い」といわれる料理や、食べたことがない奇妙な料理を目の前にすると、視覚や嗅覚の情報が脳に到達し、嫌だと思ふ情報の伝達は延髄の嘔吐中枢を刺激し、嘔吐を起こさせる。しかし、料理を見て、食べてみたいとか吐き気がするなどの感覚は、個人の幼小時からの食習慣や、その地域の食文化によるところがきわめて大である。ある人にとって嘔吐を催すものでも、他の人には結構グルメであったりする。もし、エビやカニの姿のままの料理を見せられると、われわれは食欲を感じるが、全くこれらの動物を見たことがない人がいるならば、その人は嘔吐を起こすことが十分考えられる。かつて英国のチャールズ皇太子が、世界を旅してどうしても食べられなかったものが、「羊の目玉」と「日本のイカの生け作り」であったという記事を新聞で讀んだことがある。われわれにとっては、「羊の目玉」は別として、「イカの生け作り」は最高のおいしい料理であることは、今さらいうまでもない。

また、食物に虫が混入した場合がわからずに食べてしまうことがある。ときどき食品の中に「虫」が入っていたと問題になることがある。

## 2.食料になる「虫」

わが国では、記録によると江戸時代からイナゴ、スズメバチ類の幼虫が食べられていたらしい。これらの食材は、食糧難のためばかりでなく、好んで食べられたのは明らかである。イナゴは、第二次世界大戦の頃には、田んぼの道を歩くと無数の個体に出会えた。わが国には数種類のイナゴがいるが、主な種類はコバネイナゴ(*Oxya yezoensis*)であるという<sup>2)</sup>。イナゴは、採集もきわめて容易であったこともあって、煎ったり甘露煮や佃煮にしたりして、盛んに食べられた。特に、東北地方や中部地方で多く食用にされてきた。今でも店頭で売られている。イナゴを食べるのは、日本ばかりではないらしい。イナゴ類とその親類筋のバッタ類は、世界的に食用昆虫の花形といえるという。

イナゴとバッタは同じ種類と思われたり、混同されたりするが、異なる種類である。イナゴには、大群となって移動する性質はない。大発生して大群で移動して、すべての植物を食い尽くすのは、トノサマバッタか、近縁のサバクトビバッタである。したがって、イナゴに漢字の「蝗」を当てるのは、間違いということになる。「蝗」という字は、「飛蝗」という言葉からもバッタを指すものである。バッタの大量襲来は、聖書の『出エジプト記』に出てくる。また、パール・バックの『大地』にも描写されているので、よく知られている。わが国では1880～1884年頃(明治13～17)、北海道の南半分の農作物を全滅させたとの記録があり、また、トノサマバッタが1888年(明治21)、1898年(明治31)に千葉県草原に大発生したという記録が残されている。

バッタの集団は、普段おとなしく、体の色は緑色で、孤独相といわれる生活をしている。しかし、干ばつで食べ物が減ると、餌を求めて幼虫が集まり、体から出る物質で相手の体を刺激して体は黒くなり、凶暴な群生相のバッタに変身し、群をなして飛行するようになる。そして、着地した場所では、あらゆる植物を食い尽くす。

最近、バッタの変身に関する化学物質や、その作用機序に関する研究も盛んに行われているが、いまだ大群の飛行を制止するまでには至っていないという。バッタも、イナゴと同じく食用になる。ある話によると、アフリカの恒常的に飢餓の地域では、食材としてのバッタの飛来を、むしろ歓迎して待っているともいわれている。

ハチの子は、イナゴやバッタ類と同じく食用昆虫として広く知られている。ハチの中のスズメバチ食は、古代中国周の帝王食であったという<sup>2)</sup>。わが国でも、スズメバチの類、特にクロスズメバチ(図1)は、よく食べられている。このハチのサナギや幼虫

を大和煮や甘露煮、その他の料理にして食べる。これらのサナギや幼虫は巣から得るのであるが、土中の巣を探すのに独特の技術があるという<sup>2)</sup>。クロスズメバチのほか、オオスズメバチ、ミツバチのサナギなども食用とされる。ハチの子を食べる習慣は、わが国だけでなく、中国や東南アジアに広くみられる。

イナゴやバッタ、ハチ類のほかに、食用にされる「虫」は、ゲンゴロウ、ガムシ、タガメ(図2)などの水棲昆虫、カミキリムシ、カイコなどの蛾の幼虫、セミ、アリなど多種にわたる。

### 3. 「虫」食の経験

第二次世界大戦の最中、私が国民学校(小学校)生であった時、担任教師が陸エビだといってイナゴの食用を盛んに勧めた。あまりに勧めるので、イナゴを捕まえてきてフライパンで煎ってもらった。見た目ではグロテスクで食欲をそそるものではなく、恐る恐るひとつまみだけ口に入れた。なるほど、ちょっとエビに似た味がした。しかし、それ以上は食べなかった。

貴重な経験をしたのは、1983年夏、タイを訪問した時であった。ある日、北部地方の某病院を訪ねた折、仕事は終わったが同僚がまだ病院のスタッフと話し込んでいたので、病院の門前の大衆食堂に入って同僚を待つことにした。先客の男が一人いて、酒を飲みながら何か食べていた。聞くとタガメだという。タガメは、長さ数センチの平たい大型の水棲昆虫で、かつては日本全国の水田に普通にみられた。現在では、わが国ではまずみられない。この男が食べていたのは、その分布からタガメの近縁種タイワタガメであろう。私がいろいろと尋ねると、「まあ、食べてみてくれ」と言って従業員が2皿持ってきてくれた。1皿は酢漬け、他の1皿は油漬けという。私はほんの少し、酢漬けの方に箸をつけた。口に入れるとうまい。ちょうど海のシャコの味とそっくりである。油漬けも食べてみた。これもうまい。その後、タイの市場に行った時、生きたタガメがたくさん売られているのを見た。そこで初めて、タガメはタイ国では非常に賞味される食べ物であることを知ったのである。



#### 参考文献

- 1) 梅谷献二:『虫を食べる文化誌』(創森社、2004)
- 2) 松浦誠:『スズメバチを食べる—昆虫食文化を訪ねて』(北海道大学図書刊行会、2002)

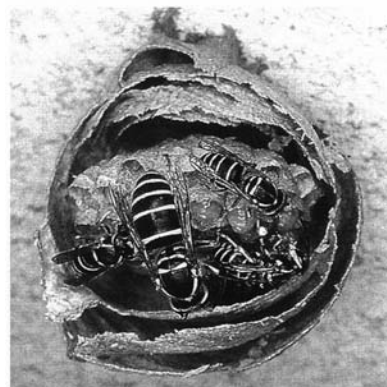


図1:クロスズメバチ  
出典『スズメバチを食べる—昆虫食文化を訪ねて』  
(松浦誠=北海道大学図書刊行会、2002)



図2:タガメ  
出典『原色日本昆虫図鑑』(下)(保育社、1983)

# 日本はよいか、住みよいか

無視できない虫の話  
大塚薬報 No.608,2005

## 1.異国からの魚

第二次世界大戦中、九州地方の池やクリークに長さ4、50cmの大きな魚が見られるようになった。非常に活発な魚で、ときには水から飛び出て畦の上をぴょんぴょん飛び跳ねている姿もめずらしくなかった。その形も蛇のようで、見て気持ちのよいものではなかった。土地の人は、この魚を雷魚、またはタイワンドジョウと呼んでいた。

実は、この雷魚といわれる魚には、ライヒイ(*Ophicephalus tadianus*)と、カムルチー (*O. argus*)の2種類がある(図1)。ライヒイは1897年頃台湾から輸入され、カムルチーは1923年頃中国や朝鮮を経て日本に入ってきたとされている。しかし、カムルチーは繁殖力が強く、ほぼ全国に分布を広げたが、ライヒイは関西地方にしか分布することができなかった。九州地方で見られたのはカムルチーである。

その後、異国から来た雷魚の子孫は、わが国の至るところの池やクリークに繁殖し、普通に見られる淡水魚となった。第二次世界大戦の末期から戦後にかけて、日本は食糧難に苦しんだ。そこで、雷魚はたくさん身近に住んでおり、捕まえやすく、大きい魚なので、食料として目を付けられた。通常、肉を"湯びき"にして、酢味噌を付けて食べるが、癖のない淡泊な味である。その肉は臭みもなく、"刺し身"にして食べる人も出てきた。

## 2.奇病の発生

第二次世界大戦の終わり頃から、福岡県、佐賀県の有明海に面した地方で、皮膚に瘤が出来て、それが体のあちこちを動き回る奇病が見られるようになった。やがて、この奇病はそれまでに中国で"長江浮腫"、"北京公使館病"などと呼ばれていた原因不明の病気と同じではないかということになった。

1945年、上海で発生した一患者から虫が摘出され、わが国の研究者によってその虫がタイなどに多い有棘顎口虫(*Gnathostoma spinigerum*・図2)と確定されて、この奇病の原因が明らかになった。

上海での奇病の原因発見により、わが国でも九州地方の奇病の追究が行われ、やはり奇病は有棘顎口虫寄生による有棘顎口虫症(*gnathomiasis spinigera*)であることが判明した。疫学的研究も活発に実施され、佐賀県の雷魚から有棘顎口虫

第3期幼虫寄生が証明され、やがてイヌやネコが終宿主であることも判明した。そのうち、体に瘤が出来てあちこち瘤が移動する有棘顎口虫症が、雷魚を刺し身にして食べた結果であることも人びとに理解されるようになり、"雷魚の祟り"という人も出てきた。

## 3.顎口虫のあらまし

有棘顎口虫は、ロンドンの動物園で死亡したトラの胃壁の腫瘍から、Owenが1836年に発見した。成虫には雌雄があり、雌1.5~3.3cm、雄1.2~3cmの長さである。雌雄とも体前端に特有な頭球を持っている(図3)。頭球には8~11列の棘が環状に生え、大半前半部にも皮棘がある。有棘顎口虫は、インド、マレーシア、タイ、フィリピン、中国、日本などに分布する。特に、タイはヒト寄生の症例が多い。有棘顎口虫の終宿主は、ネコ科とイヌ科の動物で、日本ではネコとイヌである。成虫は終宿主の胃壁に大きな腫瘍を作り、その中に集まって寄生している(図4)。その腫瘍に1個の穴が開いており、腫瘍内部で生み出された卵はその穴から胃腔に出る。消化管に出た卵は糞便とともに外界に出る。これらの卵は、約1週間で幼虫が完成する。幼虫はケンミジンコ(第1中間宿主)に捕食されて、ケンミジンコの体腔に出て、さらに発育し第3前期幼虫となる。ケンミジンコは、第2中間宿主に捕食されて、第3後期幼虫となる(一次感染)。第2中間宿主としては、ライギョ、ドジョウ、トノサマガエルなどがある。さらに、一次感染のみでなく、幼虫を宿す動物を食べて、魚類、両生類、爬虫類、鳥類、哺乳類などの動物が広範囲に幼虫を宿すようになる(二次感染)。二次感染では、幼虫は第3期幼虫以上には発育出来ず、筋肉内に被囊する。ヒトは、淡水魚、特に雷魚の生食によって感染する。幼虫は腸管壁を穿通し、肝を通過した後、全身を移動する。感染後3~4週間の潜伏期があり、その間に肝機能障害が観察される。幼虫が皮下組織を通過するときには特有の皮膚爬行症(*creeping eruption*)を生じる。多くは、体の表面に瘤を作り、それがあちこち移動する(皮膚顎口虫症)。ときに内臓を侵し、また眼窩内、頭蓋内に浸入することもある。虫が頭蓋内に浸入して脳の重要中枢を破壊し、ヒトを死に至らしめることもある。

#### 4. 顎口虫とのかかり合い

私は1954年に大学医学部に入学して、すぐ学生の身で寄生虫学教室に出入りを許可された。研究室に行くと、教室員が各地から送られてきた雷魚を刺し身にしてガラス板に挟み、光を当てて検査していた。聞くと、顎口虫の幼虫寄生を検査しているという。私は顎口虫のことを話には聞いていたが、見るのは初めてであった。そのうち検査を手伝うようになり、雷魚を3枚におろすのも上手になった。検査で、粟粒くらいの大きさの幼虫がなんと多く寄生していることだろうと驚いた。雷魚1匹に50匹以上の幼虫が見られるのもあった。そして半分以上の雷魚に幼虫が寄生していた。数10cm以上の雷魚であれば、まず幼虫が寄生していた。

#### 5. 滅びた有棘顎口虫

私が顎口虫に関わりを持った頃から、国内で感染した顎口虫症の患者は九州ばかりでなく、本州、四国からも報告され、わが国の寄生虫病となっていく。中には、宴会で雷魚の刺し身を食べて集団感染した例もあった。1940年代までは国内の患者が増え続けたが、わが国の食糧事情は好転し、衛生教育の普及もあって、人びとは雷魚を食べなくなり、1970年代になると患者数は激減した。1970年以降は、有棘顎口虫症の国内感染例はまずみられなくなった。ところが、1972年頃から中国からドジョウが輸入されるようになり、それらのドジョウの"躍り食い"を楽しむ人びとが出てきた。ドジョウがのどでピョンピョン跳ねる感覚がたまらないらしい。そして、これらのドジョウから剛棘顎口虫(*G. hispidum*)という別の種類の顎口虫症に感染した患者が出てきた。さらに、日本産ドジョウを生食して、日本に分布する日本顎口虫(*G. nipponicum*)に感染した患者が現れ、また、ヤマメなどの淡水魚を生食して、イノシシが終宿主のドロレス顎口虫(*G. doloresi*)の感染例も出てきた。

有棘顎口虫の患者はみられなくなったが、雷魚は昔ほどではないにしても、わが国の至るところに生息していて、ルアー釣りの対象になっている。ところで、雷魚の有棘顎口虫の感染はどうなっているだろうか。私は、佐賀衛生研究所と共同で、1989年佐賀県の最も感染が多かったところを主に、カムルチーを集めて、昔とった杵柄で検査した。94尾検査したが、全く有棘顎口虫の被囊幼虫は発見出来なかった。その頃の他の報告でも、全く被囊幼虫は発見されていない。このことから、第2中間宿主は健全だが、有棘顎口虫は絶滅してしまったらしい。

第1中間宿主のケンミジンコは、どこの池にも無数にいるし、第2中間宿主の雷魚

も健在で、終宿主のネコやイヌもどこにでもいるのに、有棘顎口虫がわが国で絶滅したのはなぜだろうか。一つ考えられるのは、人の食べ残しが、どこでも豊富にあるので、終宿主のネコやイヌが雷魚を襲わなくなったのが原因ではなからうか。終宿主が雷魚を食べないので、有棘顎口虫の発育環が切れたと推定される。もちろん、他の要因もあるかもしれない。

異国から来た雷魚は、わが国に来てよい環境を得て帰化動物としてすみ着いたが、一緒に来た寄生虫の有棘顎口虫は、わが国で子孫を増やすことが出来ず、絶滅してしまった。日本は、有棘顎口虫にとってすみやすいところではなかった。

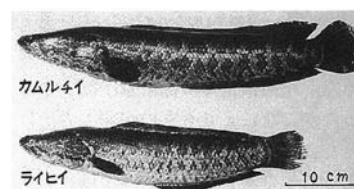


図1 雷魚カムルチーとライヒイ  
出典:『図説人畜共通寄生虫症』  
(宮崎一郎・藤幸治九州大学出版会、1988)

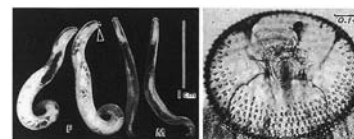


図2 有棘顎口虫の成虫  
出典:『図説人畜共通寄生虫症』  
(宮崎一郎・藤幸治九州大学出版会、1988)

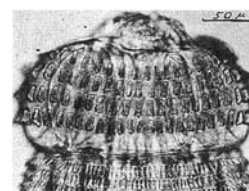


図3 有棘顎口虫第3期幼虫の頭球  
出典:『図説人畜共通寄生虫症』  
(宮崎一郎・藤幸治九州大学出版会、1988)

図4 有棘顎口虫が寄生したネコの胃  
出典:『図説人畜共通寄生虫症』  
(宮崎一郎・藤幸治九州大学出版会、1988)

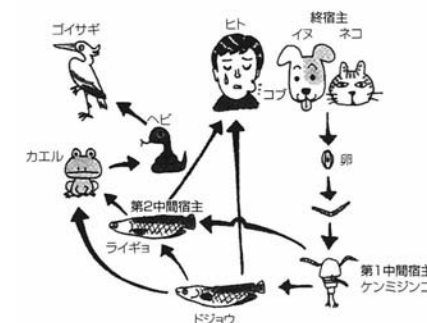
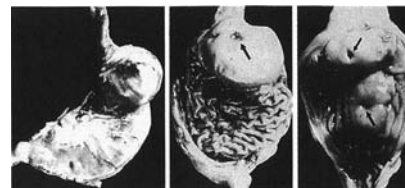


図5 有棘顎口虫の発育史  
出典:『ブレインナーシング』19(6)1545,2003  
(西村謙一「虫の居所が悪いはなし」7.顎口虫メディカ出版)



# 恐怖の棲み家

無視できない虫の話  
大塚薬報 No.609,2005



## 1.山の彼方に

私が住んでいる市から北を眺めると、割と高い山々が立ちはだかる。その山の彼方に、A村がある。そこに行くまでの道路は曲がりくねっているが、よく舗装されている。私の自宅から村の中心部の役場までは車で約30分で行くことができ、意外と近い。同場所は海拔約400mで、周辺には杉が多い。村の人口は約1,800人で、いわゆる過疎地である。その役場の近くに、診療所がある。

この診療所の医師が退職することになったので、1年でよいから勤務してくれないかとの話があったのが、1992年の3月であった。条件としては、週末は帰ってもよいが、ほかは隣の宿舎で宿泊してくれとのことであった。これは、救急医療を加えたプライマリー・ケアの診療体制である。このような勤務は初めてではあるが、私は、救急医学の専門家として、救急医学はプライマリー・ケアに基づくとの信念を持っていたので、その点抵抗はなかった。それに、この地では、市内に見られない山地性の蝶がたくさんいると聞いていたので、憧れの地でもあった。1年もこの地に滞在するなら、蝶について何か新知見が得られるかもしれないとの期待が膨らんできた。

4月早々、国際学会の座長と現地の医療指導のために中米に出張したので、実際に当地で診療を開始したのは4月の中旬以降であった。午前中は少し忙しかったが、夜は起こされることは少なかった。診療所の周りには、平地では見られない蝶がたくさんおり、昼の休み時間などには、これらの蝶を撮影したり、採集したりした。村人とも親しくなり、夜は卓球をしたりして過ごした。それまでとは全く違ったこの生活に満足し、田舎医者の実利に尽きると思ったほどであった。

## 2.恐怖の棲み家

その悪い予感がし始めたのは、赴任した年の初夏頃だったと思う。診療所の周りには昆虫やカエルが多く、診察室の中にまでオニヤンマが入ってくることもめずらしくない。それにしても、外を飛んでいるキイロスズメバチが多いところだなあと考えていた。

キイロスズメバチは、どうも診療所に隣接している官舎の玄関近くに多いようである。よく見ると、官舎の玄関の屋根に集中している。ついに玄関の屋根の瓦の木材の間に、多くの蜂が入り込んでいるのを突き止めた。日が経つにつれて、蜂の数は次第

に多くなり、玄関に車をつけて降りると、身近に蜂が飛来するようになった。攻撃はしてこないものの、気持ちがいいものではない。常に緊張の連続である。

8月になると、宿舎の応接室の中に蜂が入っていたことが2、3回あった。部屋を閉め切っているのに、どこから蜂が浸入したか全く不明であった。この頃になると、玄関の上にはひっきりなしに蜂が入り出すようになった。宿舎に隣接した診療所の2階から見ると、屋根元の木製の壁に穴が開いており、その穴の周囲には常に数匹の蜂がいて、その穴から多くの蜂がさかんに出入りしている。穴を出た蜂の多くは上空に飛び立っていき、中には玄関に向かってくるものもある。この状態が秋まで続き、蜂の数は少しも減少しない。

当地は標高約400mもあり、夏でもかなり涼しい山村である。秋深くなるとかなり寒い日があったが、天気の良い日には飛んでいる蜂の数は少しも減少していない。それどころか、家の中に1、2匹の蜂が浸入している日がしばしばあった。10月23日になって家の中の廊下に出てみると、廊下の電灯の周りにたくさんの蜂がいるではないか。温度が低いいためか、蜂たちはあまり活発ではない。洗面所にも蜂がいるかもしれないと、辺りを見回して用心して洗顔し始めた。すると、「ブーン」という音がする。その次の瞬間、「ギャー」と妻の叫ぶ声が聞こえた。ドアを開けて急いで隣の部屋に入ると、なんと妻の肩に1匹の蜂が止まっている。私は急いで、その蜂に殺虫剤をかけた。妻は蜂に刺されずに済んだ。ほっとするのも束の間、今度は妻が私の寝巻に止まっている蜂を発見した。さっき洗面所で聞いた蜂の羽音は、私の寝巻に飛んできた蜂であった。恐怖に慄きながら、そっと寝巻を脱いで、その寝巻を廊下に叩きつけた。間一髪で、幸運にも蜂に刺されずに済んだ。

こうなつては、もう一刻の猶予もない。私は家中に燻煙剤を焚いた。どうも、蜂たちは天井裏から廊下の電灯が下がっている紐の隙間から廊下や応接室に浸入してくるらしい。燻煙剤の効果はあった。何と200匹以上の蜂の死骸を廊下で回収したのだ(図1)。

しかし、10月の終わりになっても、蜂が廊下に浸入してくるので、事務員に徹底的に燻煙剤を焚いて蜂を駆除するように頼み、東北の学会に出張した。もう、蜂は駆除されているだろうと期待して帰ってくると、何と事務員は、私の依頼を忘れて蜂の駆除を実行していない。そこで、電灯の紐の隙間に直接燻煙剤が天井裏に広がるように、紙の筒を作り、その中に燻煙剤を焚いた。

しかし、効果は全くなかった。わが国で、もっとも恐ろしい動物は蜂である。年間約

40人が、蜂に刺されて死亡している。こうなっては、もう、常に生命の危険にさらされているのは、明らかである。おそらく、蜂の巣は屋根裏にあると思うので、それを除去してくれるように事務員に強硬に頼んだ。事務員は、蜂の巣の除去を専門の業者に依頼すると約束してくれた。

11月6日、事務員が連れてきた養蜂業者は、60歳代の温厚な紳士であった。天井裏のキロスズメバチの巣に接近するからには、蜂の攻撃を防ぐために、宇宙服か潜水服のようなものを着用するだろうと想像していた。ところが、驚いたことに、この業者は頭にカンテラを付け、頭と顔を保護する網を被っただけで、普通の作業服で手袋さえはめていない。腰の周りに、殺虫剤スプレーを何本か巻き付けている。蜂が近づくと、殺虫剤を噴霧して攻撃を防ぐという。

蜂の巣があると思われる場所と、天井裏への上がり口の板がある場所とはかなり離れている。業者はそこから進入したが、天井裏は梁があって進むのは大変だと、声が天井裏から聞こえてくる。事務長、看護師、私の3人は、蜂の巣があると思われる天井の下の廊下に立って固唾を飲んで成り行きを見守っている。「蜂がたくさん攻撃してくる」、「蜂の巣を発見」(図2)など、天井裏から声が聞こえてくる。まるで戦争のようだ。「蜂を退治中」という声が聞こえたかと思うと、ビニール袋を被せておいた電灯の紐の隙間から、数匹の蜂が苦し紛れに飛び出してきた。

何と、この宿舎は粗末な電灯の隙間を通して外界と直接繋がっているのではない。これは、人体の構造に例えると、わが家の部屋を脳が入っている頭蓋腔とすると、天井裏が副鼻腔となり、電灯の紐の穴が頭蓋底骨折部に相当する。そのうち、私たちの立っている上から、「蜂の80%退治」と声が掛かってきた。私たちは思わず手を叩く。10分くらいして、「蜂を全部退治した」との声が聞こえた。「やった!」と廊下にいる3人は凱歌を挙げた。間もなく、養蜂業者は天井の開き穴から降りてきた。梁が邪魔で、蜂の巣を丸ごと持ってこれないという。刃物と大きなビニール袋を持って、再び業者は天井裏に登っていった。しばらくして、彼は2袋の大きな袋を提げて降りてきた。袋には、切断された蜂の巣がぎっしり詰まっている(図3)。その直径は35cm以上もあり、数えきれないほどの幼虫が規則正しく並んだ各穴に、いっぱい詰まっている。何匹かの蜂も未だ穴の中いる。

最後に業者は、殺した蜂を箒で掃いて、ビニール袋に入れて降りてきた(図4)。彼によると、少なくとも5,000匹の蜂がいたという。私たちはこれだけ多くの殺人蜂と同居していたことになる。今思っても、身の毛がよだつ。

翌日、あれほど屋根の周りに飛び回っていた蜂は、全く見られなくなった。診療所の中に入って、私は誰に言うともなく怒りをこめて眩いた。「やっと、この診療所に赴



任したというのに、蜂に刺されて死んだら、どうするんだ」。それを聞いた若い事務員はにっこりとして、「なあに先生、心配はいりません。先生には、多額の保険を掛けてあります。どうぞ、ご安心下さい」

図1 乾燥剤で殺したキロスズメバチ



図2 屋根裏のキロスズメバチの巣



図3 キロスズメバチの巣の断面

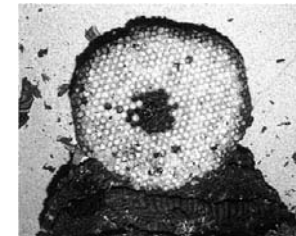


図4 殺虫剤で殺された多数のキロスズメバチ



# アンデスの彼方に

無視できない虫の話  
大塚薬報 No.610,2005

## 1.野口英世

4、5年前であったと思う。20人程度の20歳前後の男女に、「野口英世(図1)を知っているか」と聞いたことがある。「知らない」と答えた人が大部分であった。中には「名前を聞いたことがある」と答えた人もあったが、どのような人かわかっている人は、一人もなかった。これを知って、明治は遠くなりにけりと思ったものである。

ところが、塩川財務大臣が1,000円札に野口英世を登場させてから、彼の名前は急速に知られるようになった。まさに、「野口英世」の復権である。

野口英世—日本の雪深い地方の貧農の家に生まれ、左手に火傷を負い、身障者であることにもめげず、独学で超人的に努力して米国に渡り、幾多の困難を克服し、ついに世界的な科学者となる。研究に没頭し、数々の細菌学上の大発見をして、アフリカの地で研究の犠牲となって、人類のために死んだ日本人の医者。これが戦前の野口英世像であった。過酷な戦争の時でさえ、彼の生涯はその時代の華である軍人の生涯にひけをとらなかった。彼の生涯は、わが国が近代国家に発展途上の時代の理想像であった。われわれの年代の日本の医者で、少年時代に彼の影響を受けなかった者はないといっても過言ではないであろう。いや、医者のみならず日本の少年の理想像であった。塩川財務大臣も、幼き頃深く影響を受けたであろうから、紙幣に登場させたのであろう。実をいうと、私も野口英世に強く影響を受けた一人である。今でも感染症に魅力を感じるのはそのせいと思う。彼の生涯は、日本語だけでなく英語やスペイン語でも書かれ、わが国には、伝記が数百もあるという。彼は日本人のみでなく、アメリカ人の心も揺さぶった数少ない日本人の一人でもある<sup>1)</sup>。

一方、彼は修身の本の見本のような立派な人物ではなく、たかり屋で、自己管理のできない放蕩家であったとされ、学問的業績をも否定した書もみられる。私は戦前の少年時代に受けた教育のため、ずっと彼を偶像視していた。学生時代の細菌学の時間だった。当時、わが国細菌学の最高権威の一人であったT教授が、「野口英世が梅毒病原体の純粋培養に成功したと思ったら大間違いだ」と言われたのを聞いたときのショックは今も覚えている。彼はいくつかの細菌学上の発見のミスを犯したが、不滅の業績をあげたのは確かである。その一つが、第4期梅毒の中樞神経に梅毒トレポネーマを発見したことである。これは、超人的な努力家の彼にして初めて出来た研究である。この研究は、今日でさえ、これだけでノーベル賞受賞に値するといわれている。実際、彼はノーベル賞受賞の候補になっている<sup>2)</sup>。しかし、振り返

てみると当時の日本は、大国ロシアと戦ったとはいえ、世界にほとんど知られていない東洋の小国である。優れた研究者であっても、母国がこのような状態であれば、候補者として選考に大きなハンディキャップになったであろうと思われる。

## 2.オロヤ熱の研究

彼のあまり知られていない他の優れた業績に、オロヤ熱の研究がある。オロヤ熱(Oroya fever)は、アンデス山脈の彼方、ペルー、エクアドル、コロンビアの500～3,000mの高地の山間部に存在する風土病である。臨床的には、急激な発熱と貧血を特徴とする。症状としては、突然の発熱、脱力、顔面蒼白、筋肉・関節痛、強度の頭痛を伴い、しばしば意識障害を起こす。治療しなければ、致死率50%を超えるとされている。病原体は、ペルーの内科医バートンが発見したバルトネラ・バチリフォミス(*Bartonella bacilliformis*)。最初は、この病原体はリケッチアの一種と考えられていたが、人工培地で培養出来るなどの理由から、リケッチア科から除外された。この病原体は、ヒトの血流に入り、赤血球の表面に達して、赤血球を破壊して溶血性貧血を起こす。現在*Bartonella*属には、ネコ引っ掻き病や錘壕熱など6種の病原体が知られている。

オロヤ熱の発生地のみならず、ペルー疣病(Verruga peruana)と呼ばれる皮膚病の発生があり、オロヤ熱回復期の患者に、この皮膚症状がよく見られるので、オロヤ熱とペルー疣病との異同が問題になっていた。そこで、この解明に乗り出した医学生が登場する。その人の名は、ダニエル・カリオン。彼は、ペルー疣病の抽出液を自分の身体に注入し、39日後、オロヤ熱を発病して、1885年10月5日に死亡してしまった。この英雄的生体実験も、記録が十分でなかったため、2種の病気が同一のものであるとの証拠にはならないと疑問が持たれていた。しかし、ペルーの医学界では、彼の英雄的行為を讃え、カリオンが死亡した10月5日を、ペルー医学の日(el Dia de la Medicina Peruana)と制定し、毎年休日になっている。また、オロヤ熱とペルー疣病を総称して、カリオン病(Enfermedad de Carion)と呼ぶことにした。カリオン病は、バルトネア症の一種である。

1913年には、ハーバード大学熱帯医学研究室の調査隊がペルーに来て、バルトンが発見していた病原体をオロヤ熱患者の血液と組織中に発見したが、ペルー疣病の患者からは発見できなかった。それで、2つの病気は異なるものであると結論した。

野口英世は研究を始めてわずか2、3ヵ月の間に、両疾患の材料から同一の細菌の純粋培養に成功して、カリオンの正しさを証明した。今日の知識では、オロヤ熱は免疫をまったく持たないヒトの急性の感染像であるが、ペルー疣病は、顕性感染あるいは不顕性感染によって、ある程度免疫を獲得したヒトにみられるものである。

さて、ヒトはこの病気を、どのようにして感染するのであろうか。1912年に、ペルー在住の昆虫学者タウゼントが、昆虫、サシチョウバエ(*Phlebotomus*・図2)の刺咬によるとした。彼は、オロヤ熱の浸潤地に夜間滞在する者のみが感染すること、地理的分布と夜間にヒトを刺す昆虫という点からこの結論に達したのであった。

しかし、この事実が昆虫学者レイモンド・シャノンによって証明されたのは、野口英世の死後であった。サシチョウバエは、スナバエ(sand fly)と呼ばれる昆虫で、体長1～4mmにすぎない。サシチョウバエ亜科の中で*Lutzomyia*属と*Phlebotomus*属が医学上重要である。サシチョウバエは、カラアザールなどの世界各地のリーシュマニア症(leishmaniasis)の媒介者としてよく知られている<sup>3)</sup>。カリオン病を媒介するのは、*Lutzomyia uerrucarum*が主で、その他のサシチョウバエも媒介の可能性があるとされている。ヒトは唯一のカリオン病病原体の保有動物であるため、媒介昆虫が生息しない場所での患者発生は、輸血による感染を疑う必要がある。

### 3.終わりに

カリオン病の研究は、野口英世の卓越した技術と、超人的な努力によって成し遂げられた世界に誇る業績である。ただ、カリオン病は世界的にみると地方の風土病であるので、彼の業績が広く知られていないのは残念である。

しかし、私の級友によると、野口英世が黄熱研究のために滞在したエクアドルのグアヤキルの彼の研究室の玄関には、彼の業績を讃えたレリーフが飾られてあり、付近の道路には「野口通り」があり、この国では神様のように敬愛されているという<sup>4)</sup>。彼の人生で非常にうらやましく思うことがある。それは、彼にかかるストレスが計り知れないほど大きかったであろうけれども、毎日が燃えるような充実した日々であったことである。普通の人はそのような充実した日々を持てるものではない。彼は51歳という短命であったが、彼の生涯からみると、100歳以上の有意義な人生を持ったことに相当するといえないだろうか。

#### 参考文献

- 1) Plesset, I.R.: 『Noguchi and His Patrons』  
(Associated University Presses, Inc. London, England, 1980)  
(仲井久夫、柘矢好弘訳: 『野口英世』星和書店、1987)
- 2) 中山茂: 『野口英世』(朝日新聞社、1989)
- 3) 吉田幸雄: 『図説人体寄生虫学』(南山堂、1977)
- 4) 平野順造: 『夏目漱石と野口英世』(燦々だより25号、2005)



図1 野口英世  
提供: 野口英世記念館  
1,000円札のモデルになった写真  
エクアドルで撮影したもの

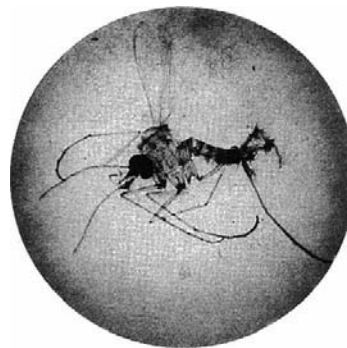


図2 サシチョウバエの一種本種はカラアザールを媒介する。  
カリオン病を媒介するのは、別の種*Lutzomyia uerrucarum*である。  
出典: 『図説人体寄生虫学』(吉田幸雄: 南山堂、1977)



## 1. 渡し船

今から約半世紀も前のことである。その日、東京を発つ時心配だった雨はとつくと止み、空はからりと晴れて、広い平野の彼方には遠く福島県の山々が見える。その山の上には、夏らしい積雲が姿を現している。50年来といわれる洪水の名残のためか、阿賀野川は黄色くにごって流れている。今、1艘の渡し船は岸を離れて川の上を静かに進んでいる。

私は、学生時代にダニの類「ツツガムシ(志虫)」の種類や季節的消長を調べてよくにつれて、次第にツツガムシにはまりこんでいった。そして、東北地方の古典的ツツガムシ病を媒介する、「アカツツガムシ」(図1)が住む有毒地を訪ねたいという願いがエスカレートしていった。このようなわけで、東京でのインターンの夏休みを利用して、はるばる阿賀野川に来たのであった。船を漕いでいるのは、佐々学先生から紹介いただいた中川佐一郎さんである。

「最初に川村先生をこうしてご案内して、中州に渡ったのは、私が30歳になったばかりの頃でした。もうあれから40年以上になりますなあ」と言って、72歳とは思えない元気な中川さんは、私の知らない大正、昭和の初期の時代を語り始めてくれた。

## 2. ツツガムシとツツガムシ病

チグリス・ユーフラテス川の例を挙げるまでもなく、人類の文明は大河のほとりに興った。わが国も例外ではない。川のほとりでは、文明の発祥とともに、そこに風土病が発生する。わが国の恐ろしい河川流域の風土病としては、日本住血吸虫症、ツツガムシ病がある。ツツガムシ病の研究は、日本医学が世界に誇る業績の一つである。病原体の発見、臨床、感染経路、疫学は、日本人学者によって解明された。

病原体(図2)は、最近までリケッチアの一種とされていたが、現在では属が異なり、オリエンチア属とされ、*Orientia tsutsugamushi*と命名されている。臨床症状は、発熱、発疹、刺し口(図3)が主要症状である。発熱は39～40度に達し、激しい頭痛、悪寒、全身倦怠、食欲不振、筋肉痛、関節痛、結膜充血、咽頭発赤、下痢、嘔吐等が起こる。約2週間の弛張熱、またはけいりゅう熱が出現した後、次第に解熱する。

発疹は、2～5病日に出現する。直径5mm前後で、紅斑性、丘疹性で、全身に出現するが、胸、腹、背部が好発部位である。これらの発疹は7日程度で消退し始める

が、重症例では出血性になることもある。ツツガムシの刺し口は、通常1個で、体幹、腋窩、陰部などに見られ、約10mm程度の黒褐色の痂皮を生じ、その周辺には、発赤と腫脹がある。刺し口の痛みは、ほとんどないとされている。刺し口の所属リンパ節の腫脹がみられ、全身のリンパ節の腫脹は約半数に見られるという。重症例では、DICによる出血傾向、髄膜刺激症状、高度の意識障害、けいれんなどの中枢神経症状、肝障害による黄疸の出現、血圧低下、肺炎などを合併する。不適切な治療では、血管内皮細胞に病原体が増殖し、全身の血管が障害され、心、脳障害、DIC、多臓器不全などで死亡する。診断は、刺し口の確認とともに、血清中の特異抗体の陽生、病原体のDNA検出などである。治療は、テトラサイクリン系の抗生剤が第1選択薬である。

ツツガムシは、節足動物のダニ類に属する。この虫は、幼虫から成長するためには、ネズミやヒトなどの哺乳動物の体液を吸わねばならない。哺乳動物の体液を吸うのは、幼虫の時の1回だけである。多くのツツガムシは病原体を持たないが、少数のツツガムシはツツガムシ病の病原体を持っているので、これらの虫に刺されたネズミやヒトは、ツツガムシ病に感染する。1匹のツツガムシが何人ものヒトを感染させることはない。また、この病気はヒトからヒトへは感染せず、ネズミからも感染しない。病原体はツツガムシの卵→幼虫→若虫→成虫という発育環の中で保有され、ツツガムシの親から子へと代々受け継がれてゆく。病原体を持ったツツガムシは、ある範囲に群がって生息している(有毒地)。ツツガムシの種類は、日本からは91種が知られており、ヒトにツツガムシ病を媒介するのは、アカツツガムシ(*Leptotrombidium akamushi*)、フトゲツツガムシ(*L. pallidum*)、タテツツガムシ(*L. scutellane*・図4)の3種である。アカツツガムシは夏期(7～8月)、タテツツガムシは秋期(10～12月初旬)、フトゲツツガムシは春期(4～6月)と秋期(10～11月)の年2回、それぞれ幼虫が発生する。幼虫の出現する時期と患者発生時期は一致する。ツツガムシ病は、東北地方の河川流域、すなわち、新潟県の信濃川、阿賀野川、山形県の最上川、秋田県の雄物川の流域に、夏期(7～9月)に発生する風土病として、古くから知られていた。ところが、その後ツツガムシ病はシベリア沿海州などに広く存在することが判明した。東南アジアでは、草原熱(*scrub typhus*)と呼ばれている。

第二次世界大戦後、ツツガムシ病は富士山麓、伊豆七島など、沖縄と北海道を除く全国に存在することが明らかになった。東北地方の古典的ツツガムシ病に

対して、これらは新型ツツガムシ病と呼ばれる。

### 3.「川村中州」

渡し船の目指す所は、葦が生い茂った中州である。この中州こそ、新潟医専の教授(後に慶應義塾大学教授)であった川村麟也博士が、初めてこの地で研究を行い、数々の貴重な業績を生んだ中州で、「川村中州」として、研究者の間で世界に知られた場所である。

この「川村中州」を取り巻いて流れる阿賀野川の流れは、幾世紀にわたる住民のツツガムシ病に対する恐怖と死者の恨みと、この疾患に対して解明に努力した研究の歴史を流しているのだ。私は船の上であの山々を見ながら、中州に渡っていった若い研究者とその時代のイメージを水面に描くのだった。

「この船で、私は何回たくさんの先生方をお運びしたか分かりません。佐々先生や、朝比奈先生、北岡先生、伊藤先生もお運びしました。特に、佐々先生は、3年間も毎年続けてお出でになり、熱心に研究なさいました」と中川さんは語り続ける。

川村博士は、最初現場での研究補助者を求めて村に来られたが、その仕事の恐ろしさゆえに、誰一人応募しなかった。中川さんは体が弱く、当時の徴兵検査に合格しなかった。なにしろ富国強兵の時代である。中川さんは、仲間が兵隊になるのに肩身の狭い思いであった。熟慮の末、「自分は体が弱く、兵隊となってもお国のために尽くせない。この仕事を引き受けて、ツツガムシ病に罹って死んでも、それは戦死したと同じではないか。誰も引き受けないなら、自分が引き受けよう」と決心して申し出た。明治生まれの気概が感じられる。中川さんは、感染の恐怖の中で毎日仕事をしていた。幸いにして、「川村中州」では川村博士考案の予防衣のおかげで、一人の犠牲者も出なかったが、死の恐怖は少しも薄らぐことはなかった。ツツガムシ病研究は、最も多くの感染犠牲者が出た研究といわれている。実際に、着任わずか2年の西部増治郎教授をはじめ、4人の犠牲者が出ている。この事実からも、その仕事の恐ろしさが分かる。妻のスイさんも、夫の仕事を手伝うようになった。2人には幾多の感謝状が贈られている。最初、中川さんはこの仕事は何週間か、あるいは長くとも2、3か月だと思っていたが、なんと44年も続くとは夢にも思わなかったそうである。今、船を漕いでいる中川さんの顔には、44年の長き日を自分の信念に生き、これまでやってきた仕事の誇りと満足感が表れているのだった。

### 4.アカツツガムシを採る

中川さんの話に聞き入っている間に、もう「川村中州」は目の前に迫ってきた。中州は、葦が一面に生えているやや広い土地である。滑り込むように、船は中州の砂地に着いた。「上陸だ」私はそう叫んで船から飛び下りた。ついに目的地の第一歩を踏んだのだ。中川さんは船を繋いで、スイさんとともにゆうゆうと船を降りてきた。私は予防薬を手足につけてから、中州の地面をじっと見た。ある、ある、鼠穴が。早速、3人は芋を付けたネズミ取り用のパチンコを穴の出口に並べ始める。私もパチンコを仕掛けるのに自信があったが、中川さん夫婦には及ばない。翌朝、再びここに来てパチンコを回収するわけである。

その日は、中川さんの家に泊めてもらう。帰ってから、風呂を使わせてもらったが、この風呂はかつて川村博士が気楽に汗を流された風呂だそうである。その夜はゆっくり休んで、翌朝早く船で「川村中州」に向かう。中川さんが船を繋いでいるが、それすらもどかしく、私は船を飛び降り、パチンコを仕掛けた場所に走っていった。パチンコにネズミが掛かっていた。ハタネズミだ。ネズミの耳殻に目を近づけてみる。耳殻内に動いている数個の橙赤色の小さい斑点。顕微鏡で見なければ断定出来ないが、ここで捕れたハタネズミの耳殻に寄生しているのは、まずアカツツガムシに間違いはない。「これです、これです」と中川さんも認めてくれる。今こそ、有名な有毒地に踏み入り、アカツツガムシを自らの手で採集したのだ。この喜びと感激は大きかった。

私は、この地に来るのに、役場から自転車を借りてきていたので、帰りも、その自転車に採集したネズミとパチンコを積んで、長い長い阿賀野川の堤防をペダルを踏んで走った。私は、何度か自転車を止めては、だんだん遠ざかってゆく「川村中州」を振り返ってみるのだった。この日の出来事が、今、まるで昨日のこのように鮮明に思い出される。

図1 ツツガムシの幼虫



左より、アカツツガムシ、タテツツガムシ、フトゲツツガムシ(鈴木博原図)  
出典:『皮膚疾患をおこす虫と海生動物の図鑑』  
(大滝倫子、篠永哲=協和企画、2000)

図2 ツツガムシ病の病原体

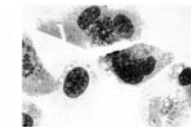
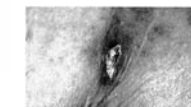


図3 ツツガムシ病の刺し口



出典:『皮膚疾患をおこす虫と海生動物の図鑑』  
(大滝倫子、篠永哲=協和企画、2000)

図4 タテツツガムシ



# 旅をする蝶

無視できない虫の話  
大塚 葉 報 No.612,2005



## 1. 蝶と蛾

蝶は「蝶よ花よ」と人びとに愛でられるが、蛾はあまり人びとの関心をひかない。「蝶と蛾はどこが違うのか」との質問をよく受ける。分類学上からみれば、蝶は蛾の一部といっても誤りではない。しかし、蝶と蛾はやはり異なる。その区別点として、① 蝶は昼活動するが、蛾は夜活動する。② 蝶は華やかな色彩をしているが、蛾は暗い地味な色彩をしている。③ 蝶は羽をたたんで止まるが、蛾は羽を開いて止まる、などといわれている。これらはおおよその傾向を示すが、例外が多く、絶対的な区別点にはならない。

確かに、夜だけ活動して昼眠っている蝶はいないが、昼活動する蛾はいる。イカリモンガやモンシロモドキなどの蛾は、昼間に活動し、形も蝶と間違われやすい。色彩については、ジャノメチョウ科の蝶は地味な暗い色彩だし、蛾の中にも華やかな色彩のものもある。わが国には産しないが、ニシキオオツバメガ(ウラニア)という、マダガスカル産の蛾がいる。羽は全体に緑色で、後羽に橙色と紫色の部分があり、非常に美しい(図1)。その形もアゲハチョウ科の蝶に似ており、この蛾の標本や図を見せると、多くの人がきれいな蝶だという。この蛾は、有名な文豪ヘルマン・ヘッセを感激させたもので、その蛾の魅力にとりつかれたことは、「Nach der Weihnachten, 1932(クリスマスが済んで)」と題して、エッセイに書かれているという。

きれいな蛾としては、わが国にもサツマニシキという種類がいる(図2)。この蛾は、前羽の付け根から先端までの長さが約40mm前後の大きさで、青黒色の背景色に白、薄青の斑点を散りばめ、前羽に赤色の帯がある。幼虫はヤマモガシを食べる。私は、この蛾に一度出会いたいと長らく思っていた。すると2003年7月、高知県立牧野植物園を訪問した時、目の前1mの所に1頭のサツマニシキが飛来した。私は夢中になり、手持ちのデジタルカメラで何枚も撮影した。

蝶には、止まる時に羽を閉じて止まる種、イシガケチョウのように羽を開いて止まる種、羽を閉じたり開いたりする種がある。蛾はほとんどすべての種が羽を開いて止まるが、前記のイカリモンガは、羽を閉じて止まる。

それでは、蝶と蛾の区別点はないのかというと、やはりある。それは触覚である。セセリチョウの類を除けば、蝶の触覚はすべて棍棒状である。これに反して、蛾の触覚は糸状のものや羽根毛状のものなどがあるが、棍棒状のものはない。

ただ、ベニモンマダラという小さい蛾の触覚は一見棍棒状であるが、よく見ると次第に先端が膨らんでいるのがわかる。セセリチョウ類の触覚は先が尖っている。触覚でほとんど区別がつくが、さらにいうならば、蛾は後羽の付け根に棘があるが、蝶にはこの棘はない。しかし、これはもうプロの領域である。

## 2. 移動する蝶

春から夏にかけて、家の周りに飛んでいる蝶の中で、モンシロチョウはもっとも普通にみられる蝶であろう。普通、モンシロチョウは遠くには移動しないで一生を終える。けれども、この蝶は大群となって海を越える事実が観察されている。また、イチモンジセセリも、個体が次から次へと一定方向に移動する性質が知られている。ウラナミシジミは秋によくみられるシジミチョウの一種であるが、暖地で春に成虫になった個体が、世代を繰り返しながら、北海道までも北上する。この蝶は、暖かい所では越冬出来るが、寒い所に到達した個体は死滅してしまう。

遠距離を飛ぶ蝶としては、アサギマダラが有名である(図3)。この蝶は、山道などで遭遇するとドキッとすくらしい優雅な蝶で、ゆっくり悠々と飛ぶ。しかし、一度捕まえ損なうと迅速に天空高く舞い上がってしまう。おそらく、空高く舞い上がった状態から気流に乗って、遠距離を移動するのであろう。記録によると、羽にマークして台湾で放たれた個体が、滋賀県比良山で捕獲された事実がある。この個体は、1,790kmも旅をしたことになる。

## 3. 日本の迷蝶

まれに、その土地に産しない蝶に遭遇することがある。これらの蝶を、「迷蝶」という。迷蝶に出会うことは、蝶愛好者(蝶屋)の大きな喜びである。私も、これまでに九州で数種の迷蝶を目撃したり、採集したりした経験がある。迷蝶のほとんどは、東南アジア、中国大陸、朝鮮半島、シベリアから飛来するが、東南アジア、特にフィリピンからのものが多い。

これらの蝶は、自力だけで飛んでくるのではなく、風に乗って運ばれてくる。台風の後にはよく迷蝶が発見される。中にはその迷蝶がどこから飛来したか特定出

来ることもある。

これらの迷蝶の種類は多く、最近の文献では、マダラチョウ科、ジャノメチョウ科だけでも、マダラチョウ科25種、ジャノメチョウ科7種が報告されている。迷蝶は日本で子孫を増やすことが出来る種もある。もし、冬を越すことが出来れば土着種となる可能性があるが、まず冬を越せない。冬を越えて南九州で土着種になったものに、タテハモドキ(図4)がいる。

#### 4. 遙かなる旅路

アサギマダラや、日本で発見される迷蝶は、風に乗って流されて遠距離の旅をしてどこかに到着するが、明らかな目的地に向かって長距離を旅する蝶がいる。それは、オオカバマダラ(Monarch)(図5)というマダラチョウ科の一種である。この蝶は、北アメリカに広く分布しており、米国では至る所で普通にみることが出来る。

この蝶は、3月下旬頃からカリフォルニアやメキシコの越冬地から、交尾をしながら北米大陸を北上し続ける。メスは、食草である南アメリカ原産のガガイモ科の植物トウワタをみつけると、それに産卵する。トウワタは強い毒を含んでおり、これを食べた家畜などは中毒して死亡することもあるという。そして、この植物を食べた幼虫は、体内に毒を持つようになり、鳥に食べられる機会が少なくなる。一度でもオオカバマダラの幼虫を食べた鳥は、毒のために苦しみ、この幼虫は食べてはいけないことを学習する。食草に卵を産みつけたオオカバマダラは、卵を産むと間もなく死んでしまう。孵化した幼虫は、発生を繰り返しながら、北へ北へと進み、カナダまで到達する。そして、夏の間カナダや米国で発生を繰り返す。

夏にカナダや米国で発生を繰り返したオオカバマダラの羽化した個体は、夏の終わりにになると、交尾することなく、南へと大移動を始める。花の蜜を吸いながら、ひたすら南を目指して飛び続ける。飛行は、あまり羽ばたきをせず、気流に乗り飛び続けるらしい。そして、ロッキー山脈西側の個体群は、カリフォルニア州の太平洋沿岸の数カ所に、東側の個体群はメキシコに次々に集まり、その木に止まって越冬する。蝶が止まった木は文字通り、蝶で埋め尽くされる。私は、フロリダ大学を訪問した際、オオカバマダラの研究者として知られるブローワー教授にビデオを見せてもらったが、その光景は言葉で言い表せないほど素晴らしいものであった。不思議なことに、蝶は毎年同じ木々に集まる。

オオカバマダラの飛行距離は、カナダでマークされた蝶がメキシコで発見された事実から、3,300kmの長距離を飛行したことが明らかにされている。なぜ、この蝶が

このような長距離を飛行して、同じ木に止まって越冬するかは、未解決の大きな大自然の謎である。

#### 参考文献

- 1) 白水隆:『日本の迷蝶工マダラチョウ科・ジャノメチョウ科』(蝶研出版、2005)

図1 ニシキオオツバメガ



筆者所蔵標本

図2 サツマニシキ



出典:富佐賀の昆虫遷(No.35、2001)  
2000年6月30日  
佐賀県三養基郡北茂安町(現・みやき町)にて、  
古川雅通氏撮影

図3 アサギマダラ



1995年6月2日  
佐賀県神埼郡三瀬村(現・佐賀布)にて、筆者撮影

図4 タテハモドキ



2001年10月12日佐賀県佐賀市鍋島町にて、  
筆者撮影

図5 オオカバマダラ



1969年9月29日  
アメリカオハイオ州グリーブランドにて、筆者採集





## 1. 奇病の発生

第二次世界大戦が終わって、日本軍が太平洋の島々から撤退した頃から、島々の住民の間に頭痛、頸背部のこわばり、さまざまな知覚異常をきたす病気が知られるようになった。頭痛は非常に強く、長引く性質のものであった。この病気は特殊な軽症の髄膜炎と考えられた。髄膜炎の診断には、髄液検査が不可欠である。この病気の髄液検査の結果、共通する所見は細胞増加があり、多くの好酸球が出現していることであった。やがて、この病気は好酸球性髄膜炎(eosinophilic meningitis)と呼ばれるようになった。1948年、アメリカ海軍のBaileyは、東カロリン諸島のポナペにおけるこの病気の流行を報告し、この疾患はそれまでに知られていない新しい病気であることを強調した。その後も、ニューカレドニアやタヒチなどからもこの病気の流行が相次いで報告された。

新しい病気が見つかる、その病気の原因が問題になってくる。この病気は、頭痛は強いが、それまでに死亡例はなく解剖例も得られなかった。この病気の原因として、次の3つの説が提案された。①Vailantらの、ある種の高産魚の熱に安定な毒による毒素説、②Rosenらの、数種の遠洋性魚類の寄生虫説、③Alicataによるネズミの寄生虫*Angiostrongylus cantonensis*説で、特に彼はハワイにおける研究から、②を否定してこの説を提唱した。

## 2. 病原体の発見

それまで、南太平洋で流行した好酸球性髄膜炎の死亡例はなかったが、1960年1月20日、ハワイで1人のフィリピン人が好酸球性髄膜炎で死亡した。解剖の結果、脳から一種の線虫が発見された。この虫は、アメリカの線虫分類の権威Chitwood夫人により、野ネズミの寄生虫*Angiostrongylus cantonensis*と同定された。この発見は、Rosenらにより1962年に報告された。Alicataの予見が的中したわけである。いつの時代でも、病原体の発見は大きなセンセーションを巻き起こすものである。Rosenらの報告は、南太平洋の島々に流行していた原因不明の髄膜炎の病原体発見ということで、世界中から注目された。

もちろん、この病原体は人体寄生虫としては、欧米ではそれまでまったく知られていなかった。

この虫は、1935年、ネズミの寄生虫としてChenにより発見され、*Pulmonema ratti*と命名されたものであることも明らかになった(後にDoughertyにより、整理されて*Angiostrongylus cantonensis*の学名が用いられるようになった)。

さらに1955年、MackerrasとSandarsの2人の女性動物学者が、この虫の生活史を解明していることも分かってきた。非常に興味があることは、この虫は発育するのに、必ずネズミの脳で、ある期間を過ごさなければならないこと、中間宿主はナメクジやカタツムリなどの陸産軟体動物であることだった。この研究は、医学とはまったく関係なく、動物学上の興味から行われたものであった。

実は、Rosenらの発見は、この線虫の最初の人体寄生例の発見ではなかったのである。第二次世界大戦が終わった年の1945年4月、『台湾の医界』という地方雑誌が発行された。その雑誌に、野村精策(図1)、林炳煥(図2)の2人の日本人医師による、「临床上、はじめて人体に発見せられたる*Hemostrongylus ratti*の1例」と題する症例報告が掲載されていた。この学名の虫は、1937年松本留吉が台湾花蓮港で採集した、野ネズミの肺動脈から発見されたもので、横川 定により、新種として命名されたものであった。しかし、1935年、Chenの発表が早かったので、横川の命名はシノニム(同物異名)であることが判明した。『台湾の医界』には欧文の抄録は付いておらず、その発行が戦争末期であり、この報告は世界中にはまったく知られることなく、日本人でもほとんど知る人はなかった。

## 3. 病原体のあらまし

*A. cantonensis*には雌雄があり、成虫の雌は長さ22 ~ 34mm、雄は20 ~ 25mmである(図3)。雌雄ともにネズミの肺動脈に寄生している。ネズミの肺動脈に寄生した雌が産んだ卵は、肺に送られる。肺で孵化した第1期幼虫は、肺胞を出て消化管に移行し、糞に混じって外界に出る。幼虫は中間宿主に入り、その筋肉内で第3期幼虫(感染幼虫)(図4)に発育する。中間宿主の幅は非常に広く、ほとんどの陸産貝類やナメクジ、淡水産の貝類である(図5)。海産の軟体動物は、中間宿主になり得ない。

淡水産や陸産のプラナリア、エビ、カニ、カエルなどが感染幼虫を宿した中間宿主を食べると、感染幼虫はそれ以上発育しないが、それらの動物の体内に長期間滞在して感染源になる。これらの動物を待機宿主(paratenic host)という。感染幼虫を宿す中間宿主や待機宿主がネズミに食べられると、感染幼虫の一部は血流に乗

り脳に運ばれるが、大部分の幼虫は筋肉に運ばれ、筋肉から末梢神経に沿って脊髄に入り、脳幹を上行して頭蓋腔に入る。脳に侵入した幼虫は、クモ膜下腔に移動し、約2週間滞りながら幼若成虫となる。その後、幼若成虫は頸静脈を経て肺動脈に移行し、そこで成熟する。

感染幼虫が、ネズミに経口的に侵入して成熟し、糞の中に卵が出現するまでには42～45日かかる。人体内では、通常幼虫は成熟しないで脳内で死滅する。

#### 4.病原体との関わり合い

1963年、私は母校の寄生虫学教室で、大学院生として脳肺吸虫症の実験的研究を行うことになった。この期間に中枢神経を障害する寄生虫をまとめておこうと、内外の教科書や論文に目を通し始めた。その中に、横川定、森下薫、横川宗雄共著『人体寄生虫学提要』があった。この本に、*Puimonea ratti*という虫が紹介され、わずか2行に「野村等(1944)は、同地の脳脊髄炎症状を呈した1患者の脊髄液に本虫6隻を認めた」と書かれており、この記事は強く印象に残った。

日本の学会で、アメリカの研究者が好酸球性髄膜炎の講演を行い、最近、脳から虫が発見されたといつて、虫のスライドを供覧した。いまだ、病原体発見の論文が印刷される前のことであった。私は、この発表に非常に興味を持ち、野村、林の報告を思い浮かべた。

やがて、野村、林の原著を読んで、好酸球性髄膜炎の病原体は同じものではないかとの疑問を抱き、どうやら同じものだと結論に達した。

私は、ますますこの寄生虫に興味を持つようになり、果たして日本にいるだろうかと思ひ、もしいるとしたら沖縄であろうと考えた。つい最近、学術探検隊が西表島で採集したネズミが、農学部動物学教室に保存されてあったのを知っていたので、教授に頼んで解剖させてもらった。ネズミの肺動脈を開くと、細長い線虫がいた。特徴的ならせん模様が見える。早速、顕微鏡で見る。間違いなく、*A. cantonensis*だ。こうして、私は、日本から最初に、*A. cantonensis*を発見する機会を得た。以後、*A. cantonensis*は「広東住血線虫」と呼ばれることになった。

#### 5.広がる「広東住血線虫」

初期の頃、「広東住血線虫」は南北回帰線の間に分布すると思われていたが、意外に広く分布することが明らかになった。現在、この虫は、太平洋の島々、東南アジア、

中国大陸、オーストラリア、ニュージーランド、インド洋の島々、アフリカ(黄金海岸)、カリブ海の島々、アメリカ本土(ニューオーリンズ)のネズミや軟体動物から分布が確認されている<sup>1)</sup>。また、この地域からは好酸球性髄膜炎の患者が報告されている。「広東住血線虫」の分布と好酸球性髄膜炎の症例は、現在も広がりつつある。

日本では、沖縄から北海道までこの虫の発見地が点在し、合計51症例の好酸球性髄膜炎の患者が報告されている<sup>1)</sup>。思えば、遠く南太平洋で問題になった病気と病原体が、日本と深い関係にあり、今や世界的な問題になったことを思うと、初期の頃この病原体に関わりを持った私は感無量である。

#### 参考文献

- 1) 西村謙一＝『好酸球性髄膜炎一特に広東住血線虫症について』(日本医事新報、第4030号、18～26、2001)
- 2) 西村謙一＝『広東住血線虫症一脳を侵す寄生虫病』(医学のあゆみ、211:200～204、2004)



図1 野村精策博士



図2 余慶雲博士(左)林嫡換博士(中央)筆者(右)



図3 *Angiostrongylus cantonensis* (広東住血線虫)の成虫  
ネズミの肺動脈より得たもの。  
上が雄、下が雌。スケールは0.5mm。

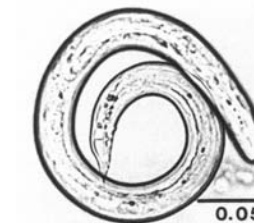


図4 *Angiostrongylus cantonensis* (広東住血線虫)の感染幼虫

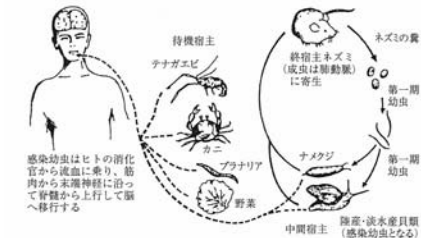


図5 *Angiostrongylus cantonensis* (広東住血線虫)の生活史と感染経路

# 土からの恐怖

無視できない虫の話  
大塚薬報 No.614,2005

## 1.土の中の病原体

人は土を耕し、植物を植えて収穫する。土がなければ植物は育たないので、人や動物は生きられない。しかし、土の中には人や動物の生命を奪うこともある細菌や寄生虫が存在する。これらの病原体は、傷口、健全な皮膚、口から人や動物の体内に侵入する。

## 2.傷口、健全な皮膚からの感染

傷口から土を介して侵入して発病する最も恐ろしい病気は、破傷風とガス壊疽であろう。破傷風は、Hippocrates(B.C.459 ~ 377)の時代にすでに記載があるが、病原菌が発見されたのは19世紀末である。1884年、Nicolaiは土壌をマウスに注射して破傷風様症状を起こさせ、注射部位に菌を認めたが、培養には成功しなかった。1889年、北里柴三郎は患者から菌を分離して、動物への感染に成功して菌の病原性を確立した。

破傷風の病原体(図1)は破傷風菌(*Clostridium tetani*)で、土壌中に広く分布している。破傷風は、傷口から土などとともに、体内に破傷風菌が侵入して起こる。したがって、土が入り込んだ深い傷は、破傷風感染の危険が大きい。日本では、ジフテリア、百日咳、破傷風の3種混合ワクチンと、ジフテリアと破傷風の2種混合ワクチンの定期的接種が実施され、患者数は激減している。破傷風の潜伏期は3日~3週間で、平均4~7日頃から口を開けにくいなどの症状が現れる。やがて、全身の硬直感が出てくるが、この時点で治療が遅れたら、全身を弓なりに痙攣を起こし、約4割が死亡する。痙攣は、光、音など、わずかの刺激で誘発される。患者は最後まで意識があるので、その苦痛は絶大である。私が若いころ、外科教室で修練時代、破傷風患者の主治医になれば、病棟の当直医とは別に専属の当直医となり、日夜休むことなく治療に当たらなければならなかった。

発病した患者には、破傷風免疫ヒトグロブリンを投与する。破傷風の予防は破傷風トキソイドワクチンを使用するが、発病してからはワクチンは間に合わない。したがって、傷を受けたときの処置が非常に重要になってくる。受けた傷の泥や異物を洗い流して徹底的に除かなければならない。かつては、滅菌した生理食塩水などで傷を洗っていたが、現在では水道水が使用される。

ガス壊疽も、土から感染する恐ろしい病気である。原因菌は破傷風と違い、一種ではない。40~80%はウエルシュ菌(*Clostridium perfringens*)であるが、その他の菌も知られている。病状としては、原因菌感染により皮下内にガスがたまり、激痛が起こり筋肉が壊死する。進行は急激で、ショックとなり死亡する。ガス壊疽は、平時には非常にまれな病気、時折症例報告がある程度であるが、砲弾飛び交う戦場ではまれでない。第二次世界大戦の最中、私がまだ小学生であったころ、中国戦線での戦記を読んだことがある。当時の常として、〇〇が続いた伏せ字だらけの文章であったが、戦場で傷つき、ガス壊疽になった兵士が、ガスのため体がぶくぶくと膨れ上がり、死後も体が膨れ続け、棺桶の蓋を持ち上げたという記事に身震いしたことを覚えている。私は、その時にガス壊疽という病気の存在を知った。

ガス壊疽の原因菌は酸素に非常に弱いので、高圧酸素療法が応用される。もちろん、抗生物質も使用される。予防は、破傷風の場合と同様に、泥土で汚染した傷の処置を徹底的に行うことである。

ワイル病も、土と関係が深い病気である。病原体は、1915年、稲田、井戸により発見された。この病原体は、スピロヘータの一種、レプトスピラ(*Leptospira interrogans serovar icterohaemorrhagiae*)である(図2)。ワイル病以外でも、七日熱等の秋季レプトスピラ症などがある。ネズミを主とする動物がレプトスピラを保有し、これらの動物が尿中に病原体を排出する。ヒトへの感染は、菌を含む水を飲んで感染する場合と、菌が皮膚から侵入する場合がある。特に、傷口から容易に感染する。ワイル病の症状は急な発熱で、重症例では黄疸と出血傾向がみられる。重症例で治療が遅れた場合の致死率は20~30%といわれている。

これまで、土から侵入する代表的な細菌を述べたが、「無視できない虫のはなし」を記そう。土の中の鉤虫や糞線虫が皮膚から侵入するのは、よく知られた事実である。

*Halicephalobus gingivalis*は、あまり知られていないが、馬とヒトを死に至らしめる線虫である。1965年、ミネソタの馬の鼻孔の腫瘍から1線虫が発見された。この虫は、1954年土壌中から発見された線虫とよく似ていたが、新種として、*Micronema deletrix*と命名された。その後、相次いでこの虫による馬寄生の症例が報告された。1975年、肥料散布機に巻き込まれ、多発外傷を受けた5歳の小児が、良好な経過をたどっていたが、受傷12日目に原因不明の髄膜脳炎を起こし死亡した。脳に炎症所見とともに多数の線虫が発見され、前記の*Micronema deletrix*と同定された。次いで、1979年、1981年と米国から人体寄生例が報告

された。両者とも髄膜脳炎で死亡している。第2例目の虫の侵入門戸は不明であったが、第3例目は仙骨部と両臀部の褥瘡からと推定されている。日本の馬からは、1985年、吉原豊彦博士らによってこの虫が発見された(図3)。その後、2例、合計3例の報告がある。世界中で馬の症例は少なくとも60例以上あり、人体寄生例は3例のみである。この線虫の学名は研究者によって検討され、現在では *Halicephalobus gingivalis* が用いられている。この線虫は本来土壤中に生活しているが、偶然馬や人体の傷口から侵入し、その体内で発育し、卵を産み、増殖するきわめてめずらしい虫である。

### 3.土食症

世の中に、粘土、絵の具、ペンキなど食品でないものを食べる人がいる。これらの人びとは、異食症(pica)と呼ばれる。氷は食品であるが、寒い時でも氷を多量に食べるのも、異食症の疑いがある。異食症は、精神遅滞や重度の精神病ばかりではなく、普通の子供や妊娠中の女性にも起こり得る。鉄欠乏性貧血やミネラルの不足が認められることもある。異食症の中で、土を食べることを土食症(geophagy)という。戦争中から戦後にかけて、裸同然で三味線を弾きながら歌を歌い、放浪していた男が九州地方にいたが、その男は土を食べていたという。土食症は、人間ばかりでなく、シカやカモシカなどの野生動物にもみられるという。これらの野生動物が好んで食べる土には、カルシウム、ナトリウム、リン酸などのミネラルが多く含まれているのが知られている。土の中には、鉄や他のミネラルばかりでなく、有毒物質や前記のように恐ろしい病気の病原体が含まれていることがあるので、土食症はときに危険である。その一例として、アライグマ回虫の感染がある。アライグマ回虫は、アライグマに寄生してもさしたる障害を与えないが、ウサギなどの他動物に寄生すると致死性障害を起こす。ヒトも例外ではない。死亡したか、きわめて重篤な後遺症がある人体アライグマ回虫症9例中、実に7例が異食症で、そのうち3例が土食症であった報告がある。アライグマの糞に含まれる虫卵を土と一緒に食べたものと推定される。

#### 参考文献

高井光ほか：「ウマ*Halicephalobus gingivalis*(*H.deletrix*)感染症の診断」  
『馬の科学』42(5)：321～331、2005

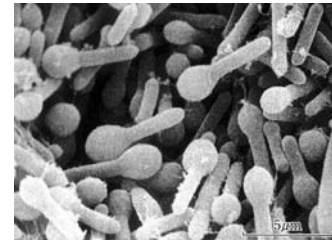


図1 破傷風菌の走査電子顕微鏡像  
出典：『戸田新細胞学』改訂32版  
(吉田眞一、柳雄介編：南山堂、2002)

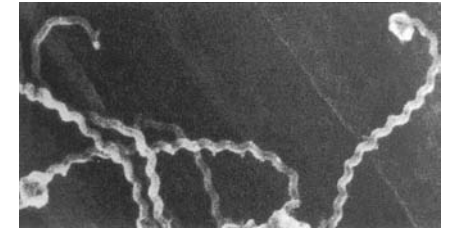


図2 レプトスピラの電子顕微鏡像  
出典：『標準微生物学』第7版  
(神谷茂=スピロヘータとらせん菌、  
平松啓一・山西弘一編、P.224、1999、  
医学書院より転載)

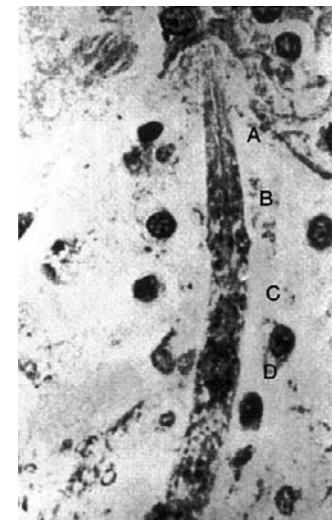


図3 日本の馬から発見された*Halicephalobus gingivalis*  
吉原豊彦博士提供



図4 アライグマ回虫の卵  
宮下実博士提供

## 松原に

1947年(昭和22年)の3月の春休みだったと思う。当時、中学生の私は、熊本県八代市から普通列車に6時間ぐらい乗って福岡市にやってきた。戦争を終わって、まだ、やっと1年半を過ぎたばかりである。大空襲でやられた福岡市は、見渡す限りビルは破壊され、瓦礫の山であったのが印象に残っている。私が福岡に来た目的は、九州大学昆虫学教室を訪問することだった。戦争中から戦後にかけて、私は八代市でクロマダラタマムシが、自宅近くの榎にたくさんいるのを見つけていた。当時の図鑑には、クロマダラタマムシの分布地として、九州は載っていなかった。そこで、中学生の私はその年の冬に、九州大学昆虫学教室にクロマダラタマムシの分布の文献を見せて頂きたいと手紙を書いた。早速、安松京三先生から返事を頂いた。手紙の中に、寒い研究室なので暖かくなってから来るようにと書かれてあったことを記憶している。このようなわけで、春休みの福岡訪問となった。

当時は、まだ、九大は帝国大学であったと思う。箱崎の電車の停留場も、帝大前となっていた。農学部昆虫学教室は構内の西の端にある。私は正門から工学部、理学部の構内を通り抜けて、昆虫学教室まで歩いていった。歩道は舗装されてない所があり、砂地に松原であったように思う。昆虫学教室は木造の古い建物であった。安松京三先生にお会いして、クロマダラタマムシの文献を見せて頂いたはずであるが、そのことは全く覚えていない。その後の印象があまりにも強烈であったからであろう。

昼食の時間になり、研究室の食堂に案内して頂いた時、痩身の方が部屋に入っ  
てこられた。江崎悌三先生だ。昆虫の雑誌などで、何時も写真を拝見している世界的な昆虫学の泰斗が、今、眼の前におられる。その時、私は表現することができないほどの大きな感銘を受けた。安松先生は、白晳の秀才という感じの方であったが、江崎先生は、色白ではなく、髪がものすごく多い方であった印象が残っている。安松先生は私を江崎先生に紹介して下さいました。私は数人の研究者と共に、持参の弁当を食べた。食事中に、別の若い研究者が江崎先生に蝶の論文原稿を提出のため入ってこられた。その原稿の図をみて、意見を述べられた黒い背広の方がいた。その方が、白水 隆先生であった。私は白水先生に蝶のことを質問した。私がツマキチョウの属名を *Midea* といったところ、*Anthocharis* を使うべきだと教えて頂いたことを今でも覚えている。

こうして、中学下学年の私は、わが国のトップレベルの昆虫学者と食事を共にしたわけである。この感激はその後、ずっと私に影響を与えた。学制改革により、中学から新制高校生になっても、私の憧れは、あの福岡の美しい九大構内の松原や昆虫学教室であった。大学進学を考える時期になって、私の夢は九大で学ぶことであった。他の大学を知らなかったこともあって、九大以外の大学は、私の頭の中になかった。少年の日の昆虫学教室訪問の感激が、苦しい受験勉強の強い支えとなった。幸いにして、私は高校卒業と同時に、九大に入ることができた。したがって、私は九大以外の大学を受験した経験はない。私は久留米の九大第二分校に入学した。そこでは、後年の昆虫学者としては、故日浦 勇君や森本 桂君(現在、九大農学部昆虫学教授)がおり、共に学んだ。動物学は、宮本正一先生の教えを受けた。宮本先生は非常に深い知識をもっておられた。大学の先生は、どうして、なんでも知っておられるのだろうかといつも尊敬していた。先生ご自身は、戦争中、南方で悪性マラリア(熱帯熱マラリア)に罹り、なんでも忘れるようになったと言っておられたが、そんな気配は毛頭なかった。

私が九大に入学しても、江崎先生には、お目にかかる機会はなく、一度だけ構内で、お姿を遠くから拝見したに過ぎない。先生は昭和32年(1957)年12月14日、肺癌でお亡くなりになった。先生が生前に、いかに多くの学者や昆虫愛好者から慕われていたのか、"江崎悌三著作集"(思索社、1984)に挿入された月報からも知ることができる。安松先生は私が卒業してから、「九大学術探検会」でお会いしたことがある。先生は、九大農学部昆虫学教授をご退官後、タイ国でご活躍であったが、故人になられた。白水先生は、ご承知のように、現在、わが国の蝶学をリードし続けておられる。思えば、少年の日に経験した昆虫学者との遭遇が、私の方向を定め人生を決定した。この運命を私は非常に幸せだと感じている。

(1993年4月著者記す)

## 著者略歴

- 1958年 九州大学医学部卒業  
1959年 インターン終了後、九大第一外科、脳神経外科で研修  
1964年 米国ハワイ大学研究員  
1967年 医学博士（九大）、日本脳神経外科専門医 九州労災病院脳神経外科部長  
1972年 岩手医科大学外科学助教授  
1974年 英国ケンブリッジ大学アデンプルーク病院脳神経外科客員部長  
1980年 英国グラスゴー大学短期留学 佐賀医科大学外科学助教授  
1982年 佐賀医科大学脳神経外科科長、兼救急部長  
1984年 佐賀医科大学退職  
1989年 日本救急医学会指導医  
2005年 西九州大学客員教授（2015年3月まで）  
2014年 佐賀昆虫同好会会長就任  
2015年 現在、佐賀大学医学部非常勤講師

## 主な著書

- 西村謙一：頭部外傷治療の実際、医学書院、1972  
西村謙一：頭部外傷 [救急医療の基本と実際]、情報開発研究所、1985  
西村謙一：人体神経系寄生虫症、新興医学出版、1991  
西村謙一：頭にくる虫のはなし、技報堂出版、1991  
西村謙一：もう悩まない、つらい頭痛、小学館、2003 他、多数

